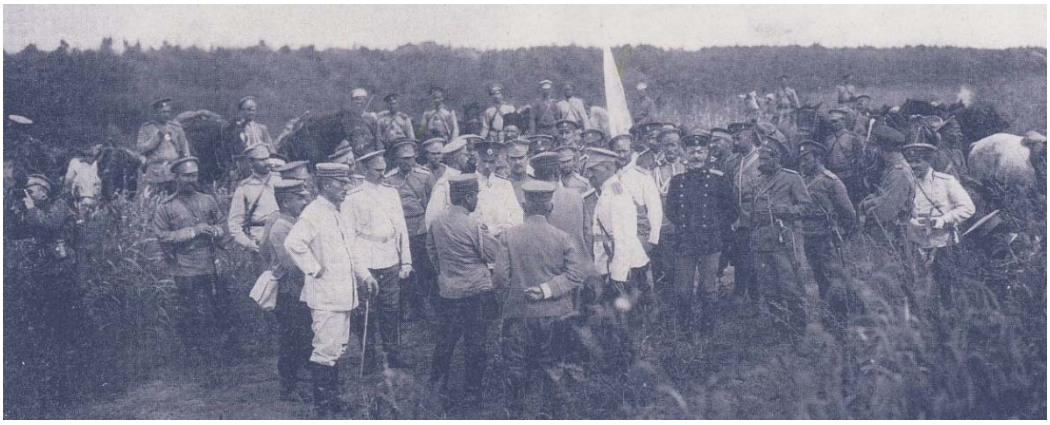
電子書籍　日露戦争への列強の策謀

三国干渉からポーツマス日露講和成立までの列強国の意図

ビゴー風刺画

左露国、何か・・・中央日本、たちあえ一背中を押す英国様子を見まもる米国

現在の水師営　2002 年撮る



西沙河子での休戦条約協定委員の会見

1905 年９月１３日、両軍委員が西沙河子付近に会見所を設定の模様、中央背面の参謀肩章は福島少将、対面の白服はロシア側委員長オラノフスキー少将。『日露戦争ＰＨＯＴＯクロニクル』澪標の会編纂より

2016年6月つゆいり　　池田勝宣

前編

	目次	２
序	はじめに	１
第１章	日清両国の対立と開戦までの経緯	３－１７
第２章	義和団の乱勃発	１８－３１
第３章	ロシアの極東への進出と日本との軋轢	３２－４０
第４章	シベリア鉄道の経緯を観る	４１－４７
第５章	日本の通信は日清・日露に勝利を齎す	４８－６３
第６章	日英同盟のながれ	６４－７５
第７章	日露戦争前夜の米英の軍事状況を概観	７６－８１
第８章	日露戦争前夜にロシア圏への諜報活動した男たち	８２－９５
第９章	日露戦争の概観と乃木神話	９６－１２１
第 10 章	「ウィッテ回想記」より開戦の経緯と講和談判を探る	１２２－１３０

（前編・Ａ４・横４０字×行３０　１３０枚となります）

後編

第１１章	高橋是清・末松謙澄・金子憲太郎の活躍	１３１－１６７
第１２章	日露講和条約締結後の新聞報道	１６８－１７９
第１３章	お雇いドイツ人フォン・ベルツの日記	１８０－１９１
第１４章	ポーツマス講和会議	１９２－２３２
第１５章	終章・談判後に出てきた秘密情報	２３３－２５３
	結びにかえて	２５４－２５７
付録	ロシア沿海州残影	１　－　８

（後編・Ａ４・横４０字×行３０　１３５枚となります）

はじめに

日露戦争を現代より振り返れば、日露戦役は日本の運命を決定するターニングポイントであった事が分かる。幕末期より陸の王者ロシア帝国の南下に怯えていた日本は、西洋文明を列強国から取り入れ、列強国の時流に乗る富国強兵を目指し、極東アジア諸国を席捲する大国へと成長した時代であった。

明治２７、２８年、朝鮮半島に於ける覇権をめぐり、日本と清国は衝突し、日清戦争が勃発した。日本はこれに大勝したが、露国、独逸、仏国の三国干渉によって、三国の軍事力に屈服し、遼東半島を返還した。そして、明治３３年(1900)、清国東北部に於いて北清事変が起きると、ロシアはシベリア鉄道と自国民を守る名の下に、清国満州にロシア軍は強硬出進した。日本をはじめ欧米列強の抗議にも動じず、ロシア軍は満州の野に居座わり、このロシア軍の居座続ける事によって、何度も日露交渉が行われたが解決策はなく、その沿線上に於いて日露開戦につながるのである。

ロシア国の満州領有は本格化してやがて朝鮮半島にも手を伸ばし、日本国に迫ってくるのではないかという不安視が増した。日本政府は安全保障のため満州・朝鮮半島からロシア軍を追い出すことに、国を挙げて軍力に傾けた。日本の近代軍事力はそれに伴って富国強兵となり、その結果として極東地域の欧米列強との植民地利益地が衝突することになる。ロシア、英国、仏国、米国等と列強国外交交渉が次々と難問の課題が起こるが、明治政府終脳たちの活躍により解決する歴史を刻む時代であった。

日清・日露戦争についての戦記物語には優れた著書が多々あるので、それらの書籍に譲り、日露開戦時の日本国を取り巻く欧米列強国の外交・意図・思惑・策略・策謀はどのよう動いていたのか、その点の外交史を探ってみたいと思う。

明治政府は日露開戦同時期に、この戦争は短期決戦による限定戦争と想定して、そのシナリオに添って軍事を背景に行動を起し、そして欧米の世論喚起の広報活動を積極的に繰り出して米国世論の説得に当たった金子堅太郎、日本の戦費外債募集を英国￡・米国＄を調達した高橋是清、ロンドンを中心に「黄禍(こうか)論」の払拭に末松謙澄、ロシア帝国後方撹乱に走った明石元二郎・石光真清等の活躍も探りたい。又、乃木希典無能説や、通信、シベリア鉄道、日露戦争前夜の列強国の立ち位置や、ポーツマス日露講和会議の息詰る外交交渉の経緯も掘り下げてみたい。

２０１４年８月吉日　　池田　勝宣

第1章　日清両国の対立と開戦までの経緯

序　　日本が朝鮮半島進出した理由は、朝鮮李王朝(1392－1910 年)が清朝(1644－1912 年)の冊封体制化下にあって、一貫して鎖国政策を続けていたからである。「中国朝鮮商民水陸貿易章程」(清は宗属関係を明記した商民水陸貿易章程を朝鮮と結び、大院君を清の保定に幽閉し、軍隊を漢城に駐留させた。大院君とは李氏朝鮮の直系継承でなく、新国王の実父に贈られる尊号）より清国政府との全ての問題規範は固定されていて、変更の必要はないとされていた。この様な李氏朝鮮の立ち位置を、日本としては朝鮮を清国から独立させ、列強国の出進に対しての備えることが最大の課題となっていたのである。

明治３年１０月、この鎖国政策解消に日本外務卿の３人が交渉に向かったが、朝鮮政府に引見を拒否され、更に２年後に代表を送り返事の催促をしたが回答はなかった。この時期、英国や露国の西欧列強が、砲艦外交(軍艦等の軍事力威嚇)で清国・朝鮮に門戸開放を迫っている最中で、日本は朝鮮が列強に支配されれば、我が国も危ない危機感を抱き、三條実美（太政大臣）も征韓論を主張して閣議に図った。木戸孝允・大久保利通らは外遊中であったので、西郷隆盛を全権大使として談判に朝鮮に派遣することが閣議で決定した。しかし、帰国した大久保らは、西郷を派遣すれば戦争になるということで征韓論は消滅、その後この論議は国内勢力を二つに分裂を招き、「西南の役」となって行く経緯となる。

李氏朝鮮は明治初年、日本への国書は「日韓は各々完全なる独立国として平等に交際する」と回答していたが進展はなかった。明治７年（1874）５月、台湾に漂着した琉球島民５４人が殺害される事件が発生し、日本政府は動向を解決するために台湾に侵攻した。李氏朝鮮は日本の台湾出兵に驚き動揺し、翌明治８年９月２０日、日本艦「雲揚」が江華湾内の領海内で、朝鮮砲台から攻撃され、これに応戦して砲台を破壊した。この「江華島事件」により、翌年２月１１日「朝鮮を独立国として清国との宗属関係を否定し、釜山・仁川・元山の開港による通商貿易の拡大」等の「日朝修好条規」（江華島事件[注]後、日本が朝鮮の開国を求め締結させた条約。朝鮮の関税自主権を認めない不平等条約の恨みを残した）に調印して互に自主独立国であることを認めさせた。

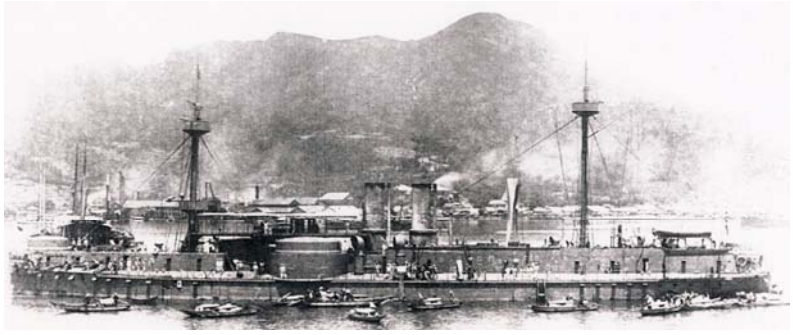
調印後、清国においては朝鮮の自国の属領であると譲らず、独立を認める日本と、宗主権を主張する清国との間に軋轢が高まり、それに露国や英国が絡んで複雑な国際情勢下に置かれた。明治１８年、日清間に天津条約(甲申政変の事後処理のための条約)

が成立していたが、清国の野望は治まらず、軍事力に自信を持っていた清国は、朝鮮半島の完全属領化を狙い、日本を追い落とす行動に出たのである。

清国は明治１９年９月８日、ドイツ製の「定遠」「鎮遠」（当時の東洋で最大級軍艦）他４隻を、日本政府の許可なく長崎港に入港させ、水兵をも上陸させた。この水兵たちが、酒に酔い騒ぎを起し、日本警察、住民らを巻き込んだ大乱闘事件を起こした。清国側の死者１人、負傷者１５人（清国側の発表は死者８人、負傷者４２人）、日本側巡査２人が死亡、負傷者２６人を出した大事件に発展となった。

この背景には、清国が海軍力を日本へ見せ付ける示威行動であり、太刀打ちできない力の差を、日本側へ歴然とさせたかったのである。これに対し日本海軍力の対抗策として、水雷艇（日清戦争で清国海軍旗艦定遠を沈る）の活用位であった。当時の日本陸軍総兵力３万２千、清国総兵力百８万の現実差があった。(『明石元二郎大佐』前坂峻之著)

注・江華島事件=1875 年 9 月 20 日に起きた日本と朝鮮の武力衝突事件。日本軍艦雲揚号（250ﾄﾝ）が朝鮮の江華水域に入った時、砲撃を受け、日本側は応戦して草芝鎮に損害を与えた。江華水域は現ソウルに通じる要衝にあたる。



清国海軍の「鎮遠」

ウィキペディアより

琉球帰属問題　清国と我が国との軋轢は琉球（沖縄）の帰属問題から始まる。琉球は徳川時代初期より、鹿児島島津氏に征服されて隷属していたが、裏面史に於いては支那（明・清）に通じ、明朝の滅亡後は清国に入貢（朝貢）していた。

幕末期に西洋船の来航が頻繁となり、英仏等の列国たちは、琉球に対して通商を結ぶ事を要求し、琉球はその外圧に堪えかね、欧米列国と締約を余儀なくされ、列強各国に対し複雑な関係を結ぶに至った経緯となっている。

日本国と琉球との関係が極めて明白となっているにも拘らず、琉球は依然として旧来の慣習を改めず、清朝との通交と朝貢の礼を継続し、我が政府にこれを認めるよう歎願していたが、素より我が国に於いてこれを許す筈もなく、明治１２年、内務初期官松田道之（1839－1882 内務官僚、滋賀県令等）を遣わし、廃藩置県を断行し、藩を改め、

沖縄県として、尚泰王(最後の琉球国王、在位 1848－1872)を東京に移住させて華族に列し、邸宅を賜わる経緯となる。

明治維新前、1848 年（清の元号咸豊３年）ペリーが琉球に来航し、翌年に琉米修好条約を締結し、1855 年には琉仏修好条約を結び、さらに 1859 年には琉蘭修好条約を結び、琉球の立ち位置は維新前に於いて一国の態をなしていた。

琉球国王・尚泰王（1843—1901 年）

栄典・1879 年・従三位。1885 年・公爵。

1887 年・正三位。1901 年・従一位

明・清の歴代王朝は中華思想に基づき、軍事的に外界の動向を察知する上で琉球王朝を外臣として遇してきた。その扱いは時により変動したが、琉球は清国を宗主国であることを歴史的な経緯となっていた。日本と清国は明治４年（1871)、１８条の日清修好条規（明治４年７月２９日天津で日本と清の対等条約し清側は李鴻章）が調印した後、先に述べた様に、同年台湾へ宮古島民５４名が漂着して殺害される事件(琉球漂流民殺害事件)が発生した。その事件を楯に日本政府の抗議し、清国は、「台湾ハ生蕃（従わない原住の人々）ノ地ハ化外ニ置キ正逮バズ」と回答してきた。台湾は清朝政府の力が及ばない“化外”の領土であると伝えてきたのである。

清朝はこの事件で、日本がまさか台湾出兵するとは考えが及ばず、この回答により明治政府は明治７年（1875）５月、陸軍中将西郷従道(西郷隆盛の弟)率いる３千の兵が、台湾南部へ犯罪捜査ため派兵した。５月６日に台湾南部住民と小競り合いとなったが、２２日、台湾西部に全軍を集結して本格的な制圧を開始したが、現地に於いて日本軍は亜熱帯の風土病に悩まされ、561 名の病死者を出した。

この状況下の日本政府は、英国駐日大使バークス(幕末から明治初期の英国公使)に軍事行動を激しく抗議され、８月、北京へ大久保利通が交渉に赴き、台湾問題を交渉開始した。１０月３１日「日清両国互換」が調印され、清国が日本軍の出兵を「保民義挙」（民を保護するために起した行動）と認め、日本は生蕃に対し法を設ける事を求め、1874 年１２月２０日までに軍を撤退させることに合意、清国は避難民に見舞金１０万両(テール=銀 37、5ｇ・現在ｇ=50 円)を払った。清国が日本軍の行動を承認した事により、琉球民は日本人となり、琉球の日本帰属が国際的に承認され事となる。

琉球に就いては、琉球が日清両国間に両属する変則的な位地を不問にしたままでいたが、茲に日本国有の領地となったが、琉球民の独自の政策を認めることはなかった。

明治８年（1875）５月、日本政府は琉球王朝に対し隔年進貢（朝貢）、冊封使（中国王朝の皇帝が従属国の国王に爵号を授けるために派遣する使節）の受け入れ等を禁止した。同９年、内務官吏を琉球に常駐させ、裁判権と警察権を接収し、熊本鎮台から一分隊を派遣して軍事権も掌握した。

更に同年イギリス中国公使トマス・ウエードの仲裁により、清国側がこの非を認めたことにより、賠償金の支払いを約束し、因って宮古島島民は「日本国属民」と明記させ、続いて明治１２年（1879)、明治政府は琉球藩を廃して日本国の沖縄県とした。中国へ朝貢を禁止し更に福州琉球館(明・清代の福州と琉球の進貢貿易館)を廃止させた。

ハリー・パークス英国公使(1865－83 年)　明治７年台湾出兵日本人兵士　　トーマス・ウェード

この屈辱的な条約をさせられた清国は、国防体制に与えた衝撃は大きく、海防論議が清朝で始まった。１８７５年、日本軍の台湾遠征の翌年、清国を代表する北洋・南洋の２艦隊の建造が開始され、その予算は粤海関（広東省広州税関）と江海関（上海税関）の関税収入２百万両、江蘇、逝江、湖北の釐金収入（内地関税）２百万両と合せ計４百万両で艦隊創設に動きだした。このような清国の海防の強化は日本の出兵が動機となり、その危機感からくる艦隊の建設は、日本の台湾出兵による琉球帰属問題によって起きた事なのである。（参考文献『世界情勢と躍進日本外交史』内田茂編纂・昭和１５年「琉球小笠原問題」と『近代日本戦争史・１』「日清両国の対立と開戦への軌跡」田中宏巳著）

清国の情報収集　清国側の日本に対する情報収集は明治１２年に始まり、清国国内に於いて、この年に「清国に対抗した日露間に同盟が成立した」と云う噂が流布し、慌てた清朝は日本へ軍備情況と地理調査を両江総督（地方長官の官職）の王之春（1842

－1906・外交家）を、1879 年(明治 12 年)12 月 7 日から翌年 1 月 5 日・軍備、諸事情を探るため派遣した。調査報告書を『談瀛録』に旅行記に纏められ、日記は『東遊日記』（1、2 巻）となり、調査報告書は『東洋瑣記』(3 巻）となる。

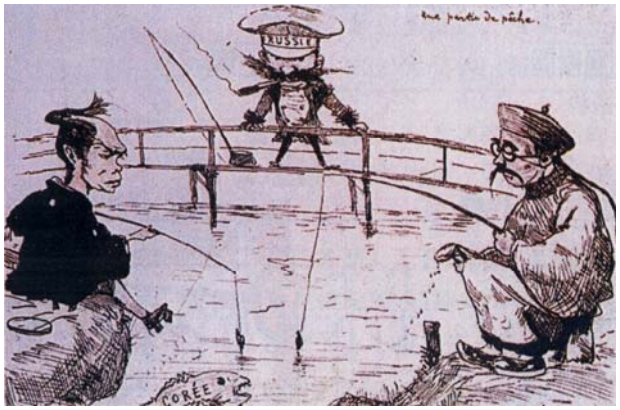
その一部に、《日本は国土を外敵に暴露し、しかもこれを守るべき険要（険しい地勢で敵を防ぐ場所）の地を持たない。・・・横浜は地形浩蕩（広々）として敵を制する便なく、東京横浜にも抑す（抑える）所がない。東京湾には５基の砲座を持つ品川砲台があるが海上にあるため弾薬補給が容易でない。陸上兵力は６鎮台常備兵員２万３千、砲７百２０門あり、戦時には兵員５万余、砲９００門に増加出来ることにはなっているが、国内事情は兵をして後顧の憂いなく戦い得る様な状態となっていない。即ち、国家は敏感な西洋文化摂取政策のため３千万円にのぼる内債の他、２千万円の外債を負い、外債は主として英国からの融資であるが、これら巨額の債務のためその利払いにも苦しんで居る状態である。そのため農民からは収入の７割を田租として徴収して、その他雑税に至っては「物として税ならないものはなく」「百方捜括(八方探す)して纖悉（細かい処を探る）も遺さず」という有様で、国民はまさに生死の瀬戸際に追い詰められている。従って軍事的見地からすれば、中国は敢えて日本を恐れるには及ばない。》と記述している。(「日清戦争以前における日中両国の相互国情偵察について」･代日中交渉上の一齣として・佐藤三郎　『軍事史学』創刊号・昭和４０年５月より）

上記の王之春の報告書は、清朝政府に取上げられることを想定して、日本の実情を悪く評価した記述が見られる。ここで肝心なことは、王之春の報告書で「日本は政府と議会が対立し、また薩長閥が反目し合い、国民と政府が遊離し、混乱した国家と見えたことである。当時の中国人の文化思考レベルでは、日本の議会制度を全く理解できなかったことを示している。その結果、日本を威嚇すれば簡単に屈服させることができる弱体国家に映り、清国政府は対日強圧論が基本路線となって行くのである。

日清戦争の概略　日清戦争の概略は、朝鮮半島(李氏朝鮮)をめぐる日本と大清国の戦争で、明治２７年、朝鮮国内の甲午農民戦争（農民の内乱）を切掛けに６月、朝鮮に出兵した日清両国軍が８月１日宣戦布告、近代化に成功した日本軍は、近代化の遅れをとった清軍に対し、終始優勢に戦局を進め、遼東半島など占領し日本が大戦勝をおさめ、1895 年４月１７日下関で日清講和条約が調印されたのである。

戦勝国日本は清の領土、遼東半島・台湾・澎湖列島(台湾西方約５０ｋｍ)と、多額の

賠償金２億両を得ることになる。しかし、４月２３日、露・仏・独の三国が日本に対して清国へ遼東半島を返還要求し、三国の軍事力を楯にした外交に屈して、日本は三国干渉(三国の軍事圧力よる)を受け入れ、５月５日遼東半島返還の経緯となる。



日清戦争の風刺画・ジョルジュ・ビゴー(1860－1927)画家・漫画家明治時代１７年間日本に滞在。

「魚釣り遊び」(漁夫の利とも)魚(COREE)を釣り上げようとする日本と中国(清)、横取りを狙う露国

日清戦争・明治27、8年の開戦　明治２７年(1894)４月、朝鮮全羅道（八道の一つ）地方に農民の内乱が勃発し、甲午農民戦争が起き、その流れで東学党の乱(１８６０年慶州出身の崔済愚・チェ・ジェウ、宗教家、東学を創始者)の教徒が起した内乱に発展、その集団を東学党と呼ばれた。

この東学党の勢力は、秕政(殻ばかりで中身がない)に半島の人心の間に忽ち勢いを増し、派遣された招討使（地方軍指揮）も鎮圧できない状態に陥り、乱徒は更に勢いを増して、京城（旧ソウル）に迫り、この報を受けた清国の袁世凱（1859－1916・軍人、政治家、北洋軍閥の総師）は朝鮮帰属の好機到来と受け止め、清国政府は猛将・葉志超（直隷提督)・聶士成（朝鮮出兵し後直隷提督）を将とし、兵１５００を発して牙山(忠清南道)に上陸した。

我が国へは口頭で知らせ、「清国の属国保護の慣例に依り、朝鮮に出兵することとなり、・・・。」との知らせは、誠に条約を無視する無礼に憤怒し、清国軍派遣は半島に於ける均勢を犯す重大な事件勃発なので、到底、我が国は黙視するわけには行かかない。我が国政府は、当時帰朝中の朝鮮公使・大鳥圭介(1833－1911・西洋軍学者、外交官)を、急遽軍艦八重山（日本海軍通報艦・伝達艦）に乗せ、京城に帰任させ、次で陸軍少将大島義昌（1850－1926・陸軍少将、朝鮮派遣・安部晋三は玄孫）が兵を率いて６月１２日仁川に到着した。

当時我が国の韓国問題に対する国民感情は、従来から幾度も沸騰し、国権拡張の政治団体運動も盛んとなり、条約の改正は、何れも切実に問題解決の難事であった。この清国へ帰属している朝鮮半島問題は、前年条約改正励行(議決通りに実行)を帝国議会

で決定されたことで、今や切迫した対韓関係に、今度こそは断じてこれを解決して積年の禍根を取除く意気込が日本側には強くあった。清国軍が派遣したことは日本軍も条約通り派遣することになり、日清両国軍が半島に対峙して一触即発の状態となった。

日本軍が仁川上陸すると韓廷は狼狽し、且つ清国もまた閔一派（閔妃・ミンビは李氏朝鮮第 26 代王、高宗の妃）と呼応し、日本軍を撤退させる策謀を企てたが、日本軍は容易に動かず、此の機会に日清共同して韓国の内政を改革し、末永く将来の禍因を絶つことを提議したのである。しかし清国側はこれを拒絶して応答なく、依って日本国は、独力で改革に着手する事を決め、７月２３日、大鳥圭介（1833－1911 幕臣）は兵を率いて王宮に赴むき提議し、韓兵はこれに抵抗してきたのである。日本軍はこれを退け、公使は王に拝謁して意見を開陳（意見を述べる）したが、閔族は全くその話に日本側の意見を聞く耳をもたなかった。（参考文献・『世界情勢と躍進日本外交史』日本図書刊行会（昭和１５年）。『東洋外交史・上』植田捷雄著参照）

余話・小村寿太郎の逸話　《日清戦争時、外相は陸奥であったが、小村は北京に臨時代理公使（陸奥の推薦による）として在籍、小村は韓国から清朝勢力を駆逐するには、清国と一戦することはやむ得ないこと、と考えていた。清国李鴻章が大軍を韓国に増派情報を聞くと、日本政府に開戦の決意を促して、公使館引揚の許可を求めた。だが、東京から返事がこない。小村は「よし、俺が一番、戦争を始めてやる」と豪語して、独断で国交断絶を清国政府に通告し、居留民をまとめて引揚げてしまった。戦機を逸することを恐れたのである。しかし、運よく、偶然にも同日に日本政府が宣戦布告したのであった。小村は厳罰覚悟の独断専行したのである。》小村の剛毅な一面を見る。（『中央公論・特集日露戦争』「小村寿太郎の苦悶」加瀬俊一著・昭和４９年５月号）より

豊島沖海戦　明治２７年７月２５日、日本艦隊と清国艦隊が朝鮮半島西海岸沖の海戦が始まり、日本帝国海軍が圧勝した。その概略は、我が海軍の吉野（防護巡洋艦・当時世界最速艦）、秋津州（水上機母艦）、浪速（防護巡洋艦・東郷平八郎大佐）の３艦は、豊島沖に於いて、清国軍艦済遠（ドイツ建造）、広甲艦（清国海軍巡洋艦）に出会い、清国軍艦から発砲が始まり、我が軍はこれに応戦し、広甲号を浅瀬に追い込み撃沈させた。済遠は逃亡したが、運送船の高陞（英国旗を揚げて清国兵を輸送中）を撃沈、護送艦操江を捕獲してこの海戦を序幕とした。

陸軍少将大島義昌(安倍晋三は玄孫)の率いる軍隊は、進軍し成歡駅(忠清南道天安市)の敵壘を陥落させ、牙山の清兵を滅ぼし、日本国の宣戦布告は７日後の８月１日となっている。この時、英国船籍の商船「高陞号」撃沈した（高陞号事件)。この事件によりイギリスは日本に対し猛烈に抗議、この問題を英国新聞『タイムス』紙に、イギリス国際法学者の論調記事に、「・・・戦争というものは宣言せずに始めても、少しも違法ではない。この時、英国旗を掲げていたかは重要ではない。戦争が始まったのであれば、交戦国の艦艇は、公海上にあらゆる船を臨検し、交戦国の船もしくは、第三国の船でも相手国向けの戦時禁制品が積んであればこれを没収、あるいは破壊処分し、必要なら撃沈させることは艦長に認められる権利である。依って、日本政府は英国に謝罪する義務は生じない」と、結論を出したのである。この結論に自信を持っていたのは、東郷平八郎がイギリス留学時に国際法を勉強したことが、この事件は合法な範囲であることを熱知していたのである。

黄海海戦　日本海軍連合艦隊と清国海軍北洋艦隊の海戦。明治２７年９月１７日、日本国連合艦隊指令長官海軍中将伊東祐亨（1843－1914 初代連合艦隊指令長官）は、本隊松島、千代田、厳島、橋立、比叡、扶桑、赤城の七艦及び第一遊撃隊吉野、高千穂、秋津州、浪速の４艦と仮装軍艦西京丸を率い黄海海洋島付近に於いて清国水師提督丁汝昌（1836－1895・清国末期の軍人北洋艦隊提督）の率いる北洋水師の１２艘（小船）に水雷艇６隻と激戦５時間余の海戦によって、致遠（北洋水師防護巡洋艦）以下５艦を撃沈させた。平遠（装甲巡洋艦）以下３艦に火を放ち、両翼に軍艦を走らして大捷(大勝利)した。

丁汝昌・北洋艦隊提督

しかも我が艦隊は１隻も失わず、赤城艦の長坂本八郎太（1854－1894・海軍少佐）は奮戦して敵弾に斃れ。海軍々令部長樺山資紀（1837－1922・海軍大将）が搭乗する西京丸（日本郵船草創期の貨客船）は前後２回の水雷に襲われたが、事なきを得たのは天の助けであった。提督丁汝昌の最後は、戦うことを諦め、軍艦武器を挙げて我が軍に降伏し、丁汝昌自身は毒を飲んで自決し、我が艦隊指令長官伊東祐亨は清国水師の丁汝昌死を、礼を尽して見送った。

鎮遠・平遠以下１０余艦が海に消え、北洋水師(北洋艦隊・1888 年編成された清朝の艦隊)は茲に滅亡したのである。後、平遠・装甲巡洋艦は日本軍に接収され、艦名はそのままで日本海軍に編入された経緯となっている。

日清戦争の連戦連勝　　こうして陸軍大将山縣有朋（1838－1922 長州藩士・内閣総理大臣経歴）を第一軍司令官に任じ、平城の陥落後、更に前進して鴨緑江を渡り、満州へ入り、九連城（鴨緑江沿町）鳳凰城（北朝鮮国境）の諸城を攻略し、民政署を安東縣（鳳凰城下）に設置した。

明治２７年１０月、陸軍大将大山巌（1842－1916・元帥陸軍大将）は、第２軍を率いて出発し、盛京省花園河口（後に奉天省・大連の東）より上陸して大連湾を占領、１１月６日金州城を陥れた。同月２６日、第一師団長中将山地元治（1841－1897・陸軍中将）は、第一師団及び第６師団の一部を率いて、海軍と共に旅順の攻囲に向い、椅子山、松壽山、二龍山、東鶏冠山の諸砲台を攻略し、１日にして堅固と称せられた旅順口も我が邦に帰したのである。

台山占領・１１月６日(写真大連世界旅行社)

第２軍幹部・後列中央大山、左山地、左乃木

明治２８年１月、第２軍は進みて蓋平（遼寧省に存在した県）を略し第１軍と互に攻略し、第２軍の一部は別に海路より山東省に向い、３０日、栄城湾に上陸し摩天嶺(山東省威海衛)に迫ってこれを陥れた。

威海衛(渤海湾入り口)と旅順口は、清国が多大の年月と財費を費やし、築造した自信ある海軍基地であった。渤海湾の要の軍港として栄華を誇り、難攻不落と称されてきたが、今や日本の手に陥落したのである。満州に於ける第１軍、第２軍は協力し合って、３月牛壮(牛壮作戦)、田庄台（旅順の北西）を占領し、まさに馬の先駆けの如く北京に迫り、３月に至り、台湾海峡内の澎湖列島（台湾の西方約５０ｋｍ）を占領した。

日清講和条約の動き　明治２７年１２月、天津海関税局（海港の税関）の独逸国人デットリングが、清国政府の命を受けて神戸に来朝したが、日本側の講和条件の情報を探りに来たと憶測され、政府は講和談判資格に疑問があったので帰国させた。翌２８年１月、北京駐在米国公使デンビーは（全権委任状の条件を満していたが）、清国政府を周旋する意思でやってきた。講和の方法を協議する好機と捉えた米国政府であったが、日本政府への思慮不足と回答されて反故にした。

更に清国政府は、総理衛門（外交等官庁）大臣の張蔭桓（1837－1900 外交官）、邵友濂（1840－1901 外交官）を全権委員を任命して日本国へ派遣する旨を伝えて来た。日本政府はこれを容れ、伊藤博文首相、陸奥宗光外相が全権弁理大臣の大命を拝して談判の席についたが、同年２月１日、日清両国の全権は広島県庁にて会合し、清国使節に資格の不備があり日本側は清国全権を拒絶し、張、邵の両氏を帰国させた。

伊藤は清国へ信議と和義を求め、その公使にふさわしい全権責任者を送るように伝えた。日本側の要求に応じて来朝したのが、北洋大臣直隷総督・李鴻章（1823－1901・清後期の外交を担い清朝再建に尽力）を選任し、清国第１級の政治家李鴻章は、李経芳（李鴻章の弟李昭慶の子・外交官）を従え下ノ関に来朝し、同月２０日から地元の春帆楼（下関に現存）で談判を開始となる。

日清講和条約成立　李鴻章は講和に先んじて休戦条件を提示したが、日本側はまだその段階に至っていないと拒否、直ちに講和談判に移る段取りとなった。ところが、２４日、狂漢小山六之助（日本人）が、李鴻章の帰途を襲い負傷を負わせた。その情報を知った列強国らは野蛮国日本と非難を浴びせ、列強の声が清国に同情を集める結果となり、この事件は政府も天皇をも震撼させた。明治天皇は勅使を遣して李鴻章を慰問した。この事件後、解決のため日本側はやむなく無条件休戦事項を認め、順次談判は日本側の指導で進み、かくして交渉は、４月１７日講和条約が成立、両全権大臣は条約に調印の運びとなる。（『世界情勢と躍進日本外交史』日本図書刊行会・昭和 15 年）

下関条約（下関講和条約 11 ケ条、議定書３ケ条、別約３ケ条及び休戦延期条約２ケ条）

第１条　朝鮮国が完全無欠な独立国であることを認める。

第２条、第３条　遼東半島、台湾、澎湖諸島など日本に譲り渡す。

第４条　賠償金２億テールを日本に支払う。

第５条　割与された土地の住民は自由に所有不動産を売却できる。割与地の住民は日本国民とみなす。

第６条　沙市、重慶、蘇州、杭州を日本に開放する。　（第７条から１１条は略）

批准は山東省芝罘（煙台市）、明治２８年５月８日とする。

大日本帝国全権弁理大臣　伊藤博文、同弁理大臣　陸奥宗光

大清帝国欽差頭等全権大臣　李鴻章、同李経方。

日清講和条約調印　１８９６年

李鴻章　李鴻章・1896 年代

陸奥宗光外相

余話・賠償金は現代金額で　賠償金は２億テールと威海衛守備費焼却金３ヵ年分 150 両、遼東返還還付報奨金 3000 万両、合計２億 3150 万両（１両・テール=銀３７、３ｇ。現在銀評価１ｋｇ、=１０万前後とすれば１兆円の金額）となる。銀両は英国に運ばれ、英国の 3500 £ に両替、評価額は日本円約 3 億 5000 万円となるらしい。（評価額は現在の 7、8 万倍とも）。尚、日清戦費は２、３億、現在額の約 7900 億相当、日露戦争は１７、３億、現在額約６兆円相当になると云われる。

露、独、仏、三国の干渉　下関条約批准の６日後、露・独・仏の「三国干渉」により、遼東半島返還を共同提議され、４月２４日の広島大本営に於いて伊藤、山縣、西郷始め、軍部の高等幕僚が集参し、御前会議を開きその対策を議論し、あらゆる方策をめぐらしたが、妙案はなく日本政府は苦慮の末、５月１０日これを清国に返還となる。

明治２８年４月２３日受領、ロシア帝国公使の勧告覚書の内容は次の通りとなる。

露国の勧告　《露国皇帝陛下の政府は、日本より清国に向って求めた講和条件を査閲するに、その要求に係る遼東半島を所有することは、常に清国の都を危うくするばかりでなく、之と同時に朝鮮の独立を有名無実となすのみにて、右は将来永く極東永久の平和に対し、障碍（障害）を与えるものと認め、随って露国政府は日本国皇帝陛下

の政府に向い、重ねてその誠実なる友誼（友情）を表せんが為、茲に日本国政府に勧告する、遼東半島を確然領（明瞭）とし、これを放棄することを以てする。》

ロシアはドイツ、フランスに呼びかけ、日本の干渉に圧力をかけた。ロシアは極東進出のために不凍港が必要であり、ロシア南下政策実現のためには、満州の権益拡大を目論み、日本の満州進出を阻止に全力を挙げて来た。

独逸公使の勧告　《本国政府の訓令に従って左の宣言を致します。独逸政府が日清講和の条件を見れば貴国より請求したる遼東の所有は、清国都府をして何時までも不安定の位置に置き、且つ朝鮮国の独立をも水泡に属させ、よって東洋平和の永続の妨げになることであると認めなければなりません。それゆえに貴国政府が遼東の永久なる所有を断念なされるように本政府が御勧告致する。・・・・》と。ドイツの真意は、

カイゼル・ウィルヘルム2世の対露政策について　『西洋史学』黒羽　茂著 1954 年 10 月号に、　《林董伯爵（ドイツ代理大使時代）の回想録によれば、「露仏両国公使の覚書の趣旨とするところはただ隣那の有誼（友情）を以って割譲の還付を勧告するというにあった。」が、ドイツ公使グートシュミットの覚書（カイゼル指示）は、「日本は三国を相手に戦っても勝算がないから三国の勧告を容れるべきである。」とする極めて強硬なるものであった。カイゼルは当初、日清戦争に於ける講和条件の確認時、「それは決して過大ではない」と頗る親日的態度を表明していたが、間もなく不可解にも「黄禍説」を唱えてその態度を豹変させた。それは、露国政界の大立者ウィッテの追想録にも、「ドイツ皇帝が膠州湾の占領によって、我がロシア皇帝に刺激を与えたことは事実である。・・・カイゼルは、当時ロシアを極東の冒険に押しやる努力していたことは明白である。ドイツは彼の東部国境安全確保するために、我がロシアの勢力を極東方面へ移動させようとしていた。・・・ドイツは極力ロシアの極東経営を援助し、門前の虎（露国）を満州の野に追いやらんとした、実にドイツの三国干渉への積極的参加であった。》このカイゼル２世の野望の件は３章と６章で述べる。

仏蘭西共和国政府勧告　《仏蘭西共和国政府の意見にては、遼東半島を領有することは清国の都を危うくし、朝鮮国の独立を有名無実に帰せしめ、且つ永く極東の平和に対し傷害を与えるものとなる。仏蘭西共和国は重ねて茲に日本国政府に対する友情を章表せんと欲するが故に、帝国政府に向って該半島を確然所有することを放棄あり

たく旨、友誼上の勧告を与うる事は仏国政府の義務なりと思考する。》と。

下関条約をロシア側の情報を覗く　『ウィッテ回想記』上・「李鴻章と東支鉄道利権交渉」の「馬関条約（下関）とロシアの干渉」頁に《アレクサンドル三世皇帝(在位 1881－1894)が崩御し、ニコライ二世が即位して間もなく起きた日清戦争は日本の全勝に帰して、遼東半島の占領によって終結した。平和談判に於いて、日本は色々と自国の利益を主張したが、取分け遼東半島の領有はその主だったものである。この条約は、私の見る処ではロシアに取って甚だ勝手の悪いものである。何故なら、今まで海を隔てた隣国の日本が、この条約によって一転して大陸に地歩を占めて、その一角に利害関係を有する事になり、しかもその地域は将来ロシアの東洋発展に重大な関係をもつ所であるからである。ニコライ二世皇帝は極めて漠然とではあるが、極東に我がロシア帝国の勢力を伸張して見たいという志望を抱いて居るようであった。そこで、日本が遼東半島を領有することを主眼とする日清条約に対して、私は最も手ぬかりなく考慮を払はらねばならなかった。

故に日本をして大陸に根幹を張り、遼東半島地域から北京の死命を制するに足りる地域を領有させることは、到底我々の容認しえない処である。私はこの結論に基づいて日清両国間に新たに成立した条約の実行を妨害する必要があると提議した。

「我々は主義として清国の領土保全と、その独立を破壊する様なことを容認し得ないので、今回の日清両国間に成立した条約に同意することは出来ない。但し日本が戦勝国として軍費を補塡するために相当額の償金を取ることには異議はない、という意味の最後通牒を日本に送るべきである。」と提議し、我々は清国の領土保全とその独立を名目として日本に迫ったのであるから、それが容れられた以上、償金の多寡その他の細目問題に関しては、何らかの干渉がましい言動を避けた。・・・。》と。

李鴻章と交渉に入る　『　同　』第２章「李鴻章と東支鉄道利権交渉」頁には、《私は或る日、李鴻章との会見に於いて、まず今度ロシアが支那に与えた援助が、いかに清国のために有利であったかを説いた。今度我々が強調した清国の領土保全という主義がいかに清国の声威を保持する上に有効であるかを説いた。更に私は言った。

「先ず第一に、ロシアと清国の間に完全な交通路、即ち鉄道を敷設することが必要である。ロシアの兵力は常に欧露に集中されているので、一朝有事の際に清国の救援

に向かうには、欧露とウラジオストクとの両方面から兵力を必要の地点に移動する必要を生ずる。現に日清戦争の際にロシアが万一の場合を考慮してウラジオストク駐屯兵を吉林方面に移動しょうとした時も、道路の無いために、その兵は戦役の終る頃に至っても、まだ吉林に到達し得なかった。そのため支那の領土保全を確保するため当面の急務は鉄道の建設である。」

李鴻章は私の外交交渉になかなか応じなかったが、好機は１８９４年１１月、ニコライ二世の帝即位の戴冠式が行われる時が来た。清国は大官李鴻章が派遣されることは異例で、それは日清戦争の終局に於いて遼東半島を返還と償金の外貨募集に尽力したロシア新皇帝に謝意を表す意味で来露した。

私はこの好機に「東支鉄道」敷設路の交渉を成立させ、秘密協約によって蒙古・満州を経てウラジオストクに至る敷設権利を得た。この三国干渉の裏には遼東半島返還への協力と、清国に負った対日賠償金をフランスからの借款介入し、恩を売ったロシアは 1896 年５月、皇帝ニコライ２世の戴冠式に李鴻章は出席させて「露清秘密条約」を結び、李鴻章は５０万ルーブルの賄賂を手にした。》と記している。

「露清秘密密約」の主な内容は下記の通りとなる。

★日本が朝鮮・清国に侵攻した場合、露清両国の陸海軍で援助する。★両国の同意なくして平和条約を結ばない。★戦争の際には清の港湾は全てロシア海軍に開放される。★清はウラジオストクへ至る鉄道建設を許可すること。★ロシアは鉄道により軍隊と物資を自由に輸送できる。★この条約は１５年有効とし、期限満了には双方が条約継続を協議ができる。

『蹇蹇録（けんけんろく）』 陸奥宗光著「露、独、仏三国の干渉・下」（筆者により読みやすく直した）

《明治２８年４月２３日、露、独、仏三国の干渉が突来（とつらい）すると、その翌２４日、広島行宮（あんぐう）で御前会議を開かれ、廟議は第三国との和親は到底破ることはできない。新たに敵国を作るは断じて得策でないと確定したのである。・・・社会はあたかも一種の政治的恐怖（パニック）に襲われ、驚愕（きょうがく）極まって沈鬱（ちんうつ）に陥（おちい）り、憂心忡々（ゆうしんちゅうちゅう）、今にも我が国の要所は三国の砲撃を受けるような虞（おそれ）を感じ、誰一人として目下の大難を匡救（きょうきゅう）（危険から救う）すべき大策ありと高談する者ない。・・・・物情恟々（ぶつじょうきょうきょう）（世間の心情）ひたすら速やかに時艱（じかん）の去るのを黙祷（もくとう）するのみ。かくて十有余日を経過し、遼東半島の還附は遂に露、独、仏三国に盟約され、日清両国の講和条約は芝罘（チーフー）（煙台）に於いて首尾能く批准（ひじゅん）交

換を了するに至り、世人は茲に始めて事変の猝発(にわかに起きた)すべき虞なきを知り、漸く積日の愁眉（心配）を開くに至ると共に、且つて彼らが胸裡（胸の内）に鬱積（心に溜る）した不平不満の念は一時に勃発し、昨日まで驕り高ぶって人を見下すことを抱いていたが、今日の終天（万世）の屈辱を蒙ることによって、その思いを反省し、各人その驕慢（おごり）を挫折した度合に従い、非常の不快を覚え、彼の不満と、この不快とは早晩いずれの所に向かって声を張り上げるか、自ら慰さめに至るには、また人情の自然なるべし。・・・・。(略)

而して平素政府に反対する党派は、是の如き社会の趨勢(ながれ)を視て、忽ちこれを利用して、総ての屈辱、総ての失錯を政府の責任に基づくものとし、大いに政府の外交を非難した。戦争に於ける勝利は外交に於いて失敗したと、攻撃の喚声は四方に起り、その反響は今なお囂然（騒がしい）としている。政府がかかる非常の時に、非常の事を断行する時は、深く内外の形勢に斟酌(相手を汲みやる)して、遠く将来の利害を押し計った政策を、いくら審議精慮ほどこしても、その計策は一として上手く行かないものである。思い切って、国難を匡救（危難から救う）し、国安民利を保持する道をここに示し、以てこれを断行するに至たることは、自分はこれを湮晦（滅び消える）すると思っている。

・・・戦勝の狂熱は社会に充満し、浮望空想殆んどその絶巓に達していて、もし講和条約中に、軍人の鮮血を注いで略取するという遼東半島割地の一条を脱漏してしまったら、如何に一般国民を失望させ、誠に失望することになるだろう。気勢の馴致（馴れ）する所、是の如き条約は当時の事情に於いて、殆んどこれを事実に施為（行為）に於いて許するすか否や疑うことになる。しかし内外の形勢互に相容れずしてこれを調和することは甚だ難しく、もし強いてこれを調和しなければ、当時起きたであろう内に発したる激動は、その危害を他日あるいは将来起こると推度するわけである。政府は実にこの内外形勢の難しい難題を処理して、時局の緩急軽量を較量（おしはかる）し、常にその重要事項と、かつ急用な事項をかたづけ、内難はなるたけこれを融和し、外難はなるたけこれを制限し、全くこれを制限することができない事項は、尚その禍機（災難）の発することを一日も遅からしめんことに努力し、外交の能事（なすべき事柄）に全力をあげる所存である。・・・・(略)》　（『蹇蹇録』(原文Ｐ363－369)）

第2章　義和団の乱勃発

義和団(ぎわだん)の乱は１９００年、中国の清朝末期に起きた動乱で、義和団事件、義和団事変、北清事件とも呼ばれる。義和団の蜂起は日清戦争後、列強国らによる５年間の間に、弱小国家となった清朝の領土を、列強国に分割競争を激しく繰り広げていた状況下で起きたのが義和団事件である。清国政府の退潮期に現れた愛国的な民衆兵集団が立ち上がり、それに触発された各地の軍閥、馬賊集団たちに伝達され、北支から北満にかけて排外(はいがい)(外国思想文化排除)戦争に発展した。

同時期の１９００年１月、イギリスはボーア戦争(南アフリカ)へ投入兵力(１７万４千)を派遣し、同年１月にアメリカはフィリピン独立戦争鎮圧のために８万の増援兵力を送り込んでいた。イギリスのボーア戦争終結は１９０２年５月３１日、米国のフィリピン平定宣言は、同年４月３０日と義和団事件と並行していた。

清国山東省で「義和団」が「扶清滅洋(ふしんめつよう)」(清朝を助けて西洋を討ち滅ぼす)を唱えて蜂起し、同年１月、英・米・仏・露・独・伊・墺太利(オーストリア)の各公使が清国政府に義和団暴動の鎮圧を要請した。同年３月に英・独・伊の軍艦が大沽(タークー)（天津）で義和団を想定した軍事訓練を行っていた。大沽は天津の外港にあって、北京に最短距離の港に義和団が北京に現れたのは４月２２日、そして義和団包囲下の北京城では各国公使らは籠城(ろうじょう)となったのである。日本国の防衛の指揮をとったのは、北京公使館付武官柴五郎砲兵中佐（後大将）であった。『タイムス』（英国保守系新聞）の記者ジョージ・アーネスト・モリソンによる、北京籠城の記事によって欧米に広く知られ最初の日本人柴五郎中佐となる。柴は陸軍内部きっての中国通(語学堪能)で、共に総指揮を取ったイギリス公使クロード・マクドナルドにも柴中佐の勇気と礼儀正しさに感服している。

駐日英国公使クロード・マクドナルド

柴　五郎中佐(当時公使館付武官)

義和団の蜂起の概略　（『北京籠城』柴　五郎述・大山　梓編　東洋文庫。『近代日本戦争史・Ｉ』「北清事変」川野晄明著。『東洋外交史・上』植田捷雄著・参照）

ロシアは清国と「露清密約」（1896 年）（ウィッテと李鴻章が秘密に結ぶ。『タイムス』のモリソンが暴露記事は後述する）を結び、東清鉄道敷設権、旅順・大連の租借（1895）に成功し、仏国は西南諸島の利権獲得（1895 年）と広州湾を租借、独逸は膠州湾を租借（1898 年）と山東の鉄道敷設権を取得した。英国は威海衛（山東省）と九龍半島（ホンコン）を租借、日本は福建省不割譲に関する交換公文要求、即ち、清朝政府に対し台湾の対岸の福建省を外国に割譲しないと確約を交わした。

こうした列強の進出に清国内では「仇教滅洋」（反キリスト教）・「扶清滅洋」などの掲げた排外攘夷の機運が高まり、白蓮教（南宋から清代までの宗教団）や八卦拳（中国武術）や離卦拳（武術）の流れを組む徒らの暴徒が蜂起した。

列強国の我が物顔で清国大地の利権獲得は、中国民衆の反感と怒りを買い、暴徒らは清国を脅かす列強国に刃向う義徒となり、それを組織したのは独自の武術・拳法をもった新興宗教たちが「義和団」となって行く。明治３３年(1900) ２月、山東省で蜂起した義和団は「興清滅洋」（清朝を扶け西洋を滅ぼす）、欧米帝国主義打倒のスローガンを挙げ、北上して急速に勢力を拡大した。帝国主義の抑圧に苦慮していた清朝は、この義和団の活動に期待し、清朝政府の西太后たちは義和団を援護し、欧米列強国に対抗する軍隊の様相に発展させた。これに対し日、露、独、仏、伊ら７カ国は、水兵計３９４人を集合させ、公使館保護のため５月３１日北京城へ入城した。しかし、６月３日、黄村停車場（現北京市大興区）と付近の橋梁が義和団の襲撃より破壊され、北京―天津間の鉄道が不通となり、北京は事実上の孤立無援の街となったのである。

日本人は軍艦「愛宕」（大型巡洋艦）から水兵２５余人が入城し、総指揮を取ったのはイギリス公使クロード・マクドナルド（写真 18 頁・英国外交官）が各国の義勇隊員の総合の指揮を取った。列強国の出兵に激怒した清国政府は、６月１９日、２４時間以内に各国公使らの北京より立ち退きを要求し、その列強軍に対し宣戦の布告をした。列強国に対し清朝西太后をはじめ、端郡王（愛新覚羅載漪・1856－1922 清の皇族・38 歳で端郡王）が陰の指導者となり、義和団に合流して排外愛国団体の「義和団」が各国公館・教会などを襲撃した事件が「北清事変・義和団の変」と呼ばれるものである。

列強 8 カ国の救援軍は清国軍に阻まれて前進が止り、北京へ軍隊を急派できるのは日本軍のみと考えられ、列強側からは強力な陸軍を日本に救援を求めて来ることを秘

かに日本政府は期待し、北京の公使館の救出と保護は、地理的に近い日本は列強側からの出兵催促を待っていたのである。

６月２３日、７月３日、７月５日の３回に渡り、英国から日本の出兵を求める通牒が齎された。英国はこの時期、ボーア戦争（南アフリカ）の最中で、極東の地へ軍を送る余裕はなく、日本もしくは露国に鎮圧軍を期待したのである。日本政府の方策は、先の日清戦争後に三国干渉よる遼東半島返還の苦い体験から、この事変の動向も不確実で予断を許さない事情と考え、莫大な出費を伴う大兵力の派遣には、日本政府の判断にも苦慮が伴った。又、列強国間にも日本の派兵に根強い猜疑心もあり、列強国たちは欧州から軍を移送するには時間的に余裕なく、事情は切迫し、列強は日本にその派遣要請を強く求めて来た。日本国に於いて、莫大な軍費と大派兵を費やした場合、果たしてこれに見合う代償か得られるかどうか、列国がその費用を保障の担保を受けてくれるかの問題も憂慮した。しかし、日本政府の深層に於いて、日清戦争後の三国干渉によって遼東半島返還の苦渋から、自からの出兵はできるだけ抑え、列国の要望が高まるのを待ちながら行動を起す方策をとった。又、政府首脳らは軍兵を派兵し、この乱を平定すれば列強に恩を売ることが出来ると考え、時の陸軍大臣桂太郎は「将来東洋の覇権を掌握すべき端緒(たんしょ)(手がかり)になる」と考え、列強帝国主義陣営の一翼に肩を並べる好機と捉え、政府首脳は大陸への進出に期待を抱いていた。

５、６月、義和団は北京、天津(てんしん)地方を支配し、北京の列国側の公使館を包囲し、６月１０日には、２０万の清朝軍と義和団軍が北京に入り、当初、清国正規軍は傍観する立ち位置にいたが、清朝軍は義和団と共同戦線の旗を挙げ、各国公使館連合軍に攻撃を開始した。生命危機に迫った北京城の各国公館員や在留民・キリスト教民など合わせて４千人余が北京城に避難籠城となった。援軍の来るまでの５５日余(米国映画コロネル・シバの名で『北京の５５日』)抗戦籠城事件の舞台となった所である。

抗戦籠城の経緯　外務省編『日本外務文書』には西公使（西徳次郎・清国駐在公使）が青木外務大臣に電報「北京籠城戦況一班」とその内容の５区分は下記の通りとなる。

第一期　６月１日ヨリ６月１０日マデ　義和団匪鉄路破壊

第二期　６月１０ヨリ６月２０日マデ団匪北京ニ闖入(ちんにゅう)シテ外人家屋焚焼(ふんしょう)、教民虐殺

第三期　６月２０日ヨリ７月１７日マデ　連日戦闘

第四期　７月１７日ヨリ８月６日マデ　事実上休戦

第五期　８月６日より８月１３日マデ　一面平和的交渉　一面ヨリ襲撃

参謀本部編『明治３３年清国事変戦史』「戦闘時期」に、《６月２０日ヨリ７月１６日ニ至ル間ニシテ、昼夜連続激烈ナル攻撃ヲ受ケ、列国護衛隊死力ヲ竭(つく)シテ防戦ニ従事シタル時期。「外交時期」７月１７日ヨリ８月１４日解囲ニ至ル間ニシテ、一時休戦ノ形勢ヨリ、続テ列国公使ト総理衙門(がもん)（外交官庁）ト相互交渉シタル時期》とある。

６月１３日から義和団の攻撃を受け、北京と天津との交通も遮断され、公使館の区域から北京市街へ出ることもできず、事実上籠城となる。日本側の総指揮官は公使館付武官柴五郎砲兵中佐となり、戦術能力にも各国武官が認められ、その能力を活躍期待される籠城となって行くのである。

ロンドン『タイムス』紙の社説に「籠城中外国人の中で、日本人ほど勇敢に奮闘し、その任務を全うした国民はいない。日本兵の輝かしい武勇と戦術が、北京籠城を持ちこたえさせたのだ」。この記事を記述したのはアーネスト・モリソン記者で、柴中佐の親友でもある。モリソン記者については６章で後述べる。

籠城(ろうじょう)ができるような武器弾薬、食糧の備えも無く、兵力も無く大変な苦労多き籠(こ)もりとなった。乱徒の義和団は攘夷救国の旗の集団であるから、長髪を背に垂らしていたので「長髪賊の乱」とも云われ、又全満州の馬賊(民兵集団)もこれに呼応して蜂起したので、やがてこの事件は、中国各地の軍閥、馬賊集合の発展乱徒となり、北支那から北満州に広がり「北清事変」とも呼ばれた。籠城の経過を見て行く。

『北京籠城(ろうじょう)』柴五郎述　(明治３４年１２月２９日講演記録)東洋文庫 53 より抜粋する

《私（柴五郎）は軍事教育会より頼まれましたので、本日の講演は諸君に北京籠城の講話をいたします。ご承知の通り、昨年の北京籠城は６０余日に渡っての話なので、詳しく話すには少なくも１０数回になるので省略しながら話します。護衛兵が北京に入ったのは、５月３１日で、各国護衛兵の数は、皆で４３０人程でありました。

日本は将校 1、下士以下２４、イギリスが将校３、下士以下７９、フランスが将校３、下士以下７５、ロシアが将校２、下士以下４９、ドイツが将校１、下士以下５０、オーストリアが将校３、下士以下３０、イタリアか将校２、下士以下３９、アメリカが将校３、下士以下５３でありました。或る国にては、海軍の小口径の速射砲や、機関砲などを持参して来ました。イギリスは８８年製の５連ノルテンェルド機関砲１門、オーストリアが機関砲１門を持って来ました。イタリアが３７ミリ機関砲１門、アメ

リカがコルツ機関砲１門、ロシアは小口径野砲１門を持ってくるはずが、何か鉄道運輸の都合で弾薬だけ持参、砲は次の汽車で送る手筈となっていたが、天津に残し次の汽車より不通になり、役に立たなくなりました。・・・。

６月１３日から１６日頃までは、彼らは、昼間は公使館の区域には襲来しませんが、夜になると各方面に少しずつ来襲がありました。彼らは公使館以外の各所には火をつけたり人を殺したり、残酷な事があったようです。就中の１４日の夜、外城にいた幾千百の基督(キリスト)教民が義和団に逐(お)い回わされ、男女老若、公使館外の城壁下にきて、悲鳴号泣して救いを呼ぶ声と、これを容赦なく虐殺する団匪(だんひ)(暴徒)の怒号と、相混じて実に凄惨でありました。・・・外国人や支那耶蘇教(やそきょう)民を公使館区域内に連れ入れ、その支那教民の男女合わせて３千余。１６日、私も日、英、米の兵を４０名ばかり率いて北京の東北部に行き、義和団の屯(たむろ)している寺を囲み、５０人ばかりを銃殺して、教民の若干を助け出しましたが、気の毒なことに、寺の柱に縛られていたため、我が方の弾にあたり義和団と一緒に殺された教民いました。

6月21日　・・・この日は、露清銀行(ろしんぎんこう)(シベリア鉄道建設のため清・露間創設銀行)の西側にあるオランダ公使館も焼かれ、この日より、敵は大砲二門ばかりを正陽門(図面左側一番下)に上げ、諸公使館に向けて射撃しました。その弾丸は７サンチ半のクルップ砲の榴霰弾(りゅうさんだん)(破片が飛び散る)で、我々の頭上で矢鱈(やたら)に破裂し、若干の支那人に怪我(けが)のみで、外国人には負傷はありませんでした。・・・。

6月22日　・・・英国公使「サー・クロード・マクドナルド」氏(後、駐日英国公使)は、かつて身を軍籍に有って、実践の経験あるこの人を推して全体の指揮を委任することになりました。英公使は早速これを承諾し、即刻命令を伝えて、米、露兵は直ちに各その公使館に帰し、伊、仏、独、墺(オーストリア)の兵は、日本と共に粛親王府(しゅくしんのう)(図面 25 頁・清の皇族・清朝８大世襲家の筆頭)防禦の指揮は、私(柴)に命ぜられました。・・・「こんな広い混雑きわまる家屋を防禦することは到底できない」という異論が盛んに起こりました。各国の兵は皆この粛親王府を引揚げて、日本人だけがここに留まりました。・・・当分援軍の来る望みは無いと断念し、そこで今後は愈々(いよいよ)日本の陸軍、もしくは露国の陸軍が、大挙して出兵を待つより外はない。それにしては今後、幾日待てば援軍が来るだろうかと、日々指を屈して算する者があり、支那兵いかに弱くとも、援軍が大沽(タークー)に上陸するのは容易であるまい、・・・・。

6月23日　・・・この日の早朝、粛親王府の北５０メートルばかりにある理藩院(図面中央上･清朝の中央官庁)当たりに、多数兵集合する様子が見え、9時頃になりますと、５百ばかりの支那兵が粛親王府と墺公使館の間より、総税務司(図面右上・税関)および粛親王府の東阿司門付近まで迫って来ました。そこで日本兵の一部を、府の屋上及び壁上に上げて射撃、私と日本兵は応援に駆けつけました。税関の義勇兵とで、２０人余を連れて総税務司西側民家の間より突き出しました。安藤大尉は、日本兵８名ばかりを率いて、税務司の南より出て、どうやらこうやら敵を追い退けましたが、敵は総税務司に火を放って退きました。この頃日本の義勇兵中、猟銃を併せて銃器を持っておる者は３、４人にして、いかにも困りましたから、英公使へそのことを申した処、イタリアの「パオリニー」大尉が、兵を１０人率いて来援しました。この日、我が方面で負傷をした者は、日本兵が３人、イギリス兵が１人、イタリア兵が１人、支那人が５、６人もありましたが、死者は出ませんでした。・・・。

6月24日　・・・甚だ兵の不足に困り、急に援兵を乞いにやりましたら、独、仏、墺の兵を、各々１０人ずつよこしてくれました。各国より１０人ばかりの援兵は、いたって少ないように思われますが、当時１０人の兵を他に援兵にやるというのは、中々容易なことでありません。・・・昨夕よりイタリア兵の全部の将兵以下２７名、粛親王府に入り、私の指揮に属することになりました。英公使の方より、英公使館が危急であるから、援兵をよこせと言ってきました。それでまた安藤大尉は、太刀を振って、その時すでに英公使館の一部に進入しつつある敵中に飛び込み、各人これに続いて突貫し、ついに敵を撃退したそうで、後に、諸外国人みな安藤大尉の勇気に感服しておりました。この日粛親王府では、仏兵１、伊兵２、耶蘇教民が２人死亡、負傷兵は仏兵１、耶蘇教民が９人、日本兵が１人おりました。耶蘇教民男女３千ばかりを、置き所無いため、粛親王府の正門面の広場、及び西阿司門西の並木のある広場に入れて、自然、日本人に直接に保護されるような形になり、彼らも、大いに我が日本人を恩に思い、我らの言うことをよく聴き、よく働きました。・・・。

6月25日　・・・我が義勇兵中村秀次郎氏は、仏公使館の北裏門(中央左上)の哨所にて戦死しました。この人が日本人中第一の戦死者で、この外、我が方面にて日本人４名負傷し、墺兵１名戦死、仏兵１名、伊兵２名、支那教民４名負傷しました。・・・。

6月27日　・・・この日我が方面の死傷は教民１３名、ここに私は、この日の戦いに英兵の沈着なる挙動に関心いたした。・・・樹の下にわずかな高さの煉瓦を積んで、

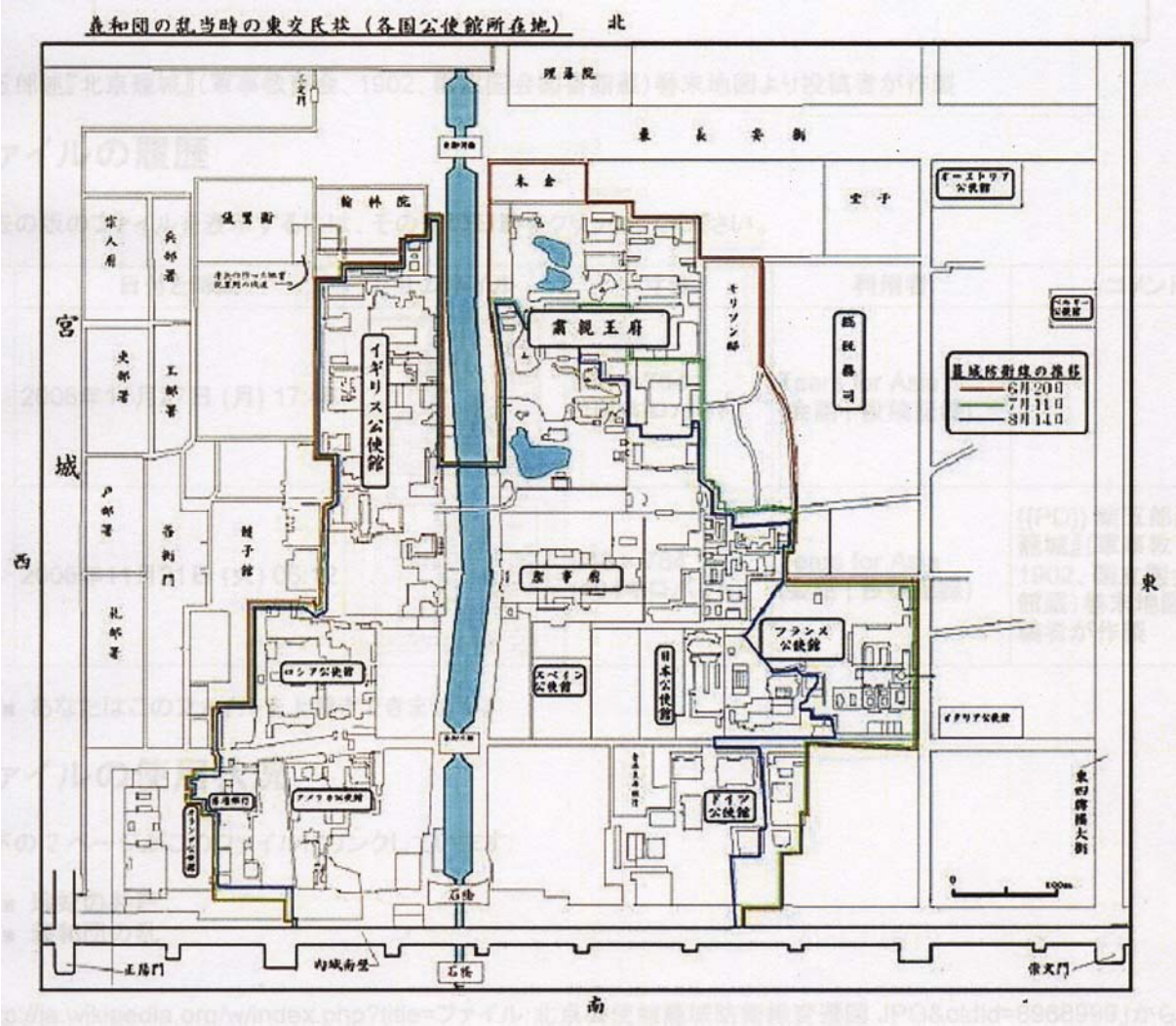
その蔭に英兵が５人隠れ、しきりに射撃して、私は往来(車道)を隔て、こちらの物陰におりましたが、時々彼らの方に様子を見に行きますと、危ないからもうくるなと言います。そのうち射撃が益々激しくなり、いかにも危ないから、私は手招きをして英兵に、こちらに来いと言いますと、英の伍長は甚(はなは)だ沈着して、部下４人の兵を１人ずつ指図して、時機を見計らい、身を低くして往来を横切り馳せさせますと、そのうちの１人が、往来の真中へ弾薬を１０発ばかりこぼし、はじめて弾薬を落としたことに気がつき、こんどは身を平たく蜘蛛のようにして、地面をはって敵弾雨飛の下に出て行き、落とした弾薬を悉(ことごと)く拾って帰り、アングロサクソン人の沈勇な処は、即ちこれだと、私は一人関心いたしました。・・・。

7月1日　・・・この日もまた総出で大砲取りに出撃しました。この日の出撃は伊の「バオリニー」大尉の発意で、同大尉より英公使に企画を告げて援兵を乞いますと、英公使は大いに危険と思い、重ねて私の意見を求めてきて、私も多分は成功するだろうと考え、伊大尉に同意と答えますと、英より海兵７名、義勇兵五名をよこしてくれました。そこで伊の大尉は、伊兵に英、仏、墺の援兵２０余名を合して、府の西側より突いて出て、我々日本人は、府の東門の閉鎖を乗り越えて、Ｃ角の北方にある大砲を奪いとる計画で、両方合図を決めて出ました。・・・伊兵は隧道(トンネル)より出て、府の周壁に沿って北門外に向い、この小路に築かれた堅固なる敵の胸壁(身を隠す)に突き当たり、この小突撃隊は、勇を鼓舞してこの障碍を乗取(のっと)る際、伊の大尉は重傷を負い、やむを得ず苦戦しつつ退却し、２名の戦死者はついに敵手に捕われました。・・・この日の失敗は、最初英公使が危ぶむにも拘わらず、私が伊の大尉と共に出撃を主張いたしたので、籠城以来の大損害を出したのは、まったく私の罪であります。・・・。

7月4日　・・・この日より、列国糧食(りょうしょく)委員にて、馬、驢馬(ろば)、騾馬(らば)などの肉を配分し、人々勝手に獣を屠(はふ)り、または斃(へい)獣の肉をとることを禁じました。元来、牛、羊、豚などは、籠城２、３日目より尽きて、その後は、主に馬、驢、騾の肉を食しました。最初我が線内にあった獣類は、１５０、６０いましたが、飼料に欠乏したころより、粛親王府の西南、庭の隅の所にある池に、たくさん芦やその他の草が生え、ここに放し、次第には府中を駆けて木の皮や小枝を食って回り、その際敵弾にあたり　斃れた獣、毎日１、２頭あり、列国糧食委員の手にて配分するようになりました。・・・。

7月6日　・・・安藤大尉は、終にこの日の晩亡くなりました。実に哀惜に堪えま

せんでした。大尉は以前より支那のことに志し、今回、家宅を売却して、自費留学を思い立った人で、事の始まりは５、６日前に北京に到着が、北京、天津間の汽車不通となり、その日の朝、用事を帯びて天津に行くために停車場まで行き、汽車不通となり籠城となってしまった。この程の想いでいた安藤大尉の最後を遂げたのは実に不運の人でありました。・・・英公使の人は、大尉の死を聞いて、悲痛の弔詞をよこしました。・・・私はいつも葬式に列する遑はありませんが、大尉の時だけは、間を偸んで、戦闘線の人に隠れるようにして葬式に列し、一朶の草花を手向けたときは、感慨のきわみ少時は墓前を去るに忍びませんでした。



北京公使館籠城図・『ウィキペディア』より（柴五郎述『北京籠城』・軍事教育会 1902 年・投稿者作製）

7月16日　・・・我々日本人は、開戦以来約１カ月余、ほとんど胸壁塹壕(身を隠す壁・土盛り)にしがみつき、炎熱雨露に晒されて戦い、毎日平均３、４時以上の睡眠を得ず、衣袴破れても更える遑も余裕もなく、ことに食糧は１０余日前より半減となり、甚だしいのは負傷３回に及び、休むことを許されず、人々は困憊の極に達した。・・・

この日私はストラウツ大尉および「タイムス」新聞記者のモリソン氏と共に、歩哨線を巡視していますとストラウツ氏は打たれ、私は軍服の左脇を打ち貫かれ、幸いに免れました。ストラウツ大尉は間もなく絶命しました。・・・。

『北京作戦日誌』７月１６日の記事に、《「ケプテン・ストラウト」、「ドクトル・モリソン」ハ柴中佐ト伊哨ヲ巡回ノ帰途、停山ノ西下ニテ、「ケプテン・ストラウト」狙撃セラル、之ヲ看護中、「モリソン」モ、足部ヲ射ラル、柴中佐ハ幸ニ、軍服ノ左腕ヲ貫カレタルノミニテ、負傷スルニ至ラズ、「ケプテン・ストラウト」１１時頃、永眠ス》と記述がある。

北京城乱徒防衛状況・yahoo

紫禁城（故宮博物院）に集結する連合軍

時の陸軍大臣桂　太郎

7月 20 日　・・・おかしなことには、諸公使が難儀をして困っておられるだろうと、西太后（せいたいこう）（1835－1908・清の第９代咸豊帝（かんぽうううてい）の妃）からのお見舞いといって、西瓜、黄瓜（きくわうり）、茄子などを車に４台送って来ました。一方では頗（すこぶ）る強硬な手紙がくるかと思えば、また一方よりは西瓜のお見舞いなど来るというので、甚だ不可思議で思い、この頃の清国政府は、平和派と主戦派とが、互に議論が一致しなかったものと見えます。

《『北京作戦日誌』７月２０日の記事。「西太后ノ名ヲ以テ、西瓜、黄瓜、茄子等、車４台ヲ、英館ニ在ル外人一般ニ送リ来ル」》とある。

7月27日　・・・この頃よりは、敵の隊長よりも毎々使いをよこしたり、矢文を射たり、ことにおかしい事は、犬の首に手紙を結んでよこしたりして、しきりに天津へ出て行けとか、早く降参したら命だけは助けて、本国へ無事に帰してやる。もしいよいよ聴かずに、出ても行かず、降参もせずに２４時を過ぎると、皆殺しにするから覚悟せよ、などとつまらぬことを書いてある。・・・。

8月1日　・・・午後になり、去る２２日に出した密使が、２６日付きの福島少将の手紙を持ってきた。・・・その大意は、大沽（タークー）の上陸困難にて意外に日時を費いやし、

鉄道も自由に使用できず、また白河の舟が不足で糧食、弾薬の輸送も予定通りにできぬ。それがため今に天津を出発できないが、昨２５日私(柴中佐)の書に接し、北京の危急を詳(つまびらか)になったので、火急に北進して救いだすと、列国軍間で協議中であると。たぶん両３日中に、１万５千ばかりの兵で、準備整い次第、通州を経て北進する予定、とありましたが、まだ中々援軍は来ないということが分かりました。・・・６月２０日以後、我々日本人の手により２８通も出しましたが、そのうち無事に目的地についたのは４通、また援軍の方より我が手に達したるものは３通のみで、・・・手紙はもちろん暗号で、色々と工夫をして紙縒(こより)に撚(よ)り、多くは日本の雁皮(がんぴ)(ジンチョウゲ科の植物の和紙)を用い、これを衣帽靴底などに縫いこんだり、傘の竹柄(たけのえ)などに押込んだりいたしました。・・・。

8月9日　・・・この頃、糧食愈々(いよいよ)欠乏して、教民の婦女、小児などは草木の葉だの槐(えんじゅ)の花などを食っているのを見ました。・・・。

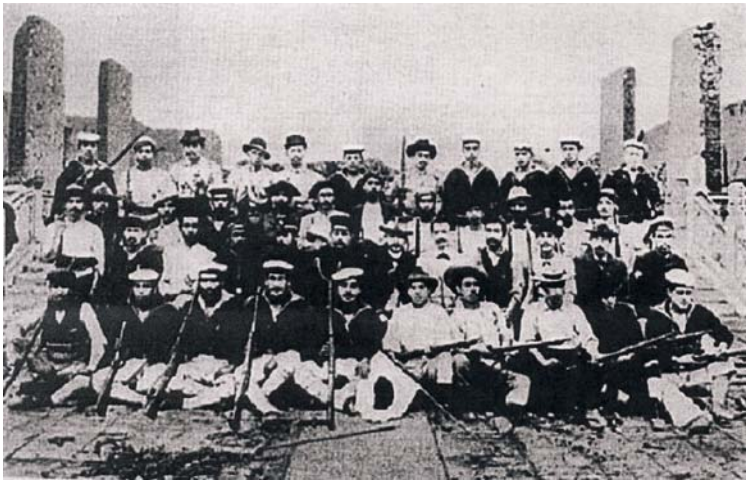
8月14日・15日　・・・一同はそら援軍が来たというので、飛び立つように喜んで、ほとんど狂気のようでありました。・・・胸壁上から首を出して辺りを見ますと、敵はもはやおりません、すぐに塀を越して飛び出して見ると、敵はよほど、周章(あわ)てて遁(に)げたものと見えて、残飯や鞍置いた馬などそのままに遺(のこ)してありました。・・・・。

そこで一つ疑問なのは、支那兵いかに弱くとも、１万内外の多数にて、しかも大砲を持っていて、４百に足らぬ外国兵に、しかも弾薬糧食ともに窮乏して困憊(こんぱい)を極めているのに、本気で攻撃して攻め落とせないことはない。そうしてみると、彼らは最初から、各国公使を殺戮しようという考えではなく、ただ猫が鼠を弄(もてあそぶ)するように若干月日間嬲(なぶ)りものにしたのに過ぎず、即ち真面目(まじめ)の攻撃をしたのではなかろうと、こういう疑問を起すのであります。

・・・わが海軍陸戦隊の勇健なる働きは、実に称賛に堪えません。彼らは下士以下非戦闘員ともに２４名でしたが、常によく全体の骨幹になり働きました。彼らの中にまったく無疵(きず)のものは僅かに５名だけで、５名は戦死し、他の１４名は負傷いたしました。その負傷も一度ならず二度、三度、甚だしきは五度も銃傷を負い、繃帯(ほうたい)にて頭を縦横に巻いて戦っている者もあれば、足を撃たれて碌々(ろくろく)歩けぬために、塹壕(ざんごう)の中に坐ったままで戦っている者もありました。彼らは不慣れな陸戦に従事し、ありとあらゆる危険に堪(こら)えた。・・・府中内より見つけだした「オルガン」を鳴らして、冗談を言うたり笑ったりして、少しも惨めな様子がありませんでした。

・・・西洋人などはこれには大いに感心し、・・・常にニコニコして苦しい面をしないというので、一般の模範となりました。・・・１５日の朝早く・・・北京城は全く外国軍の占領に帰しました。》　（『北京籠城』の文中は筆者により読みやすく直してある）

義和団事変の終了は 1901 年９月、清国と１１カ国との「北清事変に関する最終議定書」が調印され、この議定書は責任者の処罰、総額賠償金４億５千万両（テール・両の英語名）を支払いと、公使館に護衛兵を常設する権利、列強国の駐兵する権利等を含む１２ヵ条からなるものであった。



粛親王府廃跡にての記念撮影。籠城に参加した水兵及び義勇兵は負傷を除いて全員。前より２列目、右より７人目が柴五郎　『北京籠城・北京籠城日記』東洋文庫より

義和団の暴徒

北京籠城の55日間籠もり列強に日本軍人凄さを知らしせしめた男、柴五郎中佐とは

柴五郎は会津藩士の出身、上級武士の五男として生まれる。祖母、母、姉妹は戊申戦争の際に自刃。一族に多くの犠牲者を出し、会津落城後、俘虜として江戸に収容、後に下北半島の火山灰地に移封され、公表をはばかるほどの悲惨な飢餓生活を続けた。脱走、下僕、流浪の生活を経て軍界に入る。藩閥の外にありながら、陸軍大将、軍事参事官の栄誉を得た逸材で、中国問題の権威として軍界に重きをなした人物である。

石光真清の私記、『城下の人』『曠野の花』『望郷の花』『誰のために』著作に、「石光の叔父・野田豁通（1844－1913）は維新政府の陸軍監督総監（後の陸軍主計総監）旧姓石光、戊辰の役に征討大総督府の幕僚として従軍、会津若松城を攻撃軍に加わる。箱館戦争では監督総監として活躍。1885 年ドイツ留学。日清戦争では野戦監督長官として出征した。後、野田は初代青森県知事に就任時に、育英事業として会津藩の子弟から

２名を選抜して、県庁の給仕として採用した。その一人が柴五郎である」とある。

柴五郎砲兵中佐（最終階級大将）安政６年(1859)会津藩士柴佐太蔵の五男、戊辰戦争の時１０歳で、親たちの計らいで五郎を戦火より逃し、柴家の血を守ったという。

明治６年陸軍幼年学校、同１２年砲兵少佐、同１７年中佐、日清戦争には大尉、少佐で大本営陸軍参謀心得、戦後駐英公使館付、翌年北京公使館付武官となる。義和団事変に於いては８カ国の籠城の指揮をとり、英語、仏語、中国語に精通した柴中佐は各国の相互理解に大きな役割を果たした。総指揮者は英国公使クロード・マクドナルド、現場指揮を執ったのは柴五郎となり、開城後、日本人柴中佐は欧米人から賛辞が寄せたられた。英公使マクドナルドは日本人の勇気と礼儀正しさに心服し、日英同盟の構想の切掛けは、マクロナルドと柴五郎の信頼関係が始まりと云われている。柴中佐は英国ビクトリア女王から、又列強国からも勲章を授与されている。

柴五郎の中国観　義和団の蜂起に列強側は彼らを「賊徒」と呼び、所謂(いわゆる)馬賊（賊）と称するものは、正規軍の勢力の及ばない地域を守る民兵集団で、夫々の地域ごとに協定が形成され、義和団の蜂起に繋がる情報網が出来上がっていた。

１７―１８世紀、ロシア軍がシベリア・アムール河に進出したときには、「紅鬍子(フンフーズ)」と称する集団が常に馬に乗って襲来し、この集団がカザック（コザック）、ダッタンと呼ばれ歴史を刻む。この集団が地方軍閥と手を結び、その戦力集団が清国正規軍と結びつき、北支から北満にかけて暴走したのが「義和団事変」に発展したのである。

柴五郎は後年、北京籠城の経験を振り返り、列強国のみ褒め称えるのではなく、影の功労者として、清国教民（キリスト教徒）の献身的な協力に言及し、少数の日本義勇隊による粛親王(しゅくしんのう)府（清朝筆皇族府）の防衛を維持できたのも、清国教民の助力の賜物であると明言している。真に中国人を理解し、真に中国を知り、真に中国の友たらんとした多くの人々たちは、その後、軍の中枢から次第に外されて行くのである。

この事変後、「馬賊」の頭は、日露戦争、満州建国草創期、日支事変に於いて日本軍はこれらの馬賊を利用し、そのあげく匪賊の名を冠して討伐した。柴はこの賊と云われた人たちに終生心傷を負っていた。

後のことであるが、昭和１７年の秋、柴五郎翁は「この戦(いくさ)は負けです」と石光真清に確信をもって言ったとある。(『ある明治人の記録』第二部「柴五郎翁とその時代」)

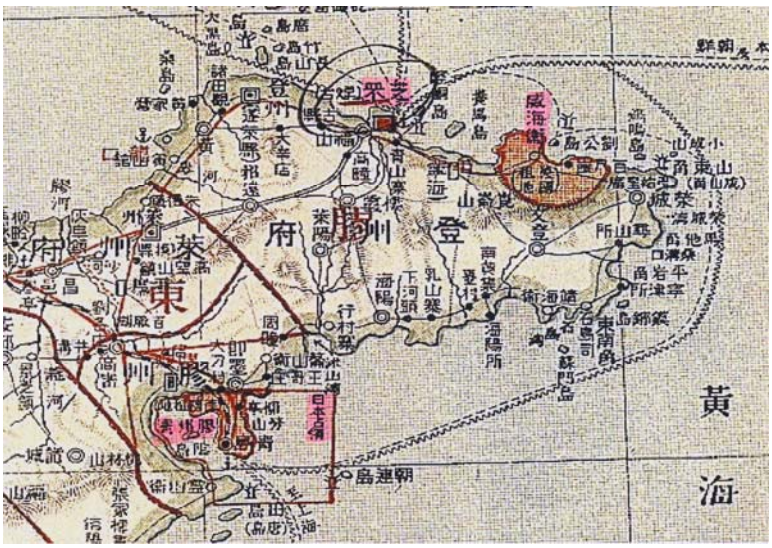
義和団事変後の日本･露、仏、独、英国･米国の中国分割の意図

義和団の乱の第一報を受けたロシア陸相クロパトキンは笑みを浮かべ「満州を占領する口実ができた」と語り、ロシアは満州を乱徒征伐の名の下に満州を占領した。ロシアは朝鮮に及び、日露の緊張は高まりこの緊張が日露戦争に繋がって行くのである。

ドイツは1897年､山東省で自国の宣教師が殺害されたことを口実に､膠州湾(こうしゅうわん)を占拠、翌年ロシアと内応して膠州湾の租借権と山東省の鉄道敷設権と鉱山採掘権を獲得する。ロシアはドイツの膠州湾占拠を見たロシア艦隊は急ぎ派遣し、遼東半島の旅順・大連を占拠して、1898年に遼東半島全域の租借権を獲得した流れとなる。

日本は日清戦争後に、露・独・仏の三国干渉により清国へ返還させられた遼東半島は、清国は日本への賠償金の仲介をしたロシアに報酬として遼東半島を差し出す結果となった。フランスも清国へ賠償金の融資担保権として、ロシアと提携して1898年に広州湾の租借権を得た。イギリスは１８９８年、日本軍が威海衛を撤退すると、ロシアに対抗するために威海衛の港を租借した理由は、ロシアに遼東半島を勝手にさせない牽制であり、日本側と了承の上に租借している経緯となっている。

この時期の陸軍大臣桂太郎は、今回のような数カ国連合軍が成立したことは歴史上初めてのことであり、同盟に参加は列強国の一角にくい込むことは、願ってもない絶好機が到来したのである。この時、桂は列強連合軍への参加こそが「将来、東洋の覇権を掌握すべき端緒」と考え、いま派兵する軍隊は「列強の伴侶となる保険料」と桂は云い、列国の援軍到着する前に、乱を平定すればその功績は日本に帰し「各国ハ永ク我国ヲ徳トセン」と桂は述べている。

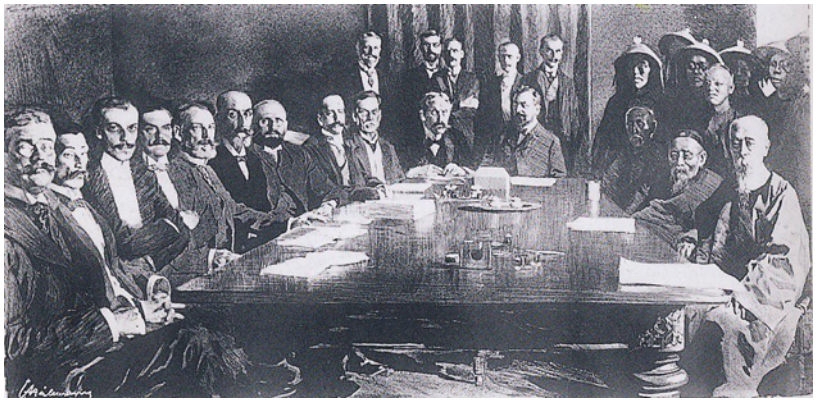


黄海山東半島は旅順大連対岸となる・威海衛と罘芝(チーフー)・左下が膠州湾

列強国の仲間入りを果たし、明治政府の指導者の喜びが溢れている。ロシア軍は北京救援と称して満州に軍を入れて、８月３０日黒龍江省、９月２１日に吉林省、１０月２日満州奉天を占領した。

このロシア軍の脅威に、日本を「極東の憲兵」として期待したのは列強イギリスである。ロシアの南下を軍事力で極東を阻止できる国、それは日本に他ならない。イギリスは将来に於いて、日本こそが利害を共に出来ることを自覚し、イギリスは駐英公使林董（ただす）に急接近したのが、日英同盟案だったのである。

北京城入城時に撮った写真



北京列国会議での小村寿太郎・左より２番目・右側・右端は慶親王、隣が李鴻章

１９００年１０月８日北京各国公使会議開催の様子・『骨肉』より。義和団事変に於いては、講和会議全権として事後処理にあたる。

第3章　ロシアの極東への進出と日本との軋轢

ロシア帝国ニコライ２世皇帝が何故極東へ野望を果たそうとしたのか、それを理解するために、先ずドイツ国を見て行く。ドイツは稀有の大政治家ビスマルクが辞任すると、名実共に独裁者の位置に着いたカイゼルが、ヨーロッパ政策から世界政策へと大きく舵をきった。それは極東に於いて日本と清国の間に明治２８年（1895）下関条約に基づき、日本に割譲された遼東半島を返還されたことによる。露国、ドイツ、フランスの三国干渉により返還された事により、列強たちが次に手を打つ極東地域への展望と策謀を考えた。ドイツは 1892 年に締結された露仏二国同盟は、両国に挟まれたこの同盟はなんとしても無力なものにしたかったのである。そこでカイゼルは、ロシアが極東経営に乗り出すチャンスを待っていた。好機到来は日清下関条約（1895 年４月）が締結し、カイゼルは独露両国が手を携えて遼東半島に乗り込むことにより、露国を極東に釘付することができる。そうなればドイツはフランスの復讐の恐れは無くなるのである。次にカイゼルの行動を追うことにする。

独逸（ドイツ）皇帝カイゼル（ヴィルヘルム2世）　カイゼルはどの様な人物であったのであろうか、その人物像から探って観たい。１８８８年、祖父ドイツ皇帝・プロイセン王、ヴィルヘルム１世が死去すると、ヴィルヘルム２世の父フリードリヒ皇太子が、フリードリヒ３世としてドイツ皇帝・プロイセン王に即位し、ヴィルヘルムはその皇太子となる。しかし、不治の病にいたフリードリヒ３世は、在位９９日で死去となり、皇太子ヴィルヘルムが即位（ヴィルヘルム２世・２９歳）が第３代ドイツ皇帝・第９代プロイセン王となる。帝政ドイツ国の議会は皇帝に大きな権力が集中し、国政は皇帝の意志が大きく反映される議会となり、「世界で最も力のある玉座」と評されていた。

英国女王ヴィクリトア（1819－1901・英国ハノーヴァー朝の第６代女王・在位 1837－1901）の孫がドイツ皇帝ヴィルヘルム２世の血縁関係となっている。ロシア皇帝ニコライ２世とも従兄弟同士の関係となっている。カイゼル（皇帝の称号）を日本ではヴィルヘルム２世を指すことが多い。

カイゼルの野心　1894 年、朝鮮問題を契機として勃発した日清戦争の結果、講和条件によって日本官民共に歓喜したが、それも束の間、三国干渉により日本はやむなく遼東半島を返還の経緯となる。日清戦争開戦時はドイツの動きは消極的であったが、次第に変化が現れた。露国ウィッテの『回想録』に、《「膠州湾の占領によってドイツ

皇帝(カイゼル)は我がロシア政策に最初に刺激を与えたということは事実である。恐らく彼は我がロシアの立場を、あらゆる方面から見て、カイゼルのドイツ政策は、当時ロシアを極東の地に冒険に押しやろうと努力していたことは明白である。ドイツは露国との東部国境安全保障を確保するため、我がロシアの勢力を極東方面へ移動させようとした」》と述べている。

カイゼルの対露政策は、三国干渉への参加することにより、寧ろヨーロッパ政局の危機より打開の糸口を探し、遠大な世界政策の一端として生まれてきたものと解すべきである。領土的野心、日本との通商上の利益を疎外の目的の様にみえるが、真の目的は欧州全体の政策より割り出された、ドイツの対露政策の一環であった。極力ロシアの極東経営を援助して、門前の虎を満州の野に追いやる事に、ドイツの三国干渉の意図があったのである。(『西洋史学』黒羽茂・1954 年 10 月号)

ドイツの極東政策と日露戦争を想定　１９０１年の極東三国同盟提議問題（独・英・日）は、ドイツが自国の西ヨーロッパ安全保障の手段として、露仏同盟の無力化を計って、ロシア皇帝をヨーロッパ侵略への野心を遠ざけることにドイツ皇帝は心血を注いだ。ドイツ国土をロシア侵食されない様にするにはどうしたら良いかを考え、思案の末、ニコライ皇帝に暇を与えないことの結論に至り、日英両国（当初は独・英・日の同盟）を結ばせ、この同盟にニコライ皇帝を対峙させる企てを仕組んだのが、カイゼル（ヴィルヘルム２世）と云われる。この外交戦術は、日英同盟締結を促した真の動機であったのである。

左・カイゼル、右・ニコライ２世・２人はいとこ同士となる

陸の王者ロシア帝国を極東に神経を向けさせることは、カイゼルにとって対仏政策上、確かに一石二鳥の名案であった。日清戦争後の三国干渉以来、悪化を辿っていた極東状勢は、１９００年の義和団の乱を契機に、ロシアの行動は様相を一変してしまった。ニコライ２世皇帝の目的は、複雑化した極東侵略は愈々(いよいよ)ロシアの行動は露骨になり、満州から朝鮮半島をも含む併合を目指した。カイゼルは形勢の手応えに自信を持ち始め、ロシアの極東覇権出進に、ヨーロッパ列強国は日露の開戦を予測から現実視として捉えた。ドイツは日露が軍事対峙に発展するな

らばドイツはこの好機を利用しつつ、仏国だけに対峙すれば良いとの結論に至ったカイゼルの秘策であった。日露の開戦を予想し、ロシアの軍事力を極東に留め置く事ができれば、との想いの発案が、初期の日英独同盟を提唱して、その同盟を煽(あお)ったのはカイゼル本人であった。(『世界史上より見たる日露戦争』黒羽茂著)

ロシアの極東政策の意図　ロシアは日本による遼東半島返還と 1900 年義和団事変を好機と捉え、満州出進と不凍港である旅順・大連の進出に大きく舵をきった。この間の英国は南アフリカに於けるボーア戦争に忙殺され、英国単独では満州までの抗議さえも出来ない状態にあった。日本自身の外交方針も満・韓交換説を唱えている状態であり、この段階では満州進出への派兵もあり得ない結論に至っていた。

１９００年６月、義和団事件は満州奉天地区の治安が不安定となり、教会の焼打や宣教師殺害事件、ロシアの敷設した東清鉄道も随所で破壊され、義和団の暴徒らは満州の各地に波及した。ロシア政府は義和団事変を好機到来と捉えていたが、当時大蔵大臣のセルゲイ・ウィッテ（ポーツマス全権)は清国の国境紛争問題の解決を親和的政策と考えていた。ウィッテは満州へ派兵反対者で、平和的な方法で清国政府から満州政策（鉄道敷設権利獲得）の譲歩を求めていた。一方満州を武力占有する宮廷議会を牛耳るベゾブラゾフ一派(極東の領有する)は皇帝に極東献策し、ウィッテの派兵政策には大きな相違があった。ウィッテの極東政策は「シベリア鉄道を開き、東西の交通を活発にしてヨーロッパ貿易を発展させ、支那向けの綿布・毛織物・金属類の輸出政策を考えていた」。しかし、１８９７年から翌年にかけて旅順・大連の租借地獲得以後、ベゾブラゾフ一派は宮廷議会を仕切り、ニコライ皇帝を極東侵略策に同意させたのである。ウィッテは大蔵大臣を皇帝から罷免させられ、ニコライ皇帝よりロシアが旅順・大連を占有したことを聞くと、ウィッテはアレクサンドル・ミハイロヴィチ大公（露国皇帝ニコライ１世の末子ミハイル公の４男）に、「殿下よ、今日の日を憶えていて下さい。この宿命的第一歩がロシアのためにどんなに恐ろしい結果を齎すかを、見ていてください」と述べ、長い溜息ついたと述記している。（『ウィッテ伯回想記』上）

ロシアの撤兵の動き　ロシアは清国・日本・列強の抗議に従い、満州撤兵に同意することを決め、１９０１年４月８日、ロシアは清国との満州還付条約に調印した。

条約はロシア軍の撤兵を３期に分け、６ヶ月間の期間ごとに、計１年半で撤兵を完

了すると伝えてきた。第１期は盛京省（遼寧省）の遼河の線以南、第２期は盛京省残部と吉林省、第３期は黒龍江省という順次で撤兵計画を示していた。

ロシアと清国は露軍撤兵後に於いて、この地区を他の国を入れさせない、清国に返還された鉄道はロシアが経営し、修膳費等の返還などの規定を取り決めた。ロシアは半年後の１０月８日までに第１期撤兵を実行したが、明治３６年（1903）４月８日、第２期撤兵は実行されず、奉天のロシア軍は撤退の行軍を始めたが、元の兵舎に引き揚げてしまったのである。

陸相クロパトキン（1848－1925 アレクセイ・クロパトキン、日露開戦時ロシア満州総司令官）は欧州西部国境を重視する立場から、満州に大兵力を割く事に反対で、南満州を放棄して、北部満州だけをロシアの勢力圏置くことを皇帝に進言していたが、１９０３年６月、彼はニコライ２世皇帝の勅命によりクロパトキンは極東視察の途次に来日し、日本の軍事力を高く評価して日本との軍事衝突には一貫して反対したが、日露戦争開戦直前にロシア満州軍総司令官となる人物でもある。このクロパトキンの満州撤兵視察行に鴨緑江（おうりょくこう）（中国と北朝鮮の境）を訪れその足で訪日し、日本世論はクロパトキンに強いスパイ行為と感じとり、彼の日本訪問はきっと開戦偵察にやって来たと日本国民は皆そう思っていた。

クロパトキン自身、日露戦端について、陸軍大臣寺内正毅（まさたけ）との雑談の際、《「予(クロパトキン)は武官なり。日本より戦を開くに於いては、３百万の常備軍をもって日本を攻撃し、東京を手裡（しゅり）(手の内)に入れん。しかし我一個人としては日本と開戦するは決して望ましからず」》と、陸軍大臣寺内に語っている。又、クロパトキン回顧録に、《「予は日本に於いて最も鄭重親切な待遇を受ける。予は、日本政府と露国との衝突を避ける希望をもっており、露国は満州にて既定の約束を完全に履行し、且つ韓国の干渉することを避ける要（かなめ）を痛感せり。・・・。》（『機密日露戦史』第１章「日露海戦の経緯」）

参謀本部中堅が露国との開戦を要望　日本は開戦論に沸き立つ世論に軍部参謀本部の中堅層が動き始め、明治３６年５月２９日、陸軍・海軍・外務の中堅幹部が会合し「戦争を賭して」ロシアの横暴を抑制しなければならないという覚悟を決めた。主戦論の中心、総務部長の井口省吾少将（1855－1925・日清・日露戦争代表する軍人）等は、６月８日大山巌参謀総長（1842－1916 陸軍大臣・西郷隆盛は従兄弟）、田村怡与造（いよぞう）参謀次長（1854－1903・陸軍中将）が出席、部長会議を開きロシア開戦を主張した。

井口の意見書は、ロシアを満州から追い出し、満州を解放して列強の利害関係の入り混じる地域を実質中立とし、さらに韓国を日本の支配下に置き、旅順・大連の租借地を返還させその上ウラジオストクを日本が領有し、「ロシアの太平洋への出口を塞いでしまう事が日本の安全を確保する道だ」という目標を掲げた。この延長として、今日シベリア鉄道や東清鉄道が未完成であること、ロシア東洋艦隊拡張の途上である現在こそ、日本には最も有利でありロシアには最も不利である判断を示し、「今やらねばならない」と声を大に訴えた。日本がこの時期を見逃し、勝てる戦争が勝てないと進言し、開戦の焦りが主戦論を生み出す結果となり、井口の戦争案に対して大山総長は、「ロシアは大国だからなぁ」と述べたと伝わる。(陸軍省編『明治軍事史』下)

井口省吾少将

井口総務部長の対露意見具申　『機密日露戦史』谷寿夫著・「満州に於ける露国の行動に対する帝国が取るべき処置に関する意見」より。

《・・・つらつら日露両国の兵力関係を案ずるに、露国の戦時東亜に使用する全陸軍兵力は２３万余なり。此の中西比利亞(シベリア)、黒龍両軍管内及び関東州に属するもの、１６万余にして、他はモスクワ軍管区に属するものなり。此の最後の７万余人の遼陽付近に到達するには、自今西比亞鉄道の状況にては１２０余日を要すべし。

・・・之に対する我が陸軍の兵力は１３師団にして、其の内少なくとも４師団は開戦の初期に於いて、決戦を予期すべき一地に集中すること難からず。爾後遂次海軍に依り其の兵力を増加することを得るべきなり。右の関係は露国が西比亞及び満州の両鉄道を改修し其の効果年を追いて増加するに従い、露国陸軍歩兵の集中に速度を増加するに反し、我が陸軍兵力を輸送する船舶効果の今後著しき増加を見ざる限りは、殆ど同一の情態に在る然(しか)るべき(当然)を以って、今日の景況は我が帝国に最有利にして、露国の為に最不利なり。

・・・彼我海軍力に就いて比較するに、目下に於ける帝国艦隊の勢力は、露国の３に対する４割合にして、優に露国に対して優勝を占め、明年６、７月の頃両国海軍の勢力は殆んど相比敵すべく、其れ以後は年々露国の勢力を増大し、次第に其の差著しく、我第３期拡張計画通り実施されるものとするも、僅(わず)かに老朽艦を補充し若干の勢

力を添加するに止まり、到底露国の勢力に及ぶべくもあらず。・・・。》

更に《２７、８年戦役の費用は陸海を合して約２億円を計上し、之を以って今後日露交戦の為要する経費を推算する時は、約５億を以って足りとする。此内、国庫の負担し得るべき額を１億５千万とすれば残り３億５千万は増税によるか、はた公債に依るかの二途に出でず。今之を公債に依るものとして、５０カ年償還、年６分の利子と算するときは、戦後国民の負担すべき最大年額は２８百万円にして、一国の存亡に係る大事の為には、国民たるもの此額の負担に堪えなければならない。３億５千万の公債は国内に求むべきか、はた外国に求むべきか。・・・》と開戦予算を算出している。

この頃から新聞や世論が、シベリア鉄道の輸送能力が達成されないうちに開戦する主戦論が勢いを増し「戦って勝てるのは今のうちだ」という世論は高まり、明治３６年（1903）６月２４日４面東京朝日新聞に「七博士意見書」が発表された。東京帝国大学教授の富井政章、戸水寛人、寺尾亨、高橋作衛、中村進午。金井延、小野塚喜平次の７人の博士が、対露強硬策を主張したこの意見書は、開戦論を盛り上げる大きな役割を果たした。内容は桂内閣の外交を軟弱であると糾弾して「満州、朝鮮を失えば日本国の防御が危うくなる」と主戦論及びロシア軍の満州からの完全撤退を唱え、対露武力強硬路線の選択を迫ったものであり、世論も主戦論に後押しをした。この意見書を読んだ伊藤は「なまじ学のあるバカほど恐ろしいものはない」と述べている。

「ドイツの膠州湾（こうしゅうわん）占領について」『ウィッテ伯回想記・上』より、この開戦前夜のウィッテは、日露の関係をどのような外交決着を考えていたか、その模索を探る。

《１８９７年、外務大臣ムラヴィヨフ伯（注）はドイツ軍艦が青島（チンタオ）へ入港した電報を受け、この電報に付いて彼に、仕官が「これは多分一時的占領で、間もなく彼等は撤退するだろう。しかし、もし彼等が撤退しない場合には、ロシアその他の各国は強制的に彼等を撤退させるのが至当である」と言うと、ムラヴィヨフ伯は「否」とか「然り」とか答えなかった。ムラヴィヨフは「この占領、もっと正しくいえば、ドイツのこの強奪政策を利用して、ロシアも極東に於ける太平洋沿岸に港湾を獲得する必要があるからだ。それは戦略上重要な位置を占めているこれ等の港湾（旅順・大連）を占領すべきである。今こそこれを敢行するに絶好の機会である」と述べたのに対し、ウィッテは次のように語っている。

「嘗（かつ）て我々はこういう占領に対し極力清国の領土保全を主張した。そしてこの主張

により日本から遼東半島を放棄せしめた。しかも大連と旅順はその遼東半島の中に含まれている。また我々はその後、日本に対抗して清国と秘密防御同盟(第三国からの攻撃あった場合に機能する)を締結し、その際我々は清国の領土を占領しょうとする日本の一切の方針に対し、清国を防御すべき義務を負ったのである。その様な約束をしておきながら、自らこれらを占領することは非常に不穏な、且つ悪辣な手段である。そればかりでなく、もしこんな悪辣な方法で侵略し、日本や清国に疑惑の念を起させた場合、この方法は大きな危険をもたらすことになる。・・・旅順・大連を占領すれば、親密な関係の清国に非常な反感を起させるに違いない」と信義を説明した。

この意に陸軍大臣（クロパトキン）は「外務大臣がこの手段が危険でないと考えるなら、陸軍大臣としては、旅順・大連の占領は極めて必要なことである」と了解した。ウィッテは「日本もイギリスも決して平然とこれを見逃がしはしまい」と指摘すると、すると陸軍大臣は「それに対しては自分が全責任を負う。日本やイギリスはこの問題に関する限り、何らの報復手段に出ないことを自分は確信する」と言明した。》

ウィッテは平和的外交を進める政策を考え、ベゾブラゾフ派は「日本は絶対戦争を起す国力と気力がない国」と宮廷派は考えていた。

ハバロフスク公園ムラヴィヨフ像　アレクセイ・クロパトキン　アレクサンドル・ミハイロヴィチ太公

注・ニコライ・ムラヴィヨフ伯爵（1845－1900）外交官、政治家。1847 年東シベリア総督に就任。1858 年アイグン条約締結。露国の極東政策を推進する事により日露戦争の勃発を招く。

「ニコライ皇帝は旅順占領を決意する」　そして更に《その会議の４、５日後、ウィッテは上奏報告を持参して皇帝の処へ参内した。すると皇帝は私に向って言った。「ウィッテ君はもう知っているかも知れないが、私は旅順と大連を占領することに決めた。それで陸兵を乗せた運送船を派遣するように命じてしまったよ」。更に皇帝は、「あの

会議の後で、外務大臣は私にイギリス艦隊が旅順大連付近を回遊していて、もしロシアがこれ等の港を占領しなければ、イギリスがこれを奪取するだろうという情報を持ってきたので、それで私は占領の決心をしたのだ」と。ムラヴィヨフ伯の上奏は無論虚偽であり、事実はイギリス艦隊が太平洋沿岸の或る地点を回遊したのは事実であるが、何処かの港湾を占領する意図などは持っていなかった。皇帝はまだ若い、勝利と名誉を渇望している。外務大臣は旅順・大連の占領はロシアのために利益であると、冒険派たちは皇帝を唆した。》と。ウィッテの賢明な平和的一切の努力は終った。

「團匪事件とロシアの極東政策」（同）　《・・・日本人はロシアの表面では朝鮮から手を引いたと見せ、裏で朝鮮を占領する野心があると解釈した。日本人が極度に我々に反抗するようになったのは極めて自然の成り行と言える。遂には支那人や日本人ばかりでなく、イギリスやアメリカまでもがロシア軍の満州撤退を要求する様になった。ロシア軍隊が満州に侵入した時、ベゾブラゾフは「ロシアは團匪(義和団)を鎮圧する力のない清朝政府を援けるため軍隊を派遣したのである。清国の暴乱を鎮定すればロシア軍隊は直ちに満州から撤退するものである」と公言した。ところが團匪の乱も鎮定後も、我が軍隊は依然として満州に居残った。清国政府は百方手段を尽くし、ロシア軍の満州撤退を要求したが、我々は色々な口実を示し拒んだ。関東州の占領と團匪鎮圧のため、清国政府を援助するという口実を以って満州に残留した。・・・　》と。

ベゾブラゾフ人物とは　ベゾブラゾフ退職騎兵大尉（元近衛騎兵連隊大尉・1853－1931）が、ロシア皇帝に接近し極東侵略を皇帝に進言した。ロシア帝国未来図を示して１９０２年にウィッテを追い落とした。

アレクサンドル・ベゾブラーゾフ）　露国皇帝退位後軟禁中のニコライ２世　　ヘンリー・ダイアー

ベゾブラゾフは極東制覇の冒険思想をミハイロヴィチ大公(ニコライ１世の末子４男)に説き、大公はその思想をニコライ２世に仲介した経緯となる。ベゾブラゾフは一般人と称し満州・朝鮮・沿海州に私設の林業開発会社、鉱山富源、漁業獣猟業を作り、この会社にロシア政府の融資と軍隊の支援を受け、朝鮮を占領して朝鮮王朝を乗っ取る計画を立てていた。経営の規模拡大したため、1904 年に倒産。多額の借金のためスイスへ逃亡、1931 年パリで没する。

開戦前夜の日本の深層を分析　『大日本』ヘンリー・ダイアー著・平野勇夫訳・実業之日本社。ヘンリー・ダイアー(英国人)は、明治黎明期の西洋式技術教育の確立と、日英関係に貢献した技師伝授教育者。彼は電話機やフットボールを日本へ持ち込んだ人物として知られる。

彼が日露開戦時の帝政ロシア政治政策の暗部を分析し次の様に述べている。

①シベリア横断鉄道が全通すれば、アジア北辺の膨大な資源の開発が可能になる。

②ロシア軍部首脳の領土拡張の野心は、ロシア皇帝やロシアが外交の必要を遥かに超える処まで進んでいる。

③ロシアは何時も、国民大衆の宗教感情を利用し、侵略行為を正当化する際には、決まって東洋人を野蛮民族視してきた。

④ロシア人はロシア正教会を通じて野蛮な民族を教化する使命を信じていた。

⑤欧米にとっては小問題だが、日本にとってはロシアの満州占領は、国の存亡に係る大問題なのだ。ロシアがこのまま満州に居座り続けるなら、兵力と武器弾薬を増強し、韓国を忽(たちま)ち席捲(せっけん)して、領土を広げてくる危機感を日本は持っていた。

⑥そればかりか、日本が日清戦争に勝って清国から得たものを露国・独逸・仏蘭西(フランス)がクスネ取り、不当にも我がものとした事実は、日本側には我慢できない。

⑦ロシアの制海権を考えれば、不凍港の韓国を手中に収めることは計り知れない価値がある。

⑧これは疑う余地のないことだが、《日本がアジアの強国として出現しなかったら、ロシアは早々に領土を太平洋岸まで広げ、さらに渤海湾(ぼっかい)まで南下して、日本を手中に収めるまで満足しなかったことだろう。》と、国際人としての論考を述べている。

第4章　シベリア鉄道建設の経緯を観る

序　ロシアは三国干渉の成功後、明治２９年、露清秘密同盟(注)の締結に依り満州横断鉄道敷設権を獲得し、超えて３１年初頭、遼東半島の租借権と、大連を起点としてその租借地とハルビンを連結する東清鉄道南部線の敷設権を獲得し、次いで３３年夏、北清に於ける義和団事変が満州に飛火すると、鉄道保護の名の下にロシア軍を満州に進め、数月にして満州を占領するに至るのである。

注・露清秘密同盟について。露清密約=李鴻章―ロバノフ協定とも、ロシア外務大臣アレクセイ・ロバノフ、財務大臣セルゲイ・ウィッテと、清国は欽差大臣李鴻章により取り交わされた露清秘密条約となる。この条約は、日本がロシアと清国のいずれかに侵攻した場合にお互いの防衛参戦する相互防禦同盟が目的であったが、ロシアの満州に於ける権益を大幅に認めさせる側面もあった。これ等ロシアへの優遇は、三国干渉よる清国への遼東半島返還と、対日賠償金への協力の見返りとされる。1896 年、ニコライ２世戴冠式に出席した李鴻章は、密談会議の謝礼として５０万ルーブルを受け、６月３日に条約に至る。ロシアはシベリア鉄道の短絡線となる東清鉄道を清国領内に敷設する権利を認めさせ、ロシアは鉄道建設に必要な土地の管理権を拡大解釈して行政権も手にした。1900 年、清と「第二次露清密約」を結び、満州への軍隊駐留権、邦人保護、監督権の施行など、鉄道沿線から満州全域に軍事、行政支配下に置いた。

シベリア鉄道建設計画は１８５０年に始まり、現在に於いては全長９２９７ｋｍと世界一長い鉄道となる。１８９１年に建設を開始し、フランスの公債による、ロシア連邦中南部チェリャビンクス州のチェリャビンクスから、東の終点ウラジオストク目指したものである。極東地域に入り、ウスリーリ川に沿ってハバロスクまでのウスリー鉄道が先ず建設され、それが１８９６年に完成の経緯となる。

日清戦争後、ロシアは 1896 年に露清密約を結び、満州とウラジオストク結ぶ東支(とうし)鉄道(中国東北部満州里から哈爾浜(ハルビン)を経て綏芬河(すいふんが)の本線と、長春から大連までの南部線 2430Km。日本では東清鉄道と呼ぶ)の鉄道敷設権を獲得して 1903 年より営業開始となる。この鉄道は清国内の土地と収益をもロシア側へ齎し、鉄道敷設とそれに関連した鉄道所有地はロシア側に帰属し、行政権もロシアに有していたのである。

鉄道建設の進捗はイルクーツクから６０ｋｍ東にバイカル湖が最大の難所となり、砕氷船を使い、冬は湖上に線路を敷いて列車を走らせ、１９０１年、一部を残してシベリア鉄道は一応完成した。又、清国政府から満州を横断して、ハルビンを経由する

東清鉄道の敷設権を得て、ウラジオストクへの鉄道も完成した。

大シベリア鉄道・１９０４年（郵便はがき）馬のトラクション（駆動輪）を使用して軍列車を輸送する

（写真の出典『ｒｕｓｓｋｏ-ｙａｐｏｎｓｋａｙａ　ｖｏｙｎａ　1904-1905　ｇｇ・1904－1905年のロシアと日本の戦争』より）

貨車輸送について　日露戦争時、ロシア軍は兵士や物資を満州方面に貨車で輸送が終ると、輸送空貨車は本国へ返却せず、その貨車は倉庫や兵士の宿泊所や燃料として使用していたという。日本参謀本部はこの情報を得たとき、この貨車輸送の仕様方法には驚いたと云う。

モスクワからウラジオストクまで、当時要した日数は３５日の日数を数えたと云い、この鉄道が単線であるため、貨車を本国へ返す方が輸送の難問が生じていたのかも知れない。複線でないため、戦時ともなれば、兵士・物資の輸送は激しく要求され、その迅速輸送問題の解決策が、貨車の片道輸送のみで、空車は廃材処分としたと思われる。しかし、日本人の質素を宗として生きて来た我々は、１回の輸送のみで貨車は現地で廃車にする発想はない。

『日露戦争を演出した男モリソン』下巻・ウッドハウス映子著に、単線のシベリア鉄道の“からくり”について述べている。

《奉天の占領時、単線のシベリア鉄道の輸送能力を基にして、軍部参謀本部はロシアがハルビンに結集する日時を綿密に計算していたが、それは日本の計算より、遥かにスピードが早かった。日本の参謀本部がスパイを使って調べてみると、驚くべきことが分かった。貧乏な日本には思いつかなかったが、ロシアは兵隊と武器を満載してきた車両がハルビンに着くと、空車の送り返しをせず、そのままレールからはずし使い捨てにしていたのである。続々と到着する貨車は、物置にしたり、壊して薪にしたりしていた。これなら単線のシベリア鉄道も複線と同じ機能が果たせる訳だ。》と、同

じように述べている。

シベリア鉄道建設の経緯　日露開戦前のシベリア鉄道の建設推進者はウィッテ蔵相を中心に進められていた。ヴィッテの出生は高級官僚の子息で、急速な鉄道発展期に事務職として鉄道会社に就職したが、優秀な彼は、政府が鉄道事業の監督指導機関の新設にあたり、初代鉄道事務管理局長に抜擢され、数ヶ月後には交通大臣に昇格し、其の６ヶ月後の１８９２年９月に大蔵大臣に任じられている。天才能力の持主と想われ、皇帝（ツァー政治）の信任する皇族や大臣や側近政治発言権が、国政に大きな影響を与えた時代、ウィッテの政治発言は首相に等しい力を持つに至っていた。

１８８０年初頭、鉄道敷設工事は金融調達が遅れ工事は止まっていたが、西比利亜（シベリア）の部分敷設計画は極東に近づくに従い、国際関係の動きに合わせて俄然（がぜん）復活した。

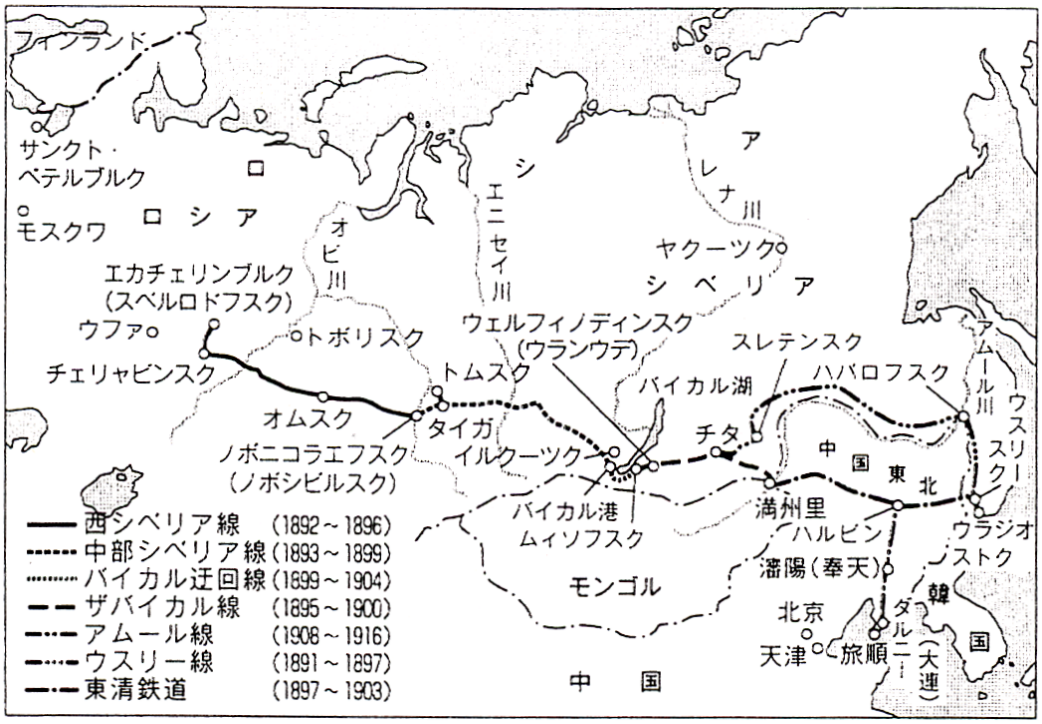
ロシアはこの時期、ドイツからロシア公債を締め出され、ロシア公債はフランス市場に求めていた。フランス国は普仏（ふふつ）戦争(フランスとプロイセン王国の戦争、ドイツ諸邦はプロイセン側に立つ)　にフランスは敗北した結果、フランスはドイツの侵略を恐れて、ロシアとのフラン借款協商を受け入れることにより、背後（ロシア側）からドイツ軍事力を牽制（けんせい）することができた。ロシアの軍事力を以ってフランスは安全保障を得ていた。

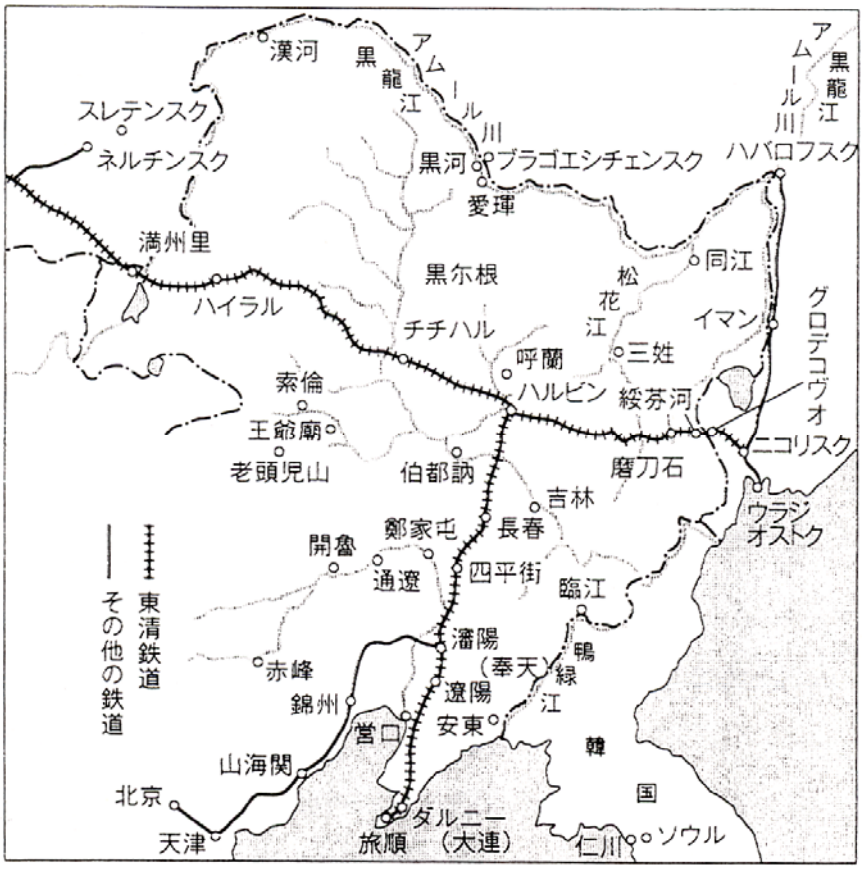
１８９１年、フランスの借款でシベリア鉄道敷設工事が始まり、ロシアは急速にフランスに接近し、露仏の軍備の近代化にも成功し、１８９４年１月、露仏秘密軍事同盟成立となって行く過程をとる。

同年５月、ロシア政府はウラジオストクを目指し、シベリア鉄道敷設工事が開始され、日清戦争で清国が敗れた結果、ロシアは好機到来と、満州に対する権益拡大戦略に強め、翌６月３日、李鴻章（りこうしょう）とウィッテ蔵相との間で秘密露清条約締結に成功し、日本による攻撃には、ロシアの軍事力で清国を守る秘密条約が結ばれ、その上、清鉄道敷設権をもロシアが獲得していたのである。

東清鉄道はシベリア鉄道のチタ(地図 44 頁参照)から分岐する支線で、満州里からハルビンを得て綏芬河（すいふんが）に至る本線となり、さらにウラジオストクへと通じるものであった。又、ハルビンから大連方面にいたる南満州支線（1898 年に旅順・大連租借による）となるもので、東清鉄道が完成すると、ロシアはアムール川沿いのシベリア鉄道本戦だけに頼ることなく、満州北部から本戦によってウラジオストク方面へと結ぶ鉄道敷設に成功したのである。ロシア・清国の秘密露清条約締結は、東清鉄道会社の設立と、

東清鉄道の付属地（線路の沿線の土地）はロシア領に準ずるものとされ、ロシアは茲(ここ)に於いて太平洋に通じる不凍港である旅順・大連を確保し、軍事的・貿易的にも極東地域へ進出する重要な港をロシアは確保したことになる。





上図・シベリア鉄道　　**下図・東清鉄道**（『世界史の中の日露戦争』山田朗著より

明治２４年３月(1891)、露帝皇太子（ニコライ２世・２２歳）名の基に、シベリア鉄道建設宣言が全世界に向けて宣布され、このシベリア鉄道極東地区起工式典に出席のため、ニコライ皇太子はウスリー鉄道（ウラジオストクからハバロフスク・ウスリー鉄道と東清鉄道の分岐点の町は烏蘇利（ウスリースク）で極東への旅行の途次に日本へ来朝した。その時、滋賀県大津で巡査津田三蔵に斬りつけられる事件（大津事件）に見舞われた。政府高官も天皇側近、天皇自身が謝意を表明したことにより、ロシア側も冷静に対処したことにより、この事件は悪化する事態に至らなかった。幸い軽傷ですみ、そのままウラジオストクに向かいシベリア鉄道極東祝賀起工式典に参列して事なきを経て、露都に帰還した経緯となっている。

１８９２年、ウィッテは全シベリア直通鉄道を、欧露、シベリア領域に絶大の利益を齎すであろうと述べ、それまでスエズ運河を通過してヨーロッパに入っていた「生糸と茶」は、上海―欧州間は４５日間かかり、シベリア鉄道が完成すれば１８日―２０日に短縮するであろうと述べている。

シベリア鉄道が完成すれば、中国生糸は欧州で首位に立ち、フランス金融資本がロンドン金融市場を凌ぐことになると自信を示していた。そして、ロシア海軍は著（いちじる）しく強大となり、欧州並びに東亜に政治的に覇（は）（軍事的に）を制することになるだろう。このウィッテ蔵相の発言は、野心を持ち合わせたニコライ２世にとっては、刺激的な国策宣言でもあった。

シベリア鉄道は１８９７年に竣工、ウスリー鉄道のウラジオストクからハバロフスク間が１９００年（明治３３年）完成となっている。ロシアと清国による「露清銀行」創設により、資本金６億ルーブルの８分の３がロシア政府及び銀行の持ち分となり、８分の５が仏国銀行団の出資額となっていた。１９００年が義和団事変、日英同盟が１９０２年、日露戦争が１９０４年―０５年となり、この鉄道建設敷設工事の完成は正に日露戦争前夜となっており、日露戦争は避けられない戦争への階段を昇ってゆくシベリア鉄道となっていたのである。　（『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著より）

シベリア鉄道建設に対する日本の対応

ロシアのシベリア鉄道建設の完成間近の明治２５年(1892)、情報将校福島安正による単身騎馬でシベリア横断に成功した。その裏で参謀本部は、シベリア鉄道建設の完成時期と鉄道建設の進捗情態を探らせた報告は、１０年後に完成すると云うものであった。翌年、それを受けて山縣有朋陸軍大臣は意見書を提出し、「シベリア鉄道が完成す

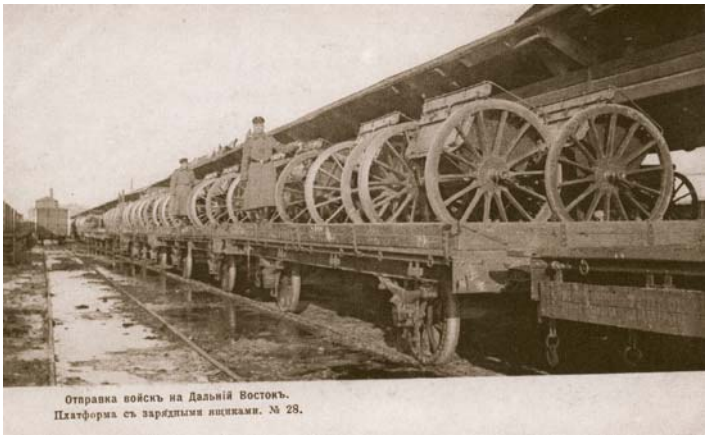
れば、ロシア軍は極東にやってくる、と警告を発し、国をあげて対処するように」と、国家の一大事危機であると宣言した。更に、「東洋の禍機(かき)は今後１０年待たずしてやってくる」と警告したのである。

福島安正陸軍中佐　明治１８年、陸軍大学校でドイツから来日したメッケル(明治初期大日本帝国陸軍制の基礎を作ったドイツ軍人・1842－1906)に学ぶ。明治１９年、インド、ビルマ方面を視察、翌年陸軍少佐に昇進、ドイツ・ベルリン公使館付武官となり駐在する。公使の西園寺公望にシベリア鉄道敷設情報等を報告している。

福島安正(1852－1919)陸軍大将

ロシア騎兵に送られる福島安正少佐

明治２５年、帰国に際し有名な「シベリア単騎横断」を行い、ポーランドからロシアのペテルブルク、エカテリンブルク→外蒙古→イルクーツク→東シベリアまでの約１万８千 km を、１年４ヶ月かけて騎馬で横断、現地実地調査を行う。明治２６年６月２９日、シベリア横断を終え新橋駅には大群衆が熱烈歓迎を受けている。



シベリア鉄道の古写真

「ケーソンとプラットフォーム」とあるからコンクリートのモルタル運搬車である。旅順地区の要塞構築用に使用と思われる。１９０４年『ロシアと日本の戦争』露国郵便はがきより

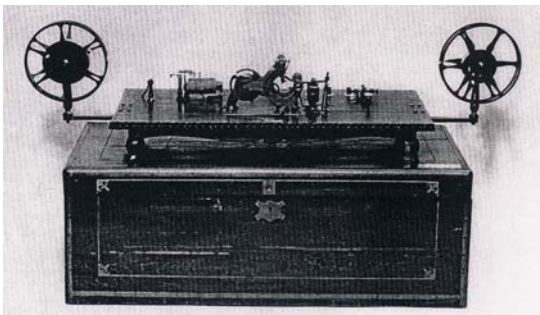
左・「極東への派兵」とある。１９０４年　『ｒｕｓｓｋｏ-ｙａｐｏｎｓｋａｙａ　ｖｏｙｎａ　1904-1905 ｇｇ・1904－1905 年のロシアと日本の戦争』より）右・シベリア鉄道『ｒｕｓｓｋｏ-ｙａｐｏｎｓｋａｙａ　ｖｏｙｎａ　1904-1905　ｇｇ・1904－1905 年のロシアと日本の戦争』より）

ウスリー川付近の建設の様子・１８９５年（ウィキペディア）　アムール川北岸線工事に従事する囚人

現在のウラジオストク駅構内・２０１４年筆者が撮る

第5章　日本の通信は日清･日露戦争の勝利を齎す

日本で最初に電流による磁気の発生を利用した電信機を試作したのは、幕末の志士で万能の天才であった佐久間象山と云われている。右写真のエンボッシング・モールス電信機は嘉永７年（1854）年、日米和親条約締結のために、２回目の来日時に米国遺日使節ペリー提督が徳川幕府への献上品に持参したものである。



ペリー提督から献上したノルトン社製モールス電信機の実物・逓信総合博物館

モールス電信機は送信側の電信機上の電鍵（電気信号を断続してモールス符合出力する装置・ストレート・キー）でモールス符合を打つと、受信側の電信機の紙テープにエンボス（凸凹の傷がつく）されて信号を送る仕組みの機器で、８町（900m）の間に電線を架し通信実験を行った。（郵政博物館より）

『ペルリ提督日本遠征記』　に《電線は約１マイル（1600m）張り渡された。両端に技術者を置きその間に通信が開始された時、日本人は烈しい好奇心を抱き、運用法を見物し、一瞬にして英語、オランダ語、日本語を建物から建物へと通じる通信を見て大いに驚いたと云う。毎日毎日、役人や多数の人々が集って、技手に電信機を動かしてくれるようにと熱心に懇願し、通信を往復するのを絶えず興味を抱いて見学していた》、と伝え、当時の日本人文化意識高く、通信技術者を異常な関心で迎えていた。

嘉永２年（1849)、松代藩士の佐久間象山が、オランダ語の文献を元に７０ｍほどの長さで通信実験を行ったのは、サミュエル・モールス（アメリカ合衆国 1791－1872、モールス電信機を発明とモールス符合）が世界初の電信機を開発した５年後の事となる。

当時、１８５３年から１８６３年に英国は大陸を接続する海底電線６本、デンマークとスウェーデンの間、イタリアとコルシカ島間、コルシカとアフリカ間などに海底電線が敷設された。大西洋横断海底電線の敷設は英米の実業家たちによって、１８５６年に大西洋電信会社が設立され、苦難の末に１８５８年に完成をみる。尚且つ英国はインドへの電信線建設を急ぎ、１８６０年にスエズ→アデン→アラビア半島→ペルシャ→カラチと不安定であったが完成をしている。１８６６年から英国はイギリス・インド海底電信会社が、ポルトガル→ブラジル→マルタ→スエズ→ボンベイを結ぶ海

路を、１８７０年迄に完成させ、ペンダーの会社と合同して、「東方電信会社」（大東電信会社）が設立されて行く経緯となる。この時代の大英帝国の国力が偲ばれる。

もう一つ、欧州とアジアを結ぶ電信線はシベリア大陸を横断し、米国を結ぶものであったが、この回線は失敗続きで、工事はシベリア、アラスカの両方から進められたが、１８６６年に大西洋横断海底電線敷設が成功したため、シベリア・アラスカ回線の米英間電信線は無用となり中止、ウエスタン・ユニオン社が３００万ドルの損失を出したという。この中断した電信線工事に着目し、新たな計画を立て直したのが「大北電信会社」であった。（『情報覇権と帝国日本１・海底ケーブルと通信社の誕生』有山輝雄著）

『国際通信の日本史』「わが国の国際通信」石原藤夫著・東海大学出版会・参照

明治３年４月、函館(明治２年まで箱館)駐在のロシア領事代理タラフテンベルグから、維新まもない外務省初代外務卿（外務大臣）澤宣嘉（1836－1873 公卿、明治黎明期の政治家）宛てに一通の書簡が舞い込んだ。書簡には次の様にあった。

《「アジア・ロシアから日本へ、日本からシナへの海底ケーブルを建設することについて、今回ロシアに設立された会社から申し立てがあった。ついては、わが国と格別の親善関係にある貴日本政府の承認を得たい」、という意味の書簡の呼びかけであった。

この「ロシアに設立された会社」というのは「大北電信会社」（英語名・The Great Northern Telegraph Company、グレート・ノーザン・テレグラフ株式会社）はデンマークの電気通信事業の会社であった。このデンマーク国籍の大北電信会社は、デンマーク、英国、ノルウェーの電信会社であったが、更にデンマークとロシア（ロマノフ王朝）結託して「デンマーク・シナ・日本拡張電信会社」という別会社を創設し、それがロシアに於いて設立された会社の社名で、日本へ売り込んできたのが、日本で言う処の「大北電信会社」であった。

これに対し明治政府は箱館開拓使に調査させると、「会社の者は３名、シベリアのウラジオストク、又はポシェット（ウラジオストク南西部、北朝鮮国境）から横浜・大阪・長崎・上海・香港に結ぶ通信で、３年から５年以内に完成を見込でいる」との事であった。その主旨は次の通りとなる。

①デンマーク・シナ・日本拡張電信会社に長崎・大阪・神戸・横浜・箱館さらに今後開港される港への海底ケーブルの陸揚げを免許されたい。

②機械や用品類への一切の税を免除されたい。

③会社職員には政府の保護を与えられたい。

④測量することを許可されたい。

これは容易ならぬ事態に明治政府は回答に苦慮し、６月、澤宣嘉・寺島宗則（1832－1893、薩摩藩遺英使節団に参加、維新後外務卿）がデンマーク側に対応し、「大北電信会社」がロシアとデンマークが裏で一体となっていることが判明した。ロシア帝国の出資により、シベリア開発とロシア南下政策に沿って、ウラジオストクから長崎を経由して上海に至る、海底電線の布設を明治新政府に認可を求めて来たのであった。7月、この折衝を負かされた寺島宗則は、伊藤博文・大隈重信・井上馨らと相談したが、この電信敷設については、今後の日本にどのような意味を持つのか、正確な方針を定められず、見切り発車ということに決まった。

19世紀後半の海底ケーブルについて

右の写真はＫＤＤ国際通信資料館に保管されている、日本初の海底電信線の実物。現在でも動作可能という。

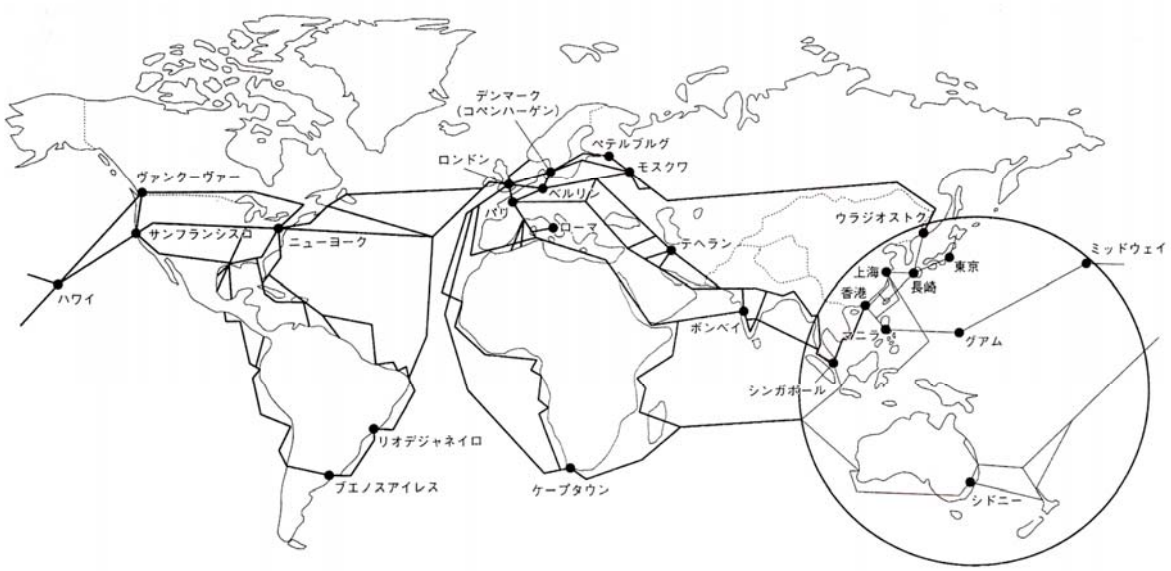
ガタパーチャ被覆の電線の周囲をタール、ピッチ、亜麻仁油の混合液を塗装して製作されていた。

当時の海底ケーブル・ＫＤＤＩより

注・マレーシア原産のアカテッ科の樹木、その樹液からゴム状の樹脂。ガタバーチャとはマレー語で「ゴムの木」の意味。先の太平洋戦争での南方出進に石油と共にこのガタバーチャゴムの獲得にあった。

大英帝国の海底ケーブル網　下記の図は明治３５年の系統図、大英帝国が５０年歳月をかけ、ロンドンから世界各地の殖民地へ海底ケーブルが布設され、英国の巨大帝国であることを示している。極東の日本はケーフルが結ばれず残されていた。英国ルート以外、ロシアの首都ペテルブルグやモスクワからシベリア横断する陸上電信線を大北電信が、ウラジオストクまで来ていた。先に述べた様にこの回線は、当初、米国が欧州と結ぶために、カナダ、アラスカを越え、ベーリング海峡を渡り、シベリアを通り欧州ルートを計画していたが、大西洋横断海底ケーブルが先に完成したため、この計画は中断となる。その中断の残りを、ロシアの費用で布設して、ウラジオストクから欧州に繋がっていた。

その電信の続きを、日本から上海に、ウラジオストクに海底ケーブルに繋げれば、北部欧州からシベリア回りで極東を経由して、更に東南アジア、インド洋から中東を回って欧州や英国に至る、世界一周の大電信網ができあがることになる。そのため極東の日本に眼をつけ、デンマークの大北電信会社がやって来たのである。



１９世紀後半までに築きあげた大英帝国の海底ケーブル網の世界電信ケーブル回線図円内は未布設

日本はロシアからの通信に不安があった　日本側から通信を見れば、シベリア経由の電信に背後のロシア帝国の野心を感じざるを得ない。ロシアはこの時点で、ウラジオストクから長崎だけでなく、将来北京まで引く陸上電信線をこの海底ケーブルに接続する契約ができていた。このような野心と策謀を背景にある大北電信会社を相手にした寺島宗則の心中は大変な苦労があったことを知るのである。

国際海底電線小ヶ倉陸揚げ庫（長崎市）

（長崎県小ケ倉町・ながさき旅ネットより）

国際電信発祥の地・日本で最初の国際電報局の碑

（グラバー邸入り口所・電話局の写真館より）

明治３年８月２５日、澤宣嘉外務卿・寺島宗則外務大輔とデンマーク特使ジュリアス・フレデリック・シックとの間で調印がなされた。内容は本文１１カ条と内密の付属２カ条となっている。

① 大北電信会社の海底ケーブルを長崎と横浜に陸揚げし、両港間を九州と四国と本州の太平洋側を通って連絡運営する。又これに伴う海岸や陸地の施設を大北電信が建設運営する。②③は略　④この約定の有効期間は３０年とする。⑤日本政府は大北電信の施設を保護する以外は干渉したり関与したりしない。⑥略。

約定内容は一見すると国際通信施設を建設する力のない日本に大北電信会社が協力しているように思えるが、実質的には、大陸側との国際通信の権利を外国の企業に奪われないようにすることを意味していた。

調印後、ロシア皇帝から「贈り物」が明治天皇に届いた。ロシアがこの問題に深く関与していた証拠である。後、「大北・支那および日本拡張電信会社」という名前の会社は消え、変わって「大北電信会社」の極東総支配人が上海に常駐するようになり、日本との折衝の窓口となった。

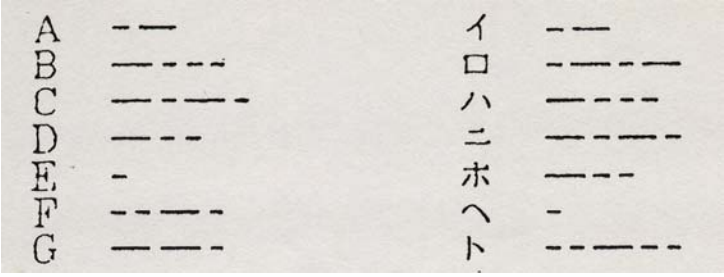
調印の翌日、調印文書を見直した寺島宗則は急に不安になり、この調印の仲介の労を取ってもらったパークス駐日英公使(1865－1883・幕末から明治初期 18 年公使を務める)を訪ねている。と云うのは、澤外務卿（外務大臣)、寺島外務大輔（次官）という日本政府の外交最高責任者が署名しているのであるが、デンマーク側の代表者フレデリック・シックの肩書きが無かったからである。

この疑問にパークスは「大北電信会社の代表が私の処へ挨拶に来た時、シックという人物はその陰にいたが、大北電信の利益を代表していると考えてよく、信用できるだろう。またこの文書は国際間の条約ではなく、Convention（コンベンション）と言って日本政府が民間企業に与えた免許状（Concession・譲歩）である。安心してください」と答えてくれた。このシナリオは大英帝国が用いて、植民地経営を民間企業に委託し、現地の反感を和らげる仕様方法となっていた。シックの正体はデンマーク皇帝の側用人（そばようにん）と伝えられるが、当時の日本人は軽くあしらわれていることになる。

この変則的な調印は日本の技術力も外交経験もない我国に於いては、これ以上の電信条約条項を望めなかったことであるが、電信の自国運営に執念をもつ寺島宗則だから、この程度の譲歩で済んだといえる。

明治４年６月には、長崎―上海が布設竣工し、８月には長崎―ウラジオストク間が竣工した。日本にとっては、資本提供していない事により、権利は取り上げられた形であるが、欧米と自由に連絡できるようになったことは大きな前進であり、そして器機が改良され、明治１３年には東京―長崎間、横浜―長崎間は直通となった。

注釈・海底ケーブルからの電信は、陸上の電信技士が受信し、それを陸上の技士が打ち直して送信する方法である。従って海底ケーブルと接続する時は、必ず人手を介して打ち直される。海底と陸上では信号の形式が全く違っていたので、秘密情報が洩れる不安はあった。



モールス符合（明治初期に吉田正秀らによって定められた）

マルコーニの発明の無線電信

電気通信産業の基礎を築いた人たち　明治１０年代に、現代日本が世界に誇る電子電気の基礎を築いた３人の男を挙げる。「からくり儀右衛門」こと田中久重（1799－1881）「東洋のエジソン」云われた男の活躍によって、芝浦製作所となり、後の「東芝」の創業者となる。日本の軍事産業の筆頭となる。

三吉正一（1853－1906）、日本初の電気機器製造会社経営、電気機器（電話機・直流発電機・芝浦電気の前身）に於ける、白熱電球の国産化を図った。沖牙太郎（1848－1906）明工舎（沖電気の前身）創業者、日本初の電気通信機器製造者。この３人の功績を簡単に紹介する。

田中久重は、有名なベル電話が明治９年発明され、翌年に日本に入ってきた。その１年後の明治１１年には早くも沖牙太郎、田中久重は製作して自宅前で実験成功している。明治１２年田中久重の筆頭弟子の田中精助たちが、日本で最初の国営通信機工場「電信寮製機所」はカラクリ儀右衛門の弟子たちによって１０台作られた。性能は輸入品を凌駕していたと伝わる。

２代目田中久重（婿）は港区芝浦に大きな工場を作り、従来からの工部省向けの製品や、警視庁向けの非常報知機、海軍向けの水雷艇に力を注いだ。当時、清国海軍に対

抗すべく超小型で安くできる水雷艇に力を注ぐ。日清戦争「威海衛の戦い」で勝利に結びつけた「水雷艇」は田中製作所が貢献したもので、その開発力に明治初期の日本人の文化機器技術の高さに驚かされる。今日の技術国日本の祖を偲ばれる。

明治２３年、２代目田中久重と田中精助は大型の蒸気機関・発電機・モーター等に日本の国策として乗り出したのである。明治２６年、資本金を三井系に仰ぎ、芝浦の地名をとって「芝浦製作所」となり福澤諭吉の愛弟子の藤山雷太を経営者に迎えた。時代はこの頃から通信機器から電気関係に移り、やがて大型発電機、重電機製造の発展を遂げ続けて行くのである。

三吉正一は、田中精助らの「電信寮製機所」で学び、電信機の製造修理技術を修得し、明治１６年に「三吉電機工場」設立、電力器機を開始した。明治１８年、自身で設計した発電機を作り、東京銀行集会所の開所式での電灯点灯に成功し、これが我が国の電灯の歴史の始まりとなる。

この会社は明治３２年に三吉が引退すると、「東京電気（株)」と改名され、田中久重の「芝浦製作所」と合併して、現在の「(株）東芝」となっている。明治後半の日本の電気業界は、弱電・強電を問わず、輸入品と国産の戦いの場であり、国産製造者の苦節の時期でもあった。後の電機関係企業は「三吉電機工場」から生まれている。

沖牙太郎は輸入品に対して壮絶な戦いを挑んだ男で、明治７年、農家を飛び出し「電信寮製機所」に入り、近代技術を身に付け、製機所のボス田中久重の弟子田中精助に認められ、明治１０年には電信用印字機など電信関連装置の国産化に貢献した。これは米国以外での電話機試作は世界でも最も早かったと云われている。

沖牙太郎は明治１４年に「明公舎」を設立し、明公舎の開発は電話機の改良で、「顕微音機（けんびおんき）」（マイクロホン）を試作、同年国内博覧会に出品した。この会場に明治天皇にこの装置が目に止り、「送話器を叩く音を受話器でお聞きになり深くうなずかれた」、沖牙太郎は感動に震えた逸話が残っている。

この電話機は博覧会側から二等賞受けた時、明治天皇が直接言葉を賜った感激が、その後の沖牙太郎の半生を純国産技術の確立に一生を捧げることになる。明治２７、８年の日清戦争時、軍専用電信線の布設などの多くを「沖電気工場」と共に引き受けたことが、戦勝に繋がっていたのである。

国際通信回線の危機　現実には日清戦争時には、呼子（よぶこ）―釜山（プサン）間の海底ケーブルは

清国軍艦によって切断される危機にあったが、日本側が黄海海戦に勝利して制海権を握ったことにより、大本営と現地との軍事連絡は保たれた。

当時の大陸向け通信線の弱点を考えてみると、**第1**に大北電信長崎局経由の呼子から釜山線は欧米人も使用しているので、軍が独占することは困難であり、釜山から先の陸線も切断される危険もあった。 **第2**に抑々(そもそも)大北電信はロシアと繋がっている会社であり、この回線を使えば日本側の軍事情報がロシアに筒抜けになってしまう。 **第3**に英国・米国との連絡に、大北電信の長崎―上海海底ケーブルには、その危険が考えられる。陸線と海底ケーブルの接続局では、信号変更をするため、必ず人が介在するため、電文内容が局の技士により判明してしまう。 **第4**にロシア側で切断の問題、日本側でのロシアのスパイによる切断が考えられた。

軍神児玉源太郎による電信の新設 電信通信を積極的に採用した児玉源太郎（1852－1906・日露戦争時満州軍総参謀長）は、日清戦争終結の直後、明治２８年６月、陸軍省内に「臨時台湾燈台電信建設部」が設置し、その部長に就任した児玉源太郎が上記の問題解決に素早く行動に移したのである。

①日本独自の海底ケーブル布設船を持ち、戦争開始と同時に本土と大陸半島間に複数の海底ケーブルを布設、大本営と戦地の連絡と、海軍の制海権を確保する。

② 前項に必要な海底ケーブルを密かに購入し秘匿して置く。

③日本本土と台湾を日本独自の海底ケーブルで連絡し、台湾経由で英国と結び、大北電信やロシアとは無関係に欧米と連絡できるルートを確保する。

④そのために、台湾と福州（福建省）間の英国製海底ケーブルを買収し、台湾の本線の電信局を大陸の英国電信局に直接つなげる。

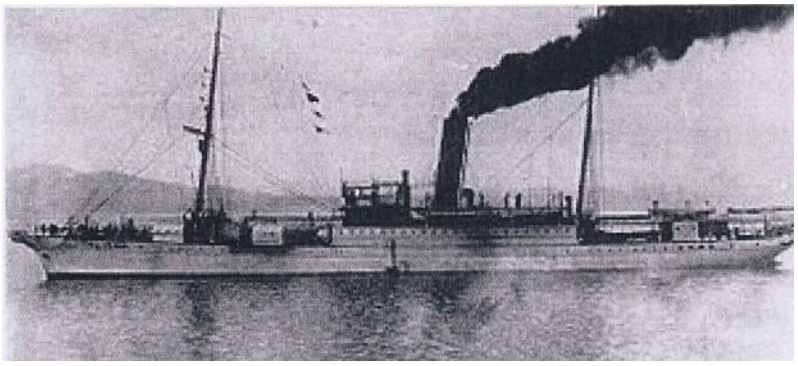
通常時の通信は明治１５年の大北電信の独占権により、①は不可能であったが、戦争の次元となれば、それは可能であった。②は、当時海底ケーブルは英国製であるが、納入期間が半年はかかり、戦争開始で手続きしたのでは到底間にあわない。無理に購入手続きすれば、戦争準備の状況が知れ、ロシアや大北電信の妨害を受ける恐れがあった。そこで隠密行動の購入作戦を取ったのである。

英国ロブニック社に、日本初の本格布設船「沖縄丸」（奈良県三笠山に因(ちなん)で命名）を、極秘に発注し、その秘密交渉を在英の加藤高明（駐英公使、日英同盟成立に尽力）が当っ

ていた。(「沖縄丸」は総トン数・２２７８。長さ８８、６ｍ。ケーブル用船首車輪０、９ｍ×３。ケーブル用船尾車輪０、９ｍ。電線槽大・中・小の設備。明治２９年４月に竣工。日本人のみによる記念回航となる)

③の九州―台湾間の布設には、児玉が部長就任後、ケープルを明治２８年７月、英国に総延長１６００海里（1 海里=１８５２ｍ）発注(秘密裡に)していた。そのケーブルを、「沖縄丸」活躍敷設により、明治２９年７月、大隈半島から奄美大島を経て、沖縄までを８月までに完成させた。明治３１年１２月、台湾―福建省の間の海底ケーブル買収に成功し、その先の運営を英国の大東電信会社及び大北電信に委託したのである。この英国からのケーブル調達と、秘密電信敷設工事をロシアに察知されずに完了させたことは驚異と云う外はない。児玉の活躍の話は戦線が多いが、世界的な視野から観た場合、日露開戦の計画は無線電信に依ることを見通していたことは、現代の我々を改めてその児玉の思慮に感動するのである。

児玉源太郎・陸軍省臨時台湾電信建設部長



海底ケーブル敷設船沖縄丸・明治 29 年竣工

対露戦略激務により、日本陸軍の至宝と言われた川上操六（1848－1899・参謀総長）は明治３２年病没、日本の諸葛孔明と言われた田村怡与造（1854－1903・川上操六と参謀本部で活躍）も明治３６年、過労で病没となり、翌年明治３７年、愈々日露戦争開戦となり、児玉は遼東半島に渡り大山巌の下で総参謀長となり作戦追行に精魂を傾けけたのである。児玉を教えたドイツ陸軍メッケル（1842－1906・明治初期、日本陸軍兵制の近代化に貢献）は、ロシア圧勝の予想が多かった列強軍事専門家の中で、「コダマがいるかぎり日本が勝つ」と予言した。戦争終結の翌年、明治３９年に病没するが、日露戦争は日本国の軍事天才を疲労困憊で命を失っていることが、如何に日露戦が疲労が激しいことであったことが実感されるのである。

日英同盟による通信関連事項　明治３５年１月、日英同盟条約がされ、同年７月に

調印された「陸海軍協約」８項目は電信の重要性が記され、協約の過半が通信関連事項となっている。当時の日本陸海軍の首脳は「日露戦争は情報戦争である」と認識していたことが凄い。

①、 共同信号法を定めること。②、電信用共同暗号を定めること。

③、情報を交換すること。④、戦時における石炭の供給方法を定める。

⑤、戦時陸軍輸送におけるイギリス国船の雇用をはかること。

⑥、艦船に対する入渠（にゅうきょ）修理（船修理のドックに入る）の便宜（べんぎ）供与をはかること。

⑦、戦時両国の官報をイギリスの電信で送付すること。

⑧、イギリス側は予備海底ケーブルの布設に務める。

アメリカ・スペイン戦争に於いて、海底ケーブルが大きな役割を果す

日露海戦前の明治３１年４月、米西戦争(米国とスペイン)に於いて、海底ケーブルが大きな役割を果たしていた。この戦い現場に日本海軍名参謀、秋山眞之（さねゆき）（1868－1918・海軍中将）が観戦武官して参列し、その戦場レベル高さに驚嘆している。秋山はこれからの戦争に於ける通信の重要性を認識して、海軍首脳に無線電信の一刻も早い実用化の提言をした。海軍大臣山本権兵衛（ごんのひょうえ）（1852－1933・後総理大臣）はこれを受理して直ちに行動を起すのである。当時のイギリス通信レベルはロシア通信技術より遥かに進んでいたらしい。

明治３６年１２月２６日、ロシアとの緊迫状況から、国際通信の非常手段を取り始め、重要な電文は機密の洩れやすい危険な大北電信回線を通さず、児玉源太郎が構築した九州―台湾間の海底ケーブルで台湾につなぎ（交信の整理する）、台湾―福州間の海底ケーブルによって、大陸側のイギリス大東拡張海底電信会社の局につなぎ、そこから香港経由で欧米に伝達した。このような臨時回線の獲得によって、欧米での戦費調達に奮戦する高橋是清・金子堅太郎、黄禍論をロンドンに中心に展開した末松謙澄らの機密連絡が、通信電報より極めて上手にいった理由がここにあった。

日本海海戦の始まりは電信通信技術による　　明治３８年５月２７日午前２時４５分、哨戒任務の仮装巡洋艦「信濃丸」は西北方面に１０数隻の船影を発見し、

「総テノ艦船・望楼へ　敵艦隊ラシキ煤煙見ユ　４時４５分　信濃丸」

（推定暗号　　ム　ネネネネ・・・　〇四四五　「ＹＲ」　）

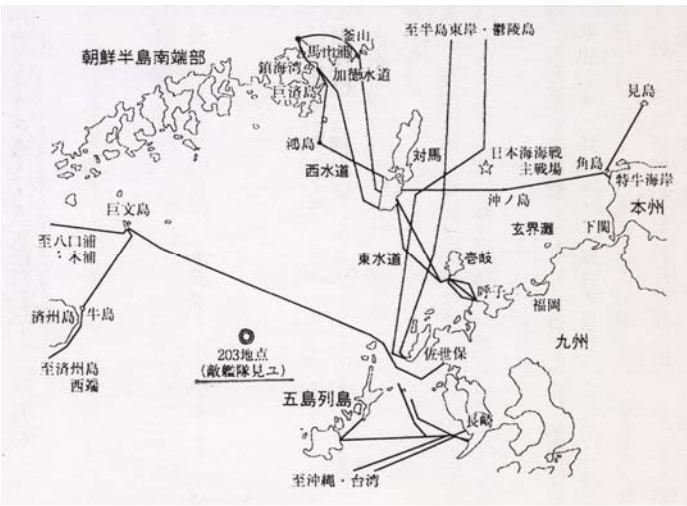
ほぼ５分後、４時５０分頃、有名な電文を打電し、対馬に待機中の巡洋艦「厳島」を中継して旗艦「三笠」に伝えられた。

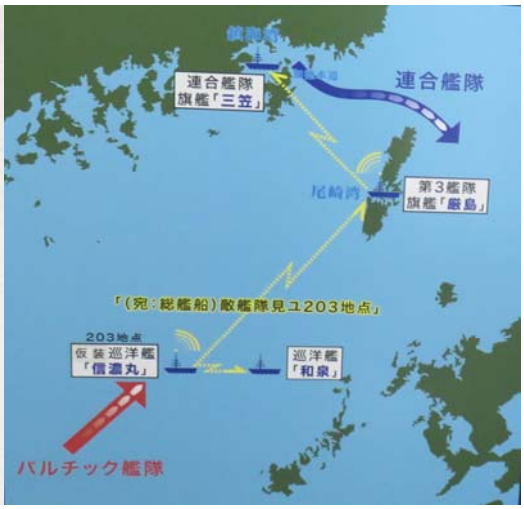
「三笠へ　敵ノ第二艦隊見ユ　２０３地点　４時５０分　信濃丸ヨリ　厳島中継」

２０３地点とは五島列島すぐ近くで、旗艦「三笠」は直ちに連合艦隊に出撃命令、東京軍令部（大本営）に出撃の報告を打電する。打電は午前５時１５分、軍令部への着電は６時４５分と伝わる。

「敵艦隊見ユトノ警報ニ接シ連合艦隊ハ直チニ出動之ヲ撃滅セントス本日天気晴朗ナレドモ波高シ」参謀秋山眞之の名文となって、旗艦の「三笠」より１３時５５分、「皇国ノ興廃コノ一戦ニアリ、各員一層奮励努力セヨ」のＺ旗信号を揚げ、２時５分、敵との距離８ｋｍに於いて左大回転、東郷ターンを下令した。

この出動報告文後半の「天気晴朗ナレドモ波高シ」は、軍学的に大きな意味が潜んでいて、砲撃戦ではどちらが有利か、水雷艇の動きは、黄海海戦時とどう違うか、など、情報を軍令部へ伝えているのである。日本海海戦は世界海戦史上、空前絶後の大勝利は、無線の活用が戦いを制した世界初の快挙となったのである。





海戦時の臨時海底ケーブル網・『国際通信の日本史』　　**索敵強化に７０隻の艦船を配備　三笠艦より**

日露戦争開戦時の大北電信海底ケーブルの処理に付いては、長崎―ウラジオストクの回線を、開戦と同時に日本側から切断した。また長崎―上海回線は欧米諸国の観戦記者や、一般用及び日本側の対外宣伝用に活かし、長崎局で中継される電文は、全て日本側が判読できる処置を強制的に講じて内容を確認していた。情報がロシアに流れることを防ぐ、これ等の非常処理について、大北電信は当然不満を持っていたが、これは戦時国際法によって認められていたものである。

軍用使用は総て臨時回線を使用したのである。又、多くの文献戦史に「謎」とされているロシア艦隊が何故、妨害電波を出さなかったのか、と云う疑問があるが、当時の無線技術の観点から見れば、それは当たり前の話で、当時のロシアの無線送信技術妨害(機器)では殆んど不可能であり、妨害に不可欠な、無意味の信号を連続発信することは、当時の通信技術レベルでは、極めて困難な高技術レベルであったのである。

日本国を救った三六式無線電信機　明治中頃より、日本海軍はロシアの軍事脅威の対抗上、英国に多くの新鋭(しんえい)艦を発注した。その建造の検査と受領のために、海軍軍人が派遣されていた。明治３０年１月、イタリアに於いて「マルコーニ無線電信」の開発に成功したのを機に、その威力を派遣士官の注目することとなり、駐在武官から無線電信の開発に着手すべきと建議をもちだされた。

「マルコーニ無線電信」は、イタリア人、グリエルモ・マルコーニ(1874－1937)、１８９４年、無線電信の実験に成功した。高い木の上にアンテナを取り付け、地中の金属に接続する接地アンテナ式を考案し、コヒーラ検波器の改良を工夫して、高さ８ｍのアンテナで２４００ｍ離れ、モールス信号の受信に成功した。1897 年英国の特許を取得しマルコーニ無線電信会社を設立し、1899 年、ドーバー海峡横断の無線通信に成功し、1901 年、大西洋横断の無線通信を成功させた。この頃の無線の通信距離と発信電力に於いて、感応コイルの火花が弱く、交流発電機出力 20000Ｖに昇圧し、高圧コンデンサーを用いて強力な火花を飛ばした。1902 年コヒーラ検波器は、長距離通信に空電(雷放電による電磁波、大気中の放電現象に伴って発生し、雑音として受信される低周波電波。発生源は電光、雷鳴を伴う雷放電となる)の影響を受けたことにより、これを防ぐために磁気検波器が発明された。

海軍は軍艦建造費の一部を、マルコーニ無線電信から装置一式の購入を求めたが、１００万円（現在の金額約７百―８百億）の特許使用料を請求され、さすがに逡巡し、日本国の英知を結集して開発することに決定したのである。

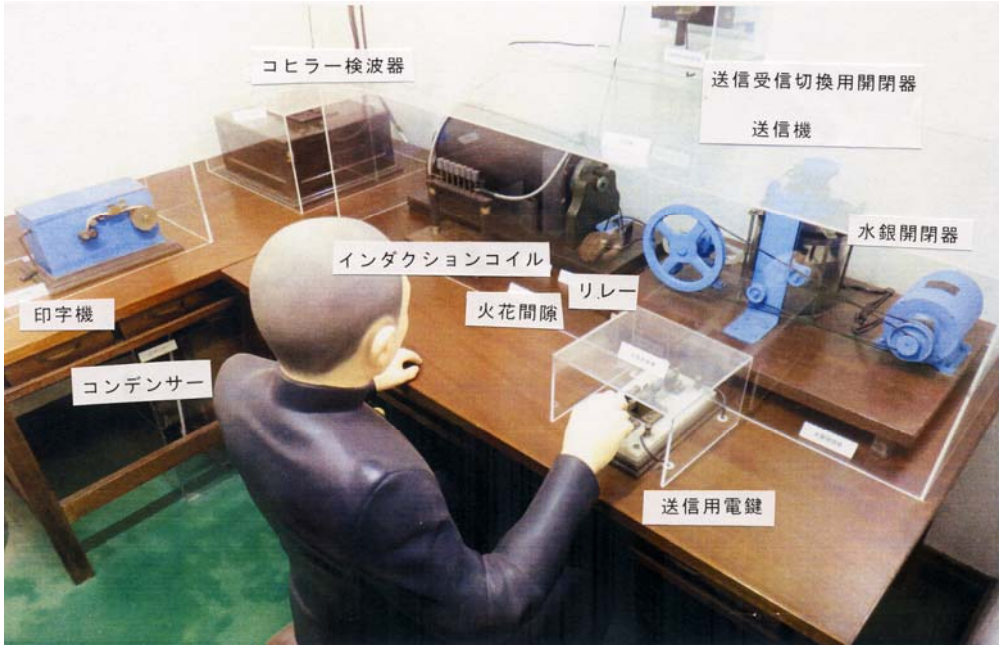
明治３３年５月、無線電信調査委員会を発足させ、逓信省からは明治３１年末から東京湾の台場で無線実験を進め、松代松之助技師が嘱託(しょくたく)として参加している。学会からは米国留学後、第二高等学校で物理の教鞭を取りながら、無線の研究を続けていた木村駿吉（咸臨丸で渡米した木村摂津守の次男）が海軍技師として参加している。委員会は３年後、８０海里（約 150ｋｍ）の船舶用無線電信機の開発を目標とし、翌年、数海

里の通信距離の無線通信を開発、これを改良して「三六無線電信機」を完成させた。

日露開戦前の直前に各艦船やその陸上電信施設に配備し、戦艦「三笠」「朝日」を含む、１７艦に設置命令が出て、辛くも開戦前に電信網を確保できたのである。

この無線機は６００Wの電力で、３０ｍのアンテナにより３７０ｋｍまで届いたと云われ、又、島津源蔵（初代・1839－1894、発明家・島津製作所の創業者。２代目・1869－1951、1897 年鉛蓄電池を作製し、後に改良された「ＧＳ蓄電池」を完成させ、この蓄電池が無線電信機使用された）の２代目が製作した蓄電池が大きな貢献をしたのである。

この電信の艦船の指揮をとった秋山真之参謀は木村駿吉に対し、６月１０日付書簡で「無線電信の武功抜群」と感謝の意を表し、５月２７日の「信濃丸」へ「・・・吾々(われわれ)指令部員がこの海戦に於いて、奉公の応分に尽くし得たり、その用いし武器は無線電信と鉛筆とコンパスにて、特に貴下に対して深厚なる謝意を表する所以に御座候」と感謝の手紙を送っている。(『電気通信物語』城水元次郎著。『にっぽん無線通信史』福島雄一著)



記念艦「三笠」には３６無線電信機・正確に再現されている

右側より、★水銀開閉器=電路を開閉（on/off)、スイッチ。★送信用電鍵=電鍵(でんけん)、モールス符合受信送信。★インダクションコイル=誘導コイル、リレー、電信を増幅して送る。★火花間隙=ヒバナカンゲキ、間隙を開けた火花放電による電磁波発生装置。★送信受信切換用開閉器=無線通信で送受信装置。★送信機=送信する信号エネルギーを発生する。★コヒーラ検波器=電磁波検出装置。★印字機=モールス符合を自動的に紙テープに記す、受信機。★コンデンサー=気を蓄え放出する。

36式無線電信機（34式無線機の改良）　直流を電源とする火花式であることは同じであるが、アンテナ直結でなく、インダクションコイルから、アンテナ波長変更線（送信機のアンテナは高周波エネルギーを空間に放射し、受信機のアンテナはそれをキャッチし電気に変換する)、又は送信蓄電池器（電池を管理するバッテリーから、バッテリーへの電池データ送信に共通の光回線とを備える通信システム）に放電させる方式となった。受信はコヒーラを用いた印字式。使用波長はアンテナを架設するマスト長から約６００ｍ、送信電力は約６００Ｗであった。

三笠記念館の「三六式無線電信機」の説明　日本海軍はマルコーニが発明した無線電信に着目し、明治３６年に三六式無線電信機を完成させた。三六式無線電信機は、突貫工事によって日露戦争が始まるまでに全艦艇、監視所、陸上司令部などに装備され連合艦隊の円滑な指揮運用、迅速な情報の収集と配布が可能になった。尚、この電信機の通信距離は８０海里（ｋｍ／1、852×80=148、16ｋｍ）であった。

（記念艦　「三笠」　三笠保存会資料より）

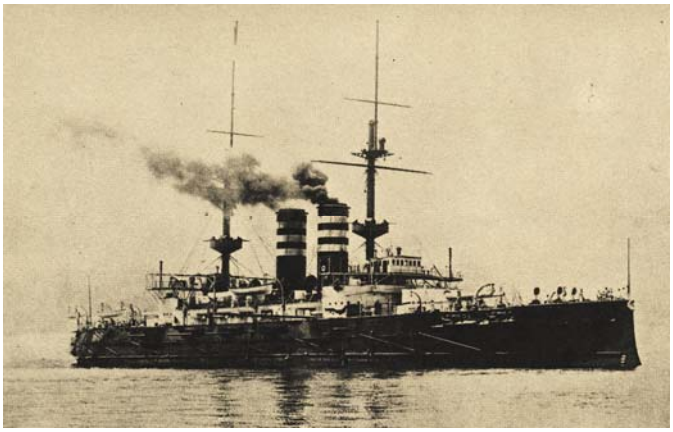
海軍技師・木村駿吉・三四、三六式無線電信機を完成

戦艦「三笠」　は明治３５年（1902）らイギリスのヴィッカース造船所（1828－1999年、ヴィッカースは 1999 年、ロールス・ロイスに買収される）で建造された。日本海海戦ではバルチック艦隊を対馬沖に迎え撃ち、東郷平八郎司令官が座乗する連合艦隊の旗艦として勇猛果敢に戦い海戦史上例を見ない圧倒的な勝利に大きく貢献をした。

愈々（いよいよ）バルチック艦隊と我が連合艦隊の激突が迫ってきた。明治３７年１０月１５日、ロジェストウエンスキー中将(バルチック艦隊司令長官)を指揮官とする第二太平洋艦隊は、苦戦している旅順艦隊を支援するためバルト海のリバウ港を出発した。日本側はバルト海に因み、バルチック艦隊と呼んだ。１２月２９日マダガスカル着、フェリケルザム支隊と合流、翌年３月１６日同地発。ロジェストウエンスキー中将は第三太平洋艦隊をベトナムのカムラン湾において隷下に編入、総数７３隻が翌年５月１４日出発した。

バルチック艦隊のシンガポール沖通過を知った日本艦隊は、ウラジオストク沖に機雷を敷設し、全兵力を朝鮮半島に集め、日夜厳しい訓練を実施しつつバルチック艦隊

を待ち構えた。５月２７日五島列島西方海域を哨戒していた仮装巡洋艦「信濃丸」は、海上遥かに東航する白灯を発見、確認のため近接したところバルチック艦隊に随伴している病院船であることが判明し、連合艦隊に「敵艦隊見ユ」の警報を発信した。



日本連合艦隊旗艦・三笠一等戦艦旗艦

排水量 15362ｔ、速力 18 ノット、12 インチ砲 4 門、6 インチ砲 14 門、魚雷発射管 4 門。館長は伊地知彦次郎。

三笠の勇壮の姿。日本海海戦・三笠の活躍　『記念艦・三笠』（三笠保存会）

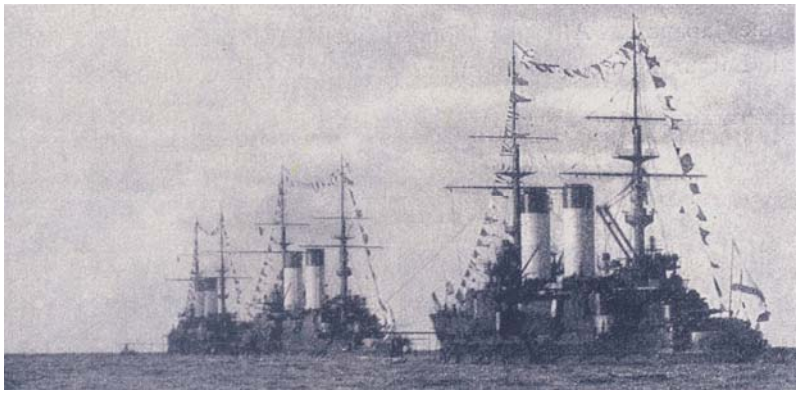
海戦史上例をみない大勝利　　戦艦４隻・巡洋艦８隻を基幹とする日本艦隊９６隻、ロシアは戦艦８隻・巡洋艦６隻を基幹として艦艇３８隻・運送船など９隻からなるバルチック艦隊を対馬沖に迎え撃ち、５月２７日から２８日の海戦において、その１９隻撃沈（戦艦６、装甲巡洋艦３、海防艦１、巡洋艦１、駆逐艦４、その他４）。７隻を捕獲または抑留し（戦艦２、海防艦２、駆逐艦１、その他４）、主力である戦艦・装甲巡洋艦・海防艦を全滅させた。辛うじて脱出した艦船は・巡洋艦・駆逐艦・運送船 １２隻、ウラジオストク港に到達艦は、巡洋艦1、駆逐艦２となる。北方に逃走した巡洋艦１隻は座礁して破壊放棄され、南下した巡洋艦３隻は損傷し、マニラに入港後武装解除となる。日本海海戦に於けるロシア側戦死者は４、５４５人、捕虜６、１０６人、日本側の戦死者は１１６人、日本側の損害は水雷艇３隻のみであった。

日本側の大勝利により日露両国の講和の機運が高まり、アメリカ大統領の仲介によるポーツマス講和会議が始まる。この日本海海戦の５月２７日が海軍記念日に制定されている。

バルチック艦隊の無線管理について　　一方ロシア側の無線はどのような状況であったのでろうか。明治３７年７月、ウラジオ艦隊の一部が日本近海に現れた時、吾妻山電信所（横須賀）でロシア艦からの信号を受信している。バルチック艦隊は、ドイツ・テレフンケン社（1903 年シーメンスとＡＥＧの合弁会社）製の設備を整え、ドイツ人技師を乗り込ませていたが、マダガスカルで技師たちは下艦してしまった。ドイツ技士ら

の待遇問題に、ロシア側は冷たくあしらっていたらしく、ドイツ技士の反発によるらしい。その技師の下艦にロシア士官たちは「ネズミが逃げた」と笑い、ロシア側の将士たちは、日本海海戦の最新通信機器による海戦(当時最高の最新科学戦)が、これから始まる開戦の予測を全く想像することが出来ていなかった。バルチック艦隊の士官級たちは、無線機による最新科学戦が無線によって決戦が起きることを理解していないことになる。

バルチック艦隊



バルチック艦隊、左スワロフ、インペラトール・アレクサンドル３世、ボロディノ。この３艦は日本海海戦に参戦した。(『日露戦争 PHOTO クロニクル』澪標の会より) **右・ジノヴィー・ロジェストヴェンスキー指令長官(1848－1909)最終階級は少将。**

記念艦「三笠」

現在の姿の記念艦「三笠」　神奈川県横須賀市稲岡町 82－19　2014 年筆者が撮る

第6章　日英同盟のながれ　『東洋外交史・上』　植田捷雄著・東京大学出版会・「義和団事変およびその後におけるロシアの対満進出」参考

ロシアは義和団の乱(北清事変)の勃興から、この事変を好機と捉え満州支配の軍事占拠行動を起こした。事変により北京城が陥落するとロシアは1900年８月「満州の秩序が回復すれば、その占領地から軍隊を撤退する」と宣言したが、虚偽の宣言をして軍隊を満州に駐留し続けた。

事変中に清国がロシア領のブラゴヴェシチェンスク（シベリア南部アムール州の州都・対岸は中国領黒河）を砲撃に対して、東清鉄道とロシア人保護の口実の下に満州占領した。ロシアの野心は満州域に留まらず朝鮮半島にも延び、茲に日本としては絶対譲れない利害衝突し、避けられない状態となったのである。

当時、ロシア宮廷に於いては満州占領政策の強行派ばかりでなく、ハト派はウィッテ蔵相、外務大臣ラムスドルフ、クロパトキン陸相の東清鉄道関係者は、平和主義の主張し、軍隊の満州から撤退によって清国との親和を図ろうとしていた。これに対し皇帝の側近に退役軍人の当時政務顧問タカ派のベゾブラゾフ派(ベゾブラゾフ、アバザ、プレーベ等)の冒険的野心家が、東洋で一旗挙げようと皇帝を煽動していた。やがて、その冒険派に扇動された陸軍大臣クロパトキンをも満州占領継続を主張し、この機会に口実を利用して満州の支配を確立すべきと進言しだした。

この間皇帝ニコライ２世は優柔の態度でいたが、皇帝はベゾブラゾフ(３章の 39 頁)策謀に乗り、次第に満州占領の野心を深めていった。一方、ドイツ皇帝ヴィルヘルム２世はロシア軍を思謀遠望の策略を立て、東欧州からロシア軍を極東に向かわせ、ロシア軍事力を削ぐ作戦が実りつつあった。そして平和解決を進めてきたウィッテ派は皇帝の側近から遠ざけられ、ベゾブラゾフ派が満・朝侵攻に邁進するのである。

『タイムス』紙の北京特派員モリソンの登場　『日露戦争を演出した男モリソン』上巻序に、《「イギリスは、日本人に激しい反露感情を焚きつける極東政策を取り付けるべきである。日本を煽動するためには、あらゆる手段を講じなければならない。ロシアはなんとしても抑えるべきだ。東清鉄道の完成を妨害し、不凍港の獲得強化を阻止しなければならない。・・・それを日本にやらせるのだ」。これは、ロンドンタイムズ北京駐在員、豪州人のジョージ・アーネスト・モリソンが、同社上海特派員Ｊ・０・Ｐ・ブランドに宛てた書簡の一部である。書かれたのは、１８９８年１月１７日、義和団事

変の２年前、日露戦争勃発の６年前のことであった。

日露戦争は、「モリソンの戦争」と云われ、モリソンは「戦争屋」とも呼ばれた。それは、モリソンが、日露戦争を惹起(問題を引き起こす)することと、日本を勝利に導くことを、自己の使命として全力を尽くしたからであり、また、彼の仕事の効果が日本及び世界に認められたからである。

モリソンは、何故、日露戦争を切望したのであろうか。それは、オーストラリアの安全保障を確保するためであった。当時、大英帝国の自治領として、その翼下にあったオーストラリアが、平和と安全を享受し続けるためには、英国には、アジア・太平洋地域における優位な地位を保持してもらわねばならなかった。しかし、ロシアが南下を続け、英国の極東勢力を脅かし始めていた。そして、頼みとする英国は眼前に迫る南阿戦争(ボーア戦争)のため、極東にまで軍事力を展開させる余裕はなかった。そこで、熱烈な豪州の愛国主義者モリソンは、これまたロシアの南下に悩む日本を刺激して、日本にロシア征伐をしてもらうおうと願ったのである。》

中央モリソン(『日露戦争を演出した男モリソン』上ウッドハウス映子著・新潮文庫より)

慶親王(愛新覚羅奕劻)1838－1917

1894 年西太后の命令で慶親王となる

モリソンの世紀のスクープ　１９０１年１月３日、ロンドンタイムズ北京駐在員、モリソンは、「ロシアと清国が満州に関する協定を秘密裡に調印した」との事実を『タイムス』紙上ですっぱ抜いたのである。満州侵略のチャンスを狙っていたロシアは、１９００年６月、義和団の乱勃発に乗じて大軍を出兵、乱の鎮圧後もそのまま満州に居座った。そして在満のロシア軍撤兵を餌に、列国には極秘にして清国に迫り、この年の暮、密約を締結したのである。この密約は清国から満州の宗主権(従属国に代わり条約・外交権を行使する)を奪うものであった。

モリソンは、１１月１０日の『タイムス』紙上でロシア大軍の満州の居座りは、「確

固たる軍事的占領に等しく、・・・ロシアは満州撤兵を再三列国に保障しているが、清国人はみな、満州はもう失ったものと痛感している」との警告を発した。

そして、１２月３１日夜１０時、上記予告の到来を告げて「露清密約調印成る」との記事を記載、２０世紀初の正月早々、日本と列強国をアッと言わせたのである。

尚、後年モリソンは１９０９年５月、明治天皇に拝謁している。１９１２年に、日英親睦に寄与した功により、天皇より御紋付料紙硯箱（すずりばこ）一組を受けている。

注釈・小村寿太郎が露清密約をモリソン洩らす　『魂の外交』本多熊太郎著（ポーツマス講和会議、小村全権の秘書随行員）昭和１６年・千倉書房より『タイムス』記事を抜粋する。

《・・・義和団事変の前後外交時代に、露清の密約談判を当時北京駐在の何れの国の公使よりも、先に嗅ぎつけて、遂に之を打破したのは小村侯である。露清密約を最初の案文は時の『タイムス』通信員「モリソン」の電報に依って世界に暴露されたのが、是は小村侯が慶親王側より内密に入手し、本国政府へ電報すると同時に、モリソンにその写しを与えたものである。侯（小村）は「タイスス」紙上の暴露によって、世界の与論を露国に向けさせる考えから、そうされたと思う。》と本多は述べている。

この時期の小村寿太郎は 1898 年駐米・駐露公使を歴任し、ロシアの表裏をよく研究し、満州に対するロシアの意図に就いて、的確に見通していた。

日露協商か日英同盟かの選択　この時分の日本は、明治３４年（1901）６月２日に第一次桂内閣が成立し、内閣成立時よりロシアの南下政策をいかに対処するかは大問題となり、二者択一から一方の方策を取らざるを得ない状況に追い込まれていた。

一つは、日本が朝鮮に於ける優越的地位を維持し、その代わりロシアの満州経営の自由を認める、即ち「満韓交換主義」（ロシアは満州を・日本は朝鮮を）である。二つは、ロシアの朝鮮侵略が避けられない場合は、実力（軍事力）で阻止する、この２つの難題は、議会を二分していた。

丁度このタイミングに、ドイツ皇帝ヴィルヘルム２世による、日・英・独の三国同盟案が進み出し、この提案に極東に於ける利益を同じにするイギリスとの同盟が検討されていた。在英日本公使林董（ただす）が、この同盟は日本としては「望むところ」と捉え、積極的に同盟案作成と成立に奔走した。

日本国内に於いては、明治黎明期より大英帝国の遣（や）り方を見てきた伊藤博文らは、

「イギリスは日本との同盟をそんなに簡単に結ぶ訳がない」という考え方を持っていた。日露協商推進者は伊藤博文、井上馨、陸奥宗光、谷干城（たてき）、尾崎行雄、栗野慎一郎らとなり、日英同盟論者らは、山縣有朋（最初は日露協商論者）、桂太郎（首相）、加藤高明（外務）、林董（駐英公使）、小村寿太郎（外務）、福澤諭吉等となっていた。

伊藤博文はロシアの南下が激しくなればなるほど、日露協商（お互の権益を認める）の必要を認め、協商によってロシアの侵略を防ぎ、朝鮮を守る、という考え方は、まだ日露交渉に余地は残されていると見た伊藤らは、日英同盟を時期早尚と考え、日英同盟は実現性が薄（うす）いと見ていたのである。この時期の状況は１９０３年８月にロシアは極東総督府を建設し、主戦派のアレクセーエフ海軍大将を総督に任命、旅順に要塞、大連に艦隊用軍港を建設し、朝鮮の馬山（まさん）に石炭貯蔵所・海軍病院建設を促進していた。そして満州国境から漢城（ソウル）間の電信の架設を終え、じりじりと日本を圧迫していた時期なのである。

林董（ただす）親英派

加藤高明親英派

井上　馨・親露派

ドイツ宰相フォン・ビューロー

日英同盟に傾く　日英同盟推進の中心人物は林董で、林は「三国干渉」将来の三国の勢力図を鑑み、イギリスと同盟する以外、日本の未来はないという結論に達していた。福澤諭吉の『時事新報』（明治２８年５月２８日）に「外交の大方針を定めるべし」と題しての記事を掲載した。「日英同盟の必要を論じ、露国の南侵は日英両国の共通利害とする処であるから、その同盟は必ずや実現し得るべきことを強調した」これは、日英同盟論が、我が新聞紙上に発表した最初であった。

日英同盟の経緯は列強国の面子があって、その実現性の機運は日英からの発案でなく、ドイツの媒介から出てきたもので、1900 年、義和団事変後にドイツから「日英独三国同盟」の締結論が提議され始め、その主唱者はドイツ皇帝ヴィルヘルム２世を始め、宰相ビューロー、外務省政務局長ホルシュタインらであった。それは１９０１年、

ドイツ皇帝がロンドンに赴いた際、英国新帝エドワード７世(母ヴィクトリア女王、在位1901－1910)に対して「日本は極東に優越した海軍を有するが故に、日本をドイツ及びイギリスに結びつけておくことが必要である」と力説したことから始まる。

そこで、ドイツ宰相ビューローは、駐英ドイツ臨時大使エッカードシュタインにその旨を密かに伝え、イギリス外相ランスダウンおよび駐英日本公使林董に対して、日英の接近の感触良好であるので、同盟提議を強く進めた。

エッカードシュタインは独逸皇帝の側近に信頼が厚く、「この秘密裡の外交話は皇帝から直接にお話しください」と進言し、日英独三国同盟の意向の流れを誘導した。

林公使はこの流れを日本政府に報告と同時に、同年４月１７日ランスダウン（英国第５代侯爵）と会見し、イギリスの真意を探ったところ、イギリスも敢(あ)えて反対の意思が無いことが察せられ、エッカードシュタインはさらに５月１１日、イギリス政府に対し、「もし日英同盟が不成立ならば、日本は日露協商に傾くであろう」と伝え、日英同盟の推進に全力で努めている。日英同盟の先導したのはドイツであるが、やがて最終的に英独同盟が流産し、成立したのが日英同盟なのである。

ドイツは何故、日英同盟仲介の役を買って出たのであろうか。動機として考えられることは、帝政ロシアの軍事力を出来るだけ極東に向けさせて、ヨーロッパからロシア軍を遠ざけようとしたカイゼルの謀策が挙げられる。これはロシアを牽制することによって、露仏同盟の勢力を弱め、ドイツの宿敵フランスを孤立に陥れる策にあった。

山縣有朋

アレクセーエフ極東総督

ヴィルヘルム２世

第５代ランスダウン公爵

ドイツは日英同盟の成立によって、ロシアの関心をヨーロッパから極東に向わせ、イギリスをして露仏同盟の外交を麻痺させ、また日本の背後にイギリス配置することにより、日本にはロシアに対峙する外交圧力を与え、これを以って日露の開戦を想定出来る状況に追い込み、因って露仏同盟の弱体化を意図したものに外ならない。

斯(か)くして、日英同盟は現実味をおびて、取分け永年日露協商論を堅持してきた元老

山縣有朋でさえ、親露主義を変えて日英同盟の必要を認めるに至った経緯となる。

１９０１年４月２４日、山縣が伊藤首相に送った書簡に日露衝突が必ずやってくることを伝え、「此の衝突を避け、戦争を未然に防ぐ策は、唯(ただ)他の与国の声援にかりて、ロシアの南下を抑制するに至り、今回同盟の計画は、恰(あたか)も我に好機を与うるものなり、宜しく速に英の意を探り進んで、独に議し盟約の成立を図るべし」と述べている。

伊藤内閣は国内の財政問題(税制)によって倒れ、同年６月２日、桂内閣組閣し、日英同盟交渉を継続した。７月１５日、桂総理に対して駐英公使林董からイギリスの内情の報告を受けて了承し、これによりエドワード７世を始め、ソルスベリー首相、ランスダウン外相、帰国中のマクドナルド駐日公使(義和団の乱柴中佐と籠城)らは日英同盟に賛成に回るのである。

ロシアの南下に対して極東に於ける権益保持のため、ロシアに単独では対抗できない日本政府は、安全保障が担保される事により、ロシア開戦に自信を持ち、英国に於いてはロシアのアジアへの南下を食い止める事が出来る同盟として、大いに期待した。

ドイツの裏側を覗けば、ドイツ皇帝ヴィルヘルム２世は、ロシア皇帝に日露戦争を煽っていたが、なかなかその通りに進まない。ロシアが何時鉾先をドイツに向けられるかもしれない。何とか早期に日露の開戦を誘発する策は、ドイツも含めた日独英の３国同盟を提唱し、ドイツは日本と同盟する素振を見せて、イギリスを誘い込み、日英交渉が本格的に進んだ時、ドイツは降りたと同盟関係者たちは見ている。

日英同盟交渉　林公使は同盟に関する事項を日本政府に構想を伝えた。

①　朝鮮問題、日本は 1898 年の日露協商によって日本に与えられた特権を保持し、ロシアが朝鮮に優越権を獲得しょうとする行動を排除する。日本はイギリスの支持を求める。

②　中国問題、日本の政策は中国における領土保全と門戸開放(注)の維持を目的とする。

③　攻守同盟、もし同盟国の一方が本同盟の目的を防護するために、第三国と交戦する場合には、他の一方は中立を守るが、一国以上の外国と交戦する場合には、他の一方は全力挙げてその同盟国を支持する。(日露開戦時、イギリスは仏・独が露国側に組する場合どう防ぐか、その時は英国も一緒に戦う防守同盟となる)

注・門戸開放宣言(1899 年7月3日通牒)　門戸開放、機会均等、領土保全の三原則を

アメリカは中国に進出している欧州列強に対し、貿易活動に於いて清国市場に割り込む目的

であった。アメリカのジョン・ヘイ国務長官(写真 11 章 159 頁)は仏、独、英、伊、日、露に対し、中国の主権の尊重と中国内の港湾の自由使用を求める通牒を発した。1900 年３月アメリカは門戸開放が国際的な政策になったと主張を展開し、２年後、アメリカは満州に於けるロシアの侵略は門戸開放に反すると主張。1904 年―1905 年日露戦争の結果、ロシアに代わって満州南部の権利を獲得した日本は、アメリカに対し満州では門戸開放を維持すると伝えた。アメリカは米西戦争(米とスペイン)で中国への参入が遅れ、門戸開放を力説する事情があった。

ランスダウン英国外相(日本の軍事力を評価)はイギリス政府案を林に手交し、案の骨子は、朝鮮が他国によって併合させられることを防ぎ、中国の独立、領土保全、商工業上の機会均等を保持するものであった。林はイギリス政府案を本国へ電送したが、その返信の訓電には「政府の確定意見は近く電報するが、その間にパリにいる伊藤を訪れて、従来の往復電報を全て示し、イギリス案の確認を伊藤の支持を得るよう努めよ」とあったのである。

何故、日英同盟交渉が進んでいる最中に、伊藤がヨーロッパに現われるのか、何故、伊藤の意見を仰がねばならないのか、林は大いに驚き、悩むのである。

その理由は、伊藤は野に下り、政友会総裁の地位にいたが、エール大学（米国イェール大学）創立二百年記念祝典にあたり、伊藤に名誉法学博士の学位を授与されることになり、その途次、ヨーロッパへ足を延ばして露都を訪問して、ロシアの要人たちと会談し、日露の紛議を緩和したい希望を持っていた。

伊藤は日英同盟よりも、日露協商の成立させることの方が、日本の安全保障に叶っている策と考えており、伊藤はロシアとの交渉を国家のために最後の奉公と考えていた。伊藤自身も日英同盟を否定するものではなく、彼自身日英同盟がそんなに早く結ばれるとは思っていなかった。日英同盟の様子を見ながら日露協商を上手にまとめることが出来るなら、それに越したことはないと思っていた。それが無理なら日英同盟交渉に変更する腹構えであったようである。

明治３４年（1901）１１月１３日、林は伊藤と会い、日英同盟の交渉経過を報告した。伊藤は困惑し伊藤は直ちに桂に電報して、「日英同盟案について細目に疑義がある。自分はとにかく露都に行き意見を交換するが、政府はこの間に細目を研究し、最後の決断を下すことを猶予（ゆうよ）されたい」と伝えて来ている。

桂は「日英交渉は今や締結間近に進捗している、重大な理由がなければ回答を遷延（せんえん）

することは許されない」と、返電し暗に露都行きの無意味なことを示した。

林も日英交渉が公式に進行し、日本最高元老の伊藤公の露都訪問は、イギリスに大きな不信感与え、両国の将来への影響を心配しはじめた。林にとっては甚だ迷惑なことで、林と伊藤の会見の際、伊藤は「桂はとくに日英同盟を重要視する様子が見えなかった」と伝え、それを聞いた林は政府の態度を疑い即刻日本政府の真意を正した。

これに対し小村外相は「伊藤は何ら官命を帯びず、自己の責任に於いて行動している。政府は従来の政策に変更なく従来の方針通り交渉を進められたい」と訓令した。

林は伊藤に対し「露都に於いては単なる意見交換に止め、日英同盟の精神に矛盾する談話は避けられたい」と、伊藤に二重外交の危険を林は強く訴えた。

イギリス政府も伊藤が露都（現サンクトペタルブルク）に向う行動に深く疑惑の念を抱いていた。林は伊藤の露都行きは全くの私的行動に過ぎず、なんらロシアと協定を結ぶ権限がないとイギリス政府に釈明した。

伊藤はロシアとの最終交渉に期待を賭けたが　同１１月２８日、伊藤はニコライ２世を拝謁し、ロシア皇帝は「朕が信ずる所によれば、両国の協和は決して出来ないことではない」と勅語を賜った。伊藤は感激し日露協商の可能を確信し、外相ラムスドルフ（9 章 96 頁）、蔵相ウィッテ（10 章 130 頁）と会談し、「個人の意見」と断りながら、「朝鮮の独立に相互両国が保障、朝鮮に於ける日本の政治上・工業上及び商業上の自由行動、朝鮮における事変に対する日本の必要なる軍事的援助、朝鮮政府に対する日本の排他的助言及び援助をロシアが承認すれば、日本は満州に於いてロシアのために相当の譲歩をしても差支えないと」と伝えた。

しかし、ラムスドルフを始めロシアの大勢は、朝鮮から完全に退去することに同意しなかった。伊藤はこの際に日本が満州に就いてある程度の譲歩をすれば、日露協商は必ず実現すると、この時点では確信を持っていたと思われる。

そこで伊藤はベルリンから桂に対して日露協商締結の可能性があり、日英同盟の締結延期を電報で要請した。しかし桂や小村の内心は、ロシアが示す好意は日英交渉を牽制するために単なる表面的な演出に過ぎず、到底満足なる協定を結ぶ誠意は無いものと捉えた。たとえ協商を結んでも、我が国は満州に於いて相当の譲歩を許さなければならず、それは清国の主権を毀損（きそん）（こわれる）する恐れがあり、伊藤の提案に林は賛成できなかった。

伊藤の露都訪問は、イギリスに多大な猜疑の念を与えたが、それがかえってイギリスを深く思考させ、日本がロシアとの締結の可能性に恐れを抱き、日英交渉が急速に進展することになったと伊藤に云えた。

日本政府は１２月７日、葉山で元老会議を開き、日英同盟と日露協商との利益得失について意見を聴取(ちょうしゅ)した。山縣、井上、大山、松方、桂首相、小村外相、山本海相が顔を揃え、井上を除く諸元老は日英同盟締結に賛成し、井上は伊藤との関係が深く同意を避けたが、会議の空気は日英同盟に賛成し、彼も多数説に従い、かくして、日英同盟が決定したのである。

桂首相及び小村外相はこれを上奏し、階下は元老に再議を命じられ、元老は前議に変わりないことを奏上し、１２月１０日、速やかに日英同盟を締結せよと聖断が下され、ここに至り伊藤の対露交渉は打ち切られた。１９０２年１月３０日、イギリス外務省において日英同盟条約は調印に至ったのである。

日英同盟は当時世界の一等国と仰がれたイギリスが、東洋の一小国に平等に結ばれ、条約の意義は大きいと受取った。日本の極東に於ける国際的地位は、欧米の最強国の保障するところとなり、これによって日本は長年の死活問題であった朝鮮に於ける権益を強化し、ロシアの南下に対する防禦の自信を深めたのみならず、２年後に於ける日露戦役の勝因を固めたものといえる。

余話・新たな史実発掘　『検証日露戦争』読売新聞取材班・中央公論社より

《開戦前史をめぐり、日英同盟と日露協商とは二者択一の選択で、それらの推進の中心となった桂太郎首相らと、元老・伊藤博文らとの間には、熾烈な対立があったとする見方に反論が出ている。千葉功・昭和女子大学講師は、当時の日本は欧州諸国の「パワー・ゲーム」にならって、むしろ日英、日露の「二股交渉」を目指していたとした上で、対立の図式が作られたのは、「日英同盟締結の功を自分に帰す」そうとする桂首相があたかも「対立があったように言い出し」、しかもその発言がそのまま客観史料として一人歩きしたのが原因ではないかと分析した。》とある。

日英軍事協商の成立『近代日本戦争史・1』「日英同盟と軍事協商の成立」田中宏巳参照

日英同盟成立から間もない明治３５年４月、駐日英公使マクドナルドが小村外相に軍事協商を締結する必要の提案を日本側に持ち出し、日本側も応じ５月１４日に海軍

横須賀鎮守府内で両国代表の会議が開催された。第２次日英同盟はイギリスのインドに於ける特権と、日本に於ける朝鮮支配権を共に認め合い、清国に対する両国の機会均等を定め、締結国が他の国１国以上と交戦した場合、同盟国はこれを助けて参戦するよう義務付けられた。終始会議の主導権を握っていたのは日本海軍で、会議が始まり海軍大臣山本権兵衛（1852－1933）が伝える。

「日英同盟海軍ノ作戦基地ハ之ヲ南北二方面ニ定メサルヘカラズシテ、北方ニ於テハ我カ軍港佐世保トシ之ニ付随シテ、対馬及朝鮮南岸ノ要地南方ニ於テハ貴国ノ海港香港ヲ主トシ、之ニ付随シテ厦門（福建省）及澎湖島（台湾島西方 50 ㎞）ヲ指定セントス、而シテ此作戦基地ニ拠テ以テ第一ニ各方面ノ制海権ヲ占メ、然ル後進テ臨機応変ノ作戦方略ヲ定ムルヲ適当ナリト認ム・・・(略)」(『日英両国軍事関係書類』「横須賀鎮守府ニ於ケル会談記事」防衛研究所所蔵」

協商の核心に迫る発言をしていることは、日英同盟及び協商の主務機関が海軍であるとの認識が背景にあったのであろう。陸軍大臣寺内正毅（1852－1919）が「凡ソ海戦ノミヲ以テ戦局トナリシハ、古来歴史上其実例甚ダ少ナシ、必ラス陸軍ヲ上陸セシメテ敵ノ急所ヲ撃破シ、彼ヲシテ容易ニ立ツ事能ハシメサルニ非ルヨリハ、結局ヲ見ル事難シ」(同「明治 35 年５月１４日横須賀鎮守府ニ於ケル日英軍事会議摘要」）と、強く発言しているが、海軍主導の展開として進み、軍事協商の目的がはっきり交渉されている。

① 相互の信号法と電信暗号の実用化

② 情報の交換

③ 艦船に対する日本炭及び英炭（カーディフ炭）の供給

④ 艦船に対する入渠修繕の便宜供与

⑤ 戦時陸軍輸送における英船の雇用

④の艦船に対する日本炭及び英炭（カーディフ炭）の供給は諸列強にとって極東艦船の行動には、当時は日本炭が絶対に必要な燃料となっていた。軍艦の造修ができるのは日本のみで、横須賀、呉、佐世保の３ドックで、英国東洋艦隊の極東での行動は日本の協力が不可欠となっていたのである。

この調印が７月の初め、その直前にエドワード７世の戴冠式がロンドンで行われる事になり、我が国は天皇の名代として小松宮彰仁親王殿下を差遣し、式を祝う観戦式に軍艦「浅間」と「高砂」の二隻を派遣し、随行員に陸軍歩兵中佐柴五郎(北京城籠城)、福島安正少佐（義和団事件の際駐日英公使マクドナルド北京城で共戦)、２人の渡英は偶然

ではなく列強の仲間として戦った象徴的な２人を両国親善の為に演出したものである。

２次日英協商の交渉は難産であったのは、イギリスはロシアがアフガニスタンに南下する事を予測し、そのインドの戦局に日本軍を差し向けてくれるかの希望があり、日本側は満州の地にイギリス軍を向けてもらえるかの希望となっていた。両国の結論として「イギリス軍はインドのみ、日本軍は満州のロシア軍を自衛で守らなければならない」と、云う事項で落ち着きをみた。

イギリスはボーア戦争で苦しんでいる時局であり、第３国との協力がなければイギリスは、既得権益国の維持が困難になっていた時局であり、このような協商の結論は、当時の日本陸軍側にとってはイギリス陸軍の加勢を期待した分失望を否めなかった。

日英の軍事協力は、実りある協力関係を相互に引き出すことが出来なかったが、日英の軍事協商は世界最強と新興の日本との同盟は、日本がイギリスより利益を得るのではないか、と云う日本外交勝利の称賛の声が高かったが、しかし交渉はロシアの進出を阻止するため、イギリスの軍事力の期待は失望に変わり、それでも軍事協商が調印できたことは、大英帝国の風格が列強間での影響力は大きく、日本側にとっては、結果として、その期待していた以上の協商となったのである。

余話・今も残る海軍横須賀ドック　「明治絵地図説明」（①から⑤現在の位置）

現在に残る横須賀軍港・造船処・船舶修理ドック跡・現在も使われている（軍港めぐり遊覧より）

中央にある小さな建物２が下の図３、左の四角い建物（絵図では③）になる。ドックの岸壁は、慶応元年１８６５年の造船所建造がそのまま残る造船所となる。現在の旧海軍横須賀軍港の大部分は在日米軍基地となっている。現在は海上自衛隊の自衛艦隊司令部潜水艦隊司令部等の所在する基地となる。

①　江戸末期のドライドック　②　ドライドック　③ドライドック（乾（かん）ドック・船渠（せんきょ））

④ 現在のダイエイショッパーズプラザ横須賀　　⑤　ヴエルニー公園一帯

「人物・地域」横須賀の落穂拾い（3）より

ヴエルニー公園案内　ＪＲ横須賀駅前

この公園はシーサイドパークとなり、軍港散歩と「軍港めぐり遊覧船」あり、海上自衛隊横須賀総監部と自衛艦隊桟橋、第７艦隊の原子力空母、原子力潜水艦、イージス巡洋艦等が見学することができる。原子力空母ロナルド・レーガンの大きさに驚いた次第の見学となる。公園には横須賀軍港に貢献されたヴェルニーと小栗上野介忠順のモニュメントがある。

フランソワ･レオンス･ヴェルニー（1837－1908）　　フランス人の造船技師で、海軍増強をめざした徳川幕府の要請により横須賀製鉄所（造船所）建設の責任者として１８６５年来日した。明治維新後も引き続きその運営の任にあたり、観音崎燈台や走水の水道の建設、レンガの製造のほか、製鉄所内に技術学校を設けて日本人技術者の養成に努めるなど、造船以外の分野でも広く活躍して１８７６年帰国となる。

小栗上野介忠順（おぐりこうずけのすけただまさ）（1827－1868）　日本初の遣米使節を勤め、外国奉行や勘定奉行など徳川幕府末期の要職を歴任し、フランスの支援のもと横須賀製鉄所（造船所）建設に携わった。軍政の改革、フランス語学校の設立など日本の近代化に大きく貢献したが、大政奉還後に徹底抗戦を主張したため役職を解かれ、領地の上野国権田村（群馬県倉渕村（くらぶちむら）に墓がある）で官軍により斬首された。

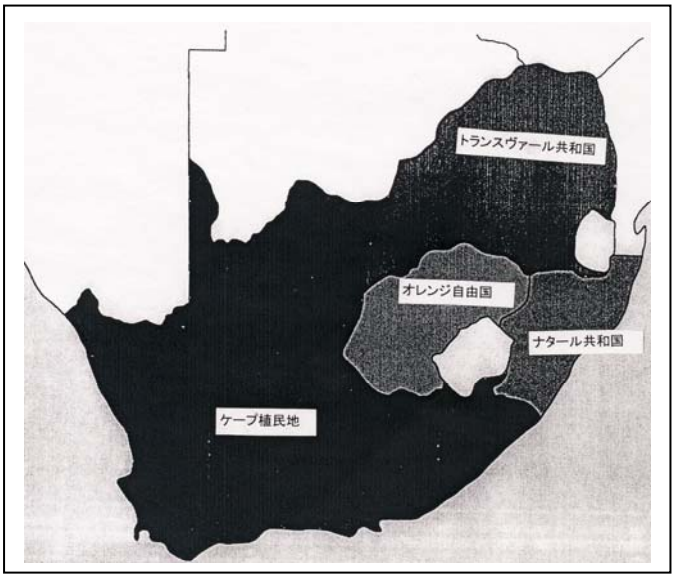
小栗上野介忠順・ヴエルニー公園

フランソワ・レオンス・ヴェルニー・同公園

第７章　日露戦争前夜の米英の軍事状況を概観

英国のアフリカ植民地に於けるボーア戦争は（第１次・1880－1881)。第２次ボーア戦争（1899－1902）となる。アフリカ南部に住むオランダ系移民を主体に、フランス・ドイツ等ヨーロッパ人のプロテスタン教徒らが、宗教的自由を求めてアフリカ南部に移住し、アフリカ南部に入植した人々を指し、ボーア人(ブール人)と呼ばれた。オランダ系白人はブールといい、ボーアは英国発音の蔑視が込められている。

言語はオランダ語、仏語、マレー語、現地語の融合したアフリカーンス語を母語とし、ブール人はオランダ語、アフリカーンス語で農民を意味する。この時代に英国がケープ植民地を獲得したため、ボーア人達は１８５２年にトランスヴァール共和国を建国し、１８５４年にオレンジ自由国を建国して港を持たない内陸国家が建国した。



１８４０年代の南アフリカ・『ウィキペディア』より

１８６７年、オレンジ自由国のキンバリーで、ダイヤモンド・金の鉱山が発見され、１８９９年、帝国主義英国はこの地域に侵攻した。第一期開戦は、ボーア人よる抵抗は強く、ドイツ制の機関銃、無煙銃などの武器で、予期せぬ大敗を屈した。これに慌てた英国は、１８万の大軍を派遣して、トランスヴァール共和国を占拠し、合併が宣言された。が、ボーア人同意せず、更なる第二期ゲリラ戦争が継続する。やがてボーア人側も抵抗の限界となり１９０２年５月、両国は合併することを承認(フェリーニヒング条約)して戦争は終わり、ボーア人の２つの協和国が消滅した。

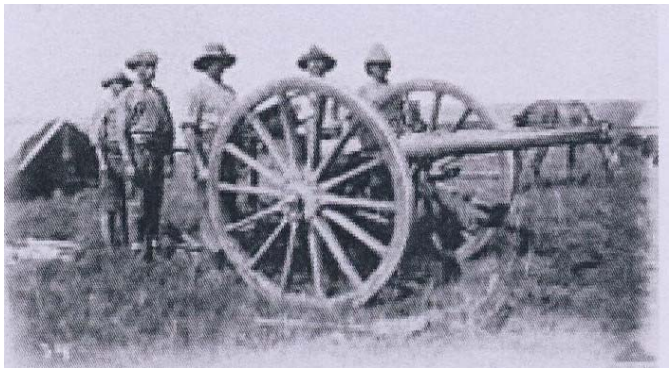
英国側の死者６千人、戦病、戦傷者合わせて３万９千人、軍事費は２億２千３百万ポンド(日本円２２億３千万円)にのぼり、日露戦争の戦費を遥かに上回り、英国の国力を疲弊させる要因となっている。この戦争により英国はトランスヴァール共和国とオレンジ自由国を合併したが、英国軍の疲弊は甚大となり、非人道的な収容所戦略（女性と子供を強制収容所に隔離・餓死)、焦土作戦展開し国際的非難をあびた。

ボーア戦争に英国２年半も費やし、英国帝国としての権威が大きく失墜し、この時

期に於いて、英国は米国の工業力に追い抜かれていたのである。極東では１９００年、義和団事変が勃発したが、この様な事情により、英国は「栄光ある孤立」の政策を改めざるをえず、１９０２年、「日英同盟」につながって行くのである。

その頃、ドイツは西南アフリカのナミビアを支配、さらにモザンビークのデラゴア湾にも野心をもち、英国の敵対国となっていた。こうした関係からボーア戦争は汚い帝国主義戦争と語られた。

ボーア戦争の英国軍



同・英国軍　　yahoo 画像より

この戦争は、両軍が無煙火薬使用した近代的な小口径連発小銃で武装して戦った戦争となる。短い銃剣を装着し、兵士一人ごとに１００発の弾薬を携帯し、他に弾薬箱で８５発を運搬した。予期せぬ敗北と苦戦に英国軍はその戦法・戦術を変え、野戦の服装も射撃目標を受けやすいものから、風土に合わせたカーキー色の軍服に変えたのである。

このカーキとは本来「土埃（つちぼこり）」を指す。１９世紀、インド駐留英国軍が、現地語でカーキと称したのが始まりと云われている。日本では明治３７年頃、陸軍が帯赤茶褐色・黄土色をカーキー色と紹介している。

１９０２年１月、英国陸軍全軍の軍服をカーキー色に定め、この時期の小銃の有効射程が 1000m、命中精度も高く、しかも連発銃の出現により火力の密度が高く、それらを一斉射撃に繰り返す新戦法が確立された。

この「ボーア戦術」が今後の戦争で使われるかに問われていたが、即刻、日露戦争で試されることになった。世界の陸軍に多大な戦術的教訓を与えたボーア戦争は、近代戦争の要であったのである。　　（『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著・他参照）

トランスヴァール共和国　1830 年代より英領ケープ植民地のオランダ系移民らが、英国統治への反発から、北東内陸へ集団移動し、ヴァールの北方（トランスヴァール）にボ

ーア人が拠点を築く。1852 年にトランスヴァール共和国が成立した。

オレンジ自由国　国名の「オレンジ」は南部国境を形成するオレンジ川に因る。1854 年、ボーア人によって建国された。1860 年代以降、西部グリカランドのキンバリーでダイヤモンド鉱山が発見され、白人鉱山技師が流入し、英国はこの技師保護を名目にオレンジ自由国を侵略した。しかし、現実にはボーア人より待遇が悪く、1899 年に第二次ボーア戦争が起きる経緯となっている。

米西戦争の概要　米西戦争=アメリカ=スペイン戦争。１８９５年のキューバ革命に対するスペインの弾圧にアメリカが軍事介入し、ハバナ湾に停泊中のアメリカ戦艦メイン号が１８９８年２月（４月２５日―８月１２日）に爆沈させられた事件を口実に、同年４月２５日アメリカはスペインに宣戦布告した。

戦況はアジアに移り５月１日、アメリカアジア艦隊がフィリピンのマニラ湾でスペイン艦隊を撃破し、６月１１日、アメリカ軍はキューバに上陸した。

１２日にフィリピンでアギナルド(フィリピンの革命家)が独立を宣言し、同月２０日、アメリカ軍がグワム島を占領した。７月３日、アメリカ艦隊がキューバのサンティアゴでスペイン艦隊に勝利し、２５日、アメリカ軍がプエルト・リコを占領して８月１２日に休戦協定が結ばれた。同月１３日、アメリカ軍がマニラを無血占領し、スペインとの戦闘は４ヶ月で終結した。

１２月１０日、パリ講和条約が成立、スペインは、プエルト・リコ、グアム、フィリピンをアメリカに割譲し、キューバの独立を認める事になる。

この間、アメリカはハワイを併合し、翌９９年にウエーク島を獲得し、東サモアの諸島をも獲得、サンフランシスコからハワイ、ウエーク、グアム、マニラを経て中国大陸に到達するルートを出来上がり、太平洋の中継基地群が一本の線で結ばれた。

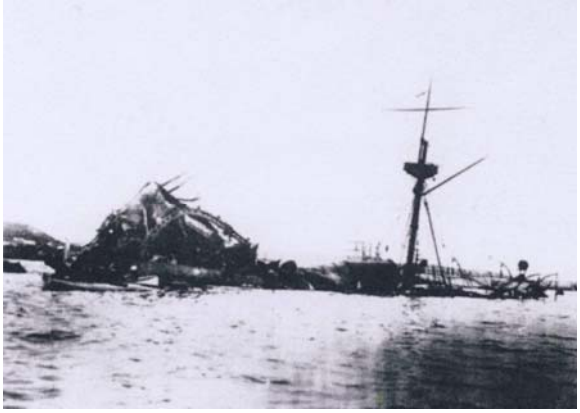
アメリカはフィリピン独立革命軍を懐柔してマニラを無血開城させたが、独立を認めないアメリカとフィリピン独立戦争が開戦となって行く。

「米比戦争」１８９８年８月１４日、１万１千の地上軍が送られ、アメリカはフィリピン独立指導者エミリオ・アギナルド(1869－1964・フィリピン共和国初代大統領)に、勝利したら独立させると約束してスペイン軍を背後から襲わせ、アメリカはスペイン降伏後、約束の独立を反故にして、アギナルド独立軍１万８千を掃射の行動にでた。

アメリカのフィリピン征服戦争は苛酷な戦争の連続であった。アメリカ陸軍公式統

計によれば、投入兵力１２万８千、死者４千、３千の負傷を出した。２０万に近いフィリピン戦闘員が殺された。アメリカはパリ条約において、スペインへ２０００万ドルを支払、フィリピン独立戦争に要した戦費はポンドに換算すれば、約１億３千万ポンド、イギリスがボーア戦争に費やした戦費より少ないが膨大な額に上った。

イギリスのボーア戦争、アメリカのスペイン・フィリピン独立戦争ともに１９００年１月から本格化し、イギリス、アメリカは共に大兵力を投入した時期と、日露戦争の前夜に重なっていたのである。『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著参照



ハバナで沈没した米戦艦メイン

エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ

戦艦メイン号沈没　1898 年２月１５日、米国が裏で操作した沈没事件で、乗員士官、兵員３７４名、日本人を含む２６０名が死亡。原因不明であるが、結果、スペインを糾弾し、戦争に突入する口実を作りだし、米西戦争がはじまる。この戦争以後、スペインは南北アメリカと太平洋から影響が一掃され、代わりに米国が太平洋に新興の帝国として歴史に登場してくるのである。

秋山真之は米西戦争に観戦武官として参加　明治３１年、米国へ私費留学で軍事思想家であるアルフレッド・セイヤー・マハンに師事（「世界の諸処に植民地を獲得せよ。貿易を保護し外国に強圧を加え、諸処に海軍根拠地を獲得せよ」との思想家）し、秋山は米艦セグランサで、キューバのサンチーゴ港包囲作戦を武官観戦する機会を得た。

米艦隊は、狭い湾口に老朽船を沈めて「閉鎖作戦」（この閉鎖作戦を秋山は具（つぶさ）に観戦している）を開始したが、結局この作戦は失敗に終わる。

スペイン軍は湾内の艦隊をフィリピンに派兵するため、湾内を抜け出す強行突破を敢行したが、操船の錬度と船速（ノット）に優れる米国艦船に搭乗していた秋山真之は、

その攻撃の実観戦を体験したのである。又、スペイン艦艇の船底に貝殻の付着(スピードがおちる)を自らの眼で確認し、船舶の走行について実践学を学んだのである。

米国艦艇の造作に不燃化(鉄板装甲)、速射砲の完備の的確な観戦報告を日本へ送り、連合艦隊の作戦参謀本部への現場戦闘実践を覚醒させた。この時の秋山の報告書が後に、旅順港閉塞作戦の基になったと言われている。

余話・明治天皇とカラカウア・ハワイ国王極秘会談

明治１４年（1881）年３月、ハワイ国王（７代目）のカラカウワ王が世界一周旅の途上、横浜港に来航した。３月１１日、随員の米国人にも知らせずに、一人で極秘に明治天皇（当時２９歳）に会見を申し入れて来た。この会見の内容が「カラカウア王の会談」が『明治天皇紀』に残されている。

《「今次巡遊の主旨は、多年希望する所のアジア諸国の連盟を起さんとするに在り。欧州諸国はただ利己を以て主義と為し（しむける)、他国の不利、他人の困難を顧みることなし、而してその東洋諸国に対する政略に於いては、諸国能く（十分に）連合し能く共同（同じ目的）する、然るに東洋諸国は互に孤立して相援けず、又、欧州諸国に対する政略を有せず、今日東洋諸国がその権益を欧州諸国に占有される所以（理由）は一にこれにある、されば（それゆえ）東洋諸国の急務は、連合同盟して東洋の大局を維持し、以て欧州諸国に対峙するに在り、而して今やその時期に到来している。

・・・(中略）今次の旅行、清国、シャム、インド、ペルシャ等の君主にも面会して、つぶさに連盟の利害の得失（そんとく）を弁説（解説）にしたが、然れども、我がハワイは小さな島々にして人口も少なく、国際的な大同計画立案する力はない、しかるに（ところでハワイ王は）貴国は聞知（聞き及び）するにたがわず（違わず)、その進歩は実に驚いているところで、人民は多くして、その気質は勇敢であり、故にアジア諸国の連盟を呼びかければ、陛下が進んでこの盟主になられれば、予（ハワイ王）は陛下に臣下として大に励みます。・・・》　（『明治天皇紀』五・現代語訳少し入れ読みやすくした）

ハワイ王は明治天皇に対し、欧米列強国の侵略対しアジア諸国が団結する必要がある。そして、明治天皇にアジア諸国連盟の盟主になってほしいと訴えている。すなわち、日本の天皇を中心にアジアをまとめて頂ければ、ハワイ王家は下臣としてついて行きます、との話をしたのである。

この提案に明治天皇は、《欧亞（欧米とアジア）の大勢は実に貴説（ハワイ王）の如し、又、東洋諸国（スマトラ周辺まで）の連合に就きて（理由を表す）も所見を同じくする。・・・しかし、我が国の進歩も外見ばかりでなく、殊に（特別に）清国とは葛藤（いがみ合う）ことが多く、彼らは常に我が国の征略の意図を感じる。既に清国との和平をも全く顧し（顧みて思いめぐらす）、王の考えを遂行（やりとげる）することは更に難事業であり、尚、閣臣等に諮り、熟考（念を入れて考える）して答えるべし・・・》と回答している。

カラカウア・ハワイ王（1874－1891）

カイウラニ王女

更にカラカウア王は、日本人の移民を要請と、ハワイ王室と日本の皇室とを結び付けることを強く希望し、カイウラニ王女（５歳）と日本皇族・山階宮定麿王（後の東伏見宮依仁親王・当時１３歳）との婚約申し入れをしている。

翌明治１５年２月、明治政府はハワイに特使を派遣し「アジア諸国の連盟・盟主」となることをと、婚姻の申し出には丁重にお断りした。移民に付いての申し出は、明治１７年、９４６名を送り、更に後続移民が続き、２０世紀初頭には、ハワイ人口の４割を占めたのである。ハワイ王国の将来に於いては、白人による病気等によって、原住ハワイ人の激減したことにより、同種に近い日本人移民を増やし、ハワイ王国に白人社会を牽制の思惑があったと思われる。

この話が持ち上がったのは米国とのハワイ合併は直近のことで、もし、カラカウア王の申し出の如く、山階宮定麿王とハワイ王女が結ばれ、日本がハワイ王国を側面から支援する歴史を想像すれば、歴史のロマンを感じるお話しである。

カラカウア王はポリネシア帝国を建設する構想を抱いていて、１８８６年にポリネシア連合に計画資金３万ドルを確保し、サモアのマリエトア王とポリネシア連合が合意に至っていたが、翌年のクーデターでこの構想は消滅した。

第8章　日露戦争前夜にロシア圏への諜報活動した男たち

諜報者 1・石光真清（いしみつまきよ）の満州諜報活動　石光は明治元年（1868―1942）、熊本藩士に生まれる。少年時代を神風連や西南の役代の動乱の中に過ごし、陸軍幼年学校に入る。陸軍中尉（ちゅうい）で日清戦争に参加し台湾に遠征し、その時ロシア研究の必要を痛感して帰国する。ロシア帝国の南下政策に脅（おびや）かされる弱小国日本を憂い、明治３２年、特別任務を帯びてシベリアに渡る。

石光真清はロシア諜報活動に専念する動機を次のように語っている。《「日清両国の間で調印の済んだ平和条約によって、台湾と遼東半島が日本に割譲されたが、ロシア、ドイツ、フランスの共同干渉によって、日本は一週間後にやむなく遼東半島の放棄を宣言しなければならなかった。政府は国民に臥薪嘗胆（がしんしょうたん）を説いて軽挙を戒めたが、国民の悲憤は容易には治まらなかった。殊に、山野を血で染めた惨憺たる戦いの犠牲者を、自分の眼で見て来た私たちの悲憤は、一層治まり難いものであった。遺族の消息や、廃兵（はいへい）（日清戦争負傷傷害者）の姿に接するたびに、私の胸には次第に深い傷痕が刻まれていった。国と国の民族と民族との生きる戦い、子孫のための戦いの激しさを、私たちは血煙と絶叫のうちに、見せられ聞かされた。やがては、大ロシア帝国の侵略に脅かされて、再び国の運命を賭けて戦わねばならない時がくるであろう」と。

大津事件（露国皇帝襲撃事件）でロシア皇帝が寛大な態度を執った事により、日露の破綻（はたん）を喰い止められた。それは日露感情のくすぶりとなって、将来へ蟠（わだかま）りを残してしまう結果となった。大清国には勝つことはできても、大ロシア帝国に戦勝することは、国民も軍部も妙案など無く、只、戦慄を覚えるのみであった。ロシアは将来の有事を想定し、遼東半島を日本国の帰属から排除したのである。

時代状況から私（石光）はロシア研究の必要を感じ、当時軍界にあって、ロシア研究に手を付け始めた人は、先輩の村田惇（あつし）砲兵大佐（1854－1917・最終階級中将。仏・伊留学、露国通）、田中義一（後の大将）歩兵少佐の他、２、３の人達に過ぎなかった。熊本の漢学塾に通っていた８、９才の頃から士官学校まで、一向勉強に方には身の入らなかった私が、このように熱心になったのは、自分でも不思議に思う事であった。これも、戦場で体験した国際世界の厳しさに揉（も）まれたお蔭であろう。どんなことがあっても、この勉強だけは続けて、将来の日露関係の危機にお役に立とうと、深く胸中に誓ったのである。》（『城下の人』石光真清の手記より・中央文庫。『曠野の花』『望郷の歌』『誰のために』著がある）

現在のハバロフスク公園よりアムール川望む　　同公園ムラヴィヨフの像　　石光真清『曠野の花』

明治２０年代末期のハバロフスクは、浦潮(うらじお)—哈府(ハバロフ)間のウスリー鉄道の労働者、写真業、医師、洗濯女等約５千人の日本人が居た。又、明治１１年９月、榎本武揚が６６日間のシベリア横断の途次に立寄り、明治１９年７月には黒田清隆も立ち寄っている。ハバロフスク公園にはこの街を造ったムラヴィヨフ・アルスキー伯爵の立像がある。伯は極東ロシアの主要都市、ハバロフスクの街を創立した人物で、１８５８年清国とアイグン条約を締結している。

アムール河の流血を見る　　石光真清は明治３３年、ロシア軍人カザック（コザック）連隊付騎兵大尉ポポーフ宅方に寄食、２月１５日、ポポーフ大尉の人物記述に、

《「イワノウイッチ（大尉より命名石光のロシア名）君、僕は連隊長から選ばれて軍務知事グリーブスキー中将の使者を命ぜられてね、愛暉(あいぐん)(アムール中流アイグン・現黒河市)の鎮守使公署に行くのだが、一緒に行かないか。馬は用意させておいた」と、思いもよらぬ出掛ける楽しみを受けた。》　愛暉はブラゴヴェヒチェンスクの対岸下流の支那街である。石光は露・中国境見聞に喜びを表している。

現在のブラゴヴェシチェンスク（中国名海蘭泡）はシベリア南部のアムール州の州都となる。対岸までのその距離７５０ｍ、中国領黒河(こくか)となる。１８５６年にロシアの要塞都市として建設され、アムール川（黒竜江）の北部は清朝に属していたが、１８５８年のアイグン条約（瑷琿(あいぐん)条約）、１８６０年の北京条約により、ロシア領となりアムール・コサック軍の根拠地となった所である。

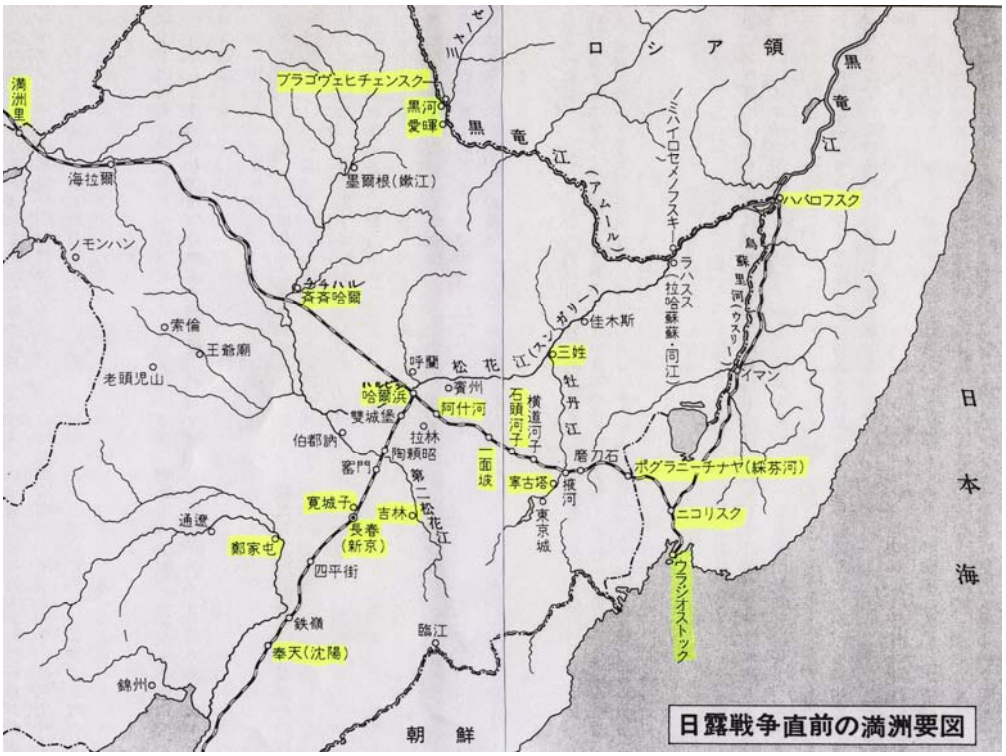
１９００年に義和団の乱徒がブラゴヴェシチェンスクに２週間占有したが、ロシア軍は在住の清国民間人３千人を虐殺して、死体や生存者をもアムール川に投げ込み、対岸の黒河鎮(こくがちん)、愛琿城を焼き払い、この街に居住していた難民全員を皆殺にした。

アイグン条約でアムール川の左岸の外満州は、ロシアに割譲されていたが、黒河の

対岸の「江東六十四屯」（６４箇所の村落）と呼ばれる地域に、多数の中国人居留民が居住していたが、義和団事件勃発時からブラゴヴェシチェンスクへ多くの難民が流入していた。１９００年７月１３日、この地域に露国コザック兵が、清国民間人３千人を排除するために起した殺戮事件である。更に８月２、３日にかけて義和団に対する報復として２千のロシア兵が、黒河鎮から渡河上陸し、清国人２万５千有余を虐殺してアムール川に投げ捨てた事件となる。

「アムール河の流血」『曠野の花』より

《・・・叫喚と銃声と呻き声と怒号と、とてもとても、あの地獄のような惨劇は口では言えない。二隊に分けたと言っても２千名近い人間を一束にして殺そうと云うのだ、・・・走る、拝む、潜り込む、・・・子供を抱いて逃れようとする母親が芋のように刺し殺される。子供が放り出されて踏み潰される。馬の蹄に顔を潰された少年や、火の付いたように泣き叫ぶ彼等が、銃尻で撲り殺される。・・・黒竜江に半殺し人間の筏が流れ去った後は、土の上の夥しい血の海の中に、靴や帽子や手提や細々としたものが、雑然と踏みにじられて散らばっていた。・・・》と惨劇状況述べている。



日露開戦前の満州図・『曠野の花』より

その続きに　《黒竜江岸が悉くロシア軍の蹂躙するところとなったのであるから、

逃げる方面は南方より外になかった。避難路は必然的にチチハル公路ということになり、・・・２万幾千人の避難民が家財を持って殺到した。・・・ロシア軍は城内に取残された市民を片端から虐殺したばかりか、勢いを駆って市民の避難路へ追撃攻撃を始めた。既に清軍の影も無く、武器一つ持たぬ彼ら避難家族の大群を目がけて射撃したから堪らない、その惨状はブラゴヴェシチェンスクや黒河鎮における虐殺に劣らなかった。・・・こうしてブラゴヴェシチェンスク対岸の清国の都市村落は悉く焼払われ、その住民は徹底的に殺された。その虐殺の目的は、ロシア国境の安全を保つために清国側河岸に街の建設を断念させるために、刃向うものは、今後、かくの如き惨禍を加えられるであろう事を思い知らせるためであったのだ。・・・・。》と石光はロシアコザック軍の暴虐の顛末を記述している。

このアムール川の悲劇を明治３４年、旧制第一高等学校の寮歌「アムール川の流血や」と歌われた歌詞に次の様にある。

１、アムール河の流血や　凍りて恨み結びけん
　　二十世紀の東洋は　怪雲空にはびこりつ
２、　コサック兵の剣戟や　怒りて光ちらしけん
　　二十世紀の東洋は　荒波海に立ちさわぐ
３、満清すでに力つき　末は魯稿も穿ち得で
　　仰ぐはひとり日東（日本）の　名もかんばしき秋津島（大和）（４、５、６は略）

馬賊に接近する　　明治３３年の頃、石光真清は紅鬍子、馬賊頭目の栄紀、増世策、と出合う。馬賊の掟情報は下記の如くとなっていた。

①機密を洩らした者は斬る。②命令に反抗した者は斬る。③敵に内通し者は斬る。④脱走を企てた者は斬る。⑤同志を欺き或るいわ侮辱した者は斬る。これが彼らの５カ条の誓いとなる。

頭目(かしら)の元には２百から２千名の配下を持ち、勢力範囲を協定して互に連携を取り合っている。北満州の地は、馬賊の保護がなければ、旅行も、大きな商売もできない僻地となっていた。この地域は腐敗堕落した清朝の軍兵力で治めることは出来ない地域なのである。石光は馬賊の情報網を使えば、ロシア軍の機密を探ることができると直感して接近して行く。

満州義勇軍(馬賊を集結)については、有名なのは政治結社・玄洋社・代表頭山満、

内田良平らは満洲馬賊を指揮して、ロシア軍の兵員・糧秣等の調査、鉄道破壊、電線破壊を馬賊に依って成し遂げようとするゲリラ活動の展開した地域となっていた。

馬賊の実情　「馬賊」（紅鬍子・赤鬍、赤顔）という言葉は日本側から生まれたたものらしい。華北地方で馬を駆使し、古くは野盗等を働いたことに起因しているらしいが、この地方での用語として、馬賊という名称は使われていないので、日本人の間で使われた名称の様である。遼・金・元・清に至る歴代王朝は、西北方面から旋風のように満州辺境に現れ襲ってくる韃靼人（モンゴル、テュルク、ツングース系）に怯え、奴等を紅鬍子・赤鬍、赤顔で襲ってきたので、これ等の侵略者をそう呼んだ。後には赤鬍でなくても、他村から襲来してくる盗賊類を鬍子と称し、彼等は、食糧、家財、婦女子までも強奪して男たちを虐殺して去って行く匪賊であった。

歴代王朝はこれ等に対して、何等防衛処置を軍事力で平定する策を執らないでいた。農民たちは、自らの力でこの赤い鬍の掠奪者たちと必死の戦いを繰返していた。北満の農村自治組織は異常な発展の歴史を遂げたのが、後の保衛団、連荘会という民間自衛組織へと発達して行く過程となっている。

農民としては、政府の役人や官兵などの官匪（悪い役人）よりも、遊撃隊（義勇団より特選されて組織訓練受けた攬把隊員・長は総攬把）に支払う金額で保護されるほうが信頼を置けたことによる。この郷村の遊撃隊を日本で言われる「馬賊」を指しているので、保衛団は旅行者の保護の他、現金、阿片、塩などの高級物資の輸送業務や、各郷村の縄張りに連絡を取りつけて、優秀な人材、優秀な武器を装備して護衛、高額の保障金を徴収し、馬賊の利用する時は、居住民らは馬賊に金銭を支払うのである。又、権勢のある馬賊に地域住民は勲章をも与えていた。

出陣をまえに武装した攬把とその部下

女馬賊・満州お菊

この時期でのロシアは東清鉄道もほぼ完成し、東清政策が着々と実現して日露国境

の満州馬賊に対する懐柔は、日露両国とも苦心したのである。日本軍はその頃シベリア鉄道の東満鉄道の沿線に破壊工作を秘密裡に始めていた。

後に『広野の花』などに見られるように、石光真清はウラジオストクで当時の花田仲之助少佐(注)の諜略軍人と出会っている。彼は軍の密令によって満州で特別工作のために、日本人や中国人を集めて、鉄道破壊や後方撹乱を目的として満州義軍なる別行動隊を編成していたのである。(『馬賊』渡辺龍策著・中央新書・『馬賊社会誌』同著・秀英書房)

ウラジオストク公園・浦潮本願寺跡

1850年ロシア海軍入港埠頭(浦塩港内)右奥に記念碑が見える

注・満州義勇軍　１９０４年、ロシア軍の後方撹乱、兵站破壊を任務し満州の馬賊を集めて創設された特別任務隊。注・頭に「花大人(ホアターレン)」は花田仲之助で、ウラジオストクの西本願寺僧に化け諜報活動に従事していた。

「秘密計画」『曠野の花』より　《・・・当時ウラジオストックには、町田経宇(けいう)少佐（1885－1939・陸軍大将)、武藤信義(のぶよし)大尉（1868－1933・元帥）を初めとして、郵船会社支店長手見機一氏（1848－1903・外交官)、東亜同文書院創立者杜根津一(はじめ)氏（1860－1927・少佐)、商務官事務所の二ツ橋領事のほかに、志士団員を引き連れて来た内田良平（1874－1937・玄洋社・アジア主義者）がいて、何れもロシア軍の東亜征服計画の推移を見張っていて、思えば当時の民間人は本当に国家意識が強いものであった。日清戦争の三国干渉に憤激した志ある人々は、軟弱な政府を頼むに足らずと、悲壮な気持を抱いて続々と大陸へ渡り、各自思う処に愛国の情熱を傾けていたのである。ロシア軍に蹂躙(じゅうりん)された満州の市場に、日本商品の販路を獲得しようとする商人や実業家も、政府機関に援助を求めるわけでもなく、単身ウラジオストックに乗り込み、ロシア軍の動静を探りつつ、満州の大地へ深く入り込んだ。私は(石光)、町田少佐、武藤大尉と協議した結果、結論として得たところは次のようなものであった。

① ロシア軍の満州占拠は既に経営時代に移って本格化していた。情報蒐集には、単独偵察では成果を挙げられない。諜報網を満州と黒竜江沿岸のロシア領に入り、これらの統率の中心をハルビンに置くこと。

② 従来私が行って来た旅行者の形式から居住者の形式に移らねばならない。その為に商館をハルビンに建設し、各地に支店を設置する。しかもその商館はロシア軍から疑われない程度に本格的な商売をするものでなければならない。

③ 本格的商館を建設するからには、その経営は万一を考え軍籍に在る者は不適格である。軍の事情に精通し、しかも商人たり得る者として参謀本部に意見を具申した。

《「商売はなにをやるか」だ、「ロシア軍が重宝して可愛がってくれるという商売でなければね」といろいろ考えたあげく、柴五郎氏(北京城籠城指揮)の写真屋を思い出した。柴五郎中佐が日清戦争前の明治２３年、清国に派遣されて諜報任務に就いた時、福建省の福州で従弟に写真業の手代となって身を隠していたことがある。「写真屋だ、写真屋ならばシベリアでも日本人の特技が認められている。しかもロシア人は大の写真好きだ」・・・》という結論になったのである。

石光はハルビンに洗濯屋をも経営していた。当時、ロシア当局は、外国人には絶対に土地の貸与を許さなかった。苦労の末、開店したハルビンの菊池（菊池正三の仮名）写真館は、写真好きのロシア人に贔屓にしてもらい、大繁盛となった。館は１０人の大所帯に、そして浪人組も寄食し、その中に二葉亭四迷（谷川四迷）もいた。石光真清は写真館の仕事の裏側では諜報活動を盛んに続けて行くのである。

諜報者2・明石元次郎のロシア周辺国の後方攪乱工作　明治３７年２月４日午前中、御前会議が開かれ、明治天皇をはじめ、枢密院議長伊藤博文、枢密顧問山縣有朋元帥、参議総長大山巌元帥、枢密院顧問松方正義、枢密院顧問井上馨、首相桂太郎大将、海相山本権兵衛中将、蔵相曽禰荒助、外相小村寿太郎、陸相寺内正毅中将が集まり会議の結果、対露交渉中止と国交断絶し、開戦を決定した。

伊藤は御前会議終了後直ちに、金子堅太郎（1853－1942・司法大臣等、大日本帝国拳法起草に参加）を米国に派遣し、高橋是清（日銀副総裁）を戦時公債募集のため米英に派遣、伊藤の女婿の末松謙澄（内務大臣等・外交官）をロンドン・パリへ派遣、欧米の世論工作（日露開戦は正義の戦いと「黄禍論」の説得の喧伝）に、２月２４日のアメリカ行の客船に金子と高橋を乗船させ、政府は早期に平和斡旋計画をぬかりなく手を打って

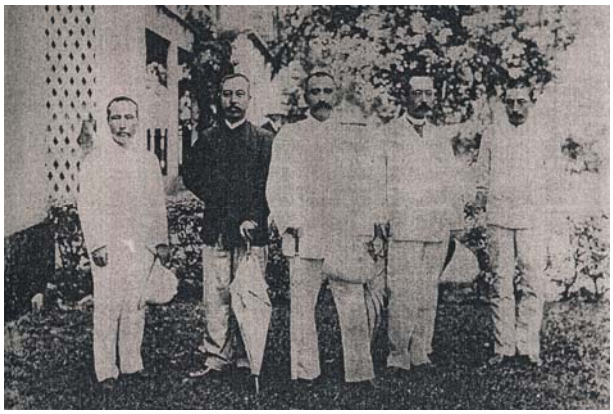
いる。この伊藤の戦略指示は、後世の我々から見れば、本当に凄い布石を打ったものと思わずにはいられない。

児玉総参謀長は連日参謀本部に泊り込み作戦を練り、ロシアとの戦いが長期になれば勝ち目は無い、先手必勝(１、２年内を想定)とし、短期決戦策を立案して、早期に講和に持ち込む作戦計画を練っていたのである。ロシア大陸は無限なので、露都まで攻め入ることは不可能である。それならばロシアの露都に内乱・攪乱を起させ、内側から崩壊させる。そして、シベリア鉄道を破壊して大動脈を止め、馬賊を糾合して満州義軍を組織しロシア軍にゲリラ攻撃を展開、あらゆる対露情報を収集する。優秀な諜報活動を展開、ロシア後方攪乱計画に抜擢されたのが、明石元二郎少佐であった。

「明石工作」･ロシア国内の内乱を扇動させる　明石元次郎の履歴・明治１０年、陸軍幼年学校へ入学、フランス語はトップ級。明治２０年、２４歳で陸軍大学へ入学し、メッケル少佐（ウィルヘルム・ヤコブ・メッケル 1885 年来日・フランス式兵制からドイツ式兵制を導入）から戦術論を学ぶ。同２４年２８歳の時、参謀本部第二部員（歩兵大尉）となり、茲で川上操六次長と出会う。明治２７年、ドイツ留学。同２９年、参謀本部第三局員となり、同年１０月、川上参謀次長と共に台湾に出向、仏領インドシナへ５ヶ月間視察調査団に参加した。メンバーは川上参謀次長、伊地知幸介第二部長(最終階級陸軍中将)、村田惇副官(最終階級陸軍中将)、福島中佐（シベリア単騎横断者)、川上参謀が明石を高く評価していたことが分かる。明治３４年１月、フランス公使館付武官としてパリ赴任、フランス語と独学を学び、翌年年８月、ロシア公使館付武官としてペテルブルグに赴任。明石はロシア語を再学し、諜報活動に従事、日露戦争の直前２月８日、「至急ムストックホルムへ行き、ここで不平党（反ロシア運動の革命家）達を煽動、同時にポーランド人を利用して武力抗争を起せ」との極秘命令を受けていた。

「明石工作」資金は、当時の金で百万円（現在の金で４００億以上・当時の国家予算額は２億３千万円)。陸軍は諜報活動に桁外れの金額を、工作資金を出したのである。明治３６年(1903)明石大佐(当時)の東欧・ロシアの各地で諜報活動が始まる。この極秘作戦の全容は、日露戦争終結後、明治３８年に参謀総長宛てに提出した「復命書」に、詳細な記録、『落花流水』(落ちる花と流れる水)と題されたこの復命書が残る。日露戦争の最重要史料となって陸軍内部と、トップ級の参謀の士官たちの教育用に長く参謀本部で利用されていた。後、昭和３７年、明石復命書『落花流水』原本の写しを、元陸

軍少佐明石泰二郎氏（元二郎の甥）から防衛庁戦史室に寄託となる。この写しは国会図書館憲政資料室の「明石元二郎文書」防衛庁防衛研究所戦史図書館に保存されているものがそれである。



仏領インドシナ視察調査団・左より明石元二郎、伊地知幸介、川上操六、村田惇、福島安正、明治３１年２月、川上の命令で米西戦争のアギナルド将軍の戦闘を見分する。　右・明石元二郎

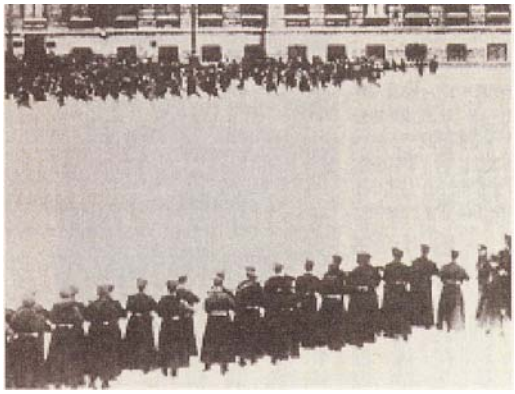
明石はロシア国内や周辺国で反政府運動に資金援助をして、テロ、暴動、革命へ誘発する政治活動情勢の隙に扇動した。当時ロシア圏に隷属と圧政に苦しめられていたフィンランドやポーランドの独立運動家たちに接触して、ロシアに反抗するフィンランド憲法党カストレンと接触、フィンランド革命党の党首カストレンに、シリヤクスを紹介され、２人とは盟友関係となり、各党派に資金提供を約束した。全ヨーロッパの革命運動家に人脈を持つシリヤスクは、明石に代わって露都周辺国を走り回りロシア反政府活動に奔走したのである。

３７年３月、ポーランド社会党執行委員会から、林董（ただす）駐英公使にポーランド人による反ロシア工作の提案があり、極東戦線へ送るロシア増援兵のポーランド青年の徴兵や動員に、反対する暴動をポーランド各地で頻発（ひんぱつ）させ、その鎮圧のためロシア軍が、約３０万人が国内に止まることに成功している。７月には、革命家たちを弾圧していたロシア内務大臣プレーヴェが、馬車ごとダイナマイトによる暗殺に成功した。

明石は、ロシア内外の革命グループとのネットワーク作りを充実させ、７月末、シリヤスクと共にスイスに行き、ロシア社会民主党のレーニン、プレハーノフ、ユダヤ系の革命組織、アルメニアの民族運動家たちと工作し、シリヤスクの助言によりロシア革命派を大同団結させて、反ロシア闘争を大同団結させることに成功した。

明治３８年１月９日、サンクトペテルブルグで、ロシア正教会祭司のガボン神父の

率いる６万人もの請願行進がロシア皇帝宮に向かった時、政府は軍の発砲を許可し、千人からの流血大惨事「血の日曜日事件」が起きた経緯となる。



血の日曜日事件

露都流血事件

ロシア国内では皇帝打倒(反ツアー)革命の火が燃え上がり、５月には日本海戦でバルチック艦隊が壊滅し、６月にはロシア海軍最大の戦艦「ポチョムキン」(1905 年戦艦ポチョムキンの反乱)で水兵の反乱が起き、ロシアの革命気運は高まり、皇帝の親衛隊に火がついたのである。明石は同月武器弾薬の購入を始め、その件を現代訳・前坂俊之著・『落花流水』から抜粋する。

《社会革命党から逮捕者が続出し、不平諸党の気勢は一時衰えが、この劣勢をいかに挽回(ばんかい)するか、関係者が集まって協議せざるを得なくなり、革命指導者のチャイコヴスキー、シリヤクスク、ガボン、ソースキースがその調整に奔走し、その結果、革命社会党を中心に諸党らは、これに従って武装蜂起に立ち上がった。

同月、ドイツの地方でシリヤクスクは拳銃及びムマウセル騎兵銃の購入に着手、スイスからの購入はデカノージ、チェケソーフらがヴエテルリー銃を手配完了、チャイコヴスキーやガボンらはロシア国内でその手配に動き、その兵器が入手したことを知らせ、諸派の劣勢挽回につとめた。

２隻の小型蒸気船「シスネ号」「セシール号」を購入し、目的はバルト海沿岸に大量の兵器を陸揚げするためで、スイスで契約した銃器はバルト海方面用として小銃１万６千挺と弾丸約３百万発、黒海方面に送る分は小銃８千５百挺、弾丸百２０万発であった。これらの大量の武器は、小型の蒸気船だけでは輸送できず、そのため約７００トンの大型の輸送船ジョン・グラフトン号を購入した。

この船のチャーターは誰に頼むか、課題は多かったが、仲介者は日本の貿易商社、

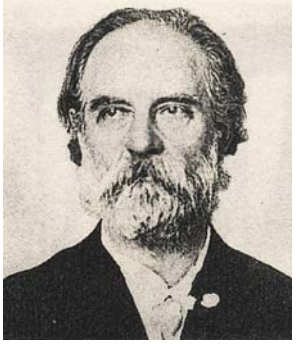
高田商会(明治大正期は三井物産と並ぶ)である。高田商会のロンドン支店長・柳田巳之吉と、相談役のイギリス人スコットによる知恵と行動力を借りた。

又、８両の貨物に積んだ武器は、スイスからオランダへ搬入し、ロンドンで迂回して高田商会の取引先の「フラム号」で外洋へ積み出す手順となっていた。

話は紆余曲折で続くので省略するが、「ジョン・グラフトン号」に積載して出港した船はバルト海を北上し、ロシアのヴィンドゥで武器の一部を降し、トルネオ・ヤコブスタットでも陸揚げしたが、ラタン地方で座礁して残された武器は没収されてしまう。

こうした反乱分子を影で支えた日本の諜報活動を知ったロシア政府中枢は、大きな衝撃を受けた。この諜報活動に恐れを抱いた宮廷議会は、９月５日、ポーツマス講和条約の締結の要因の一つともされている。

日露講和後は、明石には資金は打ち切られ、同月１１日に参謀本部から帰国命令が出る。山縣有朋の決断で支給され工作資金百万円の内、明石は２７万円を使わずに持ち帰ったという。なんとも痛快な話ではないか。明石は身のきれいな人物と評される著書は多くあり、ただ諜報活動の内容については闇となっている。当時の百万円は、見方の幅はあるが、物価指数では７万倍となるらしい。



コンニ・シリヤクス　　Ｎ・Ｖ・チャイコフスキー　ゲオルギー・ガボン　ゲオルギー・デカノージ

ポーツマス講和条約締結の翌日、９月６日の夜、ジョン・グラフトン号は、ヤーコンブスタド市街地の北側に位置するラルスメという島の沖に到着した。迎えの船に１０００挺せどのライフルと数百挺の拳銃と弾丸を積み替えると、７日朝、オーランド諸島（スウェーデンとフィンランドの間）へ向けて出発した。ところが詳しい海図を持っていなかったため、オルシェール島という小島の近くで座礁してしまう。ロシア官憲に発見され、翌８日、ジョン・グラフトン号はニュランデルによって爆破された。フィンランド人クルーたちは国内に潜入し、ラトヴィア人はヨットでスウエーデンに逃れた。・・・(略)》とある。　　（『明石工作』稲葉千晴著より）

資金工作の行方　『正論』平成１６年１２月臨時号「日本海海戦と明治人の気迫」・「明石元二郎なき平成日本への提言」佐々淳行著をみる。

《日本の資金が参加諸党に渡り、明石やシリフスクは武装蜂起のための武器調達に乗り出す。しかし、この武器蜂起は、ペテルブルグのエスエル党員がスパイの密告で大量に逮捕されて一時壊滅状態に陥り、武器調達も難航したことで当初計画の６月には間に合わなかった。８月に日露講和会議の開催が決まると、明石は講和交渉を日本有利に進めるための切り札として武装蜂起を急いだが、用意した小銃約２万５千丁と弾丸４百２０万発の大半の輸送に失敗して、８月末のポーツマス講和条約に間に合わずに終ってしまう。明石や日本の資金がどれだけ関わっていたか、不明であり賛否両論はあるが、日本の資金に支えられた反帝政党派の活動が革命機運を煽り、日本海海戦でのバルチック艦隊壊滅と共にこの不安定な世情が、ロシアを講和へと向かわせる要因となったことは間違いない。・・・参謀次長の長岡外史は「一人で一個師団どころではない働きをした」と明石を評価しているが、まさにその通りであろう》と述べている。

シリヤクスについて、　彼は元ジャーナリストで、フィンランドのスウェデン語新聞の特派員として米国に渡り、１８９４年から２年間あまり日本に滞在していたことがある。その間「桃太郎」をスウエーデン語に翻訳し、『日本研究と概観』という著書も出している。この人物に出会えたことは、明石と日本にとって幸運なことであった。

右の写真・ヤーコブスタドにあるジョン・グラフトン号の記念、

ヤーコブスタド沖オルシェール島、フィンランド側にある。（『明石幸作』稲葉千晴著より）

日露戦争に勇気づけられたポーランド、フィンランド　1772 年にプロシア、オーストリア、ロシアによる第１回のポーランドが分割され、国土４分の一を失い、1893 年には３分の一を失い、1896 年に国土の全てを失った。ポーランド祖国の回復の運動が進められていた矢先、丁度この時期に日露戦争が勃発し、これを契機として彼らの運動は勇気づけられ、ポーランドはロシアと西欧州に位置している関係上、ロシアの革命分子たちと、海外連絡分子の中継地となっていた。そのため彼等は武力弾圧に反露気運が高

まってゆくのである。当時ポーランド人程、日本の勝利を喜んだ国民はいないと云う。

フィンランド人もまたロシアの敗北を切望し、ロシアの連戦連敗が伝わると、歓喜と勇気百倍となった。フィンランド人は、日露戦争のロシアに及ぼす影響を一番よく利用して戦った。森林を利用したゲリラ作戦で、銃を担いでロシア軍に対抗し、弱点に乗じて頑強に抵抗したのでる。日露戦争に於ける日本の勝利はフィンランド人に多大な影響を与えたのである。フィンランドに於いて、奉天の戦いの敵将クロパトキン軍を打った第一軍司令官黒木大将の名にちなんで、「クロキカラー」と名づけた商品が売り出されたと云う。

その他、中国の孫文、ベトナムのファン・ボイ・チャウ、インド、トルコ等のアジアの日本の日露の勝利は、列強の圧迫を跳ね返す勇気となったのである。

『レーニン全集』8巻・「旅順の陥落」の記述　この記事は明治３８年１月初め、レーニンが２０３高地・旅順は陥落に基づいて、ボルシェビキの機関紙『フペリョード』第二号に著し、1905 年 1 月 14 日に記載を抜粋する。

《「旅順は降伏した。この事件は、現代史上の最も大きな事件の一つである。昨日電報で文明世界の隅々に伝えられたこの数語は、圧倒的な印象、巨大で恐ろしい破局、言葉では伝えがたい不幸の印象、を呼び起こす。巨大な一帝国の精神的力が地に落ちる。・・・旅順の陥落は既に早くから予見されていたし、人々は既に早くから口さきで誤魔化し、用意の文句で自分を慰めてきた。

この敗北は、あれほど神秘に包まれた、見たところ少年のように若い、きのう文明へ呼びだされたばかりの新世界によって、くわえられたのである」。ゆるぎない強力なツァーリ（皇帝）権力の威信と、切り離し得ないように結びついていた。この破局、全世界の資本主義的発展が異状に促進された。ブルジョアジーは、このような促進がプロレタリアートの社会革命を促進するものであることを非常によく、余りにもよく知っており、苦い経験によって知っているからである。・・・。

アジアの諸民族を搾取するという、長い年月によって神聖化された古来の権利を守った。日本が旅順を取戻したことは、反動的なヨーロッパ全体に加えられた打撃である。ロシアは６年の間旅順を領有し、幾億、幾十億ルーブリを費やして、戦略的な鉄道を敷き、港をつくり、新しい都市を建設し、要塞を強化した。この要塞は、ロシアに買収され、ロシアに奴隷的につかえているヨーロッパの多数の新聞がみな、難攻不

落だとして褒め称えたものである。

ちっぽけな、これまで誰からも軽蔑されていた日本が、８ヶ月でこの要塞を占領したのである。この軍事的打撃は取りかえしのつかないものである。

初めの内は日本の艦隊にまさるとも決して劣らなかったロシアの太平洋艦隊は、決定的に壊滅させられた。・・・１万人もの優秀な海兵隊を失ったこと、一つの陸上軍をそっくり失ったことである。日本軍は、遼東半島全体を完全に占領し、朝鮮、中国、満州に圧力を加えるための測りしれない重要性をもつ拠点を獲得しょうとしている。この重砲力が沙河に到着すると、日本軍はロシア軍主力に対して圧倒的に優勢となるであろう。完全に制海権をにぎり、ロシアの一軍を全滅させた今では、日本軍はロシア軍よりも二倍も大きな増援軍を送るであろう。日本軍の優秀な砲兵力の全量は、要塞戦に使われていたにも係らず、日本軍は今までロシアの将軍たちを続けざまに撃ち破ってきた。

旅順の陥落は、ツァーリズム（絶対君主制）の諸々の罪悪に最も大きな歴史的総決算の一つをつけるものである。農民大衆の蒙昧（もうまい）、無知、無学、萎縮は近代技術が要求すると同様の、高い質の人的材料を必然的に要求する近代戦において、進歩的な一国民とぶつかった時、恐ろしい程あからさまに現れた。・・・。（略）

小説『坂の上の雲』に明治３７年、明石はジュネーブにあったレーニンの自宅で会談し、レーニンが率いる社会主義運動に日本政府が資金援助することを申し出たとあるが、２人の関係はロシア側の資料では確認されていない。この話は日本の巷には流れているが、レーニンとの会談の有無ついては判らないと云うが真相らしい。

レーニンの有名な演説・ロシア革命前夜

第9章　日露戦争の概観と乃木神話

日露開戦・序盤

明治３７年（1904）２月４日、日本は御前会議を開き、ロシアとの交渉を打ち切る事を決議した。２月６日、栗野慎一郎駐露公使がロシアへ国交断絶を通告し、外務大臣小村寿太郎から栗野公使(駐露公使)に伝えられ、栗野公使からロシア外相ラムスドルフに伝達された。同日、小村外務大臣はローゼン駐日露国公使を外務省に呼び、外交関係断絶を通告した。

国交断絶の事実は国民には伏せられていたが、２月８日夜、小村外務大臣が各新聞代表を外務省に呼び、交渉決裂の経緯を知らせ、翌９日の新聞にその記事が掲載されて、日露開戦を国民が知る処となる。

明治３７年２月９日午前０時２８分、日本海軍は、ロシア海軍旅順艦隊（第一太平洋艦隊）に攻撃を開始、正午過ぎ指令長官、東郷平八郎率いる連合艦隊主力艦は、旅順港外のロシア艦隊に攻撃を開始し、ロシア側も艦隊及び旅順要塞から砲撃で応戦、日露の双方に艦船に被害を出した。ロシア巡洋艦アスコリドは、後部艦橋上部を切断、砲門破損を受けた。

栗野慎一郎駐露公使

ウラジーミル・ラムスドルフ外相

ローゼン駐日露国公使・駐米大使

明治37年2月10日、日露戦争開戦　両国の宣戦布告以前に、即ち２月９日０時に日本側より戦闘行為は始まっていた。この日本の宣戦布告前の攻撃は、背信・違法行為とロシア側から騒がれたが、日本の旅順奇襲は合法的行為で、ロシアの軍事的な怠慢に乗じての奇襲に過ぎず、ロシア側の無防備であって日本側の背信行為ではない。

「開戦に関する条約」ができたのは、１９０７年１０月１８日、ハーグ平和会議で「宣戦布告に関する条約」が署名された。日本は１９１１年１１月６日、批准となる経緯となる。この国際条約での宣戦布告の効力は、相手国が受理した時点で発生する

と定められ、しかし当時は殆んど尊重されず、第一次世界大戦後に国際連盟が改めて確定となっているのである。旅順奇襲を不法とするロシア政府の国際的な宣伝をそのまま鵜呑みみにした結果、生じたものである。イギリスの『タイムス』紙が論じたように、「今回の開戦の主原因はロシアが清国との満州撤兵条約に違反して、不法な満州占領を継続していることに原因があって、そのロシアがこのような主張をできる立場にはない」とロシアの主張は国際的に一蹴されたのである。

そして、早くも翌々日の１０日、イギリスの新聞『タイムス』は旅順のロシア当局の発表として「日本軍の攻撃によって２隻の戦艦レトヴィザンとツェザレヴィチ、巡洋艦バルラダも損傷した」と報じた。同日アメリカの新聞『ニューヨーク・タイムス』も「日本の優位が非常に増大したのは明白」であると報じている。一方、ロシア同盟国フランスの新聞『ル・タン』は同日の紙面で、日本軍による宣戦布告前の攻撃を批判し、「戦争を望んだのは日本」だと断じた。当時の新聞は、自国とって有利な報道に密接に結びついていた。

主な戦闘場面を観る

2月24日　ロシア海軍港旅順口に日本軍は廃船を沈めて、ロシア軍艦の出入りを阻止する作戦に出た。（米西戦争で秋山真之が見た作戦、７章で述べた）この戦いを「第１次旅順港口閉塞（へいそく）作戦」と呼ばれる。しかし、ロシア軍の反撃により、日本軍の船は旅順港に入る前に次々沈められ、作戦は失敗に終る。

旅順口に沈められた閉塞船（『地図で知る日露戦争』武揚堂より）

広瀬武夫中佐

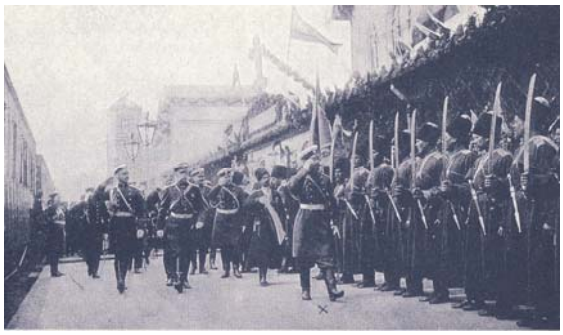
3月27日　「第２次旅順港口閉塞作戦」を敢行したが、「軍神」とされた海軍少佐広瀬武夫他、多数の犠牲を出し失敗に終り、作戦参謀の「閉塞ノ成否ニ拘（かかわ）ラズ、一面ニハ極力旅順口ヲ封鎖スルト共ニ、一面ニハ陸軍ト共同シ、以テ遼東方面ニ於ケル海陸ノ敵ヲ殲滅セントスル」との方針は変わらず、３度目の閉塞作戦が決行された。

4月30日　「鴨緑江（おうりょくこう）の戦い」（現中朝国境）日本第１軍は、２月から４月にかけて、朝鮮半島を北上して、４月末には韓国と清国との国境にあたる鴨緑江を守備するロシア軍と戦闘状態に突入、日露に於ける大規模な陸上戦が始まる。

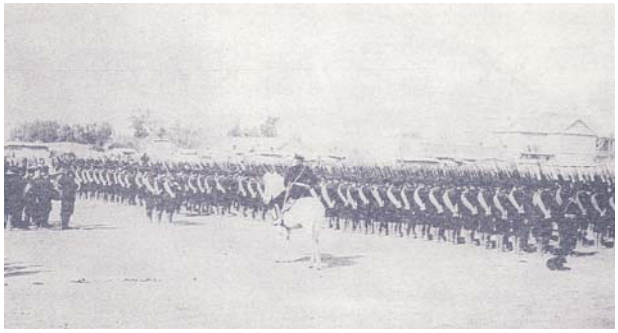
開戦直後２月１２日、日本は朝鮮半島中部の仁川（ジンセン）（インチョン）から西南約３０ｋｍ離れた港町に上陸し、その軍事行動による、「日韓議定書」（日本・朝鮮との協約・軍事上必要な土地を日本が収用することを認めさせた）の調印を強制し、これより先満州を目指しロシア軍はそれを阻止する鴨緑江沿いに陣地を作り待ち構えていたが、４月２９日から５月６日の「鴨緑江の戦い」で、第１軍４万余人、ロシア満州軍東部兵団３万余人と交戦し、日本軍はロシア軍の陣地を突破して鴨緑江を渡河に成功した。この戦いで、日本の軍事力の記事が『タイムス』掲載され、欧米に日本の力が評価されて軍費公債募集(第１１章高橋是清参照)が達成される勢いとなった。「鴨緑江の戦い」後、日本軍第１軍は北上しロシア軍の拠点遼陽（りょうよう）(遼寧省)に迫って行く。

5月3日　「第３次旅順口閉塞作戦」　第３次閉塞隊が旅順湾口に突入するが失敗に終る。『タイムス』紙は「第３回の閉塞作戦」に於ける日本海軍の勇猛さを伝えている。

5月25日「南山の戦い」　緒戦からの日本軍は、満州のロシア軍を南から追い詰めて叩く作戦構想であったが、５月５日、遼東半島西側に上陸を始めた第２軍は、２５日に金州城を占領し、翌２６日、早朝より行われた南山攻撃では、巾５ｋｍの狭い丘に立て籠もるロシア軍の塹壕陣地を攻めあぐねた。３０日、日本軍は４０００人の死傷者を出し漸（ようや）く金州城と南山・大連を占領に至る。この状況下に旅順要塞とロシア本国との電信は切断され、日本軍の作戦は予定通り進行し、南山は陥落したが、塹壕陣地を攻撃する戦法は甚大な日本軍の死傷者を出す。この事実を日本陸軍参謀本部は見逃し、以後、第１次世界大戦前の「塹壕戦」を１０年先取りした戦いとなった。



５月４日コザック兵第１ボォルガ連隊を閲兵するニコライ皇帝



奉天に於けるロシア軍シベリア狙撃隊

6月15日「得利寺の戦い」　旅順に籠もっていたロシア軍を援護する為に得利寺陣地を構築するシベリア第１軍団と、日本陸軍第２軍の間で激突が起きた。日本軍が金州・南山を占領したことにより、ロシア主力軍は、旅順要塞の二個師団・ロシア太平洋艦隊と切り離された。これと合流するスタケリベルク中将率いるシベリア第１軍団が南下、得利寺付近に陣地構築を始め、大本営から敵の陣地構築が出来上がる前に、攻撃命令が出た。日本軍３万３千とロシア軍４万が衝突、決着は容易につかず、日本側の死傷者１１６３名を出し、ロシア側２７００名を出し、捕虜４００名となる。日本第２軍は遼東半島を北上し、朝鮮半島から北上した第１軍と、新たに編成された第４軍と遼陽に向けて進撃した。

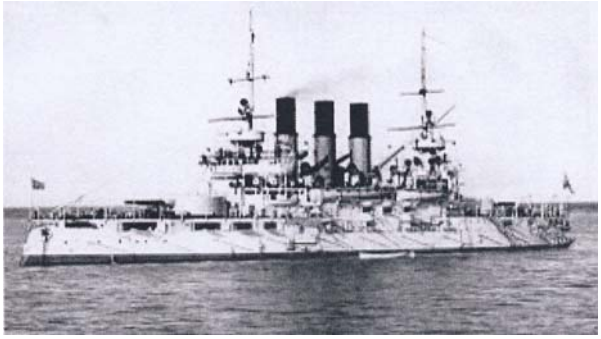
8月10日「黄海海戦」・8月14蔚山沖海戦

連合艦隊は開戦以来、旅順口に８回の攻撃と、３回にわたる閉塞作戦を実行したが、ロシア旅順艦隊は依然として旅順港に戦力を保持していた。日本側はバルチック艦隊と旅順艦隊と合流することを恐れ、陸海軍共同で旅順要塞に攻略計画を進めていた。７月末には第３軍は旅順要塞に進軍、８月７日、要塞全面の大狐山と小狐山に砲撃開始、これに呼応し同日、海軍陸戦重砲隊からも旅順市街へ射撃が開始された。

９日にはロシア軍艦レトヴィザン(12700 屯・全長 117、85m)に砲弾を命中、商船３千屯を撃沈、旅順艦隊はウラジオストクへ脱出を模索、報告を受けた東郷平八郎は、外洋へと旅順艦隊を誘導した。旅順艦隊は戦闘を避け、南東へ逃走、２時間後第１戦隊は旅順艦隊に攻撃を開始（２回目)、午後６時４０分頃、旗艦ツエザレウィチは舵不能となり、味方艦に突入し、旅順艦隊は混乱に陥った。旅順艦隊は戦艦５隻と巡洋艦１隻は旅順港に帰還し、その他の艦船は膠州湾、芝罘、上海、サイゴン等に敗走したのである。一方、黄海海戦の報告を受けた上村彦之丞中将率いる第２艦隊は、旅順よりウラジオストクに逃走する旅順艦隊を待ち伏せし、１４日午前５時、第２艦隊第２戦隊は蔚山沖において「蔚山沖海戦」始まる。午前８時２２分、戦艦リューリク艦を残して北方へ逃走、午前１０時、旗艦出雲の砲弾欠乏により蔚山沖海戦は幕を閉じた。

8月19日　中盤 「第1次旅順総攻撃」　旅順港のロシア軍要塞は、１９０４年２月から５月にかけての海戦を経ても、旅順艦隊は撃滅できなかった。やがて陸軍に旅順攻略の命令が出て、乃木希典将軍率いる３軍は６月に遼東半島に上陸し、ロシア軍は旅順攻囲作戦展開して攻撃に備えた。

旅順攻撃の策略は、「作戦上なるべく速やかに旅順を攻略する計画を要す」とされ、バルチック艦隊が旅順口に入る前に、完了しなければならない、との海軍側の強い要望であった。参加兵力５万７百余人中、８月１９日から２４日の間、二竜山と東鶏山間方面総攻撃を行った。この間日本側の死傷者１万５千８百余の損害を出し、この攻撃は兵力不足、銃器準備不足、敵の情報と状況が判らないままに第１次旅順総攻撃を開始したが失敗に終った。第３軍の行動は、旅順攻略後、満洲軍主力部隊と合流計画となっていたが、第１次の攻撃失敗は日本陸軍の遼陽・奉天の戦場が、ロシア軍と対峙する形ちとなり、陸戦に大きく影響が出てしまったのである。



ロシア軍艦レトヴィザン、後日本海軍戦艦「肥前」となる

黄海海戦（写真財団法人三笠保存会所蔵）

8月28日「遼陽会戦」　北上を続ける日本軍は、第１軍・第２軍・第４軍が遼陽目指し、遼陽は交通の要、ロシア軍もこの地で陣地構築して日本軍を待構えていた。日本軍兵力１３万人、ロシア軍２２万人が対峙し、８月２６日、右翼の日本軍第１軍が攻撃開始した。第２軍、第４軍は遼陽の南側のロシア軍陣地を攻撃したが、「首山堡」（148m高地）からロシア軍反撃され、大きな損害を出した。

首山堡

遼陽南東の高地から砲撃する第１軍独立野戦砲兵

８月３１日、第１軍は、遼陽付近の太子河を渡河し、ロシア軍の奉天への交通路を遮断した。これを見たロシア軍も太子河を渡河し、遼陽の東北に移動してその動きに第１軍は遼陽東北方の高地、「饅頭山」を確保、これによって露軍はシベリア鉄道の遮断を恐れ司令官クロパトキンは北方へ退却し、９月４日、一斉に奉天方面に撤退した。

これに対し日本軍は、将兵の損害・弾薬の欠乏のため、ロシア軍の追撃を中止した。日本軍死傷者２万２千、ロシア軍の死傷者は２万５千となり、当初の目標「ロシア軍の殲滅」であったが、この戦い後、膠着状態に陥ったのである。

10月10日「沙河会戦」　遼陽を占領した日本軍は、兵員・物資の補給に苦しみながら、ロシア軍は態勢を立て直して反撃に転じ、１０月４日、ロシア軍は奉天から大兵力を南下させた。意表を突かれた満洲軍総司令部は、ロシア軍を迎え撃つか、撃って出るか、意見が分かれ１０月８日夜半、ロシア軍の攻撃が始まり、「沙河会戦」（遼寧省瀋陽）が始まる。

塹壕の日本軍　（ウイキペディアより）

軍使を護衛するロシア軍コザック騎兵　防衛研究所所蔵

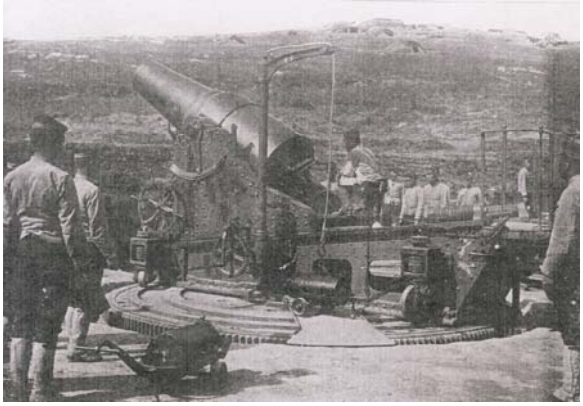
各地での激戦が展開され、１０月１２日、第４軍が三塊石山のロシア軍に夜襲をかけ、同陣地を占領、両軍の均衡が崩れる。後退するロシア軍に、満洲司令部は１５日、第４軍を中心に沙河河畔の丘陵、万宝山を占領したが、ロシア軍は翌１６日に反撃に転じ万宝山を奪回された。

１０月１８日、満洲総司令部は、沙河南岸に陣地を築いて防衛体制を固めることを決定する。同月旅順総攻撃の日本軍は兵員補充と弾薬の補給する余裕がなく、ロシア軍も留まり、両軍は沙河を挟んで、翌年春まで対峙となる。沙河会戦に於いて日本軍 12 万 800 人、戦死者 4099 人、戦傷者 16398 人、ロシア軍 22 万 1600 人、戦死者 5084 人、戦傷者 30394 人・行方不明者 5868 人となっていた。

10月26日「第2次旅順総攻撃」　明治３７年１０月２６日、第２次旅順総攻撃開始、攻撃目標は、松樹山砲台から東鶏冠山砲台の間にあるロシア軍砲台（旅順口の艦船を攻撃・地図 118 頁参照）や堡塁を奪い、劉家溝の北方から毅後軍副営の北方に至る一帯の高地を占領する目的としていた。参加兵力４万４千余中、戦死１０９２名を出し、第２次旅順総攻撃は失敗に終わる。この総攻撃中に、内地より搬入した２８センチ砲を

観測点に２０３高地に設置した。直径２８センチの砲と海軍砲で港内の艦船、港湾施設を砲撃、港口から榴弾（炸裂弾、海岸に固定し艦船を攻撃）を打ち出す大砲となる。

これは内地から解体して現地へ搬入して組み立てたもので、第３軍には大砲砲撃の専従部隊「陸戦重砲隊」が加わっており、砲撃はこの部隊と陸軍砲兵部隊と共に担っていた。ロシア軍の砲台崩壊、火薬庫の爆発をさせたが、しかし、松樹山砲台、二龍山砲台、東鶏冠山北砲台は外濠に守られ攻略できなかった。



明治３７年９月・干大山東 28 ㎝榴弾砲取り付け工事　　１０月１日王家旬西南凹地２８㎝榴弾砲・重量 10、758 屯、口径 280ｍｍ、最大射程 7800ｍ　（『日露戦争ＰＨＯＴＯクロニクル』澪標の会編纂より）

11月26日「第3次旅順総攻撃」明治３７年１１月２６日、第３次旅順総攻撃が始まる。第２次総攻撃が失敗に終わった後も、第３軍は次の総攻撃によって旅順の攻撃に手を緩めなかった。この年、明治３７年(1904)１０月半ばにバルチック艦隊がロシアのバルト海沿、リバウ港からウラジオストクに向けて出港情報が日本軍に届いていた。バルチック艦隊が日本近海に到着する前に、参謀本部は旅順太平洋艦隊を壊滅させたい事情に切迫していた。２７日、２８㎝砲弾４００発、１５㎝砲弾１５０発が命中し、厚壁を破壊したが、しかし、犠牲者が多いため、翌日２７日に攻撃目睫が変更された。

新な目睫は、２０３高知を奪うこと、この高地を占領すれば、ここより旅順港内より、ロシア旅順艦隊を攻撃することができる。この作戦は以前から主張されているものであったが、海軍と第３軍と大本営の意志統一が進まなかった経緯となっていた。

１１月１４日、２０３高地主攻(集中の総攻撃)に固執する参謀本部と御前会議で「２０３高地主攻」を決定するが、満州軍総司令官大山巌元帥はこれを容れず、総参謀長の児玉源太郎大将は、１０月までに観測地点砲撃で、ロシア旅順艦隊の軍艦機能は失われたと判断し、艦船への砲撃を禁じた。この様な上層部の意見の食い違いは、乃木

と第３軍を混乱させ、結論として第３回総攻撃案は両者の意見を全部取り入れた折衷（せっちゅう）案となった。　　『地図で知る日露戦争』武揚堂より

２０３高地頂上から旅順港を遠望　ウイキペディアより

１１月２９日、新着の第７師団(北海道部隊)が投入され、翌日、西南堡塁を占領したが、しかし数時間後、ロシアの反撃により奪還されてしまう。１１月２９日、煙台(遼陽の北東)から児玉満州軍総参謀長が１２月１日に到着した。児玉は２０３高地の状況を勘案し、大山満州軍総司令官に電報を打ち、北方戦線へ移動中の第８師団(東北地方)の歩兵第１７連隊を南下させるよう要請した。

１２月４日、早朝から２０３高地攻撃開始、翌５日午前１０時、西南堡塁全域を攻撃し制圧した。１２月５日午後より態勢を整え、東北堡塁へ攻撃開始、２２時にロシ

ア軍は撤退し２０３高地を完全に占領した。２０３高地陥落後、観測所からの日本軍の砲撃により、ロシア海軍各艦は次々に沈没したのである。

この攻撃による日本軍の戦死５、０５２名、負傷１１、８８４名。ロシア軍も戦死5、３８０名、負傷１２、０００名近くに達した。１２月１０日、第１１師団による東鶏冠山への攻撃開始し、１８日、日本軍工兵が胸壁(身を守る壁・壁体)に取り付けた２トン爆薬による爆破で崩壊、ロシア軍の甚大な被害がでた。

２８日、第９師団による二竜山堡塁への攻撃が始まり、胸壁を３トン爆薬で破壊、ロシア兵３００名が生き埋め、双方との射撃戦となる。しかし歩兵３６連隊が後方に回り込みだすと、それを見たロシア軍守備隊は撤退し、２９日３時、遂に二竜山堡塁の占領に成功した。第９師団の戦死２３７名、負傷９５３名、ロシア軍も３００名の死者を出した。

３１日、第一師団による松樹山堡塁へ攻撃開始、ロシア軍守備兵、２０８名のうち、坑道爆破で半数が死亡し、占拠した二竜山堡塁からの援護射撃もあり、ロシア軍の後方を遮断することに成功し、ロシア軍は１１時に降伏した。

２０３高地堡塁内側、爾霊山（にれいざん）日本軍爆破口・海抜 203m　堅固な内部と大きさに驚く・2002 年筆者撮る

１月１日、未明より虎頭山や望台への攻撃を開始、ロシア軍の軍備の枯渇、東北方面の主堡塁も落ち、ロシア首脳部も戦意を失い、１６時半に降伏を伝えてきた。5日、旅順要塞司令官ステッセリと乃木は水師営で会見、こうして旅順攻囲戦は終了し、日本軍の投入兵力は延べ１３万名、死傷者約６万名に達した。

乃木希典考察論を観る

『明治文学全集』４９「ウォシュバン・他集」より。S・ウォシュバンは米国従軍記者で来日、乃木の軍司令部に従属した。戦後『乃木』を著作、旅順口攻略から戦後の明治天皇崩御、

そして乃木の殉死までの従軍記となる。『乃木』の「風声鶴唳」の一部から抜粋する。

《(略)・・・露軍は乃木大将が何れの方面(奉天会戦時)に自由に活動しつつあることは知っていたが、果して何処にこれを待機すべきか、戦闘後、数日を経るまで、少しも知ることが出来なかった。戦闘開始の瞬間から、乃木大将の名は、露軍の翼端から翼端(隊のはし)まで恐怖の響を伝えていた。乃木軍が大山軍に合体したことだけは、凡ての露兵に判っていたが、何処に撃って出るかを知るものは一人もいなかった。

シベリア草原の雑兵や、ヴォルガ河(ロシア西部を流れ)や、遠きはニーヴァ河の流域から抜き出されて来た農兵等には、乃木という人間は悪霊の権化か、戦の魔神のように思われていた。陣屋の爐辺夜話などには、乃木軍の兵は血の鬼か火の鬼で、ただ死を求めて、敵と組打しなければ止まぬものとなっていた。旅順包囲戦の物語となると、誇張しても誇張しきれないが、話は更に拡大されて、乃木大将とその将卒は、残虐に浸り増悪に染まって、死を怖れない超人的な怪物であると。

一旦火ぶたを切ったならば、一人残らず斃れるまで襲撃を止めない乃木軍だというのが、露軍全員の考にあった。旅順口瞰射(高所から射撃)の地を得んがために、１万５千の兵を犠牲とした２０３高地の物語は、露軍の伍列の間に幾度となく繰返され、或る時は一回の強襲に日本軍の歩兵がほとんど皆殺しになってしまい、弾丸が尽きても退却を肯んじない。踏み留まって石礫を投げつけつつ、一人も残らず戦死した話も出たことであろう。

軍人として、また軍隊として、この奉天に於ける乃木大将とその部下ほど、恐れられたものは絶無だといっても過言ではない。会戦当初から、襲い来るのは乃木その人に外ならならない恐怖が、露軍の陣営到るところに蔓草が張り、幾多流言はこの鬼神を欺く怪物接近のお伽噺を誠しやかに幾多の陣営に伝達して、又幾度か風声鶴唳(風の音や鶴の鳴き声に驚き敗走)となって消えるのであった。

しかし今度はいよいよ大鉄槌が振りかかった。音に聞こえた日本第３軍が、既に彼等の右翼を迂回して、全速力を以ってその退路を遮断しょうとしているという事実は、野火の如く、稲妻の如く全露軍の頭上に閃いた。いよいよ襲撃が来るぞとなると、乃木大将が何処にどうして討って来るかは疑う余地もなかった。彼のもの凄き山砦の包囲戦を経て来ては、野戦の如きを物の敵の数とも思わない旅順口の老兵が、露軍の側面に接触して、突如として出現したのである。

そして露軍の知らぬ間に、既に深くその側背に迫って、第一回の突撃に、露軍の防

禦工事は、紙屑の如くに揉(も)み潰されてしまったのだ。日本軍兵士は巧みに覚えたロシア語の喊声(かんせい)を揚げ、日本語の「万歳」の声も打ち交えて、「我等は旅順の乃木軍だぞ」と叫んで追撃した。この戦慄すべき喊声(かんせい)が露軍の側面に鳴り響くと同時に、勝敗の数は既に決していた。絶望は火の如くに蔓延して、やがて全軍こぞっての退却となった。・・・（略）　》と。

この記述で見えてくる事は、乃木将軍の鬼神の如く恐れた露軍は、当時の露軍全軍が乃木将軍の行動が怖れられていたことが判る。乃木は戦地に於ける目に見えない魔力を持った殺人鬼の将軍に映っていたに違いない。

乃木将軍水師口会見　乃木凡将論に付いては他の書に譲るとして、乃木について少し述べる。明治３８年１月５日、水師営の会見に先立ち、明治天皇は山縣有朋を通じ乃木に対し、ステッセリが祖国のために力を尽くしたことを讃たえ、武人としての名誉を確保するように要請した。これを受けて、乃木はステッセリに帯剣を許し、武人としての名誉を重んじ、写真に付いては、再三の要求に拘わらず一枚のみの写真とした。ロシアの『ニーヴァ』が乃木の英雄的な挿絵を掲載している。乃木に対する世界各国から賛美の書簡が寄せられ、乃木の武功と、ロシア兵に対する寛大処置が世界的に評価されたのである。

水師営会見・中央二人が乃木とステッセリ

『ニーヴァ』挿絵乃木将軍

ステッセリ・1890 頃

乃木希典人物像について　日清戦争の戦績から野戦の得意な将軍と国民に評価されてきた。日露攻略戦時、乃木は５６歳、野津６４歳、黒木６１歳、奥５９歳、乃木は一番若かった。旅順攻略戦が難航すると、東京の乃木邸に投石されたこともあった。その後、水師営会見などの美談が喧伝されたことや、奉天会戦に於ける活躍から、凱

旋帰国時には好印象で国民に迎えられた。

歴史は下り、昭和４３年の世、司馬氏の国民的に愛された小説『坂の上の雲』に、この旅順攻囲戦で日本軍が膨大な戦死者を出したのは、第３軍司令官の乃木と、参謀長の伊地知幸介の無為無策が原因とする考えに基づいて、乃木凡将説を描いた。司馬氏の所謂(いわゆる)凡将説は読者に受け入られ、この考えに基づく乃木凡将説書籍が出版されているが、この凡将説の元とされる書籍は、谷寿夫著の『秘密日露戦史』が昭和４１年に刊行されたことが要因とされる。しかしこれらには誤解・偏見も多くみられ、公平な評価とは言い難く、その評価は現在も賛否両論があって評価は定まっていない。

「乃木将軍は軍神か愚将か」　福田恆存(つねあり)著『中央公論』昭和４５年１２月、臨時増刊号

はしがきに、《・・・私が司馬遼太郎氏の『殉死』や福岡徹氏の『軍神』に疑問を感じ、乃木将軍擁護論を書く気なったのが、決して単なる思い附きでない事は諒解して頂けよう。尤も司馬氏の『殉死』だけだったなら、これを書く気にならなかったかも知れない。司馬氏は将軍を軍人、戦略家としては否定しながらも、その宿命的な生涯に同情を以って書いている。そればかりではない。南山攻撃において日本軍は始めてヨーロッパ人の何たるかを知ったと述べ、日露戦争、旅順攻略戦に日本と西洋との出会いの運命を感じ取っている。・・・・私の関心は前に述べた様に旅順攻略戦にあり、その歴史的意義にある。乃木将軍は悲運の人であり、悲運の国の象徴である。将軍が後に軍神として祀られる理由の最大なるものはそこにある。

ところで、将軍は福岡氏の言う如く、一つ一つの戦略について見る時、果たして愚将であったか、また司馬氏の言う如く「乃木ほど軍人の才能の乏しい男もめずらしい」人物であったのか。勿論、私も将軍を智将とは思わない。確かに児玉大将の方が智将の名に値する軍人であったろう。が、旅順攻略戦における将軍の行動について私の調べた限り、将軍を愚将と呼ぶ事は出来ない・・・(略)》

「合鍵を持った歴史観」の結語に　(同に続く)　《近頃、小説の形を借りた歴史読物が流行し、それが俗受けしている様だが、それは全て今日の目から見た結論であるばかりでなく、善悪黒白を一方的に断定しているものが多い。が、これほど危険な事は無い。歴史家が最も自戒しなければならない事は、過去に対する現在の優位である。吾々は二つの道を同時に辿る事は出来ない。とすれば、現在に集中する一本の道を現

在から見透かし、ああすれば良かった。こうすれば良かったと論じる位、愚かな事は無い。殊に戦史ともなれば、人々はとかくそういう誘惑に駆られる。事実、何人かの人間には容易な勝利の道が見えていたかも知れぬ。が、それも結果の目から見ての事である。日本海大海戦における丁字戦法も失敗すれば東郷元帥、秋山参謀愚将論になるであろう。が、当事者はすべて博打を打っていたのである。丁と出るか、半と出るか一寸先は闇であった。それを現在の「見える目」で裁いてはならぬ。歴史家は当事者と同じ「見えぬ」目を先ず持たねばならない。

・・・合鍵を以って矛盾を解決した歴史というものにほとんど愛想を尽かしている。私が、戦史には全く素人の身でありながら、司馬、福岡両氏の余りにも筋道だった旅順攻略戦史に一言文句を附けざるを得なかった所以である。勿論、読者がそういうものを、一種の娯楽として読める程度にまで成熟していれば問題は無い。が、戦後の歴史軽視の結果、人々は「正史」を知らず、また歴史の読み方も知らない。その反動として歴史読物や歴史を扱ったテレビに縋(すが)り附き、その渇(かわ)きを癒そうとしている。歴史家のみならず、歴史小説家もその点をよほど慎重に考えねばならであろう》と述べておられる。中々手厳しいご指摘、歴史を追っている筆者も反省いたす所存であります。

当時の要塞(堡塁)についての認識論　日本に於いては本格的な「要塞攻略の思想」が無かったことが上げられ、露軍は欧州からの要塞建設技術を極東軍港に持ち込み、旅順天然の要害の地に、ロシアは８年を費やし、セメント２０万樽を使って大要塞を築いた。これらの堡塁には重層銃眼(じゅうがん)(はざま)があって、そこに機関銃が備えられ、地下一階と二階蔽(おお)うコンクリート壁厚は２ｍ、日本軍の手榴弾等は寄せ付けなかった。

当時、参謀本部(日清戦争での経緯から)は旅順攻撃を、中小口径火砲(カノン砲)の射撃と銃剣突撃で陥落出来ると考えていたらしく、３日後には旅順に入城の予測を立てていたと伝われる。参謀本部に於いても敵側の情報収集能力の不備もあり、旅順要塞の内側の情報を全く持たず、突撃に次ぐ突撃よる事が死傷者を甚大にしたのである。

乃木３軍にはロシア側の要塞内部が全く分からず手探りの攻撃となり、参謀本部に於いても戦術に苦慮し、９月中頃に日本最大の本州沿岸に配備されていた２８㎝榴弾砲(旅順攻囲戦合計１８門配備、２８㎝砲投入提案者は有坂成章少佐提案)が旅順に到着した。この砲の威力によって要塞破壊の解決の糸口を掴み、児玉の命令で２８㎝砲を１５分間隔に打ち込こみ、露軍の怯(ひる)んだ２０３高地を占領とる。

当時の乃木の作戦は、砲兵の火力で敵陣を徹底的に叩いてから歩兵が突撃する戦術は、「強襲法」と呼ばれ単純な肉弾攻撃とは別物で、当時の要塞攻略の定石であった。この作戦は第一次世界大戦のヴェルダン要塞(フランスヴェルダンの地で独・仏軍の戦い)等で踏襲されている。

一般に２０３高地を確保すれば、その位置から旅順港を見渡し、市街と要塞陣地の全てが視界に入り、２８㎝砲や１５㎝砲で旅順港攻撃することが出来る、旅順さえ陥落すれば総てが終わると思われる人が多いが、実際、２０３高地が陥落しても、ステッセリは降伏しないし、降伏に至ったのは、旅順東北正面の永久堡塁の全てが、日本軍の爆薬による地下坑道攻撃が吹き飛ばされ直後の、１月１日に降伏の使節が日本軍陣地に訪れ、やっとのことで旅順攻囲戦は終わったのである。

乃木神話の崩壊　ここで乃木将軍凡将説の出典、谷寿夫著『機密日露戦史』と、『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著から、乃木将軍と児玉総参謀長に触れる個所を抜粋してみる。

２０３高地攻囲戦に於いて、第３軍司令官乃木希典の「乃木神話」が生まれ、連合艦隊司令長官東郷平八郎の過度の称賛による「東郷神話」も生まれた。大正１３年(1924)、日露戦争２０周年に当たり、陸軍大学校兵学教官であった、谷寿夫教官によって戦略機密戦史が完成された。本著述がそれであり、戦争指導史と称せられる、『機密日露戦史』(明治百年史叢書『機密日露戦史』谷寿夫著・原書房)が、昭和４１年に公刊され、学界に与えた衝撃を与えた。

『機密日露戦史』の「はしがき」に「・・・先ず当時参謀本部第４部(戦史)に在職していた沼田多稼蔵大尉(後の中将)の名著『日露陸戦新史』があり、その公刊本は、大正１４年３月頃までに５版を重ねる盛況を呈していた。が、陸軍大学校兵学教官であった谷寿夫大佐が兵学教書として高度の機密戦史を著述し、谷は「・・・戦史ノ裏面ニハ更ニ裏面ノ存スルコト之レナリ。茲(ここ)ニ研究スル要領ハ秘密戦史トシテ軍ガ外部ニ対シ公開セザルモノヨリ、一層深刻ニ戦争統帥又ハ高等統帥ノ真相ヲ語ルモノ、即(すなわ)チ秘史ノ裏面ナリ、然ルニ此裏面モ亦其裏面ヲ有ス。・・・(略)」とある。

「児玉総参謀長の南下とその活躍」　同書の「第６章旅順要塞攻城作戦指導の経緯」の部分《１１月２７日より２８日までの状況の報、・・・総参謀長は斯(か)く第３回旅順

攻撃意の如く進捗(しんちょく)せず。就中(なかんづく)２０３高地は直接旅順の運命を制するものにして、その奪略(だつりゃく)は実に国家の全運命を決する大事である。我軍は３回これを占領し、３回奪還せられる。即ちこの占領を確実にするため、翌２９日旅順行の決意を松川参謀に示した。松川参謀は大山総司令官に「乃木将軍へ、予に代わり児玉を差遣わす。児玉の云う所は予の云う所と心得べしとの一礼を乞う」をもって松川少将の熱心説くところ、児玉大将は、この大山元帥の書翰を懐に、田中騎兵中佐を随えて南下の途に就いた。・・・大山総司令官は、総司令官の名を以って、第３軍の作戦を指導するため、児玉参謀長を差遣わす。本官の名を以って児玉総参謀長の指示に従しめられたし。・・・汽車移動中、２０３高地陥落の情報に接し、祝電を第３軍司令部に発した。翌１日朝食の最中、旅順より飛電(ひでん)(至急電報)あり。一旦奪取した２０３高地再び奪還されると。児玉将軍は食事を中止し激怒した。児玉は乃木と会見し、・・・一時軍司令官の指揮権借用を以って、貴兄の代理たる一筆の添書きを授けられ、此の時、児玉大将の手は懐の書状に触れる所であったが、乃木大将は快諾の上、書状を児玉大将に附与した。児玉大将は直ちに軍参謀を集め、攻撃計画の修正を要求した。

(1)２０３高地の占領を確保するため速かに重砲隊を移動してこれを高崎山に陣地変更し、以て敵の回復攻撃を顧慮し、椅子山の制圧に任じる。

(２)２０３高地占領の上は２８珊砲(二十八珊米榴弾砲・２８㎝りゅうだんほう)を以て一昼夜毎１５分間隔(かんかく)に砲撃して、敵の逆襲に備えること。

然るに重砲隊副官奈良少佐は第１項に反対し、第２項は友軍に危険なりとし不同意を唱えたが、児玉将軍は砲撃味方(みかた)打ちを恐れずとて肯(がえんずる・うなずいて承知)んぜず。児玉大将直(ただ)ちに、豊嶋将軍に第１項の陣地変換(搬入据え付け)に要する準備時間を問い、２４時間を要するとの解答を以って、これに実行を命じた。・・・。

斯(か)くして第３軍、所期の如く愈々(いよいよ)２０３高地を占領するや、児玉大将は直ちに２８珊砲を前進せしめて軍艦射撃を命じたが、豊嶋少将はこれを否認して、必ずや敵の回復攻撃の集中火に浴すべければ、徐々に鉄板を置きて砲廠(ほうしょう)(弾幕・敵弾を防ぐ建物)準備の後に応じるべしと答えしに、児玉将軍これに耳をかす所なく、即刻射撃開始を命令した。斯くして旅順艦隊のポヘーダその他、艦船８隻は立ち所に命中、遂に沈没するに至った。児玉大将のこの行動たる一面指揮権の問題あり。これを厳密に云えば、軍規軍律上大問題となるが、吾人(われわれ)は満腔(まんこう)の同情を第３軍に呈し、その赫々(かくかく)たる名誉には触れずして、只高等統帥上の隠れたる深甚(しんじん)(深く知る)の教訓を学ぶことの見地より、敢

えて諸君に実情を披露したに止まるを了(りょう)とされたい。・・・。》と。

「旅順攻囲軍第一線勤務者の雑感」「同第６章」陸軍中将　志岐守治(中佐・第１１師団の大隊長)口演部分、《(１)(２)略、(３)・・・旅順第１回の総攻撃は、８月１８日から１９日、２０日と３日間の連絡砲撃により開始された。第１回の強襲的攻撃は無論効を奏するものと感得して居た。平時における参謀勤務の不充分であった。又、何人も砲撃の成果が如何な程度の者かを承知して居なかった。当時として第１回総攻撃の強襲を実施した事は蓋(けだ)し正当な決心であったと信じる。(４、略)

(５)・・・第３軍では総攻撃の度毎に「補助憲兵」も各隊に予定させ、そして旅順陥落時の使用に準備させた。その目的は正しく日本軍の掠奪(りゃくだつ)、その他の暴行を取り締るにあったが、我々は乃木式だなと、軽蔑の念を以ってこの命を実施したのであった。凡そ人を死地に狩り立てるに際し、果たして人心を得た所置(しょち)であろうか。二者共に戦争を物質的視し、日本軍の忠勇を過信した戦場心理を無視した好一対である。

勝ち戦にはこれでもよかろうが一旦負け戦となったら大変だ。将校たり、その幕僚なる者は心得ねばなるまい。ここに一つ弁じて置くことがある。乃木将軍もその当時は今日の人が崇拝する如き司令官ではなかったのである。第３回総攻撃の前だったか、此度の攻撃に旅順が落ちねば、軍司令官は将に死を決して居るとの風説が伝わったことがある。然しその風説はいささかも第一戦部隊の督励(とくれい)(励ます)にも発奮にもならなかったのである。それはご随意とばかりに聞き流しただけである。又将軍の子供が２人戦死した如きも、今日でも大に第一線の志気を鼓舞した様に云い伝えているが全く虚偽(きょぎ)である。・・・。》(６ー１０まで略)

旅順第３回総攻撃失敗と２０３高地攻略戦　『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著・「第５章長期・消耗戦化から講和へ」、《第３軍の２０３高地軽視の作戦に対し、大本営は２０３高地攻撃を推進させる目的の下に、近い将来の作戦として計画していた樺太遠征司令官要員として、大本営付となっていた鮫島重雄中将を旅順に派遣した。工兵出身で由良要塞司令官・東京湾要塞司令官を歴任、薩摩出身で伊地知参謀長の先輩であり、且つ乃木第２師団長・鮫島近衛師団参謀長として、台湾征服戦争を共に戦った関係もあり、第３軍司令部の説得には適任と考えられた。・・・しかし、鮫島の派遣も効果がなかった。長岡次長の回顧録には、「鮫島中将、２０３高地占領の屈強なる

賛成者であった。・・・１１月５日鮫島に、ご意見聞きたし、と電報を発した。鮫島の返電の要旨は、第３軍は状況の如何にかかわらず、先般来の攻撃方法を最良として実行しつつあり、各隊の士気は旺盛でなく、自分の判断でき望台(東正面堡塁の最高地)占領の目的を達するには少なくも１０日以上を要するので、先ず２０３高地を占領して敵艦隊の処分を急ぐのは、それ程困難とは思われないが現状では従前通りの攻撃法をとる以外にない。２０３高地の占領を急ぐことは師団への作戦命令に含めていないので、これを師団に強要することはできない、という趣旨のものであった。鮫島の電報を見た長岡は、もはや第３軍司令部の「改造」以外に道がないと判断して、即日満州軍司令部の井口高級参謀に長電を発した。・・・。》『世界史としての日露戦争』大江志乃夫著・2001年・立風書房

児玉総参謀長の第３軍直接指揮と２０３高地占領　同５章・《・・・「２０３高地は直接旅順の運命を制するものにして、その奪略は実に国家の全運命を決する大事である」(『機密日露戦史』)と、単に旅順攻囲戦のみならず、日露戦争全般の帰趨(きすう)を決する決戦的性格を帯び始めたことによる。旅順攻囲戦に早期決着をつける唯一の可能性がある２０３高地の攻略が、遅延若しくは失敗すれば日本海軍の戦略は全面的に蹉跌(さてつ)する危険性をはらみ、陸軍の北進野戦軍の作戦計画も多大の齟齬(そご)(くいちがい)をきたし、予期される大会戦に兵力不足ゆえの敗北を喫する可能性が生じた。戦機を見るに天才的な頭脳の持主である児玉は、第３軍司令部に任せておいてはこの決定的戦機を逸する恐れが多分にあると考え、自ら２０３高地攻略の現地指揮をとることを決意したと考えてよいであろう。と。

１２月１日、正午に第３軍司令部に到着した児玉は乃木軍司令官と密談し、乃木軍司令官は快く軍の指揮権を児玉に委任したという。乃木軍司令官自身が、もはや第３軍司令部の「指揮統率」が不可能なることを認識し、軍参謀長以下の作戦介入を防ぐためにも児玉総参謀長に指揮権を委ねたとも推測される。・・・。

５日午後２時、豊島攻城砲兵司令官は占領した２０３高地、西南山山頂に観測所を開設し、直ちに旅順港内に潜むロシア艦隊の砲撃を開始した。観測所開設による射撃の効果は絶大で、早くも午後過ぎには戦艦ポルタヴァの火薬庫に弾丸が命中して火災を起こし、レトウィザン、ペレスウェートは６日に、巡洋艦パルラダは７日に沈没させた。残るは観測所の死角に隠れた戦艦セヴァストポリは連合艦隊の襲撃により、１

５日頃航行不能が確認された。ここに連合艦隊は旅順艦隊の全滅を確認して封鎖作戦を解除し、各艦艇は遂次内地軍港に帰港して、修理、整備を行い、バルチック艦隊(第２太平洋艦隊)の来航に備える時間的余裕を得た。・・・。》

余話・筆者の考察として　弾幕について=乃木第３軍は３度高地を占有したが、児玉のように、占有した高地陣地に弾幕を火急に張り巡らしていない。これは野戦場に於いて土木工事となるので、工兵集団が、陣地を守る構造を造らねばならない。一般兵士では無理なことで、建造物に手慣れた職人集団(土木工・とび工・重量物据え付け工・高地地曳工等・２８㎝榴弾砲は１０トン級となる)が必要となる。殊に重砲等の重量物搬入(修羅(しゅら)車・かぐらさん)の高地への引き上げは、困難に次ぐ困難の連続の工事であり、攻撃との時間との兼ね合いが勝負となる。又、これを指揮するプロの頭(かしら)・棟梁(とうりょう)が居なければ工事が迅速に進まない。この件に於いては、児玉将軍が優れた工兵集団を確保していることが判る。弾幕と重砲取り付けは児玉将軍が優れ、至難の地下の坑道堀と坑道爆発等による要塞占領は乃木将軍の高評価があってもよいと思う。筆者は建築造園石材業の生業(なりわい)であったのでこのイキサツの件は理解できる。

葬られた「旅順」の教訓　『検証日露戦争』読売新聞取材班・2005 年

《・・・２０３高地目がけて山肌を駆け昇る日本兵は、ロシア軍の放つ砲弾に吹き飛ばされ、機銃になぎ倒された。多くの犠牲を目の当たりにしながら、陸軍は戦後、銃砲火力を軽視し、歩兵を中心とする白兵(軍刀と銃剣による突撃)主義を採用する。

その疑問を解く一つのヒントが、防衛庁の防衛研究所(東京都目黒区)に保管されている一冊の綴(つづ)りの中に残されていた。日露戦争終結後の 1906 年２月、陸軍参謀本部が戦史を残すために定めた「日露戦史編纂綱領綴」だ。綴りには、「編纂綱領」の他に「日露戦史編纂規定」「日露戦史編纂に関する注意」「日露戦史稿審査に関する注意」「日露戦史整理に関する注意」が収められている。

満州軍総司令官として日露戦争で陸戦の指揮を執った大山巌・参謀総長が指示した綱領はわずか３頁で、「日露戦役ニ於ケル陸戦ノ経過ヲ叙述シ以テ用兵ノ研究ニ資シ兼テ戦争ノ事跡ヲ後世ニ伝フル」という目的が記されている。戦争の経過をきちんと整理し、陸軍として今後の戦術研究に役立てるという戦史編纂の理由を明確に示している。だが驚かされるのは、「史稿審査に関する注意」の内容だ。参謀本部第４部長の指

示とされ、８頁に亘って、陸軍にとつて不利となる事実や失敗した内容を記述することを厳しく禁じている。その主な項目は、①各部隊間ノ意志ノ衝突ニ類スルコト、②軍隊又ハ個人ノ怯懦(おびえ)、失策ニ類スルモノ、③輸送力ニ関スルモノ、④国際法違反又ハ外交ニ影響スベキ恐アルコト、⑤司令部幕僚ノ執務ニ関スル真相――などだ。その主な理由として、①軍の内情や真相を暴露する恐れがある、②勤務上の機密を暴露することになる、③捕虜の虐待などを疑わせるなどを列挙している。

取分け、部隊や個人の失策については、「戦闘ニ不利ノ結果ヲ来シタルモノハ潤飾(粉飾)スルカ又ハ相当ノ理由ヲ付シテソノ真相ヲ暴露スベカラズ」と記されている。つまり、部隊や個人(司令官)のミスや汚点に関しては真相と真実を記述しないばかりか、脚色しろと指示していたのである。・・・。》

上記の通り、大正１３年までは日露戦史の記述については、問題は起こらなかったが、翌年、谷寿夫が参謀本部第４部の幹部教育の一環として『機密日露戦史』を著したものであろう。それが昭和４１年に公刊され、明治百年史叢書『機密日露戦史』谷寿夫著・公刊され、学界に与えた衝撃は大きかった。

乃木希典の復命書　「特集・日露戦争と百年後の日本」『諸君』２００４年・福田和也著

明治３９年１月１４日、東京に凱旋した日露戦争の各軍司令官は、そのまま参内して復命書を奉読した。第３軍司令官乃木は、戦場で着けていた軍服のまま、明治帝の前に立ち、嗚咽して屡々詰まり、絶句落涙したと伝えられている。

《「而シテ作戦１６箇月間、我将卒ノ常ニ勁敵(強敵)ト健闘シ、忠勇義烈死ヲ視ルコト帰スルガ如ク、弾ニ斃レ剣ニ殪ルルモノ皆、陛下ノ万歳ヲ喚呼シ、欣然トシテ瞑目シタルハ臣之ヲ伏奏(ひれ伏し奏上)セザラント欲スルモ能ハズ。然ルニソノ斯クノ如キ忠勇ノ将卒ヲ以テシテ、旅順ムノ攻城ニハ半歳ノ長月日を要シ、多大ノ犠牲を供シ、奉天附近ノ会戦ニハ、攻撃力ノ欠乏に因リ退路遮断ノ任務ヲ全ウスルニ至ラズ、又敵騎大集団ノ我が左側背ニ行動するに当リ、此ヲ撃摧(敵を打ち負かす)スルノ好機ヲ獲ザリシハ、臣ガ終生ノ遺憾ニシテ、恐懼(怖れ畏まる)措ク能ハザル所ナリ。今ヤ闕下(天子の御前)ニ凱旋シ、戦況ヲ伏奏スルノ寵遇(待遇)ヲ担ヒ、恭シク部下将卒ト共ニ、天恩ノ優渥(手厚い)ナルヲ排シ、顧ミテ戦死病没者ニ此光栄ヲ分ツ能ハザルヲ傷ム。》(「複命書」乃木希典全集下巻)

兵の「忠勇義烈」を讃、戦死病没者を悼みながら、乃木は自らの指揮について、き

わめて「遺憾」だと、天皇の前で述べている。涙と共に、いかにも凱旋には似合わない振る舞いだが、同時にこれこそが乃木だというイメージを裏切らない。だからこそ乃木はその能力如何を超えて、「天皇に、国民に愛されたのだ」と、福田氏は語る。

旅順陥落とステッセル将軍の考察　『日露戦争を演出した男モリソン』下巻（アーネスト・モリソン、オーストラリア出身、『タイムス』極東通信員、英国擁護記事を掲載、義和団の乱、日英同盟、日露講和に裏面で活躍。尚当時の記述は『タイムス』となっている。）

《・・・旅順陥落によって日本の名は世界に轟いた。各国の新聞はロシアの覇権の失墜として一斉に書き立てた。「旅順は単なる一個の要塞ではない。これこそロシアが誇る勢力のシンボルであった。１０年前、３国干渉という非道を受けた日本の悲憤(ひふん)は今回の旅順占領によって拭(ぬぐ)われたのである」と。

１月１４日、２０３高地の戦死した将兵の招魂祭が水師営の高地(爾霊山(にれいざん))で挙行され、乃木希典は沈痛な口調で戦死者の魂に切々と呼びかける。

「嗚呼(ああ)、諸子(しょし)と此(こ)の光栄をわかたんとして幽明相隔(ゆうめいあいはなれ)つ悲哉(かな)、乃(すなわ)ち全軍の旅順口に入るや、諸子の忠血を以(も)って染めたる山川と要塞とを下瞰(かかん)する所を相し、先(ま)ず地を清め壇を設けて諸子の英霊を招く。希(ねがわ)くば魂やほうふつとして来たり饗(う)けよ」、

参列者はみな泣いた。言葉の分からない外国人までもが泣いていたのである。

２０３高地の忠魂碑・2002 年撮る　　アレクセイ・クロパトキン　エヴゲーニイ・アレクセーエフ

アレクセイ・クロパトキンの来歴　(1848－1925)幼にしてパヴロヴスク兵学校、１８歳にて卒業、副中尉より中尉に進み第一土其機斯坦(トルキスタン)歩兵大隊附として中央アジアに赴任。多々の戦争に従事し、1868 年のボクハラの役には負傷し、露都に還るや功績を賞せられた。1877 年露土(ろと)戦争(露国とオスマン帝国)は、彼は参謀長として出征した。やがて日露戦争開戦時、満州軍總司令官として日本の敵手に立つ。殊に奉天の大敗後、将軍の名声甚だ振るわなかった。

エヴゲーニイ・アレクセーエフ（1843－1917）ロシア海軍太平洋艦隊司令長官、極東総督として日露戦争の原因を作った人物。1904 年４月、ステパン・マカロフが戦死後、太平洋艦隊を直接指揮、陸軍の頭アレクセイ・クロパトキンと不仲、クロパトキンが陸軍総司令官となる。

余話・旅順攻撃戦の秘録　『悲しき帝国陸軍』高原友生著より、石原廬中佐本人が「子孫ニ伝フ・明治３７、８年戦役・旅順要塞第１回総攻撃ノ概要」と題する記録を残されている。石原廬氏の軍歴は、『干城偉績』（巻之上）松本栄編・1892 年に、石原廬の熊本鎮台在勤、熊本城戦歴となる。石原廬は高原友生氏の母方祖父の死後、石原廬の長男が遺稿の整理中に記録を発見した。「子孫ニ伝フ旅順要塞第１回総攻撃ノ概要」から旅順攻囲戦部分を抜粋する。

《「明治３７、８年戦役　旅順要塞第１回総攻撃ノ概要」旅順第１回総攻撃ハ３７年８月２１日午前４時、鳳凰山ニ於テ打チ上ルの烽火ヲ相図ニ、全線同時ニ突撃ヲ開始セラル。是ヨリ先、軍ハ突撃用トシテ鉄条網ヲ切断スル為メノ鋏、濠ヲ渡ル為メノ携帯橋ヲ各隊ニ配布ス。此日予ノ率ユル第４４連隊ハ師団ノ攻撃目標タル鶏冠山新砲台ニ（第４３連隊ハ大孤山ヨリ海岸ニ亘ル線ノ警戒ニ任ズ）向フ予定ナリシ。而テ師団司令部ハ大孤山北麓ニ在リ、師団ノ攻撃隊長タル第１０旅団長・山中少将ハ、南部王家屯北方高地ニ在テ突撃隊ノ指揮ヲナス。（攻撃目標タル新北砲台ニ来ラザリシハ何ノ意カ解スル能ハズ）以上ノ配置ステニ決定セリ。而モ師団長ハ勿論突撃隊長モ、参謀モ誰一人攻撃目標タル新砲台ノ地形敵状ノ偵察ニ来ルモノナシ。・・・（略）。

軍ハ１９日ヨリ２０日ニ亘リ全線砲撃ヲ開始シ攻撃準備ヲナセリ。敵ノ砲台ハ多少破壊サレ、敵ハ此間我ガ砲撃ニ任セ殆ド之ニ応砲セズ。破壊サレタル部分ハ我砲撃止マバ直チニ起テ之ガ修理ヲナスヲミル。１９日軍ノ砲兵部員某ガ予ノ処に来リ。其言ニ、砲一門ニ砲弾１２０発ノ準備アリ、恐ラク君等ノ隊ヲ煩ハスコトハ無ルベシ等、頗ル楽観的話ヲナシ帰レリ。今日ヨリ思ヘバ、軍ニテハ２７、８年戦役（日清戦争）当時ノ旅順攻撃ノ様ニ考ヘ居タルモノ、如ク思ハル。

愈々翌朝攻撃トナルヤ、予ノ連隊ハ予定ノ如ク新砲台ニ向テ突撃ヲ実施ス。豈ニ図ランヤ胸墻（身を守る盛土）高ク、濠深ク、猛火ノ為メ忽チ将校以下多大ノ損害ヲ受ケ、進路コレキハマルノ悲境ニ陥リ、補備堡塁ニ向ヒシ大隊ハ、鉄条網ヲ破壊シ、接戦格闘ノ後、堡塁内ニ突入シ、旭旗（旭日旗）ヲ其塁上ニ立テ、占領ヲ報セシモ、援兵至ラズ、剰へ（そればかりか）我砲兵ハ知ラザルモノノ如ク、此堡塁ニ向テ頻リニ砲撃ヲ続行シ、之ガ為メ多クノ死傷者ヲ出シ、敵ハ一時退却セシモ間モナク逆襲シ来リ。

同時ニ、各砲台ヨリ集中射撃ヲ受ケ、死傷相踵キ、最早軍旗ト共ニ殪ルルノ　外策ナキニ至リ、苦戦ノ余、屢々突撃ヲ試ミ、他隊ノ進出ヲ促セシモ、忽チ多大ノ損害ヲ受ケ、全ク他隊ノ進出ヲ待ツニ非ラザレバ、何事ヲモナス能ハザルニ至レリ。

而テ隣接第２２連隊ハ突撃功ヲ奏セズ、全ク孤立ノ悲境ニ陥リ、終ニ敵ノ奪還スル所トナル。（左モアルベシ、陥落ノ際、此堡塁ニ到リ見レバ、旅順市街ハ眼下ニアリ）

大隊長ハ早ク負傷シ、大隊ハ殆ド全滅。一方、本隊ハ予定ノ如ク新砲台ニ突撃セシモ、濠ノ幅広ク、携帯橋ハ何ノ用ヲモ為サズ。勇敢ナル将卒ハ濠底ニ飛下セシモ、外斜面ノ傾斜急ニシテ、其深サ亦３メートル以上ニ達セシヲ以テ、攀登（よじのぼる）スルニ由ナク、且ツ機関銃ノ掃射ヲ受ケ、大隊長ハ早クモ戦死シ、其他ハ胸墻下ニ殪レ、如何トモスルコト能ハズ、我連隊ノ右翼ハ第９師団後備連隊ナリシガ、是モ亦突撃ヲ果サズ。全ク無援孤立ノ姿トナリ、生キ残リタルモノハ空シク切歯シテ胸墻下ニ伏スルノミ。・・・（略）。

此間師団長ハ攻撃目標ト遠ク隔リタル大孤山北麓ニ在テ師団ノ指揮ヲ取リ、一片ノ命令モ来ラズ、又一人ノ参謀スラ来ラザリシハ遺憾ノ次第ナリシ。此際軍モ攻撃ノ失敗ヲ悟リタルモノカ全線突撃中止ト言フコトニナリ、此日ハ有耶無耶ノ間ニ終レリ。・・・。　実ニ予ハ半年ノ攻撃中、不幸ニシテ師団長参謀長ヲ戦闘中、一度モ見タルコトナシ。況ンヤ地形ノ偵察ヲヤ。又軍ヨリ折角渡サレタル携帯橋ハ、短クシテ架スルニ由ナク、無用ノ長物否短物ナリシ。・・・。

第１回総攻撃ノ後、補充兵ヲ以テスラ、着々坑道作業ノ成功ヲ見タリ。之ヲ第１回総攻撃当時ノ精兵ヲ以テセバ、容易ニ目的ヲ達セシナラン。・・・。要スメルニ、単ニ銃剣突撃ヲ以テ、北砲台ガ取レルモノナレバ、何ゾ旅順要塞の攻囲ニ、半年ノ永キヲ要セナンヤデアル。以上両度の突撃ニ於テ、連隊死傷、大隊長以下実ニ２１３１名。・・・・

実ニ不運ナル連隊ナルカナ。・・・尚当時ノ戦況、往々人ノ誤伝スル所トナル。然レドモ之ヲ弁解スレバ、勢ヒ上官ノ行動ニモ言及ボサザル可ラズ。斯ノ如キハ軍人ノ徳義トシテ忍ブ能ハザルヲ以テ、知ル人ゾ知ルト諦メ、一言モ他言セズ。只茲に感状ト神尾少将ノ書翰及ビ其大要ヲ記シテ、子孫ニ伝フト云爾。　明治３８年１２月・元歩兵第４４連隊長・石原　廬　誌　》（『悲しき帝国陸軍』高原友生著・中央公論社・2000 年）

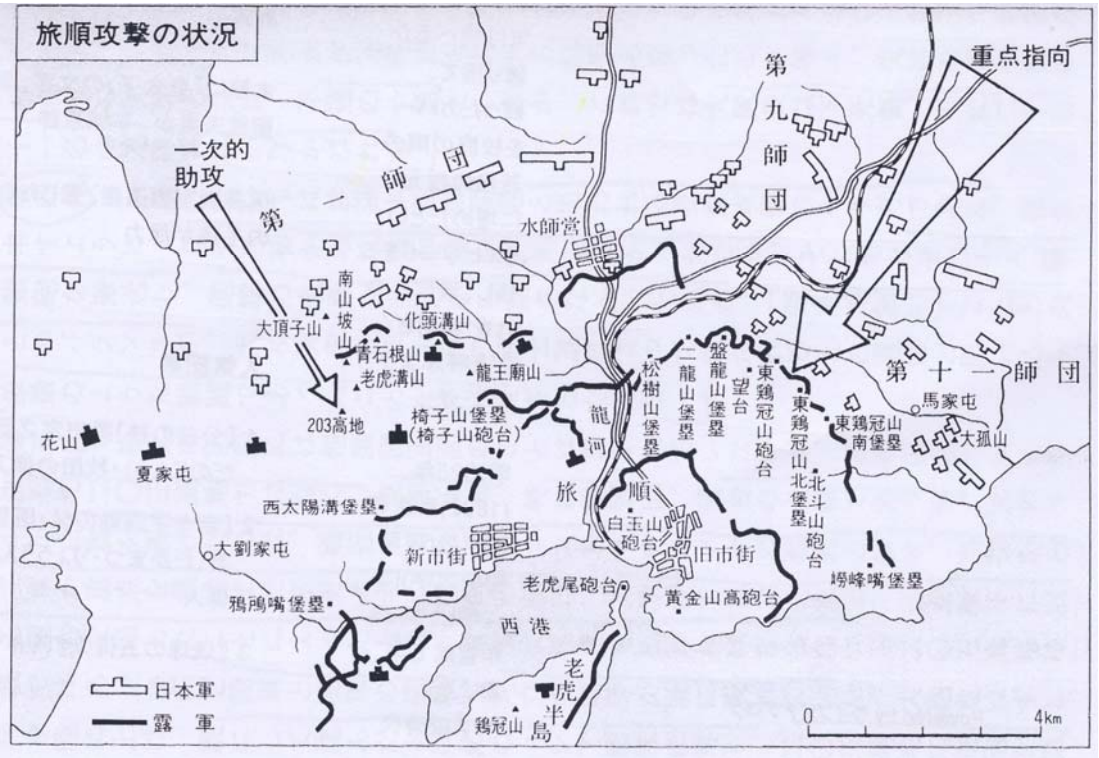
高原氏は残された記録に「高地第４４連隊の名誉、特に２千名を上回る戦死傷の鎮魂を想うとき、第１１師団司令部の戦闘指導、第３軍、満州軍総司令部、在京参謀本

部の旅順攻略の作戦指導の拙劣と怠慢を感ぜざるを得ない。と述べこの記録から得られる知見を整理してその要因をあげている。

第１に、第１１師団の戦闘指導は、ただ肉弾をならべ、銃剣のみに頼って敵陣に突撃させる戦国時代変わらぬ戦法であった。第２に、要塞防備の情報に乏しく、胸墻は７メートル、コンクリート壁１、５メートル、坑幅２０メートル、機関銃５０を超え、作戦立案段階で理解されていない。また驚くべきは戦闘開始以来、師団長、参謀、連隊本部は現場へ来ていない。１０年前の日清戦争の１日で陥落させた旅順の記憶の準備と用兵であった。第３に、４４連隊の肉弾突出が成ったとき、左右の連隊が成功せず、この相互いの連携が師団司令部の指導によってなされるべきなのにそれがない。

第４に、何故当初から坑道作業を併用しなかったのか。何故２８サンチ榴弾砲を搬入し砲撃の成果を当初から期さなかったのか。過信と思い込みの戦闘であった。

第５に、旅順陥落の決め手は決して２０３高地ではなく、東部正面、特に鶏冠山、望台の占領であり、ステッセルが白旗を揚げたのは、鶏冠山での勇将コンドラチェンコの戦死と併せ、当初から第３軍が重点を最後まで指向し続け、**旅順港ではなく旅順市街を眼下に収める望台**を落としたことによる事実に注意を払わなければならない。



旅順攻囲図　『悲しき帝国陸軍』高原友生著より

高知第４４連隊長の石原廬は、高知県の連隊を率いて旅順攻撃に参加、２千有余の

死傷を出し、連隊長は生き残り、高知では連隊長の評判が悪く無慈悲の連隊長との噂があった。連隊長は口癖の如く、一度高知へ参って誤解を一掃したいと言ってはいたが、終にその機会を得ずして逝かれたのであると述べておられる。

ステッセルの降伏　『日露戦争を演出した男モリソン』下巻・「ステッセルの不名誉な降伏」に、《・・・１月１日、ステッセルは開城やむなしと次のようにツァー(皇帝)に訴えた。「我は人力の限りを尽くしたり。願わくば陛下これを許し憐察(あわれむ)を垂れ給わんことを。１１カ月の永きに亘っての絶え間なき戦闘は、我が精力を消耗せり」と、ステッセルは乃木大将と会見後、彼は自分の守りきれなかった土面に跪き、短い祈りを唱え土地に別れのキスをした。

ステッセルの武勇と献身に対して、ドイツ皇帝は武勇勲章を与えた。欧州の人々は感動し、ステッセルを悲劇のヒーローとして讃えた。しかし、そのような欧州人のステッセル観をモリソンは根底から覆した。ステッセルは英雄どころか、実は臆病風に吹かれた惨めな敗者に過ぎない、とモリソンは主張したのである。モリソンは陥落直後の旅順をくまなく調査し、降伏時の残余兵力及び物資の数量を綿密に調べ、ステッセルの降伏の理由が、兵力、武器、弾薬、食料等の不足によるものでない事を状況証拠から証明した。

ロシア降伏の理由を正当に説明しうる者はいない。兵力欠乏という訴えは理由にならない。バラショフ将軍は、「２万５千の駐屯兵のうち２万人は負傷して病院におり、戦えるのは僅か５千人であった」と云い、ステッセル将軍は「戦えるのは僅か４千人、無傷の将校は２８人になった」と公表しているが、日本が要塞を占領して明らかになったことは、２万５千人以上の身体健全な兵が出撃に出来るほどであり、その兵士たちは良い服装をしており、栄養満点、無傷の将校はなんと数百人もいた。入院中の者は１万４千人いたが、重傷の者は殆んどおらず、特に士官クラスに仮病が多く、彼らの評判は地に落ちた。

・・・降伏した戦闘員は３２，２０６名であった。日本軍が押収した武器弾薬の数量は夥しく、日本軍を驚かせた。日本軍が押収した各種大砲は３百３０門、各種砲弾は２０６，７０４発、各種小銃は３６，６００挺、小銃実包は５４３万６２４０発もあった。食料に付いてモリソンは云う、「食料不足ということも降伏の理由にはならない。あと３カ月籠城するに足りる充分な食料があったからである。その上、大量の

シャンペン、クラレット、ウオゥカ、医療品も充分にあった。・・・」。

事実、降伏した時、ロシア側には麦粉が１７万７千貫あり、これは４万人以上の旅順のロシア人を、約５０カ月養える量、その他、ひきわり麦、玉蜀黍粉、米、重焼パン、牛肉缶詰、食塩、砂糖など余る程あった。馬は２千頭、馬糧は５６日分もあった。

石炭も５カ所の地下倉庫に７万トンの貯蔵、その中に３万トン良質のウエリッシュ一般炭もあり、このような状況証拠に基づいて、モリソンは降伏の真の原因について、唯一の降伏の理由は日本の勇敢さに参ってしまった。・・・。》と。

筆者の感想　『日露戦争を演出した男モリソン』下巻の考察であるが、２０３高地の評は、結果から見た判断と思う。個々の将軍・士官たちは、その現場に於いて、最良の結論を以って答えを出す訳である。唯結果として、後世の人にとっては戦場の経緯を知っているので、「こう云う作戦があったではないか」という云々の合理性の作戦を評したい処である。が、ここが人間、天から授かったもの、国の環境や育つ人間環境の過程差があり、両将軍の総合的軍事能力差あり、知略の差が当然に有るが人間の世界である。現在の我々が想像するよりも、「乃木将軍」に対するロシア側兵士に与えた畏怖心が大きかったことは、ウォシュバンの『乃木』の記述の通りであったと思われる。後世の軍事評論者たちは自己の安全が保障されている座で、彼是云々している訳である。国と国の戦争は、軍事力の外に、国民性・自国の政治・軍事力を背負った国の外交者たちの外交発言も大きな影響を与えているのである。

奉天会戦　奉天会戦は現在の遼寧省瀋陽の地で、1905 年３月１日から３月１０日にかけて、日本軍２４万人、指揮官大山巌・参謀長児玉源太郎、ロシア軍３６万人、ロシア満州総司令官アレクセイ・クロパトキンの双方が６０万人よる激突となる。

クロパトキンは１００万人の動員令を出していたが、ロシア国内の血の日曜日事件や紛争が起き、ニコライ２世皇帝の国民の忠誠心は揺らいでいた。日本軍に於いては、危うい勝利を拾い続け、なんとか全体の優勢を保っていた。しかし、日本軍に於いても、満州奥地まで進撃を続けたため、兵站の維持や兵力補充は益々困難となり、戦争継続自体も危うい状況になっていた。

1905 年３月、ロシア軍の奉天増援前に、大山巌は日本軍有利の段階で講和を結ぶため、総戦力を賭け、「今戦役は関ケ原とならん」と決意を将兵たちに示している。

奉天会戦の激突の末、やや日本軍優勢で結末をみた。３月９日、ロシア軍総帥クロパトキンは、第３軍（乃木軍）によって退路を断たれることを恐れて、鉄嶺（遼寧省北部）・ハルビン方面へ転進指令を出した。３月１０日、無人となった奉天に入城した。

３月１０日は陸軍記念日となる。

奉天入城

３月１１日撫順占領

クロパトキンは鉄嶺も捨てて北へ更に退いた。日本軍が鉄嶺を占領、ハルビンに逃れたクロパトキンは皇帝に罷免された。奉天を制圧したことにより、会戦の勝利は日本側あるように見えていた。ロシア軍の奉天転戦は、ナポレオン戦争時にもロシア軍が採用した伝統戦法「戦略的撤退」であった。まさに日本軍を満州奥地へ誘い込む作戦であった。ロシアはクロパトキンを罷免したことにより、国際的には敗北と認知されてしまった。代わってリネウィッチ将軍より、軍律を正し、軍の立て直おして日本軍に対峙する状況となって行くのである。

しかし、ロシア国内に於いては、この年の１月に「血の日曜日事件」「ロシア第一革命」が始まり、国内の反乱分子の鎮圧行動に軍事力は取られ、陸軍１００万と云われた軍事力を満州地域へ派兵することはできなかった。

日本側に於いても、総司令官大山と参謀長児玉による、「有利な段階の内に講和を進める」児玉を急遽、大本営へ戦争終結の方法を探るように具申している。児玉は韓京に居て、講和条件の「軍費賠償」の一条を見て「桂の馬鹿が償金を取る気になって居るゾ」と語ったと云う話が伝わる。児玉は償金の一条を見て、当時の我が国の経費と人命犠牲が莫大なことも、斟酌しなければならないと述べている。

この時期の日本国内に於いては、奉天会戦勝利の報に日本中は沸き上がり、戦争継続と世論は高まり、大本営は更にウラジオストクや沿海州の占領、侵攻計画を練り始めていた矢先となっていたのである。

第 10 章 「ウィッテ回想記」より開戦の経緯と講和談判を探る

『ウィッテ伯回想記・日露戦争と露西亜革命』上、復刻原本=昭和６年・原書房より抜粋

日露戦争開戦と「栗野公使と私の会話」　《・・・或る日、日本公使栗野（駐露公使・写真９章９６頁）の訪問を受けた。彼は中々聡明な人物である。彼はよくロシア政治事情を理解し、彼の語った記録を見れば、「両国の交渉はどうも意の如くに進行しない。日本が回答の時期を誤ることはないが、ロシアは極めて緩漫で、簡単な回答にも数週間、甚だしい場合には数ケ月間を要することがある。この交渉ぶりから見れば、ロシアの真意は開戦を欲(ほっ)するのではないかと疑う。・・・日本の与論はロシアの態度を遺憾とすることに一致している。その憤慨(ふんがい)は日々に激調をおびて来て、政府もこれを制するに苦しんでいる」と語った。更に云う、

「抑々(そもそも)極東統監(とうかん)(政治軍事を監督)とは何であるか、極東の地はロシアの領土でもなければ、その保護領でもない。何処にロシア皇帝の派遣した統監を置く理由があるのであろうか、・・・。」栗野公使の言葉は実に道理に叶っている。

栗野公使は 1903 年７月に満州問題を整理するための、一つの協定案を私と外相ラムスドルフ伯(９章 96 頁)に提示した。その案は極めて妥当なもので、ロシアがこれを承認すれば日露間の紛議は平和に解決できるものであった。案はアレクセエフ（エヴゲーニイ・アレクセーエフ（1843－1917）太平洋艦隊指令長官、極東総督・写真６章 68 頁）の処へ回付(かいふ)されたが、そのまま握り潰された。実はアレクセエフはこの案を見て、日本の誠意を見透(みとお)す眼識は無かった。ロシアは威圧的態度を示しておけば、日本は譲歩するであろうと、彼等は野心を起したのであろう。その時、栗野公使の話は決して虚喝(きょかつ)ではなく実情を吐露(とろ)（打ち明ける）したものに相違ないと考えたのである。

ラムスドルフ外相は相変わらずで、遂に断固たる決意を表示する事もなく、「自分としては如何ともすることが出来ない。この交渉は自分が担当しているのではないから」云うのみであって、ロシア政府は遂に相当の時機に回答を与えないでいた。そして、明治３７年２月９日の夜、日本の軍艦は旅順付近で我が艦隊を襲撃して軍艦数隻を撃沈させ、そして２月１０日、遂に宣戦の布告が発せられた。》と開戦時を語る。

「奉天大会戦まで」（同）《・・・１９０４年中の戦争の経過は大体下記の如であった。３月３１日　我が戦闘艦「ペトロパウロフスク」が撃沈されて、マカロフ提督(11 章 160 頁)以下乗組員の大部分が戦死した。マカロフ提督は我が極東艦隊の司令官であ

ったから「ペトロパウロフスク」(11 章 160 頁)の撃沈と、その後我が艦隊に起った戦艦の損傷とで、極東艦隊は殆んど戦闘力を失ってしまった。

４月１７日・１８日　我が軍は九連城（鴨緑江沿い）の戦いに敗れた。

４月２８日　日本軍は貔子窩（遼東半島南岸）に上陸した。これが旅順陥落の導因。

５月２８日　旅順港付近で海戦があり、我々はまた戦艦数隻を失った。

８月１７日―２３日　我々は遼東付近の会戦に敗れて奉天方面へ退却し始め、我が軍が奉天へ退却した時、総司令官クロパトキンは最早この上に一歩も退却せぬと公言した。１２月２２日　旅順が陥落した。それ以後の我が軍の敗頽は１９０５年に入ってからの事であるが、最後に奉天の大会戦に敗れて、遂にハルビン方面へ後退を余儀なくされたのである。》

「奉天大会戦」について　（同）　《翌年２月１５日―２０日まで、我が軍は奉天付近で日本軍と大会戦を戦った。総司令官クロパトキンの発した命令には、ロシア軍は如何なることがあっても奉天から北方へは一歩も退却してはならぬとあったが、我が軍は散々に敗北した。この戦闘に参加した兵数からみても非常に大規模なものであった。ロシア軍は秩序を乱してハルビン方面へ退却する他はなかった。私はロシア軍隊が奉天で受けた様な大敗北を史上でまだ見たことがない。・・・》悲観論となっている。

「クロパトキンの失脚」　(写真 9 章 115 頁)（同）《・・・日本との戦争は、戦うごとに我が軍に不利であった。敗報ばかりが頻りに伝わるので、陛下やその周囲を取り巻く寄生虫共(ベゾブラゾフ派)の心に動揺を生じる様になったのは当然である。同時にこの戦争はロシア国民の各階級を通して、前例の無い衝動を与え、全ロシアは遂に理性を失ったかの観を呈した。元来ロシア帝国は何に因ってその存在を認められて来たのであるか、それは専ら軍隊の力ではなかったか。ロシアの文化、ロシアの官僚主義的教育、ロシアの富力、その何れも世界を慴伏せしめたのではないか、それはロシアの武力を諸国が恐れたからである。今のロシアはそれほど強くない。

それは砂上に立つ巨楼であるであることが判ると、世界のロシアに対する観念は全く一変した。奉天付近の会戦が我が軍の惨敗に終わり、ロシア人の常識ある者はこの戦争は「この上継続すべきでない。出来るだけ体面を傷つけない範囲で一日も早く終局すべきである」という観念が濃厚になって来た。》と。

「皇帝に講和勧告」（同）　《・・・日露戦争中に最も思慮深く最も的確に将来を予言した論評は『ルスコエ・スロウォ』（露国外務省機関紙）に掲載されたミハイロウスキーという人物の論説であった。奉天に於ける敗戦後、彼は更に一論文を掲げて「将来リネウィチ将軍（ニコライ・リネウィチ・満州軍総司令官）から何ら期待することは出来ない」と極論した。それは極めて簡明で賛成すべき論文であったので、私はこれに自分の意見を附して陛下の秘書に送り、陛下に見せる様に依頼した。数日後に秘書からの返事が来た。それはこの論説と私の意見に対して可なり皮肉な弁駁（誤り突く論）を加えたものであった。そしてこの返書の内容は陛下が眼を通された旨が付記してあった。そこで私は更に一書を送って言った。

「私は最初からこの戦争には反対であった。私の考えではこの戦争は政治上から見て、一種の罪悪ある。それ故にこれを償う道を講ぜねばならない。が、その道は一日も早く平和を克復することである。それは一日でも早いだけ我々の利益である。何故ならばこの際ロジェストウェンスキー艦長（5章63頁・バルチック艦隊指令長官）の行動に期待をかけるなどは甚だ無理なことだからである」陛下は性来の因循（改めようとしない）と、楽観主義とからロジェストウェンスキー艦長の成功を期待していたのである。陛下は何処までもロジェストウェンスキー提督の成功を期待して、「彼は必ず日本艦隊を爆破する」と信じていたらしが、それは似而愛国者のロジェストウェンスキー艦長が支那海に現れたという一報によって、日本では大恐慌が起ったなぞと盛んに吹聴して陛下の聡明を晦ましたにも由る。》と真実性を語り出している。

「対馬沖の大惨劇」（同）　《・・・５月２７日、２８日の両日に亘って対馬沖の海戦が行われた。ロシア艦隊の全部は日本海の水底深く葬られてしまった。これが日本との戦争を惹起（引起す）した例の冒険派の事業に対する最後の打撃であった。この敗戦の後は何人も、もはや戦争の継続を思う者はいなくなった。いずれも早く講和の手段をとる必要を自覚し、この思潮は日と共にその勢を増して、遂に宮廷内にまで蔓延する様になった。陛下も遂に講和を希望するという意志を示し、私は戦争中も絶えず戦争の我々に不利な理由を説いて、一日も早くこれを停止する必要があることを主張して来たが、私の努力は何の効果も無かった。・・・対馬沖大海戦後、海軍総長アレクセイ・アレクサンドロウィチ太公及び海軍大臣アウェランは、共に辞表を出して解職した。》と疲労感で述べている。

「ポーツマス講和談判」・「ムラヴィヨフの全権辞退」（同）《・・・ポーツマス講和談判人選に走り回る時期となっていた。外相ラムスドルフ伯(1900―06 外相・写真９章 96頁)は私に次の様に話した。「ネリドフ（駐仏大使）は老齢と健康を理由に大命(ポーツマス談判役)を辞した。デンマーク駐在大使イズヴォリスキー（1906・外相）は、自分はその任に適しない。この難局に相当の成功を収めうる者はウィッテ一人である」と、殿下に言って辞した。陛下は外務大臣ムラヴィヨフ（1897－00 在）に全権の命を発した。

後日、ラムスドルフ伯爵がやってきて、「今日、陛下に謁見するので、全権について貴下の腹蔵（本心）のない意見を聞きたい。貴下はもし陛下からの委任があれば、日本との講和談判を一身に引き受けて、アメリカへ行く意志があるか」と聞いた。私は「ムラヴィヨフはどうなったのですか」ラムスドルフ伯に反問したら、「陛下の話では、ムラヴィヨフは昨日、宮中に伺候して陛下に謁見し、持病再発のためと言って全権を辞したそうです。その際、自分は望むように御奉公の出来ないと涙を流したので、陛下もムラヴィヨフは余程重病らしいと言っておられた」との話であった。

私(ウィッテ)は諸氏の全権辞退をなんと見るかと訊ねたところ伯は、「ムラヴィヨフは元来が外交官たる才能に欠けているし、また今度の談判をするために必要な研究もしていない。持ち前の功名心に駆られて飛びついただけだと。しかし利口な彼はこの談判の成否が彼の将来の栄辱（名誉と恥）に、大きな危険の伏在(隠れて存在)することに気付いたので辞退したのであろう。それにもう一つは、彼は全権に対する手当金に興味があって、十万ルーブル位は支給されると思っていたらしい。ところが私が全権の手当を１万５千ルーブルと決定している話をしたら､彼は非常な失望の色を見せた。これが彼の辞意の原因かもしれません」。と。

そしてラムスドルフ伯は国内事情からロシアが危機に臨んでいる事、講和の成立を絶対必要とする詳細を述べて、私に承諾するよう懇願したのである。

私は考えた。ロシアが講和の成立を必要とする事は言うまでもなく、その情勢を飽く事を知りながら、尚、相手に譲るところなく折衝するには、相手国である日本の内外の情勢と、その指導者の性格や技術を知らねばならない。その点において私以上の知識を有する者はいない。これはどうしても私が立たねばならないのは当然である。そこで意を決し「よろしい、もし陛下から私に直接の委任か命令があったら、私はこの件を引き受けましょう」この言葉を聞くとムラヴィヨフ伯は非常に満足の意を表した。直ぐその晩に陛下からお召状が来て、翌６月２９日に私は参内した。陛下は私が

命をお受けしたことに非常に満足の意を表され、直ちに私を講和全権に任命した。同時に陛下は、心の底から和議成立を希望するが、それはどこまでもロシアの体面を傷着けないものでなければならないと。

陛下は「如何なる場合でも一銭の償金も、一握の領土も譲渡するものであってはならぬと言った」と念を入れて述べられた。宮中の一部では「それはいかん。ウィッテを全権にするのは日本に降参する様なものだ。ウィッテは絶対的平和論者だから相手のどんな条件にも応じてしまうに違いない」とささやかれた。》と内情を述べている。

ポーツマス講和会議・「フランスの対英態度」（同）《・・・日露両国が極東で戦っている間に、ヨーロッパの政局に変化が起きていた。日露戦争前の数十年の間、フランスとイギリスの関係は疎遠（そえん）となっていた。原因はイギリスがナポレオン帝国疲弊後のエジプトからフランス軍を駆逐し、その地の支配権を握り、更にスエズ運河をも収めた。イギリスはアフリカの北部に於いてフランスと支配競争を誇示してきた。

この軋轢がフランスをロシアへの同盟に向わせ、ロシア鉄道建設公債募集に応じる経緯となっている。その結果として、ロシアの兵力は極東に移動してヨーロッパ西部国境の攻防力を弱めたことになっていた。ロシアの武力を遠く極東へ移動したことにより、フランスにとっては、露仏条約を無価値にした事になった。

フランスの与論は「日露戦争は決して起りえない」と確信していたが、フランスが日露の関係に着眼して、ロシアに対して対日態度の不遜を指摘して警告したならば、日露の紛争は破裂に至らなかったであろう。

私の考えでは、同盟国たるフランスが真に厳粛な態度で忠告したならば、ロシアは日本に対して、もっと真面目な態度で応対したであろうと考えている。

ところが戦争は始まり、ロシアが連戦連敗すると、不注意であったフランス外交当局は狼狽し、フランスはドイツとの手を握るまでの決心はつきかねていた。そこでフランスは、数年来の不愉快なイギリスとの関係を水に流して、仏英は結合する条件が整ってきたのである。》と経緯をのべている。

ポーツマス講和会議・「ドイツ皇帝の態度」（同）《・・・日露戦争は益々ロシアに不利に展開し、これに手を打って喜んだのは、ドイツ皇帝ウイルヘルムである。元来、日露戦争はウイルヘルムが、多年に亘りニコライ２世の性格を研究して、その弱点に

乗じて誘惑的暗示を与えた為に起ったものだ。その結果、北方の巨人ロシアを弱めると同時に、同盟関係にあるフランスをも併せて孤立無援の地に置くことを得たのである。これに依って同盟国を失ったと同様な立場のフランスはイギリスと握手をした。この事実が又、青天の霹靂(へきれき)となってドイツ皇帝とドイツ外交界を驚ろかした。

フランスはロシアの国力と国威が失墜したのを見て、現在のロシアの政治に失望したと同時に、将来の成り行に不安を感じていた。ロシアが疲弊し、フランスが孤立状態にあるのを好機として、ドイツ皇帝はフランスに一撃を加え、数十年は立つことが出来ない様に陥れようとする策謀計画をしているのではないかという危惧を懐き、そこでフランス政府は一日も早くロシアと日本との戦争を止めさせ、ロシアの武力を満州から移動することを熱望していたのである。》と。

ポーツマス講和会議・「私の行動方針」（同）《日本との講和談判に望み、自分の談判の立ち振る舞いの態度、行動を大体次の様に定めた。

① どんな事があっても、我々が講和を望む様な態度を見せない。ロシア皇帝陛下は周囲の諸国が戦争継続を望まない様であるから、その意を容れたに過ぎないという態度を示すこと。

② 自分は大国ロシアの全権代表者であるという顔をして大きく構える。大国ロシアの最初からこんな戦争を重要視して居ないから、その勝敗については少しも痛痒(つうよう)（痛くもかゆくもない）を感じない態度を示して相手を威嚇すること。

③アメリカにおける新聞の勢力の強大を鑑みて、記者達に対しては特に愛想よく心安く待遇すること。

④ 極端に民主的であるアメリカの人気を味方にするために、態度を簡単自由にして少しも尊大ぶる様な態度を示さぬよう注意すること。

⑤ アメリカは特にニューヨークでユダヤ人と新聞の勢力の強大なことを打算して、少しも彼等の不快を招く様な挙動のない様に細心の注意すること。私はアメリカ滞在中に以上の心得を固守し寸時も油断なく行動しなければならい。》と告白している。

ポーツマス講和会議・「私とアメリカ新聞記者」（同）《・・・アメリカの各新聞社の記者団に向って「自分は昔からロシアと親交を持続している。アメリカの地に来たことに無上の悦びを感じている。また不断に有益な、そして力強い努力をするアメリカ

の新聞に対して満腔の敬意を表す」と語った。この時以後、私がアメリカを辞するまで、各新聞の監視下に置かれ、一挙一動は悉く新聞記事の材料となったのである。

米国大統領ルーズヴェルトは談判の初めから、常に日本を支持するに努めたのは明白な事実であった。彼の同情は日本側に傾いていた。その事は当時彼が陸軍大臣(ウィリアム・タフト一行)と同行して愛嬢(長女アリス)が日本に旅行することを許したことを見ても明かである。彼は聡明な人であるから、アメリカ一般の同情がロシア側に傾いたのを見て与論に反対することが、大統領として如何に自分に不利であるかを知っていた。そこで日本に向って交渉の譲歩を勧告したのである。(日本側は新聞操作を小村寿太郎全権たちは秘密主義を貫いた)

それにもう一つ私の都合の良かったのは日本全権一行の態度であった。その秘密主義と陰気な態度が、殆んど正反対に開放的なアメリカ人の人気に写らなかった。私は談判の初めから彼等のこの欠点に気付いていたので、これを利用することを思いついた。そこで冒頭に提議した。「私がこの席で言明することは総て全世界に向って訴えようとする処である。ロシア皇帝から全権を委任された私には何等の秘密もない。故に私は日々の交渉談判の経過を新聞に公表することを希望する」と述べた。

私は日本側がこれに反対することを予見して提唱したのである。果たして日本側の同意は無かった。この私の提議と日本側の拒絶は、直ぐ新聞記者の知るところとなり、これが日本側に対する好感とは成らなかった。結局、会議毎に書記の手で会議の記録を作成し、双方の全権の検閲を経た上で各新聞社に交付することに決定した。

談判が要領を得ない原因は、日本側の検閲のためだという評判が立った。会議の席で議論を闘かわしたのは主に小村全権であった。双方とも副使が発言することは非常に稀で、私が余り横柄な態度で議論するので、或る時、小村全権は私に向って「貴下は何時でも戦勝者の様な口調で物を言う」と言った。私は「今日の場合には戦勝者はない。従って戦勝者のあり得る道理もない」と答えた。》と米国与論を見越している。

ポーツマス講和会議・「講和談判」（同）《・・・会議の後半、私がこれ以上の譲歩は決してしないから、この上会見に日を費やすことはないと言い切ってしまったので、小村全権と日本政府の間に会見を決裂させるか、私の提議を容れるかについて意見の一致を見ず、決答の引き延ばした時であった。

この時、東京では議論が二派に分れて、伊藤侯の一派は私の提議を容れることを可

とし、他の軍人派は償金を取るか、さもなければ戦争を継続すべしと主張し、共に相譲らないので回答が遷延(せんえん)した。その間にはルーズヴェルトがアメリカの人気がロシアに有利に傾いたのに驚き、私の提議を容れることを勧告する意味の電報を、直接日本の皇帝に送った。そのため東京の議論は一決して、小村全権に電報を打って来た。これは日本側の内情に精通している一通信員の談である。

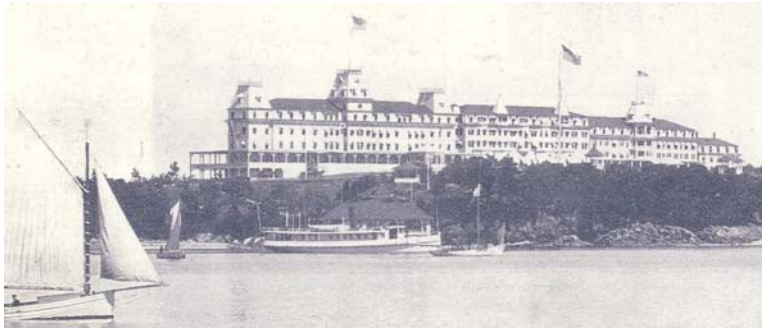
日本側随員の話では、小村全権は今度の講和条件には不同意の点があったが、東京からの命令で止む無く自己の信念に背いて調印した。しかし日本国民は彼の真意を知らないから帰国後は強い非難を受けるのを覚悟して居るということであった。》と、実に日本側の情報を的確に掴んでいる。

ポーツマス講和会議・「南樺太譲渡と皇帝」（同）《講和条件に関する陛下の訓令を見れば、私が承諾した条項には一つも訓令の範囲を超えたものはない。ただ樺太島の南半分を譲渡した事だけは訓令の外である。考えて見ればそれは賢明な処置であった。この程度の譲歩もしない様では講和の成立はなかったかも知れない。》

ポーツマス講和会議・「講和条約調印の日」（同）《・・・ルーズヴェルトは談判の進行中に私が無賠償無割譲を頑強に主張したので、私からは到底何らの譲歩も期待し得ないことを看破した。そこで彼一流の筆法で、直接に我が皇帝陛下に勧告し、そこでようやく活路を見いだし、調停者の面目を維持したのである。講和条件は私の予定より幾分か良好であったが、結局私は戦勝者でなく、戦敗者として署名調印しなければならなかった。ロシアは何十年間こんな屈辱を蒙ったことがない。私は今度の戦争の結果を恐れて始終反対した、そしてこの反対のために陛下の不興(ふきょう)（不機嫌）を受けた私が、講和締結者となり、ロシア人として忍びがたい恥辱(ちじょく)を感じながら条約に署名する役割を演じなければならないとは、何という運命の悪戯であろうか。》

更に、《・・・私は今度の使命を果たす為に、政府から１万５千留(ルーブル)を支給され、その後、更に５千留を増して総計２万留を受取ったが、尚、自分の懐から数万留を持出していた。》と述べる。

以上が『ウィッテ回想記』上の記述、すなわち日露開戦からポーツマス講和条約に至るウィッテの心境を回想記より拝見したのである。



ニューハンプシャー州ウェントウォース館、日露全権団が宿泊したホテル

ロシア全権セルゲイ・ウィッテ

『ウィッテ伯回想記・上』より

ウィッテ人物の考察　ウィッテの父はオランダ系の人で、母は露国の一名門の生まれ、妻はロシア人となる。彼はオデッサ(ウクライナ南部黒海に面した都市)大学で物理数学科卒、露国の西南地方の一鉄道会社に入り２０年間勤務。彼は鉄道の財務、鉄道の運輸経営に関する知識を得て、露国トルコ戦役の際、オデッサ鉄道の責任者として、軍隊輸送に大活躍をした。これに当時の露国鉄道専門家アレクサンドル３世帝(ロマノフ朝第１３代皇帝、アレクサンドル２世と皇后マリア・アレクサンドロヴナの第２皇子)に召され、露都の官僚界に俄然頭角を表す。鉄道以外の全経済に及び、数年のうちに大蔵大臣となり、1905 年に露国憲政政府の初代の首相となった人物である。

ポーツマス談判の末期に際し、ウィッテはよく重大危機に打ち勝った。露国の帰国の折は同胞より非難を浴びせられた。彼は一切の責任を一身に負い、講和条約の批判を甘受した。寧ろ日本より見れば、露国に有利なものであったが、国内一般の世論や新聞の論調は、彼を「半薩哈嗹(サガレン)伯爵」と呼んだ。この点は、小村寿太郎とても、自らの責任に於いて、弁解も回顧録も残さず胸にしまい込み、あの世に行った小村と実に類似しているではないか。皇帝はウィッテに伯爵を授けたが、これは露国の慣例で、皇帝は彼には寧ろ冷淡であった。

国際的な新聞報道記者ヂロン(ウィッテの首席報道係兼随行員)は、ウィッテをピョートル大帝以来の露国第一の政治家として激賞している。ウィッテの成就した３大事業は、ポーツマス条約、弊制改革、1905 年の憲法制度を改革と(国務大臣時代)、これだけの政治を成した彼は、露国のみならず世界の大政治家と肩を並べて遜色はない。

(『明治秘話・二大外交の真相』信夫淳平著・昭和３年・萬里閣書房より)

第11章　高橋是清･末松謙澄･金子堅太郎の活躍

高橋是清(1854―1936)仙台藩士。横浜の米国人医師ヘボン私塾に学ぶ。慶応３年、藩命により勝海舟の子息小鹿と海外へ留学。米国留学に横浜に滞在していた米国貿易商に騙され、学費と渡航費を着服される。更にホームステイ先で奴隷契約書にサインさせられ、奴隷として売られた事や何軒かの家を転々とし、明治元年(1868)帰国する。明治６年サンフランシスコで知遇を得た森有礼(1847－1889・外交官)に薦められ文部省入省、十等出仕(官職名上から９番目)で勤務。後に川田小一郎日銀総裁に声を掛けられ日本銀行に入行、その後、日銀副総裁の時、ロンドン留学時代の人脈を頼り、日露戦争の戦費外債公募で活躍。後、日銀総裁、貴族院議員。昭和 11 年(1936)「２・２６・事件」による青年将校に暗殺される。

そのⅠ･高橋是清の行動　『高橋是清自伝』下巻・上塚司編より概要をみる。

日露戦争開戦の直前に日本は同盟国イギリスに戦費融資を申し入れたが、ボーア戦争で多額の出費を強いられていたイギリスは、金融逼迫(ひっぱく)を理由に断ってきた。そして、明治３７年(1904)２月４日まで、日露交渉開始以来、前後１６回の協商を重ねたが談判は遂に破裂し、同月６日、日露間の国交は断絶し愈々(いよいよ)開戦の火ぶたが切られる事となる。と同時に日本政府は、戦時財政を井上・松方両元老の指揮の下に、軍費外債募集の取り纏めを緊急に朝議決定に見た。

松方伯爵より私(高橋)に相談されたが、「自分はその器(うつわ)に非(あら)ず、園田考吉(こうきち)君(横浜正金銀行頭取、十五銀行頭取)こそ最適任者である旨を答えて辞去した」。しかし園田考吉君からは、自身の健康（病より）が、到底海外行きを許さないと言って断ってきた。２月８日に至り仁川沖に於ける捷報(しょうほう)(勝報)に次いで、我が聯合艦隊は旅順を砲撃し、敵艦３隻を撃沈した報告を受け局面は一変し、大蔵大臣も松尾総裁も「高橋君を至急ロンドンに派遣するように」具申があり、２月１２日の夜、井上伯から私は呼ばれた。松方伯は「君はこの度ご苦労だが、ロンドンに行って公債の募集に当って貰いたい」と話された。

私はこの任務は重大なので、十分政府の意向を聞いておかねばならぬと思い、「仮に私がその重任を拝するとしても、政府に対し堅く約束をして貰わなければならぬことがあります。それは、政府に外債談が起これば、内外のブローカーが現れて、コンミッションを自分の手に収めようと、様々のことを政府に申立てに来る。その場合いでも、その疑も政府筋がこれに迷い、少しでも彼らに耳を傾けるようなことがあっては、

出先の者の仕事の支障となり、結局政府に迷惑が掛かるので、損失を受けることになる。如何なる者が如何なる申立てをしても、政府は一切それを取り上げず、委任した全権者に絶対の信用を置かれたい。もし政府に於いてこの決心が出来なければ私は到底この大任を引受けることは出来ません」と一言撃ち込むと、井上伯は、

「その儀誠にもっともなことであるから堅く約束する。ついてはこの注文の要件を認(したた)めて、明朝提出するように」との事なので、翌朝提出した。

出張員の注文6ヵ条　（井上伯に「政府として堅く約束する」との回答得る）

①　政府は十分なる委任条件を定め相当権限を賦与すること。　②政府は林董(ただす)英国公使に訓令して、出張員の外交上、公私共その目的に向かって十分の援助を与えること。③政府は前項の場合を除き、出張員の他に外債の用向きを間接直接申し付けないこと。④政府は外債に関し内地に於いて外国人より申込あるも一切取りあわぬこと。　⑤政府は横浜正金銀行、日本興業銀行の当事者に内命し、外国人より公債の世話等申込む者あるも一切取合あわぬこと。　⑥既発内国５分利公債の裏書付売り出を便利なりとする時はその方法を採ること。

外債募集の見積もり　この時、政府の見積もり軍費の予算を聞くと、「明治２７、８年の日清戦争の時には、軍費総額（２億３千３４０万円）の約三分の一が海外に流出しているので、今回もそれを標準として正貨（兌換(だかん)）の所要額を算定した。即ち軍費総額をおよそ４億５千万と見積り、その三分の一の１億５千万をもって海外支払いに必要と仮定はれば、目下日本銀行所有の正貨余力が約５千２百万円程あるから、これをもって海外支払いに当てるとしても、なお１億円の不足が生ずる。この不足はどうしても外債（欧米列強の戦費公債）に依るよりほか途(みち)がない。よって年内に１億円だけは絶対に外貨の募集を必要とする。最も戦時募集であるから、担保を要求されることを覚悟しなければならない。

世間に公にすることはできないが、海関税(かいかんぜい)（海港に置かれた税関）の収入をもって抵当に充てることは既に裁可も得ている。ついては速やかに出発し、年内に１億円だけは是非募債するよう努力してほしい」ということで、また阪谷次官（阪谷芳郎大蔵次官）も附言して、「この戦費は１年と見積ってあるが、これは朝鮮から露軍を一掃するだけの目的なので、もし戦争が鴨緑江の外に続くようなら、更に戦費は追加せねばならない」

ということであった。

明治３７年２月２４日、深井英五秘書役と帯同して横浜出帆の便船で渡米となる。(同船に金子堅太郎も同乗)　高橋は先ずはニューヨークに直行し、３、４カ所の米国銀行家に面会して様子を探って見ると、一般米国民の日露戦争に付いての与論は、ロシアとの戦いは、豪胆な子供が、力の強い巨人に飛掛かかったのだと言って、日本国民の勇気を嘆称(感心する)し、我が国に対する同情の表現は予想外に良かったのが非常に愉快に感じた。しかし、金融の内情は、この時代の米国に於いては、まだ自国産業の発達のために外国資本を誘致したい立場にあって、米国内で外国への公債を発行することは、到底成立しないことが理解できたので、４、５日の逗留で３月の初めに英国に向かった。

正貨・兌換、金・金貨・ポンド、又は銀本位国に於ける銀貨、その表示する価格と同じ値打ちのある貨幣。裏付けのある本位貨幣をさす。**戦費・**現在の金額にすれば、日清戦争は２、３億円=約７９００億から１、３４兆円。日露戦争は１７、３億円=約６兆の以上となる。

ロンドンでの公債交渉の経緯　私(高橋)はどうしても正金銀行との取引銀行であるパース銀行、香港上海銀行、チャーター銀行、ユニオン銀行等に交渉を進めることが最も順当と考えた。幸い旧友のシャンド氏が、パース銀行のロンドン支店長をしているので、まず同氏に会い、その紹介で頭取のバース氏、本店総支配人のダン氏などにも面会した。

これより先、ロンドンの正金支店長山川勇木君より「ロンドンでは募集の見込みがない」山川君の意は、是非アメリカで金策せよ」イギリスへ来ても恥を掻くばかりと言われていた。銀行の各責任者に懇談、英貨公債１千万ポンドを募集したい日本政府の意向を告げると、「燃えるがごとき同情を持っているが、目下の状況では日本公債の発行は容易ではない」との回答であった。

他銀行家達に区別なく公債発行のことを話して見た。しかし、いずれも円滑な進展見ることは出来なかった。この時分の銀行家たちが日本公債引受けを躊躇する原因は、当時ロシア政府はフランスの銀行家と融資提携を受けていた為に、戦争開始以来、パリ及びロンドンに於ける露国公債市価は、あまり変動なく、寧ろ上り気味であった。これに反して日本の４分利付英貨公債は(明治３０年・３２年４分利付英貨公債起債、募集額１千万磅)、戦争前は８０ポンド以上を唱えていたものが、忽ち６０ポンドまで暴落

し、日本公債に対するロンドン市場の人気は非常に悪かった。この際、日本公債を発行して応募者が無く、失敗に終わったならば、日本政府は軍費調達のためにロンドン市場を利用することが出来ないことを証明することになる。その結果、日本公債は益々暴落して、ひいては日本政府の軍費は行詰る危険を帯びていた。

内情を探って見ると、日本公債の発行に関する英国政府当局の意向が判然としないこと。また、日露戦争は白色人種と黄色人種との戦争であり、その列強諸国その不安が払拭されていなかつた。ことに、ロシア皇帝とイギリス皇帝は近い親戚の間柄（血筋）であり、英国が独り日本のために軍費を便宜調達することは、白色人種の一員として多少心苦しい点があったのである。その他理由としては、ロシアはフランスという偉大な財力の後援者が付いているので戦費には困らない。軍事力から察して、戦争は日本に勝ち味がないこと、銀行家たちが日本公債の発行を鈍らしていることが判ってきた。日英両国は同盟国ではあるが、イギリスは戦争に対しては、今なお局外中立の立場をとっていた。

私はロンドン着後、４月１０日頃になってようやく公債談に目鼻がつきかけて来た。①発行公債はポンド公債とする。②関税収入を以って抵当とする。③利子は年６分とする。④期限は５ヵ年。⑤発行価額９２ポンド。⑥発行額の最高限度３百万ポンドとし、この提案で進めることにした。

早速、日本国政府に電報を以って打診すると、日本政府は発行額の最高限譲度３百万ポンドというのを、政府の希望は１千万ポンドの半額５百万ポンドに、期限の５ヵ年を７ヵ年にして、発行価格９２ポンドというのを９３ポンドに訂正することを主張して譲らなかった。この点もついに英国銀行家の承諾するところとなったが、私が苦慮したのは、公募を発行しないうちに、市場に漏れて弊害を生ずることで、そして当時フランスの金融勢力は日本の公債発行に反対であり、この方面から邪魔が入るのを恐れがあったのである。

この如く銀行家との相談がまとまり、愈々（いよいよ）仮契約を結ぶ頃、偶然のことから一つの仕合せなことが起こった。私の友人ヒル氏が、仮契約を取り結ぶまでに運んだということで、晩餐会に招待してくれた。その時、ヒル氏の邸で米国人のシフという人を紹介された。シフ氏はニューヨークのクーン・ロエブ商会（２０世紀前半アメリカ合衆国に君臨した金融財閥）の首席代表者で、毎年の恒例（こうれい）としているヨーロッパ旅行を終え、その帰路にロンドンに着いた処であるという。

食卓に着くとシフ氏は私の隣に坐り、食事中シフ氏は頻りに日本の経済上の状態、生産の事、開戦後の人心につき細かに質問するので、私も出来るだけ丁寧に応答した。

シフ氏に、漸(ようや)く５百万ポンドの公債発行の内約が出来て満足しているが、日本政府からは、年内に１千万ポンドの募集を申付けられている。ロンドンの銀行家たちは、５百万ポンド以上は無理だというので、やむを得ず合意した次第との話をして別れた。ところが、その翌日シャンド氏がやって来て、

「パース銀行の取引先である銀行家ニューヨーク、ロエブ商会のシフ氏が、今度の日本公債残額５百万ポンドを自分が引受けて米国で発行したいとの希望を持っている」とのこと、貴君の御意見はどうであろうかというものであった。

米国銀行家も参加する　私はシャンド氏の言葉を聞いて驚いた。何しろシフ氏とは昨夜ヒル氏の宅で初めて紹介されて知り合ったばかりで、私は「クーン・ロエブ商会」と「シフ」という名前は聞いたこともなく、従って、シフ氏がどんな地位の人であるか知る由もなかった。

このことは我が政府の外交上の政策に関係することであるから、念のため電報を打って政府の意向を確かめて見た。すると政府でも何等差支えないと返事が返って来た。こうしてシフ氏との話は忽(たちま)ちまとまり、英米で一時に１千万ポンド(約１億円)の公債を発行することが出来るようになった。

私はこれを天祐(てんゆう)（天の助け）なりとして大いに喜んだ。そしてこの喜びは独り私ばかりでなく、英国人もまた非常に喜んだ。というのは、英露両国の皇室との血筋関係から、黄・白人種の戦争という点から、英国人独りが日本を援助するということに付いては、いろいろ心苦しい事情があったらしく、今度米国資本家の参加によって、日本に対する同情が英米に広がり、英国政府及び一般国民にも満足を与えたようであった。

その後、日本政府との電信交信の往復を重ね、英米両国発行の手続きを済まし、５月１１日をもって英米両国同時に募集を開始することに決定した。これより先、５月１日、日本軍が鴨緑江の戦争で全勝を博したとの電報が新聞記事に載ったので、日本公債は予想外の人気を呼び、応募申込みは、英米とも、忽ち発行額の数倍に上り、その日の３時には締切るという盛況となり、ニューヨークも同様でも、そのようであったそうである。

シフ氏が５千万ポンドというまとまった金額を引き受ける決心するに至ることは、

相当の自信があったのか、万一それが不成功に終わったならば、自分たちの組合でそれを引き受ける覚悟と資力を持っていたのか、普通の銀行家から見れば、冒険過ぎるのではないか、当時私にはそれが疑問で、その真相を解くことが出来なかった。

高橋是清

ジェイコブ・シフ

風刺画・各国は日本を恐れて「おれを睨(にら)んでるかな」『太陽』

その後シフ氏とは非常に昵懇(じっこん)となり、家人同様に待遇されるようになってから、段々とシフ氏の話を聞いて、彼がユダヤ人で在ることを知り、その理由が分かった。

ロシア帝政時代より、ロシアに於けるユダヤ人は、ロシア人に甚だしき虐待を受け、官公吏に採用されず、国内の旅行すら自由に出来ず、ユダヤ人たちは圧制に苦しんでいた。他国に居るユダヤ人の有志は、自分たちの同族を、苦境から救わねばならないと、色々の物質的に、又直接的にロシア政府に働きかけてきたが、ロシア政府は金の相談があるときは、援助を惜しまず返事をするが、それが済んでしまえば遠慮なく前言を翻(ひるがえ)してしまう歴史的経緯となっており、それ故に、ユダヤ人の待遇は何年経っても改善されることが無かった。

ロシア鉄道公債も多くはその手順で融資に至ってが、パリのロスチャイルド家(18 世紀後半、フランクフルトのユダヤ人隔離居住区から銀行家の成功者を出し、その銀行家の５人の息子が、フランクフルト、ウィーン、ロンドン、ナポリ、パリに銀行業を拡大)も非常に憤慨し、１０数年前よりロシア政府との関係を絶っていた。シフ氏の様な正義の士はロシア政治に大いに憤慨し、シフは米国にいるユダヤ人会の会長となり、ユダヤ貧民救済などに私財を惜しまない人であった。

そのようなシフの立場であったので、日露開戦に大いに考えるところがあったのであろう。そこで出来るなら日本に勝たせたい、よしんば勝利を得ることが出来なくとも、この戦いが続けばロシア国内部分裂から治まらなくなってくるだろう。かつ日本の兵は非常に訓練が行届いて強いということであるから、軍費さえ行詰らなければ、結局は自分の考え通りになり、ユダヤ人の同族は虐政から救われるであろう、と。こ

れが即ちシフ氏が日本公債を引受けるに至った動機であった。ここで少し、ロシアのユダヤ人迫害の歴史を概観してみる。

ウクライナのユダヤ人の悲史　ロシア国内に於ける反ユダヤ主義は、1470 年に発生した「ユダヤ教異端」（イエス・キリストから見て異端）を切掛けに現れた。異端の広がりにより、1487 年にノヴゴロド大司教によるユダヤ教徒追放し、1504 年にはイワン３世が、この異端信奉者を火刑にした。イワン４世もユダヤ人に対する敵意を示し、ユダヤ人を「毒薬商人」と論(あげつら)い、1545 年にモスクワに於いてユダヤの商品を焼き、モスクワでの商業活動を禁じた。

1563 年ポオツク市に於いて、キリスト教への改宗を拒むユダヤ人を川に投げ入れたりした。ユダヤ人追放令は、1610 年シュイスキー（ロシアリューリク朝断絶後に活躍した将軍）、1727 年にピョートル２世（第３代ロシア皇帝ピョートル１世の孫）が、更に 1744 年に女帝エリザベータ・ペトロヴナ（ロマノフ朝第６代ロシア皇帝、ピョートル１世の娘）が約３万５千人のヤダヤ人を、リヴォニア(現在のエストニア)から９年以内に追放するように命じた。

1762 年に女帝エカチェリーナ２世（ロマノフ朝第８代ロシア女帝）は、それまでの皇帝によるユダヤ政策を受け継ぎ、ユダヤ人の入国を許可しない政策を執ったが、ポーランド分割によって無意味となった。1772 年、第１回ポーランド分割により２０万人が、1793 年と 1795 年の分割よって７０万のユダヤ人がロシア支配化に組み入れられ、その結果、世界最大のユダヤ人口を有した。ポーランドの分割が２次、３次と行われ、ロシア国内にユダヤ人が大量に難民として流入したのである。

それを怖れたエカチェリーナ２世は、ユダヤ人の移動を禁じ、「定住区域」（ゲットー）に押し込んだ。1917 年のロシア革命の直前まで、ユダヤ人の区域移動を許さなかった。許可しない理由は、ユダヤ商人による、ロシア国内での商業活動を怖れたからである。

1801 年、帝位についたアレクサンドル１世(ロマノフ朝第１０代ロシア皇帝)は、ユダヤ人改善委員会を設置してユダヤ人を矯正(きょうせい)(再生と社会復帰)して改宗させようとしたが、ユダヤ人の猛反対にあい失敗に終わる。

次帝位のニコライ１世(ロマノフ朝第１１代ロシア皇帝)ユダヤ人の強制同化政策を取ったが、改宗したユダヤ人は少数であっが、それでも 1741 年、1844 年、1851 年と強制同化政策は全体的に失敗に終わった。

「ポグロム」(迫害・虐殺)の歴史は、1648 年、ウクライナがポーランド領時代、「フメリニツキの乱」では金品強奪した事件、５０万人虐殺事件、1734―1736 年「ハイダマク」(暴れ者・ウクライナ人蜂起軍)の集団がユダヤ人虐殺事件。1871 年、ウクライナ南部都市オデッサで発生した事件は、そのポグロムの加害者は一般人のウクライナ人の農民・町人・下層労働者となっていた。

ポグロム・ユダヤ人に集団的迫害行為、殺戮・破壊

シナゴーグ(ユダヤ教会堂)で祈る

1881 年、ウクライナ南部のポグロムは、ロシアにいるユダヤ人たちに大きな衝撃を与え、ユダヤ人の 1881－1910 年の間に３００万のユダヤ人がロシアから他国へ移住、その７割がアメリカを目指した。ロシアに残ったユダヤ青年の一部は、ロシア革命に身を投じ、革命知識人は、トロツキー、カーメネフ、ジノヴィエフ、ラデック等で、ロシア革命の政治組織の８５％がユダヤ人とも云われ、レーニンもユダヤ人説もあり、祖母や妻はユダヤ人となるらしい。カール・マルクスもユダヤ人であった。

高橋是清が担当した外債発行交渉(下記の表)　アメリカのユダヤ人銀行家ジェイコブ・シフとの出会いは、ロンドンで苦悩する高橋、そして日本の外債募集の道を決定的な影響を与えた。その成立した外債を見る。　筆者による赤字は強調を表した

英貨公債	調印・募集	発行額	年利率	担保	発行目的	発行銀行・引受人
①　第１回 ６分利付	明治３７年 ５月	£1000 万	６％	海関税 収入	公債整理 軍資充実	(英)バース、香港上海、横浜正金銀行(米)クーン・ロエブ商会、シティ銀行他
②　第２回 ６分利付	明治３７年 １１月	£1200 万	６％	海関税 収入	軍事費	同上

③　第１回 ４分半利付	明治３８年 ３月	£3000 万 期限 20 ヵ年	４、50 %	煙草 専売金	軍事費 公債整理	(英)バース、香港、横浜、 パンミュール銀行 (米)クーン・ロエブ他
④　第２回 ４分半利付	明治３８年 ７月	£3000 万	４、50 %	煙草 専売金	軍事費 公債整理	(英)バース、香港、横浜、 (米)クーン・ロエブ他 (独)ワールブルク商会、ドイツ銀行他
⑤　第２回 ４分利付	明治３８年 １１月 償還期 1931 年 1 月	£2500 万	４%	無担保	公債整理	(英)バース、香港、横浜、ロスチャイルド、(米)クーン・ロエブ他、(独)ワールブルク商会、ドイツ銀行他、(仏)ロッチルドフレール
⑥　5 分利付	明治４０年 ３月	£2300 万	５%	無担保	①　②　整理	(英)バース、香港、横浜、ロスチャイルド、(仏)ロッチルドフレール (米、独は参加せず)

(出所)『帝国国際文化』(帝京大学メディアライブラリー)１９号「ジェイコブ・H・シフと日露戦争―アメリカのユダヤ人銀行家はなぜ日本を助けたか―」二村宮國著より

1904年にロンドンで発行された外国政府債　　(同著書)

月	発行政府	利率(%)	発行価格(%)	発行時の利回り(%)
２月	エクアドル	4	６８	５、８８
５月	日本	6	９３・１/２	６、４２
５月	キューバ	5	９７	５、１５
６月	ギリシヤ	4	８４	４、７６
７月	中国	5	９７・１/２	５、１３
１１月	日本	6	９０・1/2	６、６３
１２月	メキシコ	4	９４	４、２６

※５月、１１月の発行公債は日本の利息の高いことが分かる。欧米に於ける信用度の問題か、日露戦争に於ける不安情報なのか、日本の利子が割高になっている。

シフは 1904 年から翌 1905 年まで５回に亘り、日本の外債発行に参画し、その合計額は１億 9600 万ドルに上り、ニューヨークでは、第１次世界大戦前では前例のない空前の規模の額となっている。クーン・ロエブ商会首席代表ジェイコブ・シフの力がいかに大きかったかを知ることができる。

シフの履歴　ジェイコブ・ヘンリー・シフ(1847－1920)はドイツ生まれ、ユダヤ系アメリカ人。フランクフルトのシフ家は１４世紀に遡る家柄、敬虔なユダヤ教徒の父と折り合い悪く、1865 年に１８歳の時アメリカへ移民、1870 年帰化。職業からクーン・ロエブ創業者アブラハム・クーンと出会い、1875 年に投資銀行クーン・ロエブ商会に入社。クーンの娘と結婚、パートナーとなり社内を固める。クーンの引退後、1885 年以降経営トップに昇格。クーン・ロエブ商会は、南北戦争後のアメリカ国内鉄道建設の鉄道債券を取り扱い急成長した。1893 年の世界恐慌後、各投資銀行の再建統合の主導権を握り、鉄道王エドワード・H・ハリマンと提携、２０世紀の初め、クーン・ロエブ商会はモルガン商会に次ぐ地位をウォール街に確立した。

ジェイコブ･シフの意図は何処あったのか　「ジェイコブ・H・シフと日露戦争」二村宮國著より参考にシフの意図を考える。高橋是清はシフとの出会いを「天佑」と喜び、その出会いに感謝している。しかし、シフと高橋の出会いは偶然ではなかったのである。シフの方から計画的に高橋に近づいたと考えるべきである。N・W・コーエン(ナオミ・W・コーエン、JACOB H. SCHIFF、ニューイングランド：ブランダイス大学出版、1999 年)のシフについての最新の研究によれば、日露戦争開戦直前の 1904 年２月、ニューヨークのシフ邸で開かれたユダヤ系アメリカ人指導者たちの集まりで、シフは次のように述べたという。

「７２時間以内に日本とロシアは開戦する。私は日本への資金協力を実行すべきかどうか検討している。計画を実行に移した場合、ロシア国内のユダヤ人にどのような影響を及ぼすか、皆さん判断を伺いたい」とアメリカユダヤ人会で述べている。

既にこの年初め、シフのクーン・ロエブ商会は日本への資金協力を検討し始めていた。セオドア・ルーズヴェルト大統領もアメリカ国内世論も日本寄りであり、会合でユダヤ人指導人たちは日本への協力に好意的であったと、コーエン氏は述べている。

英国に於いても英国王室を巻き込んだ日本の外債募集となっており、政治的な動機だけでなく、東ヨーロッパ諸国に於いても特に帝政ロシアのユダヤ人迫害は、ポグロ

ム(大虐殺)に広がり、1880 年の復活祭の季節になると毎年のように発生していた。ロシア圏からのユダヤ人たちは迫害から免れるために、アメリカへユダヤ人の移住者が激増、1880 年に２０万人、1890 年に３０万人、1900 年から第一次大戦までの間に１５０万人がアメリカへ渡っている。その全米にいるユダヤ人が結束することによって、ロシア圏にいる同胞を擁護して保護することを考えていた。

シフはアメリカのユダヤ人救援委員会が組織され、その代表として、セオドア・ルーズヴェルト大統領、ヘイ国務長官に書簡を送り、ロシアに対して抗議している。そして、日露関係が緊迫し戦争は不可避の情勢になったとき、シフは戦争が帝政ロシアに打撃を与え、ユダヤ人迫害政策が改められる切掛けになると考えていた。

シフはポーツマス会談に乗り込んだ小村壽太郎外相の交渉上にも、強力な後ろ盾となった。ロシア全権のセルゲイ・ウィッテ伯の覚書で「ロシアは資金を使い果たした。国際信用は地に堕ちた。内外で公債を発行することはもはや不可能だ」と資金調達の不可を記している。

日露戦争後のシフと日本　日露戦争終結後もシフは日本人の友人であり続け、日本財政の非公式顧問として日本支援を続けた。シフは南満州鉄道の権益がポーツマス条約で、ロシアから日本へ譲渡されるのを見て、アメリカ鉄道王、エドワード・H・ハリマンが買収に動いたとき、シフは支援として日本の満鉄を米国への売却を働きかけている。1908 年８月書簡で高橋に、「南満州鉄道への日本の投資負担を取り除くために、ハリマンへ売却してはどうか」と提案したが、日本政府は売却に同意するどころか、満州への進出意欲が強く、シフの提案は不成功に終っている。

日露戦争中の 1905 年１月、日本政府は「周旋(しゅうせん)尽力少なからず」として勲二等瑞宝章を授与し、講和成立後の明治３９年(1906)、日本政府は再び勲二等旭日重光章を明治天皇から直に授与することをシフに通達し、３月２８日、皇居で外国民間人として初めて明治天皇に会っている。

フランス資金とドイツ資金がどのように日本へ齎したか　この章の終にフランス国の日露講和の思惑について考える。当時、フランス国はロシアに日本円で７０億円の資金を貸し出していた。日露講和が囁(ささや)き始めた頃のフランス国の思惑を探ってみる。

日露講和会議の前、１９０５年３月２８日、当時、ロンドン滞在中の高橋是清の処

へ、パンミュール・ゴルドン商会の代表者コッホの仲介で、パリ株式会社仲買委員長ヴェルヌイユと極秘の会見をした。この接触はフランス側の希望によるものであったが、しかしこれはヴェルヌイユの個人的希望から出たものではなく、実は当時のフランス首相ルーヴエの内密の指令に基づくものであった。

『高橋是清自伝』高橋是清著(下巻)「フランス資本談と近づく」の頁に、《明治３８年３月２８日午後４時、約束通りコッホ氏の事務所で、極秘裡にヴェルヌイユ氏と会見した。氏の言は、「自分は大蔵大臣ルビエ氏の申付けによって貴君に御面会を求めた処、早速御承諾下さってありがとう。御承知のごとくフランス国民は従来から巨額の露国政府の公債に投資している。今日では日本の金額にして７０億円位にも上っている。そういう深い経済関係を持っているフランスとしては、いつまでも戦争が続くことは非常に憂慮に堪えない。一日も速かに平和になることを希望して止まない。

又我々フランス人は、今日まで少しも日本の真価を諒解しなかったことを恥じる次第である。これに反し、英国の如きは流石(さすが)に機敏であって、団匪事件(義和団事件)の時に、早く日本の兵力を認め、次いで日本と同盟するに至った。故に大蔵大臣のルビエ氏の言うには、この際、速かに講和することを希望するが、これまで連戦連勝の日本が勢いに任せて、もし償金を要求するということになったら、ロシアはそれを納得しないので、そうなれば講和は成立の見込みがない。もし日本が償金を取らずに講和をするというのであれば、フランスは日露両国の間に介入し、露国政府を促して講和をさせるようにしようと思うが、貴君の意見はどうですか、これが自分の使命である」と言うから、私(高橋是清)は、

「これまでの戦争の例を見ても、和議をするに当って戦争に勝った国が、償金を取らぬということは殆んどない様である。自分の考えでは、日本が予(あらかじ)め償金を取らぬということを条件として、講和の談判を進めることは出来ないと思う。且つ左様な条件では政府が、如何に平和を希望しても、国民が承知しないであろう」と答えると、ヴェルヌイユ氏は、

「なるほど貴君のお説は一応御尤もであるが、今日、日本の兵は連戦連勝であるが、戦いをしている所は支那の領土内で、未だ日本軍はロシアの域内を寸地をも侵していない。日本が飽くまでも償金を求め、ロシアがこれに応ずるということは、日本兵が少なくともモスコーまで進出しなければ出来ないことである。それは日本に取って容

易ならぬことと考えられる。而してルビエ氏の考えは、日本政府が償金を取らなければ、財政上苦しむであろうから、その償金の代りに、新たに５億乃至７億円くらいの日本政府の公債を起こすために、パリ金融市場を開放したい。そうすれば、日本政府は永遠に富裕な仏国市場を使用することが出来るので、一時に取る償金以上の利益となるから、この際は償金を求めず、和を講ぜられるよう希望するのである」と言うことであった。それで私は、

「しからばそのことを内々日本政府に打電して、政府の意向を聞いてみようか」と言うと、ヴェルヌイユ氏は、

「ルビエ氏の意向はこの際日本政府の考えを聞いて貰いたいというのではない、ただ貴君がどう考えているかを聞けばよい。すでに貴君の考えが分かった以上、それでよいのである。この戦争はロシアの敗戦によって落着しても、ロシアは他日、必ず日本に対して報復の戦争を起こすことは明らかである。そうなって困るのはフランスである。故に日本とも経済関係を密接にしておけば、他日、日露の間に紛糾が生じても、フランスがその中間に立って、その間を調停することが出来る。というのがルビエ氏の意中である。就いては、今後フランスとの経済関係を密接にし、戦争終了後は早速パリにて日本公債を発行されるよう希望する」と高橋に伝えたのである。》

フランス国は 1905 年３月頃（奉天会戦後列強は日本勝利を認めていた）より、日本の勝利を見通し日本への融資を摸索し始めいて、パリの金融市場を日本公債のために開放する姿勢を見せて、日露談判の無償金による講和を促していたのである。この時期の事情としは、フランスはロシアと同盟関係にあるため、日本公債を直ぐには発行することは出来なかったが、ポーツマス講和条約が９月５日に調印されると、フランスは日本へ急接近したのである。

９月８日、ロンドン滞在中の高橋の下へ本国政府から急電が入り、「第１回及び第２回の英貨公債２、２００万ポンド、並びに国内の第４回及び第５回６分利付き国庫債券２億円を整理するため、フランスを加えて、無抵当、４分利付き長期公債、発行価額９０パーセント以上で、３億ないし４億円の外貨を発行したいから、そのような条件で直ちに内交渉を始めよ」と訓令を伝えてきた。続いて９月１２日、「速やかにパリ株式取引所のヴェルヌイユ氏と交渉を進めよ。・・・」と連絡が入る。

この様に日本は戦後処理のための最初は、外債発行の半分はパリで発行を予定し、

その間、ロシア公債との兼ね合いを見ながら発行する会談を進めた。フランス政府は、１１月１３日パリ駐在の本野公使を通じ、「日本はロシアより先に公債募集に着手してもさしつかえない」と正式に回答があり、発行期日等を協議して発行条件を決定したのである。（図表 139 頁表参照）

日本国は日露戦争の全戦費１４億６、４２０万円の内、約半分が英国・米国・独逸の資本で賄い、ロシアは全戦費１５億２、４００万ルーブルの内、６億８、１５０万円を仏国・独逸の資本で賄った。日本は日露戦争終結後、フランスの資本が組み入れられ、ロシアは英国の資本が流入し、日仏協商、英露協商を作り出して行く経緯となって行く。こうして観て行くと、日露戦争は、国際政治・金融の両面に於いて、典型的な国際戦争であった事が判る。

余話・日本は公債の返却をどの様にしたか　ここで戦費公債に付いて確認しておく。ユダヤ資金の莫大な公債借入金をどのように返済したのであろうか。調べて見ると、返済完了したのは８２年後、昭和６１年(1986)と成っていた。先の太平洋戦争敗戦後の日本は、米国勧告による関係国に、「日本の戦後復興のためにアジア諸国に向かって、戦争賠償金を多額しないようにと進言」して呉れた。米国の協力は戦後日本の経済成長を誘導して、今日の日本経済発展を見たのである。日本国民感情は、お世話になった米国への感謝と報恩の気持を抱いている。しかし裏面にユダヤ系アメリカ人たちは「貸したお金はキチント返して頂きたい」という本音をアメリカ政府にお願いしてあったのである。因って日本政府はユダヤ公債の返済を最優先した結果、返済が完了した。米国の日本へ戦後指導は、ユダヤ資金返済誘導策にあったことが凄いことである。乱暴な言及としてユダヤ資金返済拒否は、米国と開戦し米国に勝利すれば返済不可であるとか、そのための戦争説もありやと聞く。

そのⅡ・末松謙澄（1855－1920）福岡県生まれ、大庄家の４男。東京日日新聞社の記者。明治８年伊藤博文の知遇を得て外交官としてロンドンに赴任、ケンブリッジ大学に学ぶ。衆議院議員、逓信大臣、内務大臣など歴任する。ロンドン在学中に『源氏物語』を英訳し、この時代の欧州では日本国は中国の一部で有ると思われていた時代、末松はなんとか欧州の人々に「日本」を知ってもらいたい一心で、英国人匿名で『The Identity of the Great Conqueror Genghis Khan with the Japanese Hero Yoshitsune』（「日本の偉大なヒーロー義経の正体は、

征服者ジンギスカン也」)という題名の冊子を刊行した。物語は水戸藩の『大日本史』やシーボルトの『日本』等からヒントを得て、末松の文才も兼ねた論文とし、“英国人が書いた論文”として平然としていた。末松謙澄という男は優れた外交センスの持ち主で、恐らく日本外務省も裏で操作があると思えるが、ロンドンから史実論文として欧州で発表したことは、大変優れた政治家といえる。この物語を後世から観れば、沿海州から満州方面に源義経が遁走した地域に、ジンギスカンが大帝国建国を成して行く発想、新列強国にのし上がる日本の認識を見事に述べている。沿海州の地は昔々、源義経が活躍して足跡を残した地域であると暗示（その地域に日本人は戻る）させ、日露戦争後の談判には、沿海州を日本へ還付問題を提議した事実を考慮すれば、政治的意図を思わざるをえないのである。末松謙澄明治３７年２月、イギリス・フランスへ日本を有利に導く為、「黄禍論」と「日本は正義の日露戦争論」を欧州へ広報活動し、岳父伊藤博文侯爵の熱い期待に応えている。(拙著『ジンギスカン即源義経説・流布の顛末・電子書籍９章を参照。『青萍・末松謙澄の生涯』玉江彦太郎著。『末松謙澄と防長回天史』金子厚男著。)

明治政府の凄い処は日露戦争限定した事　明治３７年２月１０日よりの日露開戦は、この戦争をどの様に終結させるかが、政府首脳にとっては最大の難問であった。弱小国が強大国と戦って勝利するには、戦略的に戦争の局面と和平の時期を想定内収める「限局(げんきょく)戦争」を想起し、その上で戦争開始しなければならない。と、日本政府首脳(特に軍部)たちは考えていた。そして緒戦の短期間の間に、激しくロシアを叩き、予定していた戦闘範囲内で、６分４分の勝戦(かついくさ)を挙げ、その状態を維持して戦争の局面を膠着状態にして第三国の介入と斡施(あつせん)役を買って出てくれる国を俟つ、その斡旋指導の下に講和に持ち込む、これを小国が大国ロシアに勝利する「限定戦争」の収め方の上策と考えていた。

日本は先ず、ロシアとの戦争を世界的規模の戦争に拡大させないように細心の注意を払い、列強から日本に有利な国際情勢の環境作り、列強国に日本贔屓になってもらう広報活動に努めなければならないと、日本政府首脳は考えていた。

斯(か)くして、このように洞察した日本政府主脳は、我が国の戦争目的を、中立国の欧米列強に対して、明確に日本国土を守る正義の日露戦であることを広報し、欧米の国民に日本支援を与してもらう世論を作り出す必要があった。当時の国際情勢を分析すれば、日露戦争が拡大する危惧的要因が二つ存在していた。

一つは、中立国の欧米列強が何等かの要因で、新たにもう一つ別の戦争ひき起こす

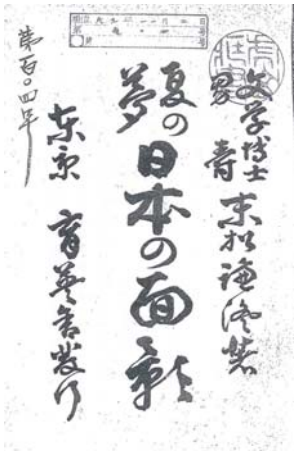
かも知れない危惧が想定された。二つ目は、欧米列強が人種的、宗教的にもロシアと似ていることから、１０年ほど前の「黄禍論」を再燃させたり、あるいはキリスト教徒対異教徒戦争説(白人対黄色人戦)を鼓舞したりする可能性が充分あったのである。

日本政府が最も恐れたのは、キリスト教国対異教(仏教)国戦争を列強が煽ることにより、欧米諸国が日本を共同敵視することを、なんとしても防ごうとしたのである。

日本政府は、開戦後直ぐに、アメリカへはハーバード大学卒の英語に堪能な金子堅太郎を派遣し、ロンドン・パリへはケンブリッチ大学に学び英語に精通した末松謙澄を派遣なる。日露戦争於ける日本の戦争目的について、現在でいう処の海外広報活動を強力に押し進めることであった。末松謙澄の広報は、「黄禍論」による扇動される新十字軍の提唱に全力で反論すること、「百方千方ヲ黄禍論打撃ニ尽シ、以テ欧州諸国ノ共同干渉ヲ防禦スベシ」とする「豪命」(末松が使命を豪ってそう呼んだ)と呼び、覚書の使命の真の意味を強調したのである。末松の使命は日本政府の正義の戦争である事を「海外広報活動」に依って欧米国民に理解してもらうことであった。末松謙澄は明治３７年２月１０日、アメリカ経由で欧州へ向かったのである。

末松謙澄と生子夫人(伊藤博文の次女)

岳父伊藤博文



『夏の夢日本の面影』日本文化を紹介

※日本訳の緒言は欧中著書二種あり『昇天旭日・ゼ、リッスン、サン』『夏の夢日本の面影・エ、ファンタシーオフ、ファール、ジャバン、オーア、サンマル、ゾリーム、ダイアログ』。バーサ・クレイ『ドラ=ソーン』を翻訳、『谷間の姫百合』で発表。明治１２年(1890)『義経=ジンギスカン説』英文論文発表。

末松謙澄ヨーロッパへ赴く　明治３７年２月４日午後、御前会議(天皇・元老・閣僚による)の末、遂にロシアとの開戦への決議が裁下された。この緊迫した２月５日朝早々に永田町の総理官邸を訪ねた。末松は桂と小村外相も同席の元で、桂首相は、何分にも

早急な要請と言いながら「できるだけ速やかにヨーロッパへ旅立ってほしい、ロンドンを中心に言論活動を開始し、彼らの同情を醸造して、黄禍論の再発を防止してほしい」と要請した。末松はその時の両大臣からの要請の趣旨を書き残している。

『日本外交文書』４５９・明治３８年１０月２８日、《末松男爵ノ帰朝ニ関スル件、附記・末松男爵復命書、　復命書　　一昨明治３７年１月下旬日露外交方ニ危機ニ迫ル、謙澄会々相州大磯ニ在リ、一夕桂総理大臣会見ヲ求ムルノ急電ニ接シ上京ノ処、総理大臣並ニ小村外務大臣列席ニテ、急ニ泰西行ノ事ヲ嘱セラレタリ、其趣旨ノ要点ハ左ノ如シ。》その６項目あるが３項目のみ下記に記す。

《「所謂、黄禍論ハ、泰西(西の果て=西洋)諸国ノ人心ヲ感動シ易キ議論ニシテ、今方ニ泰西ニ勃興(勢力盛ん)セリ。此論、若シ我全力ヲ尽シテ対抗セザレバ、欧羅巴諸国ヲシテ、我ニ対シ事実上共同敵視ノ態度ヲ取ラシムルニ至ルノ虞アリ。因テ百方千方力ヲ黄禍論打撃ニ尽シ、以テ欧州諸国ノ共同干渉ヲ防禦スベシ。」》とある。

政府首脳から受けた渡航使命を、後に「豪命ノ使命」と呼び、この使命を受ける前に末松は、伊藤、山縣へ献策の書簡を提出していたので、「微力ナガラ直チニ進ンデ、其重任ニ当ルコトヲ諾シ」と末松は述べる。

《右ノ要旨ハ両大臣ノ面語(面談)スル所ナリ・・・米国経過中、米国ノ諸新聞ニ先ツ、我主張ヲ明ニシ大統領并国務卿ニモ面会シテ、説ク所アリ間モ無ク欧州ニ渡リ主トシテ倫敦、次ニ巴里ニ居ヲ占メ広く欧州各邦ヲ精神的戦闘ノ相手トシ、豪命ノ諸点ニ向テ有ラン限リノ精神ト労力トヲ費シ、其成功ニ勉メタリ・・・今回ノ大役ニ関シ泰西ニテ我邦ノ用意周到ニシテ、能ク大局の勝ヲ制シタルハ独リ軍事上ノミナラストシ、謙澄ヲ遣外セラレタル事ノ如キ、亦其用意周到ノ一トシテ、之ヲ数ヘ我政府ノ措置ヲ称賛シタルモノ数多之レアリ、謙澄ハ此行ニ聊カ犬馬ノ労ヲ尽スヲ得テ、従テ我政府当局者ヲシテ其令聞(命令)ニ此一事ヲ加ヘシムルコトヲ得タルハ、実ニ自カラ光栄トスル所ニ有、之候敢テ数言ヲ記シテ高聴ヲ冒涜仕候也。　明治３９年　男爵末松謙澄(印)　総理大臣侯爵西園寺公望殿　外務大臣子爵林　薫殿　》

斯くして、末松は横浜港からアメリカへ渡った。「大統領并国務卿ニモ面会シテ説ク所・・・」「米国経過中、米国ノ諸新聞ニ先ヅ我主張ヲ明ニシ・・・」(同文書・459)　末松の広報活動は欧州だけではなく、米国を含めた世界的な規模で活動を考えていたことが判る。末松は３月１４日、１８年振りにロンドンの土を踏んだ。

末松謙澄の政治家としての名演説　第二軍が塩大澳(えんたいおう)(大連北方)に上陸して南山へ向け進撃を開始した５月５日、地球の反対側ロンドンに於いて、末松謙澄はコンスティチューショナル・クラブ(ノーサムバーランド通り 29 番地・1962 年まで存在)で講演演説に望み、演題は「日英極東問題観」で日英関係の歴史的概観の話から入った。(『ポーツマスへの道』村松正義著・原書房より)

演題は「日英極東問題観」《「・・・５０年昔の 1854 年でしたが、日本は、初めてアメリカに対し港を開きました。間もなくイギリス、ロシア、フランス及びその他の西洋諸国が、２、３年の間に次々とそれに続いたのであります。その同じ年ですが、イギリスはフランスと一緒なって、ロシアに対しその本国に近い黒海で戦うことになりました。その結果、極東における英仏両国の連合艦隊も、ロシア艦隊を追跡してカムチャッカ沿岸のペドロパブロフスク・カムチャツキー要塞（カムチャツカ半島南東部）を攻撃したのです。その間に諸君は、諸君の提督を最も悲劇的な終焉でもって失ったほか、大きな反撃を受けて２百名もの損失を出しました。最後に、増援を得て、イギリス軍は、その要塞を占領し破壊しましたが、しかしロシア艦隊は、霧を利用して、１ヵ月前に逃げてしまっていたのです。

しかしながら、その逃走したロシア艦隊も、悲しむべき難破事故にあい、生き残った者たちが、日本に助けの手を求めて来ました。我々は諸君とロシアとの間で何が起こっているのか判りませんでしたし、またその問題に関係もありませんでしたが、同情の気持ちから、その生存者らを充分に処遇した訳です。

我々は、伊豆地方の戸田という所で、彼らを庇護しました。(1854 年地震によるディアナ号沼津沖で沈没・プチャーチン以下 47 人「新造船戸田号」は露国へ帰国)　そして彼らは、その場所で、本国へ帰る為に新しい船を造ることを望んだのです。我々は、彼らに資材を与え、我々の船大工や職人も貸しました結果、彼らは二隻のスクーナー(２本マスト式の帆船)を建造することに成功し、私の記憶が正しければ、和親条約を結んだ後、それらに乗船して日本を離れたのです。

1861 年には、所謂(いわゆる)対馬事件が起りました。対馬は諸君もよくご存じのとおり、朝鮮海峡に位置した島、日本にとって最も重要な戦略的拠点であります。問題のその年に、ロシア艦隊が突如としてその島にやって来まして、海兵隊を上陸させ、明らかに同島を略奪しょうという意図で、その一部を占領したのです。

これは、何の根拠や理由もなしに、また事前に何の通告や外交交渉も無しに、しかも、ロシアが数年前に条約で以って我々と友好な交際に入っていたという事実に拘らず、また災禍(さいか)の折には、我々が彼らに救援の手を差し伸べたにも拘(かかわ)らず、行なわれました。勿論(もちろん)同島の官憲からも、続いて中央政府からも抗議をしましたが、ロシアの外務省は何の留意もしませんでした。その時ですが、イギリス艦隊がその現場に姿を見せまして、ロシア人の即撤退を求めたのであります。その要求は聞き届けられ、対馬は日本へ救い返されました。

1868 年に、我帝国政府の新体制が発足しましたが、それに先立つ数年の間、日本は尊皇を主張一派と、幕府を擁護する他派との二大派閥に分かれていました。当時日本では、精力的で賢明なハリー・パークス卿(幕末から明治初期１８年間駐日英国公使)が、イギリスの代表となっていましたが、グローバーやローザー、それにイギリスの立派な現駐清国代表アーネスト・サトウ(日本滞在 1862 年から、1895－1900 年・駐日公使)といった人々も居りました。彼らは皆、やはり同じ様に精力的で冒険好きな代表者を首長とした外国の熱心な佐幕派支援に対抗して、尊皇派を支持しょうとするパークス卿の指導に従ったのです。それらの事実は、大部分が秘密外交史の書かれざる頁の中に含まれていますので、日本でさえよく知られておりません。ましてヨーロッパでは、猶(なお)更(さら)のことです。しかし一つの事だけは確かであります。それというのも、イギリスが我が帝国の統合に向けて大きな働きをしたと云うことであります。

1874 年になりますと、台湾の原住民が多くの日本人を殺害するという、所謂台湾事件が起こりましたが、これがついには、日本と清国との紛糾問題へまで発展したのです。しかしその紛糾も、当時の駐清英国代表が差し伸べてくれて、仲介により結局平和裡に解決しました。

また 1885 年に、巨文島(コムンとう)事件(1885 年イギリス東洋艦隊が占拠した事件、ロシア極東艦隊を遮断するため)というものが起こりました。この事件は、簡単に言いますと、こうなります。つまり、ロシアが韓国から巨文島をひったくろうと企てたのであります。しかし諸君のイギリスは、このロシアの動きに強く反対を示し、対向処置として、即座に巨文島を占領し、そこでついにロシアにその計画を放棄させることに成功したのです。この目的が、諸君の望んだ通りに達成されますと、当然に諸君は、その後まもなく巨文島の占領を止めました。この事件は、直接には日本自身に関係ありませんでしたが、しかし我国も、それによって同じように利益を得たのです。

1894年と1895年に於ける我国の清国との戦争では、大英帝国は中立を守ってくれましたし、全体的に言って日本に友好的でありました。若干の人は、イギリスも三国干渉の際に更に一歩を踏み込んでいたかも知れないと言いますが、しかし我々はそれについて非難を致しません。諸君が超然として加わらなかったということだけで、我々には充分であったのであります。その戦争の間に、我々の西洋諸国との条約の改正が実現し、日本も、他の国々と平等の立場に立つようになり、初めて文明諸国の仲間に入ることを認められました。この問題で、他の列強に先駆けて、指導とイニシアチブを取ったのは、諸君の大英帝国であったのです。

また、旅順がロシアに占領された時、大英帝国は威海衛(いかいえい)を占領（日英が了解の下ロシアを牽制するため英領とする）しました。これは、ロシアの侵略に対する対抗処置として意図された以外の、何ものでもありませんでしたし、その賃借権も、ロシアの占領と明らかに共存するようにとりなされたのです。これぞ、それ自身、ロシアと大英帝国との相反する利益の証しでもあります。

義和団の蜂起と、列国の連合軍による各国公使館救出のため北京への進撃ということが起こってきました。ロシアの内密な企図を抑制し、・・・イギリスとアメリカと日本とは一緒になって立ちはだかったのでありました。》と、幕末から明治黎明期にかけての英国諸君に感謝の気持ちを乗せて熱弁、更に、同盟・宗教論に話が及ぶのである。

演題「日英同盟の成立の話」 《・・・それから、1902年にイギリスと日本との間で同盟条約成立、がやってきました。満州問題は当時まだ終結しておらず、イギリスはその事実について完全に知っていました。・・・諸君は、極東で大きな商業上の利益をもっていますし、政治的な利益も少なくありません。それらの利益を保護することが、諸君にとって必要だったのです。

諸君の偉大な帝国の利益のうち、わずかな部分しか極東には存在しませんけれども、諸君がその利益を失うことは許されませんでした。・・・諸君が保護しなければならない利益が、実は日本の利益と同一なのであります。日本も、その利益と安全を防禦して擁護するためには、イギリスと全く同じことをしなければならないのです。》と、英国民の琴線に触れる、「ヨイショ」の弁舌が冴えわたるのである。

演題「日本は宗教に最も寛容な国」 《・・・我々の道徳規範や理論規定は、若干の

点で日本の方が最も発達しているかもしれませんし、他方また幾つかの点で西欧諸国の方がもっと発達しているかもしれませんけれども、諸君等と全く同じです。善意か道徳の問題に関する場合、日本人も西欧の親友がそうするのと同じ考え方をもち、同じ方法で行動するということです。

例えば、赤十字社という組織は、日本でも非常によく活動しています。その会員は、約百万人で構成され、年間の寄付金も、約２百万に昇っています。それは、天皇および皇后の直接のご援下にあります。しかもこのことは、すべて宗教とは関係なく行われておりまして、日本は、宗教については最も寛容な国となっております。

良心の完全な自由も、憲法で保障されていまして、ほんのわずかな差別さえ、法律上で、宗教を理由にしてはなされません。社会的付き合いに於きましても、それは同じであります。

ここで、一つの例をお話しましょう。昨年の秋に亡くなりました片岡さん(片岡健吉・明治 18 年洗礼を受ける)は、プロテスタントでありましたが、しかも最も大きな政党の指導者の一人でもありました。彼は、数回の会期にわたり、議会の衆議院議長でありましたが、現職のままで逝去しました。彼が最も好きだったものに、賛美歌がありましたが、まさに臨終の床にあって、彼は、その友人や親戚の者にそれを歌うことを求めまして、それを聴きながら他界したのです。

救世軍も、彼らのイギリス士官の指導を受けて、我々の通りをパレードしております。いや、モルモン教徒でさえ説教することを許されております。これらの事実を見れば、我々国民には過ぎるくらい寛容である事に、お気付きでありましょう。》

演題 「日本は決して好戦国にあらず」 《人々は日本人が戦争に勇敢であり、よく戦うと話しています。恐らく、これは本当でしょう。しかし、もし我々が戦う国民とだけに考えられるならば、遺憾とすべきです。・・・我が帝国の車輪や動きを規定する日本のいわば頭脳が、西欧的な流儀の思想や推論によって活気づけられ、これからも活気づけられていくだろうということと同然なのであります。

これからの西欧的指向は、軽率な衝撃で行動してしまう危険から、日本を守ることに役立つでしょうし、また、一つの国家をなす日本に対して、その国際的責任をもっと感じさせるようにもなっていくことでしょう。

また日本の軍人等が、その上恐るべき敵に対して大きな成功を勝ち得た後に、落着

きを失い手に負えなくなるのではなかろうかといった懸念も表明されています。しかしこのことについては 少しも心配ありません。我が軍は、徴兵制を基礎にして出来上がっております。軍人たちは、愛国的であり、進むことを命じられた時には華々しく戦いますが、しかし、生まれつき好戦的なのではありません。

寧ろ平和を好んでおり、更に申せば、完全な秩序と規律が彼らの間にみなぎっているのであります。ロシアとの外交が断絶した調度１日後のことでしたが、私が日本の首相たる伯爵・桂将軍に会いました折、彼は、ロシアとの長期に亘って交渉期間中も、我が陸海軍のうち誰一人として、彼のもとにやって来て彼らの外交上や政治上の意見を開陳(自身の心を有りのまま述べる)して、同首相に迷惑をかけるような者はいなかった。と私に語りました。このことによっても、多分に、我が軍の性格がどのようなものであるかについて、お考えいただくうえで役に立つことでしょう。》

（演題の「日本の近代化の成功」・「日本と中国」・「日英米の関係強化を訴える」・「日英同盟の強化と永続を求めて」は省略する。）

末松は、１０月に入ると持論の発表の形を変え、『ウエストミンスター・ガゼット』紙に「日本における兵士の養成」、「徴兵制」をイギリス人の研究に対して発表している。１１月には「日本軍はなぜ強いか」、「日本の大変革」記事を数社のジャーナル誌に発表。１２月には「日本の宗教」、「日本側の捕虜および負傷者待遇措置」、「腹切り、その真の意義」等の論文を新聞に掲載するのである。

黄禍論　（『世紀末の文化史』大江一道著・1994 年　山川出版社・参考）

１８９５年７月、ドイツ皇帝ヴィルヘルム２世（カイゼル）はロシア皇帝ニコライ２世に１枚の奇妙な絵を送った。事はこの絵図によって「黄禍論」が始まるのである。

黄禍の図「ヨーロッパの諸国民よ、汝らのもっとも神聖な宝を守れ！」「黄禍に立ち上がれ」１８９５年

上記絵図の説明、絵図の中央の右、高い崖の上に、翼を広げて立つのは天から遣わ

された大天使ミカエル[注]である。その左側にミカエルに招集された、手に槍[やり]、剣、盾[たて]などを持つ女性たちは、ヨーロッパの列強を象徴している。

その誰もが、ミカエルの左手が示す彼方を眺めている。その彼方には、平原が広がり、その上方は黒々と暗い。が、そこには炎に包まれて竜に乗った仏陀の像が見える。要するにこれは遠方から迫る脅威を表すもので、これを先頭に固まって見つめる３人の女性はドイツ、ロシア、フランスであり、オーストリア=ハンガリーを象徴する女性が、尻込みするイギリスの手を取って前へ連れ出そうとしている。その二人の間にいるのはイタリアであろう。左端の小さい女性はどの国をさすのだろうか。そして、これら一群はヨーロッパ列強の背後の空には、輝く十字架がある。

この絵が露骨な反アジア的寓意[ぐうい]画（別の意味を託して表す）であることは、一目で解るだろう。カイゼル自身が言う、「それは、それぞれの守護神の姿で表現されたヨーロッパ列強を示すものであり、守護神たちは十字架の防衛のため仏教、偶像礼拝、野蛮の侵入に連合して抵抗するように、天から遣わされた、大天使ミカエルに招集されたものである」と。更にこの列強の結束は「共通の内部の敵である無政府主義、共和主義、ニヒリズムに対抗するためにも必要である」と、付加えている。

この絵はカイゼルが、H・クナックフスという画家に１８９５年、描かせた左の「黄禍の図」と云われているものである。この年の４月１７日に日清戦争講和条約が調印された年と重なる。その６日後にロシア、ドイツ、フランス三国の大使が、「日本が清国に割譲させた遼東半島を放棄するように」と勧告、即ち三国干渉である。

黄禍とは人種的偏見、差別用語で白色人種の黄色人種にたいする恐怖、嫌悪、蔑視の感情を表す造語である。観念の由来はアジアの騎馬民族ジンギスカンによる西側への侵略の歴史的経緯を表している。当時欧州では白人種、アーリア(金髪・青い目・白人、長身)人の優越性を主張する人種哲学が生まれていた。特にプロイセン・フランス戦争（普仏戦争）にゲルマンドイツが勝利したことにより、人種的優越感を満足させる正当な根拠論は、フランスのゴビノー伯爵（アルテュール・ゴビノー・仏国の貴族主義者、白人至上主義を提唱、アーリアを支配人種と位置づけ）に大表される。

ドイツ帝国はビスマルク（1815－1898）が多大な貢献によって造られた帝国であったが、ビスマルクの大言壮語や派手なしぐさは、若いカイゼル（当時２０歳）にとっては煙たい存在であったはずである。

帝国の進路のためにロシアとの結合を進めるビスマルクに反発するヴァルダーゼー

将軍（対ロシア予防戦争を主張）が、ヴィルヘルム２世に接近していった。この時機、ロシア、オーストリア=ハンガリーとの３帝同盟結び、オーストリア攻守同盟を結び、フランスを孤立させる政策をとり、複雑怪奇千番の政策をビスマルクは国策としていた。軍事的なビスマルクの君主体制政策に対して、カイゼルは同調できなくなり、皇帝はビスマルクに辞表出させ、ビスマルク時代は終わりを告げた。

１８９０年初めより、カイゼル・ドイツ帝国の進路は、ビスマルク外交とは異なる進路を取り、ロシアとの再保険条約（両国のどちらかが第３国との戦争に巻き込まれた場合、他の一国は好意的中立を守る外交約束）が迫っていたが、条約を再新しない断を下した。ロシアは急速にフランスとの同盟を結ぶ外交に展開する方向に進むことを見て、ヴィルヘルム２世は、ここで次の手として、日本国の極東での台頭は、黄色人種と白人種文明の危機であると捕らえ、ロシア皇帝に送られ、「黄禍の図」の構図は、以上のことを表現したものである。

注・ミカエルは旧約聖書からユダヤ教、キリスト教、イスラム教へ引き継がれ、三大天子、四大天子、七大天子の一人。

日本における黄禍論の受け止め　『桑原隲藏全集１巻』「黄禍論」桑原隲藏（じつぞう）著・大正２年

《黄禍論の由来は、黄色人種より来る危険という意味を発信し、世界を黄人がやがて白人たちを迫害圧倒するという論は、日清戦役の頃から世界の注意を惹（ひ）いていた。

ドイツ皇帝が「黄禍」（日本人、中国人を指す）と題した、寓意画を作った以来ことで、その画の一端には龍に模した仏陀が、炎々（えんえん）たる火焔（かえん）を上げつつ西方に突進するに対して、欧州諸国を代表すると思われる女神が先頭に立ち、ロシア、フランス等を代表する女神はこれに続いている。この画の真意は日本の勃興を意味したもので、支那の覚醒を意味したかは不明であるが、兎も角も耶蘇教国が一致して、仏教信者である東亜民族の発展を阻碍（そがい）防圧する意を寓したことは明白である。

アジアの小国がその幾十倍もある欧州の大強国と戦い、見事にこれを打ち破ったという事実は、全アジア人に深刻なる印象を与えた。欧人の圧迫を受けながら、この抵抗は不可能と断念していた黄人が、白人の圧迫を離脱することが出来る。白人に対して痛快なる復讐をも成し遂げられるという実例が示されたのである。・・・（略）。》

日清戦争に勝利した、「新興日本国」は欧米の白人種たちには驚きと、奇異に見られ

たことは確かである。英国、露国も清国は強国であり、簡単に侵攻することは出来ないと思っていた。それが極東の小国が清国をひねりつぶしてしまった。列強国は、どのように将来の国策を立てて行ったらよいのか、不安と列強の結束を考えた。その絵が露骨な反アジア的寓意(ぐうい)画、「黄禍の図」となったのである。

その Ⅲ　金子堅太郎　履歴・嘉永 6 年(1853)、福岡藩士金子清蔵直道の子息。明治 4 年に黒田家留学生として渡米、ハーバード大学で法学を修める。アメリカ大統領セオドア・ルーズヴェルト(1858－1919)と同窓生。明治 11 年(1878)に帰国。その後、夏島憲法(伊藤博文の横須賀市夏目の別荘で起草)に参加(1887 年)を経て、明治 21 年、伊藤博文・井上毅・伊東巳代治らと共に明治憲法の起草に参画。その後、伊藤博文の信頼を得、首相秘書官・枢密院議長秘密官・貴族院書記官長を歴任し、第 3 次伊藤内閣で農商務相、第 4 次伊藤内閣で法相を務めた。日露戦争時、公報大使として渡米「日露戦争は日本国を守る戦い」とアメリカ世論に訴えた。更にポーツマス講和談判に於いては、ルーズベルト大統領との会談で秘密情報を得て小村全権に伝達し、講和談判を有利な進行に寄与した。

金子堅太郎の活躍　金子堅太郎の「秘密外交回顧録」は、『日露戦争・日米外交秘録』上・石塚正英著。『明治 37 年のインテリジェンス外交』前坂俊之著。『日露戦争と金子堅太郎』村松正義著。『正論』平成 16 年 12 月号「日本海海戦と明治人の気概」を参照する。

日露戦役は、明治３７年の２月４日の御前会議により決定した。「日露の交渉は如何なる手段を取っても解決ができない。ロシアは我が国の要求に応じることはないから、やむを得ず国を賭して干戈(かんか)(戦争)に訴え、この日露両国の難問題を解決する外はない」と、その結論を以って、陛下に奏聞した会議決定をみたのである。

その晩６時頃、伊藤枢密院議長から、金子宅に電話で「至急に相談ごとがあるから、即刻来てもらいたい」連絡があり、至急に伺うと、伊藤公の言われるには、「この日露の戦争が１年続くか、２年続くか、又３年続くか知らぬが、もし勝敗が決しなければ両国の中に入って調停してもらう国がなければならぬ。それでイギリスは我同盟国だから口だしは出せぬ。フランスはロシアの同盟国であるからまた然りで、ドイツは日本に対しては甚だよろしくない態度を取っているので、今度の戦争もドイツ皇帝が多少唆(そそのか)した形跡がある。依ってドイツは調停の地位には立てまい。

唯、頼むところはアメリカ合衆国一つだけである。公平な立場に於いて日露の間に介在して、平和克服を勧告するのは北米合衆国の大統領の外はない。君が大統領のルーズベルト氏と兼ねて懇意のことは吾輩も知っているから、君は直ちに行って大統領に会って、そのことを通じて話し合ってもらいたい。又アメリカの国民にも日本に同情を寄せるように、一つ尽力してもらいたい。これが君にアメリカに行ってもらう主なる目的である」と申された。

金子は言う、「それは閣下も御承知の通り、アメリカが独立して間もない、1812 年に英国と米国との戦いの折には、ヨーロッパ各国は皆、英国を助けたが、独りロシアだけは合衆国側に立って、影になり日向(ひなた)になり援助した為に、あの戦いも相引きになって講和条約ができた。爾来(じらい)(それ以来)、アメリカの人々は非常にロシアを徳としている。

その次には 1861 年から 65 年まで 5 ヵ年間続いた南北戦争に於いて、合衆国の南部と北部とが奴隷廃止の事から兄弟争いをして戦うようになってしまった。その時、イギリスは全力を挙げて南部を助け、兵器弾薬は勿論、軍艦までも造って渡して、北方を圧迫しょうとしたのである。

アラバマという軍艦を南方に送り、それが北部の軍艦を荒らした。イギリスの艦隊がニューヨーク湾に入って、市民を恐喝しょうとしたが、ロシアは直ちに艦隊を派してニューヨークの港の口に整列させて、イギリスの軍艦が大西洋からニューヨーク湾に入ることが出来ない様にして、イギリスの艦隊の示威運動を阻止した。ロシアの旗艦は直ちに小蒸気船を降ろして司令長官がこれに乗ってニューヨーク市に上陸し、直ちに市長に会い露国はイギリスに反して北方を助けたのである。かくの如く政治上、アメリカ合衆国は露国から恩を受けていることが多大である。

商業上に於いてはウラジオストク、旅順等の軍需品・食料品・シベリア鉄道に用いる鉄軌・機関車・貨物の多くはアメリカから提供されている。社交に於いては、米国の富豪の娘たちはロシアの貴族と婚姻している。政治上・外交上・商業上・家族上に密接なる関係がある。金子の微力では米露の関係を打ち破って日本へ同情を寄せさせることは出来ない。

金子はアメリカ合衆国の人たちのへの説得は困難であると述べ、他に適任者、小村寿太郎外務大臣(ハーバード大学卒)、栗野慎一郎駐露公使(ハーバード大学卒)おるではないか、一番適任者は伊藤公であると言うと、伊藤は、

「陛下から伊藤は左右を離れては困ると、御沙汰があるので僕は行けない」と答え、

更に「今度の戦いに一人として成功すると思う者はいない。しかしながら打ち捨てておけば露国はどんどん満州を占領、朝鮮を侵略し、終には我国家を脅迫するまでに暴威をふるうであろう。事ここまで至れば国を賭しても戦う一途あるのみ、成功不成功などは眼中にない。国運を賭して戦う時であるから、君も博文と共に手を握ってこの難局に当ってもらいたい。愈々ロシア軍が海陸から我国に迫ったなら、伊藤は鉄砲担いでロシア軍を防ぎ、日本の土地を踏ませない決心でいる」と博文に満腔(まんこう)の熱意をもって説かれ、金子は承諾せざるを得なかった。

翌日、金子は参謀本部児玉源太郎に、陸軍は勝見込みがあるのかと問うと「５分５か、４分６分」答えられた。更に、海軍省に山本海軍大臣に会い、「海軍は勝つ見込みはあるか」と聞くと、「日本の軍艦は半分沈める。残りの半分でロシアの軍艦を全滅させる」と云うのが当時の実情であった。

金子は苦悶の中、明治３７年２月２４日、対米工作のため米国へ、又同日に高橋是清は戦時公債募集のため、サイベリア号に同乗したのである。

３月１１日、サンフランシスコ到着。開戦直後はアメリカ人特有の「アンダードック」(大きい犬と小犬が喧嘩すれば、大犬をステッキで叩く)贔屓(ひいき)によって日本に同情を寄せていたが、ルーズベルト大統領は世論的に中立宣言を３月１０日出していた。金子はハーバード大学法科卒業の米国大統領人脈を使って米国の世論を日本側の味方につける工作を計画し、当初、シカゴで広報活動を考えていたが、ロシア色が強いので、ニューヨークへ向かった。その理由はシカゴに於いては、ロシアメディア工作が強く、駐米ロシア大使カシニーは、ワシントンで米国新聞記者たちに、お茶を飲ませたり、ハバナの葉巻やエジプト紙煙草を配ったり、シャンパンを飲ませてご機嫌を取っていたのである。

ロシアの広報活動は「今度の戦争は日本の陰謀で、宣戦布告をせず国交断絶だけで戦争を開始は国際法違反である」と云い、そして「今度の戦争はキリスト教と非キリスト教の宗教戦争であり、欧米のキリスト教国は挙(こぞ)って日本を撲滅しなければならない」等々を喧伝していた。

金子堅太郎の反論は、当時は国交断絶すれば戦端を開いて良いことは国際法の常識であった。現にロシアもトルコと戦争した際、国交断絶後に戦闘行為開始したではないか、宗教戦争と煽るとは何事か。ロシアのキシニョフ(モルドバ首都)でのユダヤ人虐殺、政治犯をシベリア送りの極刑を科しているではないか、これがキリスト教国する

ことか。これに対して日本は、憲法で信教の自由を保障しているではないか。

この記事が翌日の新聞に載って大いにアメリカ人の注意を引くことになる。ニューヨーク軽視総監が金子の身の危険があるので、護衛の警察官を着けたいが、と言ってきた。しかし、「暗殺されても一向に構わない。暗殺されれば１億数千万のアメリカ人の半分くらいは日本に同情を寄せてくれるだろう。だったら自分は喜んで死ぬから、護衛はよしてもらいたい」と答え、金子は護衛を断った。

３月２６日、中立宣言しているルーズベルト大統領に会う手配を、高平小五郎駐米公使に打診してもらい、翌日訪ねると、ルーズベルトは「なぜ早く来なかったのか」と言われ、金子は吃驚(びっくり)した。

「君は僕の厳正中立の布告を読んだのか、僕は早く君が来たら説明しょうと思っていた。実は日本の宣戦の布告が出て日露間に戦争が始まり、アメリカの陸海軍の若い軍人は、今度の戦いは日本に勝たせたいから、日本の軍に投じて加勢しようと云う者が随所に出て来た。そこでロシア大使が困って、お前の国の陸海軍の若い軍人共は日本贔屓(ひいき)とみえ、日本軍に投ずるような演説各所でやっているので、どうか取り締まってくれと懇請されたので、やむを得ず出したのだ。僕の腹の中は違う、君に早くそういう内情を話そうと待っていたのだ。僕は参謀本部長に言い付けて、日露の軍隊の実情を詳細に調べさせ、今度の戦さは日本が勝つ」と云われた。

これは予想外の話で、日本陸海軍当局も勝つか負けるか分からぬと言っているに、大統領は「勝たせなければならない」その理由を述べて言う、「日本は正義の為に、人道の為に戦っている。ロシアは近年各国に向かって悪虐無道の振舞(ふるまい)をしている。とくに日本に対しての処置は、甚だ人道に背き正義に反した行為である。そこで吾輩は影になり、日向になり、日本の為に働く。これは君と僕との間の内輪話で、これを新聞に公にしては困る」とも言われた。

更に「君はハーバード倶楽部員で、東京に於けるハーバード倶楽部の会長であるから、今度米国に来たと言えば、アメリカ全国にいるハーバード倶楽部の会員は日本に同情するに決まっている」と話してくれた。

金子はルーズベルトの真意が分かり、その話を暗号電報で小村外務大臣に打ち、この電報を見た日本の内閣各大臣は大変な喜びであった。返信は小村大臣からの電文は、「君と大統領との会見は予想外の好結果である。この話を各日本の公使たちに暗号電報で通知することにした」とあって、日本政府の喜びは大変なものであった。

合衆国外務大臣ジョン・ヘイ(門戸開放宣言者・敗戦の清朝は欧米列強による中国分割に動いたが、米国は分割競争に乗遅れ、中国に関し門戸開放・機会均等・領土保全の３原則を列強に示した)は、「今度の日露の戦争は、日本がアメリカの為に戦っていると言ってもよい」と云い、金子は「それはどういうわけか」と聞くと、

「私は外務大臣として支那に向かって門戸開放、機会均等ということを宣言した。それをロシアが門戸開放せず満州には外国人を入れない、満州は機会均等ではない。満州はロシアの勢力範囲として、アメリカの商工人も入れない。日本は支那の一部であるから、門戸開放、機会均等にしろという。この結果が今日の戦争になった訳である。つまりアメリカの政策を日本が維持するための戦いであり、アメリカは日本にお礼を言わなければならない。日米の政策が一致しているから、アメリカは日本に同情を寄せている」。このように米国外務(米国合衆国国務長官)大臣が言ったので、金子は非常な声援を受け、東京の小村外務大臣に通報した。

金子堅太郎(1853－1942)　**ルーズベルト**(1858－1919)　**ジョン・ヘイ**(1838－1905)　**アダムス**(1838－1918)

ジョン・ヘイ外務大臣の知恵袋ヘンリー・アダムス(先祖が２代大統領名門の子孫)

彼の言うことによれば、今度の戦争は全くロシア宮廷の大官と、陸海軍の軍人とが結託して朝鮮を取る策で、この戦いが画策されたのだ。皇帝・皇后の信任を得たベゾブラゾフが軍人と結託して、満州に１万の兵を送れば、５万の兵を送ったように言い、日本を恫喝し、恐喝手段で日本を屈伏させる政策を取っている。それ故日本が朝鮮を渡して平和を乞わなければ解決をみない。旅順にいる極東の太守アレキシーフ海軍大将(写真第９章 115 頁)は、戦さをするかと恐喝すれば、日本は縮み上がるから、それで行けると思ったのがこの人の作戦である。ところが国交断絶するや否や、仁川港に於いてロシア軍艦が日本軍艦に打沈められた電報を受けると、ロシア宮廷の大官も皇帝

も悉く恐怖に侵され驚いた。その時の宮廷の驚きは非常なものであったと、この筋の人に聞いた。１カ年間この戦いが続けば、ロシアは必ず内側から壊れる。

ロシア内情を詳しく調べると、ロシアは軍費をフランスから借りているが、これは長く続かない。そこに、先年ユダヤ人をキシニョフ（モルドバの首都）等で虐殺している。ところが欧州のユダヤ人には金持ちいて、この金権を握っているユダヤ人は「ロシアに金を貸すな」と云うことになり、シフと高橋是清との公債募集に成功していることと符合する。

更に、早くフィンランド、スエーデンの地方に密使を送って、国境に乱せば、極東に送る兵を分割することはロシアの痛手でとなる。その扇動費用は２、３百円もあったらよかろう。軍艦一隻沈めたと思えば安いものではないか。早くあそこに密使をやってかき回せ、とヘンリー・アダムス(1838－1918・歴史家、思想家・ハーバード大学)が私に言った。大統領も同じ意見であった。

私は直ちに桂総理大臣、小村外務大事連名にして郵送した。その後の話では、陸軍の中佐をしていた明石元二郎(第８章 90 頁)という人を、フランスに滞在させて、フィンランド、スエーデン、ノルウェーに手を回して色々かき回したということを聞いた。この献策はヘンリー・アダムスが私に会って言ったのが初めてである。

注釈・アメリカの日露戦争於ける考え方は、「ロシアの専制国に対する民主主義の勝利、絶対君主国に対する、立憲君主国の勝利」をルーズベルトは日本の勝利を予測し、ロシア国を後方攪乱すれば、ユダヤ人が考えて居た様に、ロシア国は内側から壊れると予想していた。

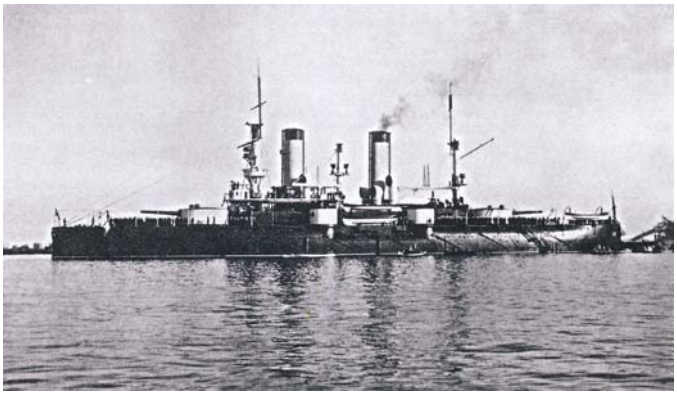
金子の講演　金子の広報外交は、大統領ら晩餐会２５回、高官らの会談等６０回、演説会５０回、新聞への寄稿５回、友情と人脈を生かした広報活動は近代史上稀の活躍をする。金子の米国での画期的な演説論文 「敵将マカロフ提督への哀悼」題名の演説する(明治３７年４月１４日・ニューヨーク５番街ュニバシティ・クラブに於いて)

「敵将マカロフ提督への哀悼」の演題　《・・・余ハ、此夕歓楽湧クガ如キ間ニ在リテ、露国海軍中佐「マカロフ」ノ旅順港外ニ於テ戦没セシ報ヲ聞キ、悲喜交々臻ル。惟フニ戦役ハ、国都国トノ交戦ニシテ人トノ死闘二ヒズ。「マカロフ」提督ハ、人ト為り誠忠ニシテ多能、夙ニ海軍戦術家トシテ令名アリ。其ノ著書『戦術論』ノ如キハ、既ニ日本文ニ翻訳セラレ我海軍将校ノ間ニ伝唱セラル。而シテ今ヤ其ノ忠死ノ訃音ニス。

曷ゾ哀悼ノ情ニ任ヘン。然リト雖モ提督ハ、露帝ノ命ヲ奉ジテ職ニ闇外(冥界)ニ就キ、一朝君国ノ為ニ斃れ武人ノ本分ヲ全フセルモノニシテ、敵躬方ノ区別ナク均シク其ノ忠君愛国ノ事蹟ヲ景慕シ、其ノ名声ハ永ク露国ノ海軍歴史ニ赫々トシテ耀クベシ。》

と、結びにマカロフ提督追悼の辞を述べたところ、米国民の紳士淑女の琴線に触れたらしく、非常な好反響を呼んだのである。金子が敵側に追悼の辞を贈ったということで、米国人に日本人は偉大な国民であると強く感動を与えて、金子の武士道精神による米国向け広報は大きな成果をあげた。(金子堅太郎『日露戦役米国滞留記』)

マカロフ提督



最後の乗艦となったペトロパヴロフスク戦艦

マカロフ提督　旅順口奇襲攻撃を許したオスカル・スタルク司令長官の後任に、1904 年２月２４日ロシア太平洋艦隊司令長官に就任、マカロフの着任は連合艦隊となり、日本とっては脅威となる。第２次閉塞作戦に失敗した連合艦隊は旅順封鎖を機雷敷設に切り替えた。一方戦艦ペトロバブロフスクにマカロフ提督は座乗して日本艦隊の攻撃に向かう。日本軍の敷設した機雷に触雷して爆沈、爆死となる。

演題は「極東ノ現状」(The Situation in the Far East)と題する演説は、日露戦争の起因から説き、開戦に至った事実と外交文書を引証しながら弁じ始めた。(４月２８日、ボストン、ハーバード大学構内公会堂・サンダース劇場)

《・・・会頭、貴下及貴婦人紳士諸君、世界ニ於テ著名ニシテ、余ノ記憶ニ最モ深ク銘刻スル此大学ノ会堂に於テ、此ノ如キ上流ニ位スル会衆諸君の前ニ演説スルコトヲ得ルハ、是レ余ニ与ヘラレタル栄誉ノ最モ大ナルモノナリ。

現今ノ日露戦争ハ、独リ我日本帝国ノ安危(安全か危険)ノ係ル所ナルノミナラズ、実ニ亜細亜全般ノ治乱ノ関スル所ナリ。余ハ、今此演説ニ於テ、我日本帝国が開戦シタル動機ニ関シ或者ガ懐ク所ノ疑団（疑い気持）ヲ釈キ、且露国ガ我日本帝国ニ対シ加

フル所ノ寃枉（えんざい）ヲ弁ゼント欲ス。又我日本帝国が忍耐ノ極、ヤムヲ得ズシテ開戦ヲ宣言シタルコトヲ明カニシ、且ツ此至重（重大）至大ノ関係アル歩趨（進みぐあい）ヲ取リタルハ、唯土地ヲ侵略シ、若クハ専ラ我一国ノ私利ヲ謀ラント欲スルニアラズ、実ニ英米的ノ文化ノ特象ナル人類ノ向上進歩ヲ希図（もくろみ）スル赤誠（偽りない心）ニ出デタネコトヲ詳ニセント欲ス。

然レドモ、今其ノ本題ノ主旨ニ入ラザルノ前ニ於テ、先ヅ我日本帝国が満州ニ関スル歴史ヲ略述シ、諸君ノ注意ヲ請ハン。蓋シ満州問題ハ、独リ露国ノ解決スベキ問題ニアラザルナリ。満州ノ一部、所謂遼東半島ハ、１８９５年日清戦役ニ於テ我日本帝国軍ノ占領シタル所ニシテ、戦已ムヤ、下関条約ニ於テ清国ヨリ我帝国ニ与ヘラレタル所ナリ。我帝国ハ、軍ノ威力ニ由リテ之ヲ獲得シタルモノニシテ、即チ我ガ戦勝鹵獲物(交戦国の所有権取得)タリシナリ。然ルニ下関条約調印ノ後、忽チ起リシ出来事ハ如何ナリシゾ。其墨痕未ダ乾カザルニ、欧州ノ３大強国、即チ露仏独ノ３国ハ忽チ干渉ヲ加ヘ、其口実ニ云ク。日本国ガ満州ノ地ヲ領有スルハ、亜細亜ノ平和ニ危害ノ虞アリト。請フ、此非常ナル声言（言い広める）ハ、我帝国ヲシテ如何ナル地位ニ置キシカヲ思慮セヨ。当時、我帝国ハ僅ニ戦闘ヲ止メシノミ。我輩ハ、血肉ヲ糜シ財貨ヲ費シタリ。我軍ハ損害ヲ蒙リ、我艦ハ折傷ヲ免レザリキ。此削弱（弱まる）セラレタル場合ニ於テ、忽チ新鋭強国鋼ナル反対ニ会ス。即チ露仏独ノ３大国ハ、無礼ニモ我ニ求メテ云ク。還付セヨト。当時、我帝国ノ位地、実ニ是ノ如クナリン。我帝国ノ此際ニ処スル、若シ其言ニ聴カズンバ、則チ更ニ３国ト兵ヲ交ヘザルヲ得ズ。聴呼戦呼、二途ノ外、我帝国ノ就クベキ途アラザリシナリ。是レ、我帝国が３国ノ索ムル所ヲ聞カザルヲ得ザリシ所以ナリ。３国ノ声言セシ亜細亜ノ平和ノ危害ヲ避ケンガ為メニ、我輩ハ、ヤムヲ得ズ、我ガ正当ニ獲得シタル領域ヲ，挙テ之ヲ清国ニ還付セリ。是レ、実ニ事端（事の起こり）ノ始ナリ。我輩ノ率直ナル、還付シタル領域満州ノ半島ハ、大清国ニ還帰シ、永ク其版図ノ内ニ在ルベシト思ヘリ。其露国ノ帰スベシトハ、万思量セザリシ所ナリ。然ルニ豈図（意外にも）ランヤ、露国終ニ之ヲ占有セリ。露国ハ、外交上ノ計策ヲ用テ、３国ガ我ヲ要シテ還付セシメタル半島ヲ租借セリ。唯是レノミナラズ、露国ハ、内ニ欲念ヲ儲ヘテ、陰ニ機会ノ来ルヲ待テリ。露国ハ、已ニ其新ニ得タル地域ニ於テ地歩ヲ運ビ、偏ニ之ヲ露国化スルヲ到来スルヲ待テリ。恰モ好シ。１９００年拳匪ノ乱(義和団の乱)清国ニ起ルヤ、露国ハ、奇貨居クベシ（機会を逃がさず）ト思ヒ、其機ニ乗ジ忽チ兵ヲ満州に入レ、其全土ヲ挙テ掌中ニ帰スルニ至ルマデ、

進兵ヲ止メザリキ。

露国、一タビ之ヲ占有スルヤ、複之ヲ放棄セズ、其従来神権（神から授けられた権力）宣言スル故習ヲ襲ヒテ、曰ク。我ノ居ル所、我留リテ去ルベカラズト。是レ、露国外交家ノ累々言明スル所ニシテ、其ノ満州ニ関スル計策モ亦、此ニ胚胎シ来レリ。而シテ之ニ次グ、如何。我帝国ハ観察ノ能力アリ。露国之ヲ占有スルノ後、其為ス所ヲ視察スルニ、久カラズシテ鉄道ヲ布設シテ、遼東半島ニ於テ終点駅ヲ置キタルヲ見タリ。又暫クシテ、旅順ヲ露国ノ海軍々港ト為シ他国船舶ノ出入ヲ禁ジ、随テ世界の貿易ニ対シテ此港口ヲ閉鎖セリ。次ニ東清鉄道ヲ延長シテ鴨緑江ニ至ルノ計画ヲ立テ、哈爾賓ヲ経営シテ陸軍根拠地ト為シ、而シテ満州鉄道ニ沿フテ塞堡ヲ設ケ、且益々兵ヲ満州ニ進入スルコトヲ絶タズ、孜々(熱心に務める)トシテ満州ヲ露国化スルノ方策ヲ怠ラズ。

加之（そればかりでなく）、露国ハ、韓国ト協約シテ、龍岩浦(鴨緑江河口)ノ租借ヲ得タリ。龍岩浦ハ鴨緑江ノ南岸ニ在リ。露国ハ之ヲ租借スルニ、鴨緑江ノ上流ニ於ケル広大ニル林地ヲ有スルガ故ニ其ノ木材ヲ剪伐(伐採)シテ鴨緑江ニ流スヲ以テ、其貯留所トシテ龍岩浦ヲ必要トスルコトヲ口実トセリ。是レ、実ニ露国慣用ノ外交手段ナリ。昨年我国ハ、此事ニ付テ煩累（わずらわしい）ヲ招キタリ。一日京城ノ我公使館員其ノ地ニ遊ビ龍岩浦ニ上ラントセシニ、露人ハ拒ミテ登岸スルコトヲ容ルサズ。露国ハ、龍岩浦ニ堡塁ヲ設ケント欲スルノ意アリシガ如シ。露国ハ、此ノ如クシテ満州ヲ占領スルノミナラズ、延テ韓国ニ其威力ヲ加ヘント欲スルノ意アルコト、明瞭トナレリ。是レ、実ニ韓国及我日本帝国ノ為メニ看過スベカザル関係ナリ。露国ノ独立保全ヲ脅嚇スルノミナラズ、我帝国ノ韓国ニ於ケル権利及利益ニ危害ヲ及ボシ、延テ我帝国ノ存立ヲ危フセントスルノ虞アリ。是ニ於テ呼、我帝国ハ、露国ト交渉ヲ開カザルヲ得ザルニ至レリ。我帝国ノ目的ハ、固ヨリ平和ノ協定ヲ得テ、満州及韓国ニ関シ将来葛藤ヲ生ズルノ患ヲ絶タント欲スルニ在リシナリ。即チ昨年７月２８日、我帝国外務大臣ハ、露国政府ニ対シ意味ヲ以テ外交文書ヲ致サシメタリ。(中略)

露国ニ於テ、了解シ得ベキ理由ナクシテ屢次（しばしば起こる）回答ヲ遷延シ、加フルニ平和ノ目的トハ調和シ難キ軍事的活動ヲ為セルニ拘ラズ、帝国政府ノ現交渉中用ヒタル耐忍ノ程度ハ、其ノ露国政府トノ関係ヨリ将来誤解ノ一切ノ原因ヲ除去センコトヲ忠実ニ希望シタルコトヲ十分証シ得テ余リアリ、ト信ズ。而モ帝国政府ハ、其尽

力ノ結果、帝国ノ穏当（そのさま）且無私ナル提案、若クハ又絶東（極東）ニ於テ鞏固（ゆるがない）且恒久ノ平和ヲ確立スルニ近キ如何ナル提案ニ対シテモ、露国政府ノ同意ヲ得ルコトハ毫モ其望ミナキヲ領得シタルガ故ニ、現下ノ徒労ニ属スル談判ハ之ヲ断絶スルノ外、他ニ選ブベキ途ヲ有セズ。

帝国政府ハ、右ノ一途ヲ採用スルト同時ニ、自ラ其ノ侵迫ヲ受ケタル地位ヲ鞏固（強固）ニシ且之ヲ防衛する為メ、竝ニ帝国ノ既得権及正当利益ヲ擁護スル為メ、最良ト思惟スル独立ノ行動ヲ採ルコトノ権利ヲ保留ス。

日本帝国政府ハ、露西亜帝国政府トノ関係上将来ノ紛糾ヲ来スベキ各種ノ原因ヲ除去センガ為メ、有ラユル和協ノ手段ヲ尽シタルモ其効ナク、帝国政府が極東ニ於ケル鞏固且恒久ノ平和ノ為メニ為シタル正当ノ提言竝ニ穏当且ツ無私ナル提案モ、之ニ対シテ当ニ受クベキノ考量ヲ受ケズ。従テ露国政府トノ外交関係ハ今ヤ其ノ価値ヲ有セザルニ至リタルヲ以テ、日本帝国政府ハ其ノ外交関係ヲ絶ツコトヲ決定セリ。下名ハ、更ニ本国政府ノ命ニ依リ、帝国公使館員ヲ率キテ露京ヲ引揚グル意思ナルコトヲ、茲ニ併セテ「ラムスドルフ」伯（9章96頁）ニ通告スルノ光栄ヲ有ス。・・・》（前掲外務省記録、金子『米国滞留記』より）

ここで金子堅太郎は日露戦争の開戦までの事実経過を述べ、講演時間を1時間と想定していたので、豪雨に拘わらず参会してくれた事に謝し、「本有（本来の姿）、余ハ、我日本帝国ノ存亡荒廃ニ関する事項ヲ演説シ、幸ニ貴紳の謹聴ヲ辱フス。而カモ既ニ1時間余ニ渉リ、僅ニ日露開戦ノ歴史ヲ演了セシニ過ギズ。是ヨリ進ンデ戦役ノ経過及其の結果ヲ説キ及ボサント欲スレバ、更ニ時間ヲ要シ重ネテ清聴ヲ煩ハスニ忍ビズ。故ニ止ムコトヲ得ズ、茲ニ講壇ヲ降ルベシ」と。

これにて講演の時間が終了しましたので、この辺で終わりとしますと挨拶をしたのである。嘗てのボストン留学時代の旧師である最高裁判所判事ホームズの忠告で、「『ハーヴァード』（ハーバード）大学及ボストン市ノ人士ハ、博学多識ヲ以テ自カラ居ルガ故ニ、貴下ノ演説ニシテ若シ1時間余ニ渉ラバ、厭倦（飽きる）シテ聴聞スル肯セザルベシ。故ニ演説ハ、努メテ1時間以内ニ結了スルヲ可トス」と忠告を守って終了したのである。

ところが、今度は聴衆の諸氏は、金子堅太郎の演説打ち切りに承知せず、総立ちになって「演説ヲ継続セヨ。余等、夜ヲ徹シテモ、終局マデ之ヲ聴カン」と要望したの

である。もはや演説を途中で中止することは出来なくなってしまった。

金子はそれではと、再び演説を続行、日露戦争の経過や日本軍の行動、キリスト教国対する異教国戦争論へり反駁（反論）、更に極東に於ける日本の任務についての熱弁講演をし、金子のアメリカ諸君への熱意ある演説は喝采を浴びたのである。　尚、この続きを読みたい方は下記の通り。　（出典・『日露戦争と金子堅太郎』松村正義著・新有堂・S62年・上記の続きは83頁―99頁、全文は67頁から99頁となる）『米国滞在記』（同）。

ルーズベルトの樺太島占領提案を進める　５月２７日、日本海海戦で日本が大勝利を齎し、６月８日、ルーズベルトは、「これで愈々講和談判なると見て、君に忠告することがあると言ってきた。ロシアに対しこれまで何遍も講和談判の仲介を言っても、ロシアの領土は日本軍に占領されてないので講和を拒絶している。そこで今から日本は２箇旅団の軍隊と砲艦２隻を持って樺太島を取れ。２箇旅団でロシア兵を追い払い、彼の領土を占領せよ。講和談判に入る前に早く取れ、ということを、日本政府に伝えよ」と。大統領の布石の打ち方は手早く、大本営は煽られた。

樺太侵攻図　『地図で知る　日露戦争』歴史文学地図・武揚堂より

樺太島占領　ルーズベルト大統領の忠告より１ヵ月後、砲艦２隻と１個混成旅団が樺太に上陸したのは７月８日であった。日本軍の樺太占領はロシア帝政を驚愕させた。

ロシア皇帝はルーズベルトに、日本軍を樺太から撤退するように尽力を願ってきたが、ルーズベルトはそれを拒否したのである。アメリカ大統領ルーズベルトが日露双方に対して講和会議の開始を促し、ロシア皇帝へ停戦勧告を告げた。講和条件受け入れさせるため、ロシア皇帝へ圧力をかけ、樺太侵攻作戦を実行する様に指示したのである。

日本軍は７月７日に亜庭湾(樺太南端太伯)へ侵攻、８日にはコルサコフ、１２日にはウラジミロフカ(現ユジノサハリンスク)に入り、１６日にはコルサコフ面司令官アルチシェフスキー大佐が降伏し、２４日、北樺太アレクサンドロフ付近に上陸、３１日にはリャプノフ中将(兵士５千余名)は降伏を受け入れ、全島を占領したのである。

樺太の戦い・樺太南部の大泊郡深海村女麗(亜庭湾)に上陸　明治３８年(1905)

金子の小村全権への情報連絡専念する　７月２５日、小村全権がニューヨークに到着、金子は「アメリカは小村全権に引渡して僕は帰国したい」と告げると、「それは待ってもらいたい。今、君に帰られては困る。我輩が表面に出るから、君はニューヨークにいて終始ルーズベルトに相談し、我輩に最善の意見を暗号電報で知らせてくれ。談判の情報を遂次連絡するから、君を通して大統領に問題点を相談してほしい。君の助けがないと談判はまとまらない」と、金子は小村へ連絡を密にする「連鎖ノ任」即ち連絡役に就いたのである。

樺太(薩哈嗹)占領について　当時陸軍・海軍幹部の専ら眼を注いだ所は、満州及び旅順で、樺太に軍を送る余裕はなかった。この間に樺太占領に最も熱心に主張したのは、参謀次長長岡中佐で、彼は３７年６月、児玉大将に代わって樺太占領軍作戦計画案を立て、之を上司に力説した。しかし陸軍の首脳者は之に傾かず、又海軍の共助を要するが、海軍側も之に乗り気がなかった。唯内閣に於いて樺太占領を要説者は小村外相で、３７年８月、小村は長岡次長に、外交上大いに希望する旨を明確に語った。

小村は、当時旅順は何時陥落するか分からず、何時講和談判が始まるかわからない

事情に、領土の割譲は実力の必要条件とする事に鑑み、なるたけ速やかに我が軍の樺太攻略の挙に出て欲しいと深く求めた。

その後奉天の役が終わり、陸軍部内に樺太出征の議が漸く進み、３月末第１３師団に動員令が下った。けれども海軍に於いては、波羅的(バルチック)艦隊の動静が尚不明なる間は共助できず、殊に樺太出征決行するも、コルサコフは５月以後、アレキサンドロフスクは天候及び霧のため、７、８月に入るならば航行可能と称し、即時の軍艦擁護には断固として応じない。之がため出征軍１３師団の動員は、立ち往生となった。

程なく日本海の大勝利により、我が海軍は最早何の心配をせず、浦塩(ウラジオ)港内には若干の敵艦あるも、何等心配がない。今や海軍としては差支えない筈であったが、海軍は依然として之に応じなかった。

６月９日、米国大統領の講和提議があり、この日午後、参謀総長室に山縣、伊藤、桂、寺内、小村の５人が相会し、密談数刻に及んだ。会議後、山形と伊東のみ居残り歓談なり、その折、ふと総長室に入って来た参謀次長の長岡に、両公は講和提議案の概要を語り聞かせた。長岡は之を機会に、樺太出征決行を熱心に主張し稟議(りんぎ)した。

これに対し伊藤は「戦争を進めることと、大統領の講和勧告とは別物だ」と語り、山形も「樺太のことに長岡は気狂だが、準備は既に出来ているのだから、外交上妨げさえなければ行って来い」と言った。

数日後、長岡は小村を訪ねた折も、小村は「私の決心は従来通り、是非やってもらいたい。講和談判に都合が至極(しごく)良いと思います。唯海軍はどうでしょうか、」と告げた。

山縣、桂、寺内も火事泥棒的に類する樺太出征は米国大統領に対しても遠慮し、伊藤、小村にやる気があるならやっても良いとの意見であった。６月１２日、海軍・陸軍の占領を伊藤、小村は出征を主張したが、山形、寺内、山本の態度が煮え切らなかったので中止となった。６月１４日、児玉より大本営へ飛電(ひでん)(至急電報)があり、講和談判も近く開始予定、我が作戦方針は講和談判を成るべく迅速有利に結了させるために、日本軍は樺太占領の準備が調えた。

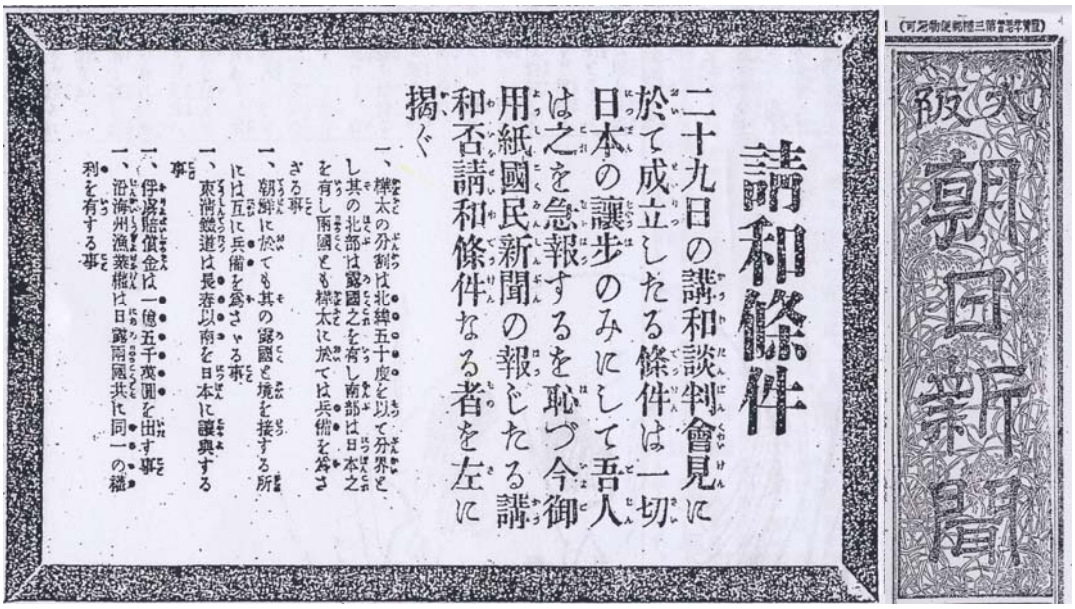
この児玉の飛電は、大本営の逡巡組に一喝を与え、海軍をも之に応じたのである。次いで６月１７日夜、樺太遠征作戦計画は御裁可を得、我が陸戦隊の樺太上陸は７月７日に漸(ようや)く行われたのである。これが日本側の講和期に入って防備なきサガレンへの上陸に着手したが、最早日本に兵力の余裕なく、従って続戦の余力なき証拠であった。

(『明治秘話・二大外交の真相』信夫淳平著・昭和３年萬里閣書房より)

第12章　日露講和条約締結後の新聞報道

講和条約への日本国民の悲憤はすさまじかった。２０億円と期待した賠償金と取れないではないか、樺太さえも半分ではないか。連戦連勝の報しか聞いていない国民は、「一体政府はなにをしているのか」悲しみが怒りとなって爆発して講和反対のデモに繰り出された。国民は重税に耐え忍び、戦地に肉親を奪われても、総て皇国の光栄のためと歯をくいしばってきた。それなのに、こんな屈辱講和をなぜ結んだ。こんな講和より戦争を続けろ、ロシアを叩きのめせ、小村と政府はなにしているのだ。・・・

国民の大爆発は無理もなかった。政府は戦争の実情を国民に知らせていなかった。本当は知らせる訳に行かなかったのである。８月３１日講和条約の内容が伝わると、日本国民の怒りは爆発した。


大阪朝日新聞

請和條件

二十九日の講和談判會見に於て成立したる條件は一切日本の讓歩のみにして吾人は之を急報するを恥づ今御用紙國民新聞の報じたる講和否請和條件なる者を左に掲ぐ

一、樺太の分割は北緯五十度を以て分界とし其の北部は露國之を有し南部は日本之を有し兩國とも樺太に於ては兵備を設さざる事

一、朝鮮に於ても其の露國と境を接する所には互に兵備を設さゝる事

一、東清鐵道は長春以南を日本に讓與する事

一、伊藤賠償金は一億五千萬圓を出す事

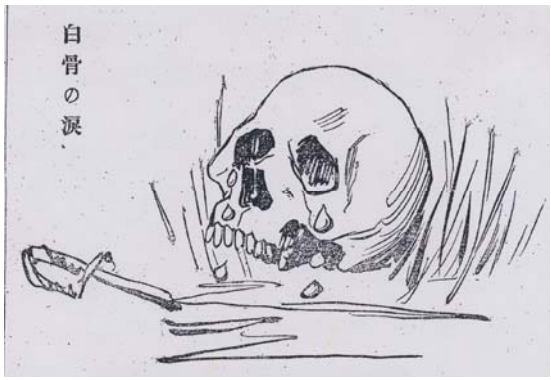
一、沿海州漁業權は日露兩國共に同一の權利を有する事

明治３８年９月１日　大阪朝日新聞１面

大阪朝日新聞　明治38年9月1日　１面

「天皇陛下に和議の破棄を命じ給わることを請い奉る」　付して惟みるに開戦の当初、天皇陛下は宣戦の詔勅（天皇の詔書）を煥発（輝き顕れる）して、軍人有司民衆に諭したまう所あり。曰く、「朕茲に露国に対して戦を宣す、朕が陸海軍は宜しく全力を極めて露国と交戦の事に従うべく、朕が百僚（多くの官吏）有司は宜しく各其の職務に率い其機能に応じて国家の目的を達するに努力すべし。凡そ国際条規の範囲に於いて一切の手段をつくし遺算（計算ちがい）なからんことを期せよ」　是軍人と有司とに勅し（天皇の命令）給う者なり。曰く、「朕は汝有衆（国民）の忠実勇武なるに倚頼（依頼）し速やかに平和を永遠に克復し以って帝国の光栄を保全せんことを期す」・・・（略）。

直訳すれば「我等国民は伏してお願いは、陛下が聖意ない講和条約いまだ調印してないなら、これを破棄する事を命じてほしい。軍人達に続戦を命じてほしい。国民と軍人は天皇の御心に従って身を捧げてきた。政府は皇国の光栄に背く講和を結ぼうとしている。天皇の御力で調印を止めて下さい。」と熱烈な嘆願文となる。



大阪朝日新聞　１面・明治３８年　９月１日

同９月４日　３面　大阪市民大会

（同）**○天声人語**　御用紙（新聞）で成立した講和条件だといって号外にも出したが我が輩はどうしても此れが戦勝国の命じた条件とは信じられない。・・・幾等なんでも支那朝鮮でもこんな条約は結ぶまい。支那人や朝鮮にも押のきかない話で満韓経営もあったものでない。此は嘘であろう、・・・若し樺太分割が事実ならどうすればよいのか吾々はどうしたらいいのか。・・・（略）。（読み易く直してある）

大阪朝日新聞　９月４日　１面　**「与論を以って天地を震撼すべし」**

講和の進行に当り、我が国民が比較的平静の態度を取り、当局役人のなすがままに一任していることは、講和条約を目にして対岸の火災を見ているようだ。・・・これは国民の講和条件ではない。当局役人有志等の講和条約でないか。当局役人の有司の仕業に、大不満である我が国民は如何なる艱難に遭遇している。如何なる事情か知らぬが、猛然奮然と進んで此の私約を破棄しなければならない。・・・。（読み易く直してある）

毎日新聞　東京京橋　**明治38年9月1日1面「国民精神の大打撃　政府外交の大失敗」**

露国は敗国の地位を自認せずして、寸地を割らず一金を払はず、驕（おご）り高ぶり、日本の要求を破棄することに対し、我が全権は袂を払って別れず、同じ考えとして婚和しょうとして、鞠躬如（きっきゅうじょ）（身をかがめて恐れ）として他の鼻息を伺うような態度を見て、我が国民は失望した。・・・爾後（じご）（のち）の経過を予想すれば、国民はいらだち、見識者はあきれ返りしまう。そして続々と入る新聞記事の報告は、段々と悪くなる。日本は償金

の要求を放棄し、露国は樺太の割譲を承諾しないで、まさしく我々の深く考えることは、如何にしても講和を求めているが、露国は着々と談判の強意を高めて、益々我々を圧倒している。考えれば、最初の要求に、我はインデムニチー(賠償)の名を避けて、リインバースメント(払い戻し)の名称の言葉を使ったりしている。談判開始以前は我より先に一歩を譲る者として、遠まわしに事を纏(まと)めるような心の配慮を示し、露国は一金を払わないと声言(せいげん)し、更に動員令を発し、続戦を続けると先声を示した。彼の如く、戦勝の結果を、宴会の席の様なざれごとで取り収さめようとている。・・・・。

毎日新聞

明治３８年９月１日　毎日新聞(東京)１面

毎日新聞　９月２日　１面　**「嗚呼千古の屈辱」**

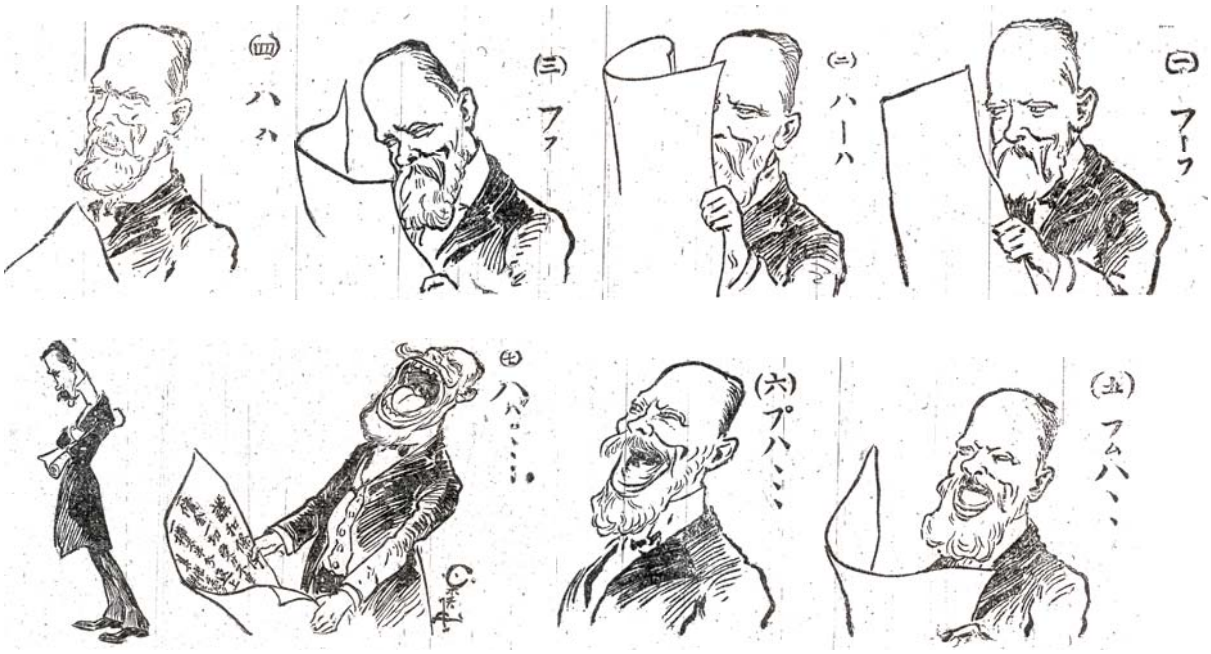
講和は成立して全権の調印がある以上、批准(ひじゅん)も迅速に進むであろうし、内閣の指揮を受けて決定した条約は、必然と批准となるだろう。誰か破棄することを、此の間に変更することはできないか。政府は軍事行動を極秘にするように、講和談判を秘密にしたが故に其の条件の精細なる点は、未だ之を確実することは無いし、内外の諸報を総合すれば、其のあらましはすぐには窺(うかが)う事はできない。・・・開戦の目的と平和の保障を得ることは、是等は既に知られた事実によって不幸にも世に明確となり、露国に日本は組みやすい国と勘違いされ、露国人に軽くあしらわれている心だけに終り、是明らかに外交全局の失敗なり。・・・。

時事新報　**明治38年9月1日**　３面　**「不満足と希望」**（時事新報解説）

唯平和成立のみに其の条件は未だ広報を得られないが、最後の問題として我が要求

条件の中、償金の要件は樺太の南半分を割譲して、竄入軍艦引渡、(中立国港に紛れ込んだ露艦)海軍力制限の二箇条の如きは無論放棄したと知る。近日来の成り行に徹し談判上に好結果を期待予想したが、大譲歩を以って講和条約を結ぶとは思い掛けないことであった。戦争には充分の勝利を収めながら、軍費は１銭も賠償を取らず、実力で占領した土地さえも無償還付とあっては、交戦１９ヶ月、幾多の人命と資金を犠牲にして収め得た戦勝の効果はどの様に見ればよいのか。永遠に充分確実な平和条約を確保した趣旨と見るべきか。日本国民は決して平和の成立を願わない人はいない。・・・既に全権の間に議定された以上、唯遺憾至極、残念千万として涙を飲むほかはない。戦勝の効果が斯に結局に終わる其の責任に至っては政府の当局者及び其の機務(政務)に参與した政治家に於いて自ら覚悟を持つべきである。・・・。

時事新報　９月２日　５面　**ウィッテの七笑い**



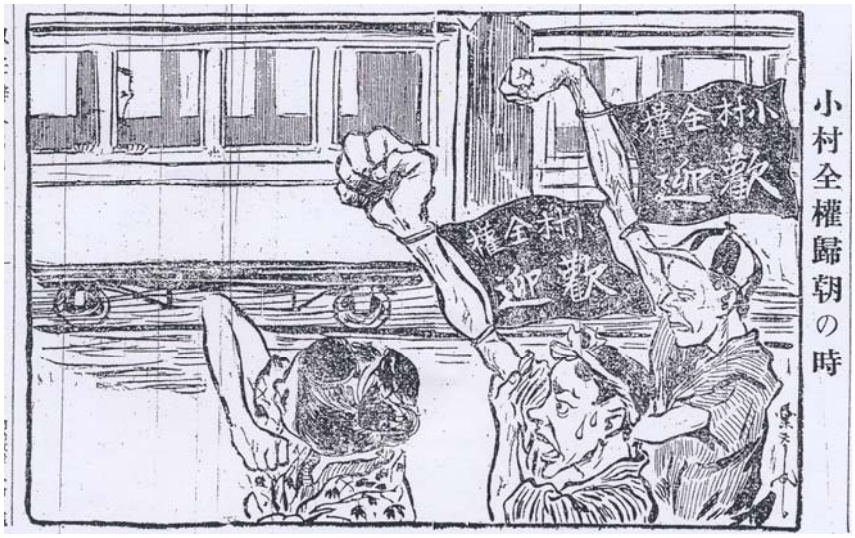
右側より順に見る　　左下段小村全権の呆然とした立姿か

時事新報　９月６日　３面　**「露国新聞講和評」**外務省着電

『ルス新聞』は双方の全権委員が何れも成功を祝し就中日本は重要の利益は悉く之を取得し、特に成功したものはないと、左の如く論じていた。露国は是迄、頻に災害を受けたと今日迄の事を露国の勝利と云うべきでない。此の如くの争いで之を外交上の勝利と称すべきか、唯外交上の失敗を避け、其の目的を達したに過ぎない。

『シノツチエストワ新聞』は曰く、不首尾な戦争の後に歓喜する外交上の成功を収

めることを得る理由はなし、然れども今回の条件は吾人の想像より最上の条件なりと云うべし。・・・・今回の講和条約は露国が古来締結した講和条約中最も不利益なもので、畢竟(究極)外交の無能政府の過失及び社会壊敗(壊れ敗れる)の至りなり、戦争の創痍(傷)が深く、講和条件が国家の体面に創痍は更に甚だしいものがある。・・・。



東京朝日新聞　９月１日・日露ジャンケン委員　　時事新報９月５日・小村全権帰朝の時

東京朝日新聞　明治３８年９月１日　３面　**「講和談判成立」**

講和談判既に成立した事は、本社特電並びに諸外電の報道する如くとなるが、其条件は既に知られているが、概観するにこれまで勝抜ぬいた我日本が、その戦勝後の平和条件に関しては、露国の言い分に吾人は聞き入れ従う次第なり。満韓処分問題は日本の自力は既に決定して居る所である。必ずしも談判の決定を待たないまでも、其中に於いて未決定をなる部分は、皆露国と互譲をし合って謙抑(控えめ)の和解を極めている。・・・・既に露国には談判の折衝を待たずして、日本は退譲している。故に今度の談判は、最初より償金割地、鼠艦交付、及び海軍力制限の四条件と定まり、談判の結果、当局者は悉く主張を投げ捨てている。従って戦争に勝ち抜いた我帝国が、終局の平和条件決定に関して、露国の意のままとなる。・・・。

国民新聞　明治３８年９月１日　　１面　講和事件特派員特電(禁傳載)

◎ 戦費要求撤回の真相　（８月２９日午後浜田本社特派員ポーツマス発）

樺太島割譲及び戦費払戻しの二要求は当初より日露両者間に絶対意見の相違あり、此の二問題はしばしば講和会議の破裂する危機を生じ、然るに日本天皇陛下は、人道

の為、我が全権委員が全く調和的精神と平和の為に戦費払戻し要求を撤回し、日露両国の同意し得る条件を以って樺太分割に同意することを命じ給えりと。・・・。

国民新聞　９月１日　３面**「講和成立」**

我が特派員の伝える所によると、信頼する日露両国は、１９ヶ月間の血戦を経て、遂に和睦を講じて終わる。未だ両国全権の調印を見ず、又両国元首の批准を経ていないが、今日に猝(にわ)かに之を確保しすることは難しい。・・・・我が日本国民は好戦国民ではない。其の戦う為に戦いにあらず。或る目的を達するが為に戦うのである。既に其の目的を達して、是以上戦争の必要はない。・・・和す可(べ)きは必然の経路である。

・・・・日露開戦の理由は其の要を摘(つ)めば、露国が満州を押領し、韓国を侵害したので、日本帝国は露国に向って、交譲的精神を以って、其の平和的解決を試みたにも拘らず､露国の頑として之に応じないので､やむを得ず､干戈(かんか)(武力)を動かしたるなり。

・・・償金の３０億以上を得んとすることや､・・・戦功を無にすると云う事は、最終的に何の為に日本は開戦したのか。・・・我は戦い勝ち、勝って其の宣戦の目的を達したのである。・・・。

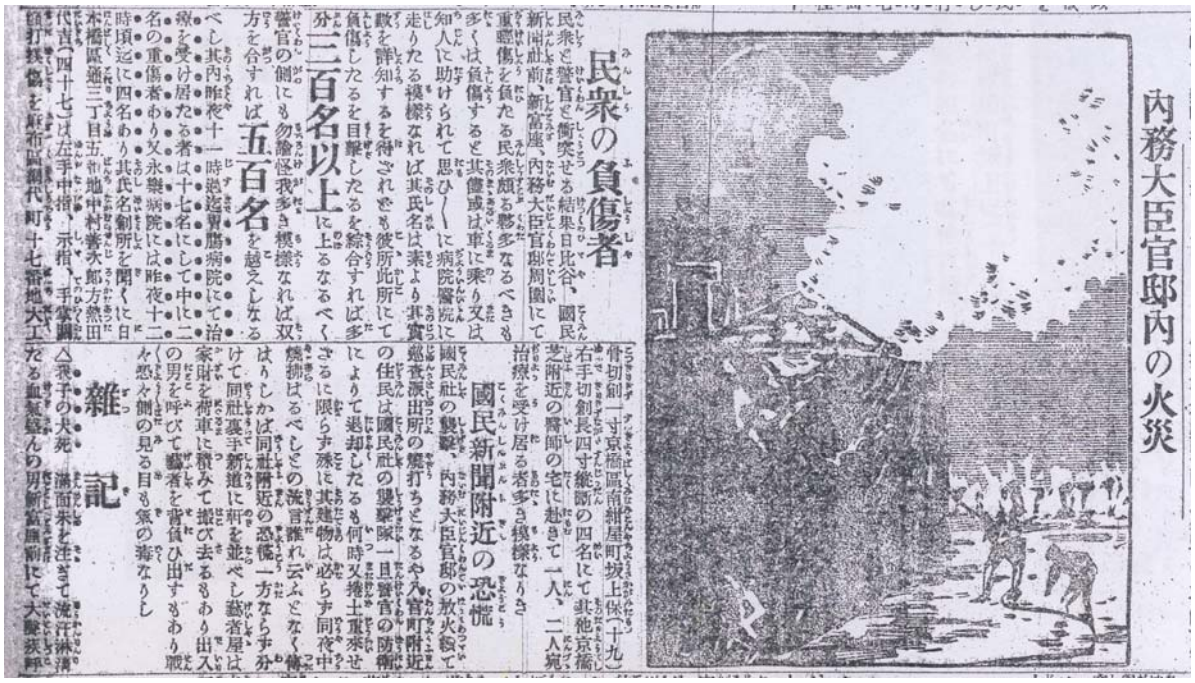
国民新聞　９月３日　１面　**「償金なき講和」**

此度(このたび)、米国ポーツマスに於ける講和談判に於いて、我が全権より軍費支払いを要求したが、其の議は調(ととの)わないで、やもえず本社特派員の電報に依って、之を知る得る訳である。我が全権ばかりでなく、我が国民も皆賠償金を得ることをほっしたのである。・・・・日露戦争の終局については、此の戦争はモスクワを占領しなければ終わらない。・・・３年、５年を費やし６、７千里長駆(ちょうく)を走る説もある。又講和の風説伝わると、３０億の償金得、貝加爾(バイカル)(バイカル湖)以東を割譲と云う噂もある。・・・・早稲田の経済学者天野博士は、俗論の紛々の間に呼びかけて、今日の償金は到底得られない。「償金は今日に収めるは極めて困難なり。・・・しかし軍費及び戦後経営資金に必要である。因って数十億の国債を永く我々が負担することになる。」・・・。

国民新聞　**9月6日**　**6面**　**「国民新聞社襲われる」**　新富座の演説会解散と同時に、二重橋の外を廻った一手の者は馬場先門をくぐり、郵船会社前を東京府裏門に沿って右折するもの、直線して鍛冶橋門を出る者、若しくは馬場先門より直に右折して有楽

町原を横切る者、通る道は異なるが、落合う先きは何れも瀧山町を一直線に日吉町の国民新聞社前に雲集して、どっと起る鯨波の声は天地も震撼するばかりある。

其の間に軽装した２、３０人の若者が群衆中より躍り出て歓声を揚げた突貫の声、諸共一斉に社内に乱入し、直ちに階下の印刷機械場に突入してローラーを壊し印刷機械を破壊し、尚機械の原動力の瓦斯管を破壊し終わると、彼等は再び潮の引く如く野外に退却して群衆の中に混じり同時に石、瓦、レンガの礫は同社硝子窓に向って一斉射撃をし、硝子の破れる音、器物の壊れる音、物凄く此上如何に成行のかと危ぶまれた。此急報に駆け付けた京橋警察署卅間掘分署長始、巡査、憲兵は必死となって制止したが、民衆は容易に静まる様子は見えず、追々勢いが出て来て、例の礫は愈々激しく、一名の巡査は頭部を負い血潮は肩より背に掛けて一文字に唐紅を染まり、又一名は仕込み杖にて肩先に切りつけられた。


内務大臣官邸内の火災

民衆の負傷者

民衆と警官と衝突せる結果日比谷、國民新聞社前、新富座、内務大臣官邸周囲にて重軽傷を負たる民衆頗る夥多なるべきも多くは負傷すると其儘或は車に乗り又は知人に助けられて思ひ〳〵に病院醫院に走りたる模様なれば其氏名は素より其實數を詳知するを得ざれども彼所此所にて負傷したるを目撃したるを綜合すれば多分三百名以上に上るなるべく警官の側にも勿論怪我多き模様なれば双方を合すれば五百名を越えしなるべし其内昨夜十一時過迄賀膳病院にて治療を受け居たる者は十七名にして中に二名の重傷者あり又永樂病院には昨夜十二時頃迄に四名あり其氏名創所を聞くに日本橋區通三丁目五番地中村善次郎方熱田代吉（四十七）は左手中指、示指、手掌闘創打撲傷を麻布區新代町十七番地大工たる血氣盛んの男新富座前にて大聲疾呼骨切創一寸京橋區南紺屋町坂上保（十九）右手切創長四寸縫合の四名にて其他京橋芝附近の醫師の宅に赴きて一人、二人宛治療を受け居る者多き模様なりき

國民新聞附近の恐慌

國民社の襲撃、内務大臣官邸の放火後の警官の側にも勿論怪我多き模様なれば双方を合すれば五百名を越えしなるべし其内昨夜十一時過迄賀膳病院にて治療を受け居たる者は十七名にして中に二名の重傷者あり又永樂病院には昨夜十二時頃迄に四名あり其氏名創所を聞くに日本橋區通三丁目五番地中村善次郎方熱田代吉（四十七）は左手中指、示指、手掌闘創打撲傷を麻布區新代町十七番地大工たる血氣盛んの男新富座前にて大聲疾呼骨切創一寸京橋區南紺屋町坂上保（十九）右手切創長四寸縫合の四名にて其他京橋芝附近の醫師の宅に赴きて一人、二人宛治療を受け居る者多き模様なりき

雑記

△飛子の犬死　滿面朱を注ぎて流汗淋漓たる血氣盛んの男新富座前にて大聲疾呼

時事新報　９月６日　暴動を伝える

既に民衆は何処より持って来た一三の梯子を同社の入口に掛け庇を伝わり、二階に闖入する者は内部より駆け出して梯子を横に倒し、二間ばかりの木材を入口の上方に掲げて「国民新聞社」の看板を突き落さんとするもあれば、柱に掛けてある同社の看板をエイヤーエイヤーと肩に担いで、溝石に叩き付け木端微塵にして、万歳を叫ぶ者いる。警官は唯傍観するのみ。社員栗原武三太氏は此騒動中、前頭部に負傷し尚社員中負傷を受けた者数人に及び、是より先寄せ手の一人は下軒板の屋根看板を突き落とそうとしたが、其れを見た社員栗原三太、阿倍美家の両氏は各々二尺三寸程の業物の鞘

(名刀)を払い屋外に突いて出て、其の奴らの横腹に切りつける。

其れを見た民衆は「それ抜いたぞ」と激昂、巡査もそれを知り直ちに彼の抜刀の社員を制止屋内に入ってしまう。兎角するうち、各方面より多数の巡査応援が駆け付け漸くにして解散したが、一時同社界隈の雑沓は全く言語に絶した。・・・。

国民新聞　９月７日　３面　**「天下の大事を誤る者」**　天下正義の士は、之を何と見るか、日本の忠良なる国民は、之を何と聞くか。今や講和条約既に調印せられんとしている。我が帝国と露国の開戦した目的を外交談判により収め、我が国民をして平和的、積極的の経営を開帳し大いに開国に取り組でいる皇謨(天皇が国家を統治)を、宏恢(大きく開く)になるに際し彼の毫も(少し)世界の大勢に通じない。帝国の立場を詳らかにせず、当今の事務に就いて殆んど盲目なる徒と、此れをあおる問題にして、その機会に平生の私憤を晴らす徒、此の国家的問題を営業的問題として手先を打とうとする輩がいる。・・・・二重橋外に於いて吊り旗を翻し天子の想いを驚かし奉るのは誰か。更に甚だしきは内務大臣官邸を焼討し、都下の警察署、派出所に放火し、危険の天地を現した者は誰か。・・・彼等は所謂志士と云うが、憂国の士たるもの放火犯人・家宅侵入者を謂うか。白刃を揮い瓦礫を飛し、良民に危害を与え、果たして彼等は所謂志士か、憂国の士たる本分を云うか。・・・(略)。

萬朝報　東京京橋　　明治３８年９月１日　１面　**「嗚呼、千古の大屈辱」**

嗚呼、夢か、夢にあらず、夢ならば覚めて自から一時の幻影なるに過さりし慰される機あるべし、夢にあらず、夢にあらず、一つの現実として千古の大屈辱の眼前に成立するのを如何にするのか。・・・。割地と償金とは、初めより講和条件の骨子となっていた。喩え萬やむない事情に由り、最小限の要求を譲歩するのは必要であるが、其の譲歩は枝葉の問題に於いて、決して之を此の骨子の上に於いてするべきでない。骨子の上に於いて譲歩をすれば、講和条約は名があって実がなければならない。・・・露国が壮言豪語を弄し、頑然これを断るとすれば、驚倒とされ、自からびくびくと退場の事となり、講和の破裂に終ることを恐怖となって、遂に樺太の北半を棄て、償金の要求全部を撤回し、纔かに捕虜収容の経費として１億５千万円(現在の金額７万倍位)の補還に止まっているではないか。・・・償金要求の撤回は我が国経済をして 悲惨の情

況に陥ってしまう。・・・・。

東京日日新聞 **新橋　明治３８年９月１日**　２面**「和議成る」**

・・・既に公然の秘密として世間に知られた償金割地の重要案件に於いて、樺太半部を割取して北部は無大償にて之を露国に還與(かんよ)して償金全部を抛棄(ほうき)することは、洵(まこと)に、以外の結果を見るに至った。而(しこう)して政府機関氏の報ずる所に縒(よ)れば、割取すべき樺太の半部は北緯五十度を以って境界となれば、我が占領軍の略取したる五十一度付近の地域は之を包含(ほうがん)していることになり、我陸海軍の戦勝に依って得たる結果も、既に此退譲に因って著しく毀損(きそん)(こわれる)を見るに足る。・・・。

日露講和条約成立　８月２９日講和が成立、**欧米の各新聞紙面**を見る。

『ワシントン・スター』(保守系紙・1981 年廃刊)「日本は・・・人道のため償金の権利を放棄した。この偉大な行為は、日本人が勇敢なだけでなく寛大な国民であることを示している。・・・。」

『ワシントン・ポスト』(1877 年創刊)　「ロシアは講和の結果、予想外の好体面を保った。ロシアの外交官は同国の軍人より優れている。」

『ニューヨーク・トリビュン』(1841 年創刊 1966 年廃刊)「平和のためとはいえ、敗れた相手に自分の正当な戦利を譲ることは、偉大な国民でなければできないことである。」

『ロンドン・タイムス』(1785 年創刊・世界最古の日刊新聞)「日本は、開戦の目的としたものを、満足と考えられる形で獲得した。日本の政治家は史上比類のない自制力を発揮したが、これは日本古来の武士道の精神により、金銭のために続戦することを否認したからである。」

『ノルド・ドイッチェン・アンツァイゲル』(ドイツの新聞・日露の戦力を冷静に判断している)「講和がこのような形で締結されたのは、ロシアが、なお続戦の潜在力を持つという事実に基づいている。」

『ル・シエークル』(仏国新聞・親日派)「日本は連勝によって世界軍事大国の仲間入りをし、償金放棄の寛大さによって文明国の地位を得た。」

『ル・ジルブラース』(仏国新聞・同)「日本の行為は偉大である。今後、日仏間の親密化をはかることは、フランスにとって有益である。」

『ル・ゴーロア』（仏国新聞・親露派）「日本の国力は限界に達したが、ロシアには余力がある。にもかかわらず、露帝は講和締結に傾いた。」

『スローウォ』（ロシアの新聞は屈辱的と）「今回の講和条約は、屈辱的敗戦の結果、やむをえないものであった。」

日本国民が暴徒化する　日本国民は、賠償金２０億は取れず、樺太が半分の講和成立、国民は唖然とした。悲しみが怒りとなり、人々は講和反対のデモに繰り出した。日本国民のあらゆる階層の人達が、生命を奪われ、重税にたえていたではないか。なんでこんな屈辱的講和を結んだのか！　日本軍隊は連戦連勝でないか！　戦争を続けろ！　ロシアをやつけろ！　小村、政府、恥を知れ！

国民感情の爆発は無理もなかった。政府の実情を国民には知らせていなかった。知らせる訳には行かなかったのである。日本の戦争の収め方は、奉天までの連勝が精一杯だった。日露戦争自体が、危険な綱渡りであり、国民を鼓舞して、緒戦から一気に勝ち抜け、戦力の尽きる寸前に英米仏独の列強の介入によって、渋るロシアを講和交渉の場に引き出したのである。日本軍はハルビンに攻め込むぞ、の気勢を示していたが、これはロシアを欺くための虚勢に他ならないが、結果として日本国民をも欺（あざむ）くことになった。政府は日本の軍事力が尽きたなどと、国民に知らせれば、忽ちロシアに知れ、日露講和は破裂してしまう、瀬戸際外交であった事が分かる。

９月５日、講和調印の日、東京日比谷公園で講和反対の国民大会が開かれた。主催したのは講和問題同志連合会で、参集人約３万人、壇上での大演説は無念と悲痛の叫び、国民新聞社へ押しかけた。交番３６４カ所が焼き討ち、教会、アメリカ大使館、大臣官邸、小村留守宅を暴徒が襲い、帝都は無政府、無警察の混乱に陥った。翌６日、政府は戒厳令を出し、軍隊の出動で暴徒らを鎮圧した。同日、緊急勅令で、講和反対記事を載せる新聞雑誌を厳しく取り締まり、全国で３９諸紙が発売停止となった。

非講和論と講和謳歌論　『日本新聞発達史』小野秀雄著　五月書房　昭和５７年より

講和条約成立は国民の希望に副わないと反対した新聞社は次の通りとなる。

東京朝日新聞・９月１日　今回の条件は東洋の平和を永遠にたもつ所以ではない。政府は戦後平和の破裂によって国民の受ける苦痛を虜（とりこ）に、露国の指命条件に聽従（きしょう）（聞

いて従う）したとすれば、日本政府自ら日本国民を屈辱するに当たる、国事を誤る者は当局者也。

大阪朝日新聞・９月２日　和約は陛下の嘉納をまって成立、時機決して遅くない。万民よろしく鼓を鳴らして和約の破棄と閣臣の更送に努力せよ。当局尚且つ調印を終ったたら陛下の批准を拒むことを請い奉れ。

日本・９月２日　今回の条約は民論を省虜しないで、当局の専断によって締結したもの。人民の本位と相距(あいさる・さる=去る)ことは遠い、事前に鎮静した国民は、今は起きる時期となる云々。

時事新報・９月１日　批准交換を経るうちは平和の成立も未だ確実ならない、或は場合に依っては更に交戦を継続することになるかも知れない、故に此の際軍事当局は予定の計画に少しの油断あってはならない云々。

東京日日新聞・９月１日　互譲案は卑怯汚辱の極みである。当局は何故談判の不調を図からなかったのか、樺太分割は自ら好んで他日葛藤の種を下したものである。

大阪毎日新聞・　かくの如き結果を得たことは、全権元老閣臣の罪である。宣戦の詔勅には、永遠の平和と帝国の光栄を保全することを期するけれど、此条件にて此目的を達する事を得られるか、嗚呼弔いする死体的講和。

東京毎日新聞・９月１日　此失敗の反応は国民の憂憤となり、志士の激昂となり内地の安寧は恐らく動揺しない。

報知新聞・９月１日　遼東還付以上の失敗である。唯一の善後策は批准拒絶にあるのみ。

萬朝報・９月１日　帝国の光栄を抹殺し、戦捷国の顔に泥をぬるのは我全権なり、国民は断じて帰朝を迎えることはない、之を迎えるには弔旗を以ってせよ、帰朝の日は市民一斉に閉戸して顔をそむけよ、千古の軟骨漢を歓迎する者は、血なく骨なく公心なく義憤のない醜奴のみ。

都新聞・９月１日　此屈辱的平和に満足する者がいるとすれば４千萬の同胞中、僅に１６人いるのみ、其の１０に人は内閣員なり、其の４人は元老なり、他の２人は高平全権委員と徳富蘇峰なり、怪なる哉、此異彩講和の成立を祝し政府を謳歌し、中央と国民は其の言論極めて冷静であった。

中央新聞・９月２日　講和の条件に不満足のものがあったが、吾人は文明の為、人道の為、平和の来るのを賀せずにはいられない。外交に於いて一頓挫あっても、其の大

捷の光輝を荷負って更に平和の戦場に於いて大々的勝利を博してはきいけない。

国民新聞・９月１日　今や吾人は戦勝の結果として平和条約に於いて其の目的を達し、悉く之を達し、総て之を達したのみならず、其れ以上の獲物を握り、韓国の保護権、満州の撤兵、門戸開放、旅順大連の租借等皆宣戦当初の目的以上の副産物なり。

政府は１日以来の新聞紙の論調を見て驚き、戒厳令と同時に新聞紙取締の緊急勅令を発布し、発行停止を命じられた。９月７日、萬朝報、二六、都、８日、日本新聞、人民新聞、１０日、東西両朝日、大阪日報、１１日、二六再停止、１２日、山梨民報、東北評論、小樽朝報、１８日、大阪朝日再停止となる。

日本国は決して不利な講和条件ではない　ルーズベルトは1905年９月６日付でジャーナリストの親友Ｇ・ハーウェイに次の様に書き送っている。

《「日本は、実際には素晴らしい報酬を獲得している。償金が取れなかったために、講和条件全体が日本にとって大失敗であるかのように言うのは賢明ではない」ルーズベルト大統領は日本国民の態度をみて、情勢の無理解であると批判した。日本人は交渉の大詰めに於いて、割地・償金問題の２点に没頭し、それが全てである様な錯覚を起こしている。抑々（そもそも）日本が開戦したのは、土地や金が目当てではなかったはずである。日本は取るべきものは取っているではないか。朝鮮の支配権、東清鉄道の一部割譲（かつじょう）、遼東半島の租借権、ロシア軍の満州撤兵である。これによって戦争目的は充分達成されたではないか」》と述べている。

日本は、ポーツマス条約、第二次日英同盟締結によって、世界の大国としての地位を獲得、欧米列強と肩を並べた。これは日本の歴史始まって以来のことで、よく考えてみれば、日本国民が悲憤するほど損をしたわけではない。

しかし残念なことは、日露戦争の快勝で軍部と国民が、日本軍事力を過信し、その後の日本の不幸な歴史が始まる流れとなる。日露戦争時の日本国力を知っていたのは、参謀本部の重鎮、元老、上層の政府要人だけであり、彼らはその事情を国民に公開しなかった。しなかったのではなく、出来なかったことが真相であろう。当時、国民に軍事力不足を公開したならば、露国との講和は締結できないと、大本営は考えていた。

ロシアとの講和談判の兼ね合いを考慮すれば、不可能であったと筆者も考える。

（『日露戦争を演出した男モリソン』ウッドハウス映子著・新潮文庫参照）

第13章　お雇いドイツ人フォン･ベルツの日記

エルヴィン・フォン・ベルツは(１８４９―１９１３年)ドイツ帝国の医師。日本人相良玄貞（独逸留学中に入院時に知り合う）との縁で明治９年来日したお雇い外国人の一人。明治１４年、日本女性ハナと結婚。２７年間に亘り東京医学校(東京大学医学部の前身)日本医学界の発展に尽くす。明治２３年頃、明治天皇・皇太子の侍医となる。『ベルツの日記』は在留外国人の観た日露戦役裏面史の日記録となる。ドイツ版(書名『ERWIN BÄLZ, Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan』(「エルヴィン・フォン・ベルツ、日本を覚醒におけるドイツ人医師の生活」)のドイツ版を元に昭和１４年、日独文化協会から『ベルツの日記』として刊行。(時代背景により未発表個所がある)後、トク・ベルツはドイツ帰国、1913年没・64歳。長男フォン・ベルツは昭和２０年、日本で死去。彼の日記『ベルツの日記』(下)トク・ベルツ編・岩波文庫。明治３７年(1904)２月５日から３８年(1905)８月２９日迄の、日露戦争期の部分にベルツが日露戦をどの様に捉えていたかを観る。() 注釈は筆者が入れた。

明治３７年２月５日(東京)　平和の見込みは、もはや無きも同然。ロシアは遼陽に兵力を集中し、続々と先発部隊を鴨緑江に進めている。アレキシェフ総督は、(パリ経由でペテルブルク宛の報告で知る)自己の判断により必要とあれば、直ちに宣戦を布告する全権を委ねられている、と伝える。これは少々眉唾(まゆつば)ものである。ロシアにすれば、日本の方から宣戦を布告させるのが、遥かに好都合であるからだ。昨日、宮中で「重大な会議」があった。伊藤、山縣、松方、大山、井上の諸元老と各大臣が出席し、会議は長時間に及んだ。最後的な決定をみた模様、・・・今は誰も戦争を疑うものはない。事実、戦争を避け得るかは、最早推察の限りでない。・・・。

2月7日　　交渉決裂、戦争！　さあ戦争だ。日本側の再三に亘る厳重な催促にも拘わらず、未だに何らの回答にも接しない。茲(ここ)に日本は交渉を打ち切る！旨、一昨夕、小村外相はローゼン男爵(駐日ロシア公使)に通達した。・・・。

２月９日　・・・今朝、日本側の要求及び対ロシア交渉に関する政府の公表があった。それによれば誰でも日本が我慢し切れなくなって交渉を決裂させたことを、尤もだと思わざるを得ない。ロシア政府はこの機会を利用して、日本を平和の破壊者と宣伝している。・・・夜、開戦第一報、７日(即ち一昨日)仁川港碇泊中の巡洋艦ワリヤーク(6500トン)及び砲艦コレーツ(1800トン)は、長崎・大連間の連絡に従事する東シベリア汽船の大型新造船２隻と共に我が軍（日本軍）に拿捕される。・・・韓国宮廷ではロ

シア側に兵２千の派遣を要請したが、到着したのはロシア兵でなく日本軍なのである。しかも、ロシアの軍艦が拿捕される有様！　気の弱い韓帝にとって、これは確かに驚異であり、恐怖であったはずだ！　皇帝は数日前から万一の場合は、フランス公使館に難を避けることに決めていたそうである。・・・日頃から韓帝に、ロシアに刃向う勇気が日本に有るとは、到底考えられないと、吹き込んでいたからである。・・・。

２月１０日　・・・日本海軍の勝利！　『時事新報』号外、「一昨夜１１時、我が海軍は旅順の旅順港口に於いて露国艦隊を襲撃し、戦艦２隻、巡洋艦１隻を水雷により撃沈せり」と。これは、まるで作り話のような感じがして、旅順港口、砲台の直下で！とは、ほとんど信じられない。・・・。

２月１１日　宣戦布告、今日は「紀元節」、２５６４年の昔、神武天皇が即位した日であるとか。この日を利用して天皇は、対露宣戦を布告した。・・・。

２月１３日　・・・外交関係の決裂にも関わらず、旅順では、日本軍のあの様な攻撃を想像しなかったらしく、アレキシェフ提督と多数の士官連は、８日の晩、劇場に居(お)ったとか！　芝居の最中に、日本軍の大砲が市街に響き渡った！　そこで、吃驚(びっくり)仰天して、大混乱が起こったのであった。

２月１６日　戦争の第一報、最もそれは、誇張されてはいたが、ヨーロッパに受けた深い感動が、段々と判って来た。（欧州の情報が入る）今度という今度は、流石(さすが)のドイツも無敵ロシアの脆(もろ)さ加減が、こうも暴露されたのを見ては、愈々(いよいよ)目を覚ますことになるだろ。これまで、（ドイツは）あからさまに日本人を軽蔑し、一途(いちず)にロシアを賛美して憚(はばか)らなかった、東洋に於ける我が独逸(ドイツ)海軍と役人の連中に良い薬だ。・・・彼らの若干の者は、日本の方からロシアを攻撃するが、その際十分勝算があるとの意見を述べたところ、（彼は日本人として日本軍の精鋭を語っている）素気なく笑殺(しょうさつ)（ドイツ海軍連中にあざわられる）された。私（ベルツが日本軍の実力を述べると）は流石に日本人を観る点に掛けては、誰よりも勝れていると賞められるどころか、反対に盲目的な日本贔屓として、ヨーロッパの物事を量(はか)る尺度を無くしてしまったのだと言われた。・・・。

２月１９日　旅順司令長官スタルク提督罷免。後任者はロシア随一の海相将マカロフ（ステパン・マカロフ・砕氷船建造者・戦術論者。日本軍の機雷で爆沈爆死）は、部下の連中は彼を、ネルソン以後に比肩なき海の天才と称している。ウラジオストックや旅順やバイカル湖で幾多貴重な役目を果たした砕氷船の発明者でもある。・・・彼の観るところでは、日本人のこの素質を酷(ひど)く過大に評価していることだった。今や彼はこの事

実を痛切に悟ることだろう。日本軍もまた、彼がまれに見る由々しき好敵手であることに気付くはずだ。この点を日本軍は百も承知だ。・・・。（よく露国観察をしている）

２月２７日　日本側の公表、日本の老朽船５隻に石を積み、これらを港口に沈めて港を閉塞するに当たるとか。ところが、偶然のことに、露艦レドヴィザン号が、丁度港の入り口に坐礁していて、堡塁諸共に猛烈な砲火を浴びせてきたので、乗組員は早目に船を沈没させたそうである。従って港口はまだ塞がれていないわけだ。この殆んど確実な決死行に、全兵員が残らず自発的に志願した。・・・これらの乗組員は救助された由（よし）。大胆な作業である。（旅順口の閉塞状況を語っている）

３月３０日　２７日午前３時３０分、第２回旅順港閉鎖敢行。驚異的な勇敢さをもって強行されたにも関わらず、今回の試みも失敗に帰した。山本海相は、この攻撃を議会に報告した時、ロシア軍がなお強力な艦隊を有し、マカロフが有能な指揮官である点を認めた。１ヵ月前に新聞では、ロシア軍を満州から追払うことなどは、朝飯前であるかのように書き立てていたにも関わらず、今や急に日本側で、相手の勇敢さを強調し出したのは奇妙だ。・・・。

４月９日　・・・夜、ドイツ公使館で盛大な宴で陸軍大臣と色々な話をする。不思議にも大臣は、戦争のことに関しては、他の日本人よりも口が軽い。或いは、少なくとも自分（ベルツ）に対して、あまり遠慮しないのだろう。大臣は素直に認め「あの旅順口の第一夜に１、２隻の犠牲は覚悟の上で、港内に引続き突入し、ロシアの全艦隊を襲撃しなかったのは、東郷の失策だった。今では事が頗（すこぶ）る面倒だ」と。・・・。

４月１３日　午後、広瀬中佐の葬儀。国民葬の形をとる。この広瀬は、最初からその一命を確実に投げ打つも同然の大胆極まる企てを、２回も敢行する以前から海軍では特に評判のよい人物であった。彼は外面的な栄誉には全く無関心で、酒と女を斥け、ひたすらその軍務に没頭した。しかも親切、温厚で部下のためには、世話を惜しまなかった。海軍士官なるものは、僧侶の如く、全身を勤めに捧げるべきで、個人的の絆に縛られてはならないとの信念に生きていた為、彼は妻を迎えなかった。敵の砲台と軍艦からの激しい砲火の下で、底荷（バラスト）積載の船を爆発した後であったが、部下の勇敢な機関部員の安否をも確かめるまでは、身の安泰を計ろうとしなかった。空しい捜査の後、彼がボートに飛び乗った時、一発の砲弾がその身を引裂き、ただ「一片の肉魂」

がボートに遺された。これが鄭重に保存され、今日東京の青山で埋葬にされた。天皇はその死後、彼の身分としては破格の位階昇進を許された。この様な死後の名誉表彰はヨーロッパ人には不可解に思われるが、これにより後世の人々に輝く栄光の中に先人を崇めつつ、単にその生涯だけでなく、その死も祖国の為であったことを示すのであるから、決して無意義ではないのだ。・・・。（彼は日本的文化哲学を理解している）

５月２日　日本軍、陸上での最初の勝利。日本軍は九連城（鴨緑江沿い）を占領し、捕虜千名、野砲２８門を獲得！　敵の砲列下を渡河し、堡塁に突入。・・・ロシア軍の士気を酷（ひど）く喪失させるに違いない。日本軍の損害一千名。

５月５日　鴨緑江岸に於ける日本軍の勝利はヨーロッパに非常な感動を与えた。・・・

５月１４日　・・・日本はロンドンとニューヨークで１千万ポンドの公債を、９割３分の時価、６分の利子付、関税担保で募集した。こんな条件は、現在の有利な戦況から見て、甚だ不都合であるから、最初東京ではどうしても信じようとしなかった。その第一報に接し、新聞は有り得えないと断じた。が、やがてこれが事実と判明すると、政府の最大の反対派も沈黙した。彼らの本能的な愛国心が決して政府の妨害をしてはならないと命じたのだ。（日本の戦費公債の６利子高に不満を述べている）

５月１５日　・・・結局、日本の新聞も不平を洩らし始めた。日本側は１億円を６分の利子で獲得するが、ロシア側は３億２千万円を５分利で、しかも額面価格だ。この差異は実際の処、あまりにも甚だしい。

５月２０日　日本軍海上の大難。ロシアの機雷の掃海作業により、最近すでに２隻の水雷艇を失ったが、今度は戦艦「初瀬」がロシアの浮流機雷に触れて爆沈した。しかも同日巡洋艦吉野（英国製 4216 屯）と春日（イタリア製・アルゼンチンより購買・7700 屯日進と同型）が濃霧のため衝突沈没（？）した。・・・。

６月２日　旅順陥落の急速な実現に対する自分の懸念が、遺憾ながら全く正しかった様子である。今日、この様な懸念が初めて新聞紙上に現れた。即ち、ある軍事通者曰く、旅順陥落を近日中と期待してはならないと。・・・。（露国側の情報を得ている）

６月２６日　・・・今日奇怪な報道があった。ロシアの全艦隊、即ち戦艦６隻、巡洋艦５隻、駆逐艦１４隻が旅順の沖合に姿を現したというのだ。これは明らかに閉塞物が取り除かれたことと、沈没しない６隻の戦艦がある事を、世界に誇示したのであ

る。日本艦隊は有らん限りの水雷を集め、攻撃を加えた。結果、戦艦ペレスヴィト沈没し、他に戦艦、巡洋艦各１隻は港内へ曳行、その後、残りの諸艦も退却した。

７月３日　反独逸熱は全世界に拡がって行く。最近誰かが「ドイツ人が一般に鼻つまみの有様は、全くユダヤ人と同様だ」と言ったが、最(もっと)もな言葉だ。・・・我々ドイツ人に対する憎悪の感情は疫病のようだ。・・・有名なウチトムスキー公が、一新聞代表と会談して「日本が日清戦争の後、その戦利品を奪い取ったのは、ドイツの罪である。ロシアはドイツに誘われて干渉に加わったのだ！」と言明した。およそ、これ以上の鉄面皮(てつめんぴ)があろうか！！ウチトムスキー公はその発言には権威がある。・・・。(ドイツ皇帝が、清国の敗戦時に膠州湾を獲得し、それに引きずられて露国も遼東半島を租借したと述べている。カイゼルによる露国を極東に進軍させることを促したと公は言う。一理あり。)

７月１０日　・・・日本人が旅順陥落を必至(ひっし)と見る自信は、全く恐ろしい程である。東京の全市街では軒並みに、或いは道路越に、支柱を建て回したり、針金を張りめぐらしたり、提灯や旗を吊るす様にしてある。・・・何処へ行っても「旅順陥落祝いで仕事がつかえていて、ご注文には応じられません」との返事。・・・旅順は絶対確実に陥落する訳でもないのに、誰の念頭にもないらしい。・・・。(簡単に陥落しないと云う)

７月１５日　・・・ウィルヘルム独逸皇帝は、又も親電を発せられた。皇帝を名誉隊長に戴くロシアの連隊に宛て「皇帝陛下と祖国のため、卿(きょう)ら連隊は今や出陣の栄を担う、これ朕の誇りとする処なり。神よ、連隊旗に祝福あれ！」と打電したのである。勿論(もちろん)ご自身にすれば、一片の辞令に過ぎないかも知れない。が、しかし、日本では独逸皇帝が親露的傾向を余りにも知り過ぎているので、どんな言葉でも邪推して解釈されるからだ。常に反独的(特に『時事新報』は反独逸・親英的)である日本の新聞は、こんな機会をも徹底的に利用して毒舌を揮(ふる)っている。・・・。(この時期ドイツ皇帝は、露国皇帝軍を極東に向けさせる事に異常なくらい外交戦術を展開と重なっている)

８月１日　愈々(いよいよ)戦争が第６カ月目に入り、まだ真の勝敗の決定は下されていない。・・・英米の新教伝道者連中の態度は、この戦争に於ける最も不快な現象に属するものだ。彼らは今や神道や仏教の信徒らと合同大会を催し、その席上で今度の戦争は人種と宗教に何の関係も無いのに、日本は野蛮国ロシアに対し、真の文明を代表するものであること等を宣言した。・・・ロシアは満州の馬賊紅鬍子(ホンホーツ)(赤ひげ)を使役し、開

戦当時は日本軍への敵対行動に利用しようと思っていた。これらの危険な連中が、今度は日本側の味方になり、北京駐在ロシア公使は、清国政府に厳重な抗議を提出した。「盗人猛々(たけだけ)しい」とはこれだ。・・・。(日露共に満州地域の馬賊を利用していた)

８月１９日(元箱根)　・・・１０日朝、大山元帥は軍使を派遣して、旅順司令長官に非戦闘員の立退きに関する天皇の文書を伝達し、それと同時に降伏を勧告した。元帥は１７日正午までの猶予期間を与えたが、その後なんの音沙汰もない。・・・旅順は降伏しない。旅順のロシア軍は大山元帥の開城勧告を拒否したばかりでなく、非戦闘員の立退きさえ断念した。・・・。

８月３０日(東京)　旅順は依然として落ちない。その代わりクロパトキン軍に対して戦果を収めた。日本軍は２６日、２７日遼陽の南方鞍山店附近で、最初正面より攻撃を加え、退路を迂回してクロパトキン軍に大損害を与え、砲８門を分捕った。・・・。

９月２日　大勝利！　日本軍は忍耐と気力の点で、超人的の行為を成し遂げたに違いない。もしクロパトキンがこの大戦で一敗地にまみれると、戦争は当分日本に有利に決着することになる。旅順は持ちこたえている。クロパトキンがステッセルに、今１カ月保てば旅順の囲いを破って救い出す旨を伝えた由。だが最近の報道はこの可能性かの僅少(きんしょう)(わずか)なことを示している。・・・。(旅順陥落に不信感を抱いている)

９月４日　・・・旅順は落ちない。ペテルブルク(露都)発の一電報によれば、ステッセルは８月２２日より２８日に至る間、日本軍が連日に亘り攻撃を加えて来たが、常に大損害を与え経てこれを撃退した旨を報告している。・・・しかしながら、要塞の塁壁の下に日本軍の半数が死体となり、或いは負傷して横たわっていることは、疑う余地のない処である。・・・遼陽の戦いは旅順の陥落よりも重大なのであるが、なんと言っても国民は、後者を大きい慶びと思っているのだ。・・・。

９月５日　クロパトキンの退却は成功したらしい。この退却は、奥、野津両軍の猛攻を支えたロシア軍部隊の勇敢さによって可能になった。クロパトキンはその敗北を率直に認めている。最初から戦争する気の無かった彼にとっては辛いことだ。日本の勝利がヨーロッパに与えた印象は大きい。わが国（ドイツ）の武官連（ドイツ軍人は日本軍を小馬鹿している事をベルツは気に入らない、しかし今に見ておれ！)、ことに海軍の連中も、日本人が大いに取得し、大いに実力のあることを愈々(いよいよ)認めるだろうか？・・・。

９月 11 日　・・・クロパトキンの殿軍(しんがりぐん)と戦闘が交えられている模様である。形勢

は日本軍にとって一層重大である。クロパトキンは逃れ、旅順は落ちないのだ。クロパトキンが退却すればするほど、その補給線は短縮され、一方日本軍は愈々延長されることになる。・・・日本人が敵国ロシアの同盟国たるフランスの人間よりも、我々ドイツ人を憎んでいるのは事実だ。否、それどころか多数の日本人が公言するように、ロシア人よりも酷く我々を憎んでいるのだ！　日清戦争のドイツの干渉と膠州湾の占拠以外に、ドイツ皇帝が露骨に示される黄色人種（黄禍論）への反感のせいだ。・・・。

９月１４日　・・・イギリスの世論の変化は、帰国した新聞通信員によるものだ。彼ら通信員は悉(ことごと)く日本で受けた虐待振り（従軍記者たちに戦場観戦を参謀本部は許可しなかったのである）に憤慨している。一人として戦争を間近から見せてもらった者はなく、遠方からの観戦を許された者すらほとんど無い有様である。彼らは邪推され、まるでスパイの様に見張られた。外国の公使館付武官連も同様の目にあったそうだ。・・・。（特に列国武官達は戦の現場への見学は不可で、理由は戦場秘密情報が洩れ事を恐れていた）

９月１９日　・・・韓国に『コレア・デーリー・ニュース』（大韓毎日申報・毎日新聞系）という日本の息の掛かった新聞が発行されている。この新聞が、図々しくも主張して曰く「日本は幾百万の金と、幾千の人命を投げうって、韓国の独立の為に戦っている！」と。その韓国の自主性を日本が今では、あっさりと奪ってしまっているのに。甚(はなは)だ興味ある事実は、ウルズリー卿（英国元帥。アジアの諸戦役に勇名を馳せる）が黄禍を信じ、米国を代表国と認めていることだ。と云うのは米国では既に早くから黄禍を真剣に考え、これと闘っているからだ。日本が大勝利の暁に於いて、日本と摩擦を生ずる第一の国は、米国である。それは、両国共に太平洋を目ざしているからだ。・・・日本は戦争が済めば大いに疲弊となり、回復に 10 年を要する。それに金だ！　その上清国が日本の言いなりなるかどうかは、疑問だ。すでに今からして、不信の徴候が見えている。・・・。（ポーツマス講和会議後の日米の太平洋制覇する苦悩を言い当てている）

９月２８日　・・・傷病者の数（日本人）、『ジャパン・タイムス』によれば、現在 4 万 5 千名以上が内地の病院に収容されている由。数千名は満州の地で治療を受けており、しかも戦場に在る兵数せいぜい 30 万で有る事を思えば、これは莫大な数である。

１０月１３日　ロシア軍退却中。遼陽北方に於ける日本の勝利。当地で日本軍の戦略に屡々(しばしば)疑念を抱いていたのは全くの杞憂(きゆう)（取り越し苦労）だった。４日に亘る戦闘で日本軍は、奉天の南方延長５０キロの全線に於いてロシア軍を撃破し、大砲３６門を奪

取した。この戦闘を日本側では、戦略的に最も光輝ある成功と見なしている。戦史上最大の激戦に属する。両軍２０万以上！　ロシア軍は砲約千門である。ペテルブルグでは意気消沈の体たらくに相違ない。・・・。

１０月２３日　・・・バルチック艦隊が罪のないイギリス漁民を砲撃し、２隻を沈没せしめ、多数の人を殺傷した。まだ公表は無いが、引いて説明をつければ、露艦が対日恐怖心から、罪のないイギリス漁船を日本の水雷艇と誤認したものと解釈するより他はない。この報道が確認されるとバルチック艦隊は歴史上で永久に恥をさらすことになる。(1904 年 10 月 21 日北海のドッガーバンク“英国東方 100 ㎞地点”で英国漁民船団を、バルチック艦隊が砲撃した。2 人死亡他負傷者有り。漁船団は日本の水雷艇と間違える。)

１０月２８日　・・・ドイツに対しては終始口喧しい日本の全新聞は、殆んど惨めなくらいの崇拝と敬慕をもって「我々（日本）の同盟国イギリス」に愛着している。連日、我々は「独船、露艦に石炭を供給云々」の記事を読まされる。しかしイギリスの船が同じことをやっている点は全然知らぬ振りだ。(英国も裏抜けしているだろう！)

１０月３０日　・・・今日聞いた処によると、相変らず陸軍と海軍の間の勢力争いが激しい様で、現在、旅順の占領が非常な難関に遭遇している責任は、主として海軍の我儘(わがまま)に因るそうだ。それと云うのも旅順での名声を海軍が一手に占めようと思ったからで、旅順の背後に軍隊を至急上陸させることを、陸軍側から催促すると、その都度、海軍の返答は何時も決って、冒険過ぎるから、責任を持って安全を保障することは出来ない。同やら海軍は、最初の内単独でこの要塞を片付けてしまう予定だったらしい。處がそれは、とんでも無い誤算だった。挙句(あげく)の果て、如何しても軍隊を上陸させねばならない事になった時には、もう陣地がすっかり固められていたので、日本は陸海軍共、散々これに悩まされる事になった。・・・。(旅順攻囲戦を的確に掴んでいる)

１１月２日　旅順。第２回目の旅順に関する公表があった。・・・日本軍のやり方から考えて、その企図を放棄するまでに、決死の行動に出た事は確実だから。その後、日本軍は、専(もっぱ)ら坑道を掘る事になった。斯くして今回、爆薬により内部要塞地帯中に、２カ所の破口(はこう)を作る事に成功した。今や新聞はこの公表を「旅順まさに断末魔」なる見出しで掲げているが、しかし、その公表自体から推測すれば、前途なお莫大な犠牲が必要であろう。・・・。(彼は乃木将軍の坑道を掘りは効果的であることを理解している)

１１月１０日　・・・英字新聞と日本新聞は依然としてバルチック艦隊への石炭供

給問題で、イギリス政府の態度を、ドイツ国と比較して論じ続けている。『ドイッチェ・ヤパンポスト』紙が露艦の石炭を輸送している多数のイギリス汽船の船名を列挙し、電報を打って来たのは、甚だ時宜(じぎ)に叶っている。ドイツ汽船の石炭と云えば、結局は英国からの物で、英国だけが軍艦用として適当な石炭を余るほど持っているのだ。・・・。

１２月１７日　・・・日本とロシアは戦後の課題として、攻守同盟を結ぼうとする思想は、明らかに日本で益々人気を得ている。著名の代議士で文士の志賀重昂(しげたか)(1863－1927・評論家)は暫時の休戦に関する交渉の折、ロシア将校に語ったそうだ。「戦後、我々両国が同盟すれば、両国で世界を分割する事が出来る」と。伊藤侯爵は最初からロシアと協定に賛成であり、イギリスとの同盟を侯は出し抜いて、その不在中に締結された事は周知である。栗野前露公使も、ロシアの同盟論者であった。・・・。

（日露講和締結４年後、明治３９年駐露公使本野一郎を派遣、ラムズドルフ外相、ウィッテ首相、皇帝ニコライ２世と会見し、ニコライ２世は異例に本野を引見し、彼が駐露公使に就任したことに喜ばれた。今後は誠実な友と成ることを祈ると述べられた。第１回日露協約調印書・秘密協約調印書を 1907 年 7 月 30 日、第２回は 1910 年、第３回 1912 年、第４回は 1916 年に締結、日露両国間で米国鉄道王ハリマンの満州進出に意欲を見せる米国の動きを、日露両国が揃って牽制したのである。小村外相の描いた方向へと日本は進んでゆくのである。）

明治３８年１月２日（東京）　旅順陥落！　大吉報・・・旅順開城。日本に取ってなによりも素晴らしいお年玉である。ステッセルは１月１日、乃木に書簡を送り、降伏に関し交渉開始の旨を告げた。この報道は昨朝すでに、天皇の元に達したのであるが、奇妙なことに東京では２日に漸(ようや)く発表され、一方ワシントンでは、元旦早々に知れわたっていたのである。・・・。（米国では１日に新聞記載、日本は２日、何か齟齬が？）

１月５日　・・・天皇は、正１２時、広間においでになり、先ず式辞を読まれ、諸外国大表者と、この席に会する喜びを述べられた。これが英語に翻訳され、次に桂首相が答辞を述べ、その後で外交団主席がフランス語で祝辞を述べる。日本の宮廷で英語が採用されているのは特異のことである。・・・各自の前に黒い漆塗の盆に盛って並べてある料理に手を出す。皇室の紋章入りの酒杯は各自が記念品として、持ち帰ってよいことになっている。・・・。

１月６日　・・・ロシア将兵に寛大な条件を差許すよう、天皇が乃木に命じられたこ

とに、全新聞は感激している。乃木の運命たるや悲劇である。今や彼は不滅の名声を博したが、掛替えのない２人の令息は要塞外の土と化しているのだ。露帝に宛てたステッセルの最後の報告は、頗(すこぶ)る悲壮である。その結びの言葉に曰く「吾人(われら)は１万の兵を戦線に有するも、その悉くは病者なり」と。換言すれば彼を負かしたのは、日本軍でなく壊血病だというのだ。・・・。

１月１６日　ステッセルの名声地に墜ちる。・・・外国武官連が主張は、未だおよそ２万の戦闘力あるロシア兵が残っていて、軍隊は決して疲弊の模様でなかった。ステッセルは２８サンチ榴弾の破壊的威力ばかりでなく、特にその神経を錯乱させる効果を再三強調している。しかも要塞は日本軍の予想していたことよりは、遥かに半年以上も永く持ちこたえられるのだ。自分に言わせると、防御した人々は依然として勇士であり、勇婦である。というのは、婦人連も男子に劣らず、勇敢に振舞ったからだ。・・・乃木将軍は長崎知事に一書を送って、ステッセルを特に鄭重に取扱うように依頼した。乃木としては、これは確かに心底からの希望である。・・・。

２月４日　黒溝台(こっこうだい)附近の会戦。遼陽の西北、沙河河畔の戦闘を日本側では呼称している、非常な激戦だった。・・・最初は日本軍も黒溝台から撤退せざるを得なかったが、３日に亘る戦闘で莫大な犠牲を払って再び同地を占領した。・・・。

２月１１日　・・・パリとベルリンに於けるロシアの多額の募債は不調に帰した由(よし)。フランスは要するに、今後しばらくロシアから対独援助を期待できそうにないので、これ以上ロシアに金を注ぎ込む気持のないことは明白だ。(1904 年４月５日、英仏協商が成立すると、仏国は英国との本協商により「対独逆封鎖」の役割を果した。露国の連敗を目の当たりにした仏国金融業者らは、露国公債の引き受けに難色を示し始めた。)

２月２６日　・・・平和の風説(日本世論)と条件。ロシアは下記の条件で講和を締結する用意がある旨の風説を再三耳にする。①韓国を日本の勢力範囲と認めること。②遼東半島を旅順と共に割譲すること。③ウラジオストックを自由貿易港とすること。④ハルビンまでの満州を清国に還附すること。これは元来非常な譲歩なのだが、日本の新聞はお話にならないと一蹴している。だからこれ以上の条件を望んでいることは明白である。・・・。(当時の新聞紙面は日本が獲得する条項について政府を煽っている。)

３月１０日　・・・深更(しんこう)(深夜)、　大勝利！　奉天は陥落した。時に今朝１０時。公

報に曰く「我が包囲作戦は成功せり。我が軍は奉天を占領し、俘虜・大砲その他の戦利品莫大なり。今朝、なお戦闘継続中」と。・・・。

３月１６日　奉天戦の影響に関しては未だに不明である。・・・パリ市場に於ける、６億フランのロシア公債が延期になった。銀行筋では戦争目的にこれ以上金を貸すことを好まないのだ。フランス全新聞は平和を要望し、戦争が続くとフランスの注ぎ込んだ莫大な資本が、非常な危険に瀕するからである。・・・。（３月１０日、露国は奉天敗北すると仏国金融界は、露国公債発行の引受を無期延期の宣言している。）

３月２６日　・・・約１万５千のロシア人捕虜は、東京からほど遠くない千葉県の広大な習志野演習場に収容されるそうだ。・・・京都では２万人を収容する。・・・。

３月２７日　・・・目覚ましい日本の財政。日本の内国公債は５倍の申込みになるらしく、今度はロンドンとニューヨークで３億円の新公債を起こしたが、しかもその条件は、１割引発行で４分５厘の利子という有利なものである。・・・。

４月３日　今日午前、恐らく今までに東京であった最大の戦勝祝賀行列が行われた。商工会の示威運動で、１０万の人員がこれに参加した由。自分はこの催しを公園の傍で見物した。色取り取りの、数限りない大旗・小旗を風に翻（ひるが）えしながら、・・・少年音楽隊、団体、紫・白・赤・藤色や緑の色分けの分団が、・・・１０万人の口から一斉に天皇に「万歳」が三唱され、・・・１０万本の小旗が全くの壮観であった。・・・。

フォン・ベルツ

日本海海戦勝利を祝して横浜

東郷司令官を歓迎新橋駅 10 月 22 日

５月２９日　対馬沖（日本海海戦）に於ける日本海軍の稀有（けう）の大勝。海戦は２日間続いた。露艦は２６隻、１３隻は撃沈、５隻は拿捕され、日本側は１隻として大型艦を失わなかった。三笠は損傷を受けたが、戦闘には差支えない状態だ。勝利があまりにも圧倒的なので、もし官報があらゆる詳細な点を伝えていなければ、誰もほとんど信

じなかったろう。午前中はすっかり、号外！　号外！だった。・・・。

８月２７日（オーストリア・ザルツブルク）（明治３８年６月１０日横浜出港帰国の途）

・・・ルーズベルトは講和条約の為、全力を尽くしている。一般にアメリカの世論は急変してロシア側に有利となったらしい。不思議なことはない。清国商人の大々的な対米ボイコットによりアメリカは日本の勝利がいかに好ましくない影響を教えられた。適当な時期に日本を抑えないと将来が危ない。・・・。（清国商人の大々的ボイコット問題は不勉強のため判らない。ポーツマス講和会議終盤となり、ルーズベルトは日露の樺太の割譲と償金問題の解決に辣腕を振るう大統領は、日本だけに有利な勧告は出来なかった。）

８月２９日（ザルツブルク）　講和！　自分にとって、この報道は全く思いがけなかった。日本はあらゆる点で簡単に譲歩するとは、到底信じられなかったからである。日本はそれをしたのだ！戦費賠償を受取らないし、抑留船舶は取得しない、樺太の半分は無償で引渡すというのだ！・・・日本の為政者は要求緩和の挙に出るのが賢明である訳を、確かに承知しているのだ。・・・ロシアとの将来の同盟を考えていないとは誰が言えよう。全ての目的は一度に達せられるものではない。用心深く一歩一歩前進するのがよいのだ。・・・そして日本は今や巨大な一歩を押し進めたのである。

『ベルツの日記』を通しての筆者の感想　ドイツ人としての情報や文化感覚等から来る、直感評は随所に見ることができる。ポーツマス談判に於いて小村全権と金子堅太郎は、ルーズベルト大統領に日本側の交渉内容を警戒することなく全部話した。日本側は米国に全面的に日本側の味方と少しも疑わずにいた。しかし、ルーズベルトはアメリカの将来を考え、日本だけを一人勝の大勝は不可とした。将来、起こるであろう、それは太平洋圏内で相対する地域の軋轢を予測したと思われる。それらの情報を受けた時、ベルツは将来を見通し、有頂天になっている日本政府と世論に、鋭く批評の目を注いでいる。妻ハナの日本を愛しているからこそ、その記述が日本国への愛情の上に立って語っているのである。

この日露戦役時、英米は日本に対する肩入れ順調に進んでいたが、日露講和締結が結ばれた頃より、ベルツは日露とは同盟・協商が結ばれることを予言している。日記には記されていないが、帰国時には、日露が結ばれたその先のドイツの将来に、どのような布石を打つか。出来れば愛妻の国、日本と度の様な協商ができるか、当然考えていたであろう。

第14章　ポーツマス日露講和会議

戦争に勝って講和談判に破れる。ヘタクソな小村寿太郎の外交。小村全権の弁舌に火を吐く講和談判、「軍は強いが外交交渉が腰抜け、同胞の血を流して勝利を代なしにした」などと新聞は揶揄した。一般的に談判評は初めの段階に於いて優勢に進め、終盤の詰交渉が失敗に終るという、当時の新聞・世論が受けた印象となっている。本当に小村全権は失敗談判であったのであろうか。日本政府に於いて講和談判の詰めに甘い処があったのか。この辺の処を先ず明治百年史叢書『小村外交史』外務省編・原書房・昭和４１年を中心に探って行くことにする。(旧仮名遣いを現代仮名遣に直した)

ポーツマス講和会議前の動き　明治３８年(1905) 6月９日の夜、日本駐在米国公使グリスコム(ロイド・C・グリスコム・在公使 1902 年―1905 年)は外務省に小村外相を訪れ、米国合衆国政府の訓令として、同日付の公文(日露講和斡旋)を手交した。一方、駐露米国大使マイヤー(レンガーク・マイヤー・在大使 1905―1907 年)が露都(サンクトペテルブルク)に於いて、同時期に公文(露日講和)を露国政府に提出した。その内容文は次の如く、

《本使は米国務長官の電訓(電報訓令)に従い、閣下に対し通牒(相手国の諾否を問わず通知文書)を為す光栄を有する。・・・合衆国が日露両国と友好親善の関係を保つことは久しい。合衆国は此の両国の繁栄と幸福を祈ると共に、此の二大国民間の戦争に依り、世界の進歩を阻礙することを感ずる。故に大統領は、日露両国政府に於いて両国自己の為のみならず、世界文明全体の利益の為、相互に直接の講和談判を開始することを切望する。」》と日露両国への講和勧告となっている。

米合衆国大統領は熱心に日本政府に講和会合に同意を進め、又露国政府にも等しく同意を求めつつあった。これに対し小村外相は、「本大臣は国務長官閣下の電訓を通牒された６月９日付の貴翰(公文)の受領を光栄に思う。尚帝国政府の複答として左の趣を貴国政府へ電報を願う。・・・帝国政府は大統領の勧告に応じ、講和条件を商議決定する目的を以って、日時及び場所に於いて露国全権委員と会合して日本帝国全権委員を任命する。」と回答した。これより先ロシア側の希望はパリ、日本は芝罘、若しくは山海関を要望したが、最終的にワシントンからポーツマスへ（ニューハンプシャー州ポーツマス海軍造船所・会場写真 15 章 238 頁）と決定をみたのである。

７月８日小村全権一行団は、ポーツマス講和会議へ先立ち新橋駅にて歓呼に迎えられた。井上馨老侯は小村全権に「君は実に気の毒な境遇に立ってしまった。今迄の名

誉も今度で覆(くつがえ)るかも知れない」と涙を流した。伊藤公は「君の帰朝の時には他人はどうあっても、吾輩は必ず出迎えに行くヨ」と告げた。小村全権は桂首相に「帰って来る時には、人気は丸で反対でしょう」と言い、桂は微笑で返すのが精一杯となっていた。小村全権一行は佐藤(愛麿)弁理公使、山座外務省局長(山座円次郎・小村外相の許で日英同盟推進)、安達一等書記官、落合書記官、本多外務秘書、埴原書記官、小西外交官補、外務省雇デニソン(外務省お雇い米国人)の全権委員らは、同日午後、大北汽船のミネソタ号に乗船して横浜港を離れた。

同月２５日ニューヨークへ到着。今次の米国世論は日露戦争に多大な同情を日本に寄せていた。又小村のハーバード大学の出身者なので、一行の入米記事が新聞紙上に載る程の人気が盛り上を見せていた。同月２７日、高平(駐米公使高平小五郎)を伴ってオイスター・ベイ(ニューヨーク州)大統領の別荘を訪ね、その時、ルーズベルトは小村全権に次のように語った。

オイスター・ベイ(ニューヨーク州)ルーズベルト邸サマーホワイトハウス「百聞は旅に如かず」より借用

《「余(ルーズベルト)は平和談判の結果に関し未だ確然とした見込みがつかない。露国は常に曖昧で変幻極まりなく、今回の講和談判に付いても、ラムスドルフ(露国外相)はカシニー(駐米ロシア大使)を通じて露国政府に伝えたが、この際毫(ごう)(すこし)も講和を為(な)す意を答えず、全権委員の任命に付いては、急ぐ必要がないとか、一刻も早く休戦の希望を持っているとか、ウィッテを任命するとか、露国政府の定見は殆んど分からない。就いて余は、ウィッテと会見の際には彼に対し、露国は相当の犠牲を払う必要があり、若しこれを払わず望めば平和談判破裂になると、伝える意向である」と。更に「日本は進んで東部西比利(シベリア)全域(沿海州)を略取するならば、露国の東洋に於ける位置を烏有(うゆう)(何も無い)になってしまう。・・・然るに彼は過日パリで、我が米国大使に向かい、若し日本から強いて償金を主張するなら、自分の米国に於ける滞在は長くないと語った。これは虚喝(きょかつ)（おどし）かも知れないが、日本に省慮(せいりょ)(顧みて考える)を加え、な

るたけ穏和を以って当たる外はない。もし不幸にしてこの機会を逸(いっ)せば、戦争は更に１ヵ年以上継続となり、日本の戦勝も疑われる、償金を得る事も難事となるであろう。もし露国に於いて難題を唱えて固持した場合、日本は忍耐を以って当たり、この機を逃すと、これを得ることは困難となるので、寧ろ引延(ひきのばし)策を採るのが良いと思う。そして、同時に若し談判不調のやむを得ない場合に於いて、少なくも英米両国の同情を失わない様に注意する事が緊要(きんよう)(大切)であろう。世上或いは浦塩港(ウラジオストク)の武装解除を説くものもあるけれども、余の意見では、日本に於いてハルビン、旅順間の鉄道を領有する以上は、浦塩(ウラジオ)の連絡は中断されるから、強いて武装解除を求める事もないであろう。或る筋より聞く所によれば、日本は沿海州沿岸を領有する希望があるらしいが、それは頗(すこぶ)る困難であろう」と述べ。そして、

「世上また中立港の抑留(よりりゅう)(中立国へ逃げ込んだ露艦艇)から露国艦艇引渡を説くものもある。余も始めはその説であったが、仔細に考えれば、同艦艇は、正常な艦はわずか１隻に止まるから、その必要もあるまい。殊に日本は露国軍艦の捕獲と沈没軍艦の引揚げとで、開戦前より勢力を増加しているから、尚更である。又償金の事に於いて談判を破裂に終わらせる事は、大に熟考(じゅっこう)を要する。それは談判破裂の結果は更に１ヵ年間続戦となれば、前途の如く日本の勝利は素より疑いが、単に軍事上ばかりでなく経済上の損害も大きくなる。その上、償金を得ることは益々困難となるからである。」

そして、「休戦説に付いては、余は当初これに左袒(さたん)(肩肌を脱ぎ味方)したが、見解に一理ある事を認めたので、余はウィッテに面談の折、最早日本に対し休戦を勧告する意なき事を告げようと思う。要求提出の方法はこれまた熟考を要する。余の所見では寧ろ最も緊要な事項から、先ず提出してこれを協定した後に、他の条項等を提出するのが得策のようである。」と、大統領は談判の手順を示して語った。

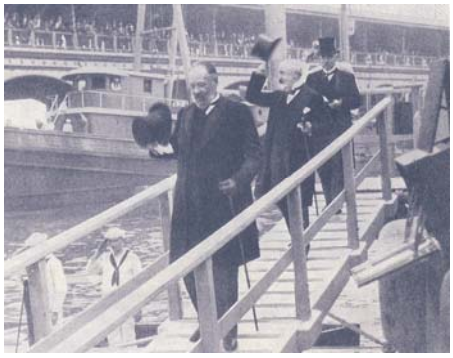
小村全権はこれに対し、

「見解は逐一(ちくいち)拝承したが、大体に於いて日本政府の見る所と符節(ふせつ)(おなじ)する。今回の談判の最も困難な事は、露国政府の中心力が無いことは自分も、閣下の認める所で、これに顧みる我が要求条項も、努めて穏和の精神を以って定めて行きたい。日本は直接談判の内容を提示しない主義で確守して行くが、閣下に対しては内密に高覧いたします」と交渉段取りを述べて一通の箇條書を大統領に手交し、露国領土の割譲は薩哈嗹(サガレン)島(樺太)以外には求めない」旨を述べた処、大統領は満足の意を表した。

小村全権は話を更に進め、「浦塩の武装解除と露国極東海軍力の制限とは共に同国の

攻撃的勢力を防止する目的であるから、その中の何方(どちら)かの一方が行われば自分は満足する。又抑留艦艇の引渡は、他の条項に照らし、日本政府の満足する決定なら問題はない。償金は決して容易な事ではないが、我国が今日まで犠牲に供した経費と人命とを思えば、これを提出することは実にやむを得ない」と述べた処、大統領は「他の事は兎(と)も角、償金問題はウィッテの任命で一層困難となり、償金問題を先に提出するより重要項目を先に提出し、金額の提示はその後にするがよい」》と思うと答えた。

メーン州セントポール・中央小村全権、右佐藤、左デニソン、立花大佐



先頭ウィッテ、中ローゼン男爵

ウィッテ動き　一方、ウィッテ全権委員一行は７月１９日、露都を出発し渡米する途次、仏国パリ金融業者連から、「賠償金支払いの金ならともかく、戦費公債には今後１フランも貸さない」と言い渡されている。又、随行員ヂロンは在英公使林董(ただす)を訪問し、日露同盟論の可能性について林と会見している事は、ポーツマス会談後を視野に入れた、将来の日露同盟の可能性を探り入れている会談となっていた。

同８月２日、ニューヨークの埠頭に到着、群がる欧米諸新聞記者代表を船中に迎え会見を求めた。彼は英語を解(かい)しないので、随行員のヂロン(英国親露国派の新聞記者、ウィッテの信頼が篤く、英米新聞記者達の説得手腕に発揮して談判に影響を与えた)が船中で起草した「米国の公衆に告ぐ」と題した陳述書を代わって朗読した。米国新聞記者らの報道勢力の偉大な事を激賞し、米露の伝統的国交に訴えて、米国人の親睦同情と援助を要望した。新聞社代表者らは拍手喝采を以ってこれを迎え、著大(ちょだい)の好感をウィッテに示し、新聞記者との接触は彼が渡米の船中より既に企画していて、着米早々に新聞による米国世論戦術展開を、談判の難関を突破する戦術に怠りなかった。

８月４日にローゼン(駐日ロシア公使・駐米大使・写真第９章96頁)と相携えて大統領をオイスター・ベイに訪問し、露帝の親翰(しんかん)(皇帝の親書)を呈(てい)した。その文に曰く、「朕はウィッテの華盛頓(ワシントン)に向け発程するのを機に、茲(ここ)に朕の誠実なる友情を閣下に致す。今や幸に閣下の発意により、露日両国委員は両交戦国間の講和を討議するため貴国に於

いて相会する。朕は国務大臣ウィッテ及び朕の駐米大使男爵ローゼンに訓令するに、露国は日本の提議に対し幾何(いくばく)の程度まで譲歩できるかを考量すべきと考えた。言うまでもなく朕は閣下が講和談判をして、満足な解決に至るかについて、その力の及ぶ総てを尽し惜しまない事を深く信じて疑わず」と。ウィッテは当日の会見を外相ラムスドルフ(写真第9章96頁)に電報して曰く、

《ローゼン男及び余(ウィッテ)は本日大統領と午餐(ごさん)を共にした。余は彼に我が皇帝陛下の宸翰(しんかん)(天子直筆)を呈した処、彼は大に感激し、余はローゼンの通訳にて彼と2時間半に亘る談話となり、「露国は征服されたのではない、故に露国の立場に相応しない条件は一切承諾することはできない。随(したが)って第一に、露国は何ら償金支払を受諾しない。露国は凡そ如何なる条件を問わず、その名誉に関するものには断じて同意しない。これ必ず露国の国外に有する威信を傷つけるばかりでなく、寧ろ主として露国自身の眼に照らして、その国威を損じ、露国自身の信用を失うからである。我が国内の情勢は如何に急迫の下にあっても、露国自身を偽らなければならない情勢ではない。露国は今や講和談判を行うに際し、日本が既に握り得た成功はこれを承認するが、日本が単に企望(きぼう)(目ろむ)する成功に築かれた条件、若しくは露国の逢着(ほうちゃく)(出会)する人との災厄(さいやく)を商量(はかりごと)するが、飽くまで拒絶する決心である。日本に対して我が立場を諒承(りょうしょう)しなければ、露国は最後まで防守戦を継続し、日露両国の持久戦に堪(た)えるかを見るだけである」》と。

大統領は将来の局面は日本に有利と信じていたが、次第に疑問が彼の胸中に湧き起り、露国の位地、殊に露国の心理状態に付いては彼自身の判断は公平でなかったことを自覚した。

《大統領は言う「自分の確信する平和は、両交戦国に取って共に利益があるから、償金を支払わなければ到底和局成立しないと言うならば、相当の支払はやむを得ないであろう。但し自分は露国と同様の見地から、日本に対しその要求の抑制を勧告しつつある。日本の軍人一派は続戦を欲しているが、穏和派は平和を欲する。但し平和を欲するに付いても、償金の要求は難しい」》と。

大統領は日本の要求及び態度を明らかに承知しているが、日露両国の所見に甚大にかけ離れている事を心配する大統領は、平和成立の見込みは極めて不安視し、今後、談判不調の場合に於いて、一方の希望であれば何時でも容易に談判を開催する用意と意見を述べ、大統領は両全権も同様の訓令を受けていると答えた。

ルーズベルトはウィッテの会談内容を金子に語る　その内容は次の通り、

《余とウィッテとの会談は甚だ不満足な結果であった。次に講和談判の問題に移り、今回、幸いに両国全権委員会に至ったので、この機を逸せずに平和の結了に至ることを希望する。これに反し続戦すれば、貝加爾(バイカル湖)以東は悉く日本の略取する所となろうと述べたが、ウィッテは傲然として言った「或は然らん。然れども、たとえ日本に於いて貝加爾以東を略取するも、露国はこれに権利を与えない。必要とあれば１年、２年、３年或は４年にして続戦するのみ、と。」余は言う、「もしそうなれば露国は必ず財政に窮する」と、ウィッテは言う「否ならず、仏独両国に於いて外債を募集し得る見通し充分ある」、と、余は言う「かかることを為るも益はない、寧ろこの機を利用し薩哈嗹(樺太)を割り、償金を与えて和議を成立させたらどうか」と、ウィッテは言う「薩哈嗹割譲は不可能であると」、余(大統領)言う「けれども同島は既に日本の占領に帰したではないか」と。彼(ウィッテ)は言う「断じて割譲出来ない」と。

斯くの如くウィッテは強硬な態度を示したが、果たして彼の本心から出たのかは多少の疑問はあるが、余は償金の事に竭、各種の方面からこれに談及したが、彼は常に之を避けて問題としない。ただ言う「償金は支払うことは出来ない」また支払うべき理由もないと。その話は虚喝か、さもなければ余と日本との親密な関係に際し、余に語れば、自ら日本に知れるだろうとして、故意に償金の断じて支払い難いことを言って、日本に伝えられることを避けた策と推測する。》と、

しかし、ウィッテが償金に苦痛に思われる所為は、韓国、遼東半島、薩哈嗹、及び満州に関して日本の要求を承諾しなければならず、この上償金支払を諾することは、帰国の時、反対派から攻撃を受ける恐れによるものであろう。兎も角日本から償金問題を提出するに付いては、初めよりその金額を示す事なく、寧ろ捕虜の問題にしても１０万人もおり、これ等の費用も少なくない筈である。

大統領と金子で談判の段取りを相談　《償金と云わず、払戻金と云い、以って実を収めるのが得策では無いと大統領は言う。また要求提出の方法についても、過日小村男爵との会談の際、余は一部ずつ提出しては如何と言う。要求を全部一時に提出することを検討する事もあろうかとも答えた。

尚その後、熟考を重ね或は箇条に付き、双方の合意の成立し難い場合の駆引にするか、又始めから全部提出して置く方が良いかと検討し、且つ万一談判不調に陥った場

合に世界の与論に訴え、日本の要求の過当でなかった事を示す方が利益であろう。 露国全権委員は、正式に談判開始前に条件項目を示すよう求めるかも知れないが、その場合にはこれを拒絶し、正式談判に移った後に詳細を示すことは当然であろう。

浦塩斯徳（ウラジオストク）の武装解除よりも海軍力制限の方が穏やかである。余は小村男爵に語った如く、或は今回の談判は破裂なるか測り難い、その問題の最も困難な事は償金で破裂の場合には恐らくはそれが原因となるであろう。もし不幸にして破裂となった場合、直ちに余に知らせてほしい。その場合には尚一策がある。」》と金子に語った。

談判の開始　８月９日、日露両国全権は所定の会議所に集合し、海軍工廠（こうしょう）内での予備会議を行った。正確にいえばポーツマス海軍工廠の第８６号建物（写真 15 章 238 頁）は雑貨貯蔵庫である管境の一小島である。さて講和談判は如何なる順序手続きで進めて行くか、これから両国全権で取定めねばならない。

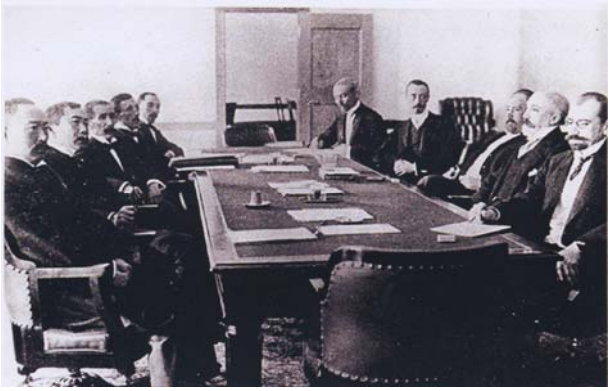
翌１０日午前、愈々（いよいよ）第１回の本会議に入り、日本側は小村及び高平、会議書記官として佐藤、安達、落合の３随員が列席し、一方、ロシア側はウィッテ、書記官ド・プランソン、コロストヴエツツ及びナボコフの３名が列席し、このポーツマス講和会議室内の模様を、露国随員のコロストヴエツツの日誌に詳細な記述がある。

《談判は４カ国語で行われた。ウィッテは多く仏語を用い、隅々語字に途惑う時、意義を一層徹底して欲しい時には、自然露語に戻った。彼が仏語を用いる時には、小村男の次に坐する安達が、これを日本語に翻訳し、露語で話す場合には、ナボコフがこれを英語に翻訳し、小村の日本語を安達がこれを仏語に翻訳した。ローゼン男爵は、ウィッテが、何か説明を男爵に求めた時、及び通訳その当を得ずと認めた時にのみ、語を挟むことを常とした。両全権は喫煙し、殊にウィッテは常に莨（たばこ）を手にし、吾々書記官は翻訳し、かつ筆記した。ウィッテの語調は早く、かつ低く、時には仏語にて何か言い、次いでこれを露語に訳することがあるから、書記は一時困難を感じた。彼はナボコフもしくは安達の通訳意に満たされない時には、更にローゼンに依頼した。高平は黙して喫煙し、時に小村と語を交えるのみ。佐藤と落合とは筆を手にした。

小村は明らかに句切（くぎ）り練った語調で弁じ、段落ごとに語を止めて通訳に時間を与える。彼の前には参考書類が置かれ、ウィッテの答弁も平静であるが、彼の語りは感に触れて発する如く、言辞長短あって洗練なく、時には日本委員を当惑させたが、議論

を持出すこともある。小村は明かに問題を予め綿密に研究して来ているようで、才気では劣らず、用意に於いてはウィッテに勝った。察するに顧問の米人デンソンの助言に依るものであろう。ウィッテは卓上に白紙と訓令書以外に一葉の書類をも置かない。彼は時には落合の通訳中に言を遮って、異議を示して意見を挟むことがある。落合の円満、単調なる語句にはウィッテは明かに焦燥を感じ、視線を小村に真っ直ぐに向くのが常であった。

・・・高平は紙巻莨を次から次へと吸い、その口を開くのは、小村から求められた場合に限られた。ローゼンもウィッテの注文あれば、語ることを常として、ただ論難を鎮め、または或る論点を明瞭ならしめる必要な場合には極めて、巧妙に容喙(横から口を出)した。ウィッテは激しい場合には椅子を打ち、語調短く粗化(あらい)するので知られている。会議の２回目か、３回目に、ウィッテは茶を呼び、その次に小村もこれに倣って、毎回欠かさず茶は卓上に現れた。》と会議風景を記述している。



日露講和会議の様子　明治 38 年 8 月 14 日

左側３人目小村全権・右側３人目ウィッテ全権

前列左高平駐米公使・右小村寿太郎

後ろ中央がお雇外交顧問デニソン

本会議に入る　小村は先ず「我が皇帝陛下には人道と世界の平和のために、日露両国間に平和の克復を希望せられ、茲に自分等を派遣されたのである。自分等はこの重大なる使命を果たすに於いて、一に誠心誠意を以って事に当たる覚悟である。露国全権委員に於いても、また同様の精神を以ってこれに対処されたい。また講和談判に直接関係ない問題、または議事の進行を妨げる細目の問題は、これを避ける事にしたい。露国委員に於いてもこの点に就いて同意あることを希望する。」と述べた。

ウィッテは同感の意を表し、次いで講和条件の開示を求めた。講和条件に関する露国の意向は、初めより我方の希望する所は、甚だしく懸隔(かけ離れ)があって、殊に

軍費払戻、薩哈嗹(樺太)割譲の件は、その発端に於いて討議すら拒絶する模様であり、講和条件を全部開示については、先方に到底同意出来ないものがあるとして、講和談判冒頭より一大障礙となりそうなので、小村は予めこの障礙を排し、かつ談判上の駆引きの余地を残し、機先を制し逐条(箇条毎に)討議の提議としたのである。小村は**12カ條**の講和条件を英文と仏訳文に認め提示した。下記の如くとなる。

第1、露国は日本が韓国に於いて政事上、軍事上、及び経済上の卓絶なる利益を有することを承認し、日本が韓国に於いて必要と認めた指導、保護、及び監理の措置(処置)を執る事に之を阻礙(さまたげ)し、又は之に干渉しないことを約すること。

第2、露国は一定の期限内に全然(全てに渡る)満州より撤兵し、且つ地方に於いて清国の主権を侵害し、もしくは機会均等主義と相容れざる何等の領土的利益又は優先的もしくは専属的譲与及び免許を放棄すべき旨を約すること。

第3、日本は改革及び善政の保障の下に、その占領中に属する満州全部を挙げて清国に還附すべき旨を約すること。但し遼東半島租借権がその効力を及ぼす地域はこの限りに在らざること。

第4、日本及び露国は、清国が満州の商工業を発達せしめんが為列国に共通する一般の措置を執るにあたり、これを阻礙しない事を互いに約すること。

第5、薩哈嗹島及びこれに附属する諸島嶼(大小の島)並に公共営造物及び財産は総て日本に譲与すべきこと。

第6、旅順口、大連、並に附近の領土及び領水の租借権、及び該租借権に関連し、又はその一部を組成するものとして露国が清国より得たる一切の権利、特権、譲与、及び免許、並に一切の公共営造物及び財産はこれを日本に移転譲渡すること。

第7、哈爾賓旅順口間の鉄道、及びその一切の支線、並にこれに附属する一切の権利、特権及び財産、及び該鉄道に属し又はその利益の為に経営する一切の炭坑は、何等の債務及び負担を伴わずして露国よりこれを日本に移転譲渡すべきこと。

第8、満州横貫(東西に貫く)鉄道はその敷設の基く特許条件に遵い、且つ商工業の目的に限りこれを使用する条件を以って、露国これを保管経営すること。

第9、露国は戦争の実費を日本に払い戻すべきこと。その金額並に支払の時期及び方法は双方の同意を以ってこれを定めること。

第10、戦闘中損害を被り、為に中立港に避難し抑留させられた露国軍艦は総て正当捕獲物としてこれを日本に交付すべきこと。

第11、露国は極東水上に於けるその海軍力を制限することを約すること。

第12、露国は日本海、オホーツク海、及びベーリング海に瀕(ひん)する(接所)露国領地の沿岸、湾、港、入江、及び河川に於いて充分な漁業権を日本臣民に許与すべきこと。

当初小村の講和条件の原案には、浦塩港(ウラジオストク)の武備撤去の１カ条も有ったが、大統領から指摘があり、小村の裁量にてこれを削除した。また軍費賠償の事は、既に訓令事項にその要求を命じてあったが、ただ「償金・インデムニチイ」の語は大統領の注意斟酌(しんしゃく)がありこれを避け、改めて「払戻し・レインバースメント」の語を以って要求を提示し、金額を明示しなかった。日露談判の難産事項は第５款(かん)(条項)、薩哈嗹(サガレン) に関する件に、小村は「現に同島を完全に占領し、日本官憲は今や露国官憲に代わり、日本行政の下にこれを支配している。斯(か)くの如く獲得した権利を露国の正式の譲渡に由り確認する事を希望する。これに対しウィッテは、「サガレン島（樺太）の占領の事実は単に武力の結果で、権利獲得の行為ではない。露国は国家の威厳と両立する総ての譲歩を為す覚悟であるが、露国が日本を初め全世界の公認する正当の条約により充分の権利を以って領有し、３０年以上も露帝国の一部分を構成した版図を割取(わりとり)する如きは、露国の威厳の許さない所である」。これに対し小村は、「サガレン島は日本群島の連続で、軍略上の見地からすれば、これを領有する事は日本の安全を期するに欠かせないものであると論じた」、両者の意見は到底一致に至らなかった。

ウィッテの随員コロストヴエツツはその日誌に、《「ウィッテの論法はより多く情に訴へ、感に発し、小村のそれはより研究的で、堅実な論証を以ってしている。ウィッテの心中は葛藤していて、必要以上の言辞(げんじ)を吐露(とろ)(本心を喋る)する仕立ての論法は必ずしも上出来ではない。例えば小村がサガレンの日本に取って死活問題と主張すると、ウィッテは、露国は同島を無くとも必ずしも立行かざるにあらず、ただ主義として領土の割譲に応じることは出来ない。日本委員はウィッテのこの失言を得たとして、これを会議録に挿入することを要求した。我方では右は非公式の言に過ぎず、日本側でも同様の私見を吐露したことあるが、会議録には記載しないと論じ、この要求を拒絶した」》と記している。

8月10日第1回本会議に続く　　８月１６日第５回本会議於いて第１０、第１１、保留し第５、第９を残して、ロシア側の譲歩により、大体の解決を見ていた。８月１

７日、第６回会議は愈々軍費払戻に関する第９款の討議となる。小村は本件に関する覚書をウィッテに提出し、「日本の要求は、少しも間接若しくは因縁的性質のものを包含していない。厳に戦争の直接実費のみに制限したもので、該範囲までは日本に於いて、これが払戻を受けるべき正当の権利である事を確信する。けれどもその払戻金額整定の問題に関しては、日本全権委員は交譲妥協の精神を以ってこれを議論する覚悟で、露国全権委員に於いて右等の事由(原因)に鑑み、本件を再考することを熱望する。」と述べ、ウィッテは、

「軍費払戻しの如きは総て露国の現実の地位に相応じない。露国はその威厳と相容れない条件に服するよりは、寧ろ再び干戈(戦争)を執ることを欲する」と答え、飽く迄、峻拒(厳しく拒む)する態度を示したのである。

小村は言う「露国が続戦の力があることは認めぬではないが、我が日本と雖もまだ続戦の覚悟がある。我が提出の講和条件は、今日迄に得た戦果に比べれば最も穏当(妥当)な、寧ろ最も軽少のものである。日本が有利に続戦し得るのは、頗る確実な地位にあるにも拘わらず、かくも謙譲の条件を提出した所為は、全く誠実に人道を重んじ、両国共通の利益のため、また人類全般の慶福のため、平和に局を結ぼうと熱望するが故である」、と述べると、これに対しウィッテは、

「露国は平和を希望するが、露国が続戦に必要の方法を得ることは、屈辱的平和を買うに比して、一層容易である。且つ将来に於ける戦争の結果に関し憶断(憶測)をすることは、慎まねばならぬ。日本全権委員の提出した条件は、人道及び平和の感情を表彰する穏当のものでなくして、却って日本が目下の形勢に乗じ、将来の予期する処の軍事的成功を計量し、苟も可能と思惟する所のものは挙げて露国から奪取しょうとする意志を証明するもで、若し露国にして同様の地位にある場合、露国はその敵国の首府を占領しない間は、決して軍備賠償の要求はしない。露国は今日までに苟も譲歩し得られるものは悉く譲歩した。そして談判は今や露国の威厳に関し、譲歩を為し得ない点に達した」と強弁を発した。

小村はウィッテに向かって、「貴下の言は恰も戦勝国を代表するものの如くである。」(“you talk as if you represent the victor”)と言って呵々と大笑いし、これを通訳したローゼンはウィッテの意を承け「ここには戦勝国はなく随って敗戦国もない」(“There are no victors here. and therefore no defeated”)答えて傲然としていた。ウィッテは頑として動かず、軍費払戻を約するが如き講和条約には到底署名でき

ないことを明確に声言する覚書を提出した。

談判の難関　８月９日より２９日に至る第１０回講和会議に於いて、韓国問題、満州還付並に開放問題、遼東租借権譲渡問題、満州鉄道経営問題等、同支線譲渡問題は大体議了したが、第５款のサガレン割譲、第９款の軍費払戻、第１０款中立国抑留軍艦交付、第１１款の極東海軍力制限の４カ条に付いて、談判の難関に突当る。

ウィッテは在満州露軍の苦境と戦運の回復がおぼつかない事により、１７日、露都へ電報を打つ。「軍費賠償、サガレン割譲、海軍力制限、中立港抑留軍艦の４件は妥協成らず。その際何れの側より、譲歩なければ談判不調となるであろう。サガレン及び軍費賠償に至る放棄について、問題は極めて重要であるから、本件は速に考慮の上決定されたい。続戦は露国に取り一層の災禍なることに疑を容れない。我が国はなお多少の防守に堪えるも、日本を征服する見込みは殆んどない。局面の有利なる進展は、一に日本の疲弊を俟(ま)つしかない。速に廟議を定め、皇帝の裁可を求めることは政府の責任である。予(ウィッテ)は敢えて左の穏当な意味を具申したい。即ち中立港に於ける我が軍艦は、国家の威厳の見地より申せば重要の事だが、何等実際上の意味を有するものではない。我が艦隊の制限案もまた同じ。我が国は実際上、日本と相戦う艦隊を極東に維持することは不可能であろう。

けれども償金に至っては、露国の威厳と併せてその実体的利害に触れる重要問題である。サガレンは鉱山に富源を利用せず、また将来も暫くこれを利用することはあるまい。日本はサガレンを軍略上その他、露国に敵抗する技術目的に利用するであろう。たとえ同島が我が領土にしても、大舶の通航する海峡は日本の権力の下に立たざるを得ない。我が方の不利は同島が現に日本軍の手中にある。余は今後、数拾日にしてこれを我手に奪回する可能を見出すことを得ない。余は以上の所見を包み隠さず打ち明けることにする。神聖な義務と信じ敢えてこれを具申して迅速なる訓令を俟(ま)つ」と。

小村全権の苦悶　この言に依ればウィッテ自身の意見は償金を別にして、やむを得ければ、中立国抑留軍艦交付及び極東海軍力の制限は、サガレンの割譲を以って譲歩する如くである。然(しか)るに露帝は外務大臣より電報によれば、「朕は先に命じた通り、一寸の地も一ルーブルの金も譲るべからずと、朕は依然よりこれを固執(こしつ)して移らず」と記してラムスドルフ外相に渡していた。ウィッテ自身はサガレンの割譲を承諾して、

講和成立を上申しても、皇帝は耳を傾けないだろう。

この時期、露国宮廷政府内には続戦派の気勢が日毎に高揚し、その圧迫はウィッテの露国代表としてこれを無視出来ない苦境となっていた。露国は威厳に関する４案件中、サガレン及び軍費払戻の２問題は、我が国の最も重要視する所で、これに対し充分我が方が主張の貫徹を計らねばならない。中立国抑留軍艦引渡及び極東海軍力制限の２要求は、多少駆引き上の余地もあった。

そこで小村は露国に対しサガレン割譲及び軍費払戻の２問題に付いて満足な協定を為す意があるのならば、他の２要求は撤回をすると宣明し、ウィッテの再考を促すようにした。露国に於ける情勢は前途の如くであり、小村は妥協の見込み無いことを判明すれば、談判破裂の責任は露国にあることを闡明（はっきりさせる）の措置を執り、我が方は直ちに談判地を引揚げ、その後の局面は米国大統領の斡旋に託す籌算（計算を図る）を胸底に置き、８月１８日、第１１回会議に臨んだ。

小村は「日本全権委員はこれまで双方の意見に至る諸問題を満足に調整する様な希望を懐く事により、若し露国全権委員に於いて、調和の精神を以ってサガレン割譲及び軍費払戻の問題を考量するならば、日本全権委員は海軍力制限及び抑留軍艦交付に関する条件を撤回する覚悟がある旨を宣明する」との覚書を提出した。

茲に於いてウィッテは、書記官を退席させて、双方委員のみで、非公式的に隔意（解けない心）なく談合を試みると言い、小村は同意し、茲に非公式の内会議に入る。その内容は本談判中に於ける極めて重要なる一項目であった。ウィッテは小村の宣明に対しての返答は、形式を離れ実質について内密に協議を試みたいと申し出た。

ウィッテは曰く、「自分はサガレン及び軍費問題に関し政府より拒絶の訓令を受けて居り、この訓令以外には如何ともし難い、この儘では到底談判破裂の外ないが、自分自身としては、切に和議の成立を希望するので、実行可能の方法があるならば、本国政府に対しその採用を促したいと思う。露国政府と人民の態度は、自分の出発以来一変し、今日に至って続戦論が強烈になり、サガレン割譲及び軍費払戻の２件は朝野（官民）共に強硬に反対を表している。

軍費問題に就いて考えるに、俘虜（ロシア軍捕虜）収容費の如く露国人の日本より受けた利益に対する相当の補償は、これをなすこと当然であろうが、これ以外に於いて何ら軍費を支払うことは絶対に承諾することはできない。サガレンに於いては妥協の道もあろうが、例えば北部を露国に、南部を日本に帰属すれば如何か、北部サガレン領

有は露国に取っては黒龍江の防衛上必要である。これに反し南部は漁利に富み、それは日本の利益は主として漁猟に存するから、南部領有は日本の利とする所であろう。

日本は宗谷海峡の両岸を有するに至る結果として、浦塩港から太平洋に出る通路は、日本の控制(引き留め)する所となる訳で、由来露国人は海峡に関して感覚的に鋭敏であるから、日本より宗谷海峡の交通を阻礙しない保障を得たい。この保障は畢竟(究極)形式に止まり、実際何ら価値もないけれども国民の感情を傷つけないために必要である」と。小村はこれに対し、

「和議の成立を希望に於いては自分も同感で、今互いに公然の資格を離れて、この２大難件に対する妥協の道を討究する機会を得たのは、自分の満足する所であるから、腹蔵なく意見を吐露するが、如何なる解決方法とっても、政府の位置と国民の与論とを互いに斟酌融会（溶けて一つになる）するものでなければ効果はない。日本国民感情は、参政権を有するから、露国に比べれば与論を尊重することは一層大である。

故に露和条件もこの目的を達し、国の安全を永遠に保障するため、サガレン島嶼のみならずウスリー(沿海州)地方をも割取し、東清鉄道全部を譲り受けようとする意図がある位である。けれども政府は深く大局の利害を慮り、殊に日露将来の和親を念、敢えて巨大の意図を排して今回の条件を決定したのだから、この以内には一歩も退くことはできない。サガレンに関して日本国民の５０年来の感情は今回の占領によって一層高まったので、国民は如何なることがあっても、我が方も枉げて一歩を譲らぬでもない。即ち自分自身を以ってすれば、同島二分案を仮に可とするならば、同島は現に我が方の占領下にあるので、その北部一半を還付することは相当の代償を受けなければ理由が立たない。」と述べると、ウィッテは一理ありと肯定したので、

小村は、「しからばその代償は何を以ってすべきか、露国領土の他の部面をこれに代えて割譲するのは最良の方法であろうが、それは不可能であるから、結局金銭を以ってする以外あるまい」と言明すると、ウィッテはこれに頷いたので、小村は更に話を進め、

「その代償額としては、同島に対する我が国民的感情に鑑み、還付地の物質的価値を標準とせずにして、無形的価値を標準としなければならない。この標準に照らし、その金額は１２億円でなければ日本国政府は承知しないと思う。蓋し本国政府は元来軍費に重きを置いているから、今これを撤回するには、右の金額を要求するのは当然で、殊に国民的感情に鑑み、絶大の難事であるサガレン両文案に同意することについ

ては、この額は決して過当ではない。仮に同島両分を可とすれば、その境界線は歴史的境界線の北緯５０度と定め、宗谷海峡の自由航行権に付いては、露国の韃靼海峡(間宮海峡)に関し同様の保障を与える事を条件として我が方に於いても同意致そう」と。

これに対しウィッテはこの金額は自分も同意できないが、本国政府に於いてこれを是認する事は至難であろうが、１２億円を以ってすれば、日本と折合の趣旨は一応露都に電報すると答え、小村もウィッテもこの妥協案を本国政府へ電稟(電報)して訓令を仰ぐことに決まった。

小村の電稟に接した我が政府は、慎重疑議の末、該妥協案により商議を進めて講和の成立を計ることを認め、２０日発にその旨を電訓し、併せて代償金額は小村の裁量に於いて多少減額を可となる旨を申し添えた。

仲介のルーズベルトは談判破裂を憂慮し、ウィッテに対し篤(手厚い)と譲歩勧告欲し、内密に米駐露大使ローゼンを招き説得もした。ローゼンは大統領を以って日本の為に譲歩勧告するものと推測したらしく、「サガレンは浦塩港及び沿海州の防禦上これを割譲することは無い、軍費は素より之を支払う理由なし、既に少なからず日本の要求を容認した露国は、これ以上譲歩する事は至難なり」と明言した。

大統領は露帝に妥協案勧告する電文を起草し、《「日本は既に露国海軍力制限及び露国軍艦引渡の２条項の要求を撤回した。そして更にサガレンの北部一半を露国に還付することを欲し、これに対し、露国は俘虜給食に報償を為すべく、その報償の金額如何は追って協定したい。問題が解決されれば、余(大統領)はこれを以って露国に取って大利益になると思考を進めた。日本の財政は難局にあるとはいえ、尚続戦に堪え得るし、想うにサガレンに関する限り、露国に北部を領有する限り、浦塩港の地位を充分に支持し得る事は露国軍事当局者の認める所である。余は陛下がこの時機を逸せず、速やかに講和条約を締結する事を満腔の熱心を以って勧告かつ希望する」》と伝えた。

大統領はこの電文を２１日正午、米駐露大使マイヤー発送して急ぎ露帝に捧呈した。露帝はこの電奏文を視て、「一寸の地も、一ルーブルの金も日本に与えてはいけない、朕をしてこれより一歩も譲ずることはない」と記して外相ラムスドルフに渡された。ウィッテは折返し回電して曰く、

「談判打切りとなり、世界が我が折衝の真相を知るに至れば、露国の償金拒絶は正当視される筈がないし、サガレンに付いては我が方に組みする事はない。日本は現にサガレンを領有し、我が方はこれを奪回することが出来ないことは事実で、事実は議

論よりも強い。故に我が国にして談判破裂の責任を日本に押し付けるならば、サガレン割譲と軍費賠償の両者を併せて拒絶すべきでない。・・・」と上申した。

ウィッテは苦慮、されど露都政府は動かない。２２日ラムスドルフから前日の電訓には、「不幸にして日本全権委員は露国の威厳上到底承諾できない講和条件を主張する様である。日本は過大な要求を破棄しない場合は談判を打切るようにせよ。日本は償金問題に就いて頑固であるから、その点に於いて談判は不調としてサガレン問題の討議は不必要である。・・・」と伝えた。

けれどもウィッテは大事を取った。電訓の接受後直ちにラムスドルフに、「皇帝陛下よりの回答を俟(ま)つものであるから、その回答の届くに先だち談判を打切るのは得策ではないと信ずる。日本側より難題を提起される限り、ウィッテは回答の到着する迄、最終会議の引延を試みる。日本との折衝は既に尽きたと思われるが、陛下からの回答到着前に談判を破裂させれば、大統領の不快を招くことを恐れる。・・・」と釈明した。

形勢は愈々逼迫(いよいよひっぱく)した　その同じ２２日大統領から突然に金銭非要求説(償金不要説)に急下して来たのは見逃し難き現象が、その夜金子はルーズベルトより一急信(秘密書簡)に接し、それは極めて重要なる一急信であった。この全文は戦後に、ウィッテ自身も入手したと回顧録に記述がある。即ち、大統領はこの金子へ渡した秘密書簡を、ウィッテやヂロンにも渡していたのである。この件は 15 章で述べることにする。大統領の秘密書簡の邦訳を、『明治秘話・二大外交の真実』信夫淳平著・昭和 3 年、の邦訳文で読む事にする。現代文で読み易くした。

《予（大統領）は日本の諸友人がいずれも挙げて、日本が巨額の償金の為にこの上続戦する可能性はあるのかと、疑惑を抱いて居(お)る事を貴下に報告するのは予の義務と思う。上院外交委員会に有力な地位を占め、日本に厚き同情を有する所の一議員(外交委員長ロッヂの事)は只今(ただいま)予に一書を寄せ、「日本は巨額の賠償の為のみにて到底続戦をするべきでない。若し日本にして薩哈嗹(サガレン)領有を以って談判するならば、自分は日本に非難を加えるが、単に金銭を獲る為に軍事行動を再演するならば、日本はその金額を獲ることは出来ず、忽(たちま)ち米国その他の同情を失うだろう。自分は日本の償金要求を正当視せずと、明言する事を義務と感じる。日本は薩哈嗹以外には未だ露国本土の一寸の地をも占領して居らぬではないか」と申して来た。従来日本に好意を表す米国人に

於いても、その大多数は之と同感なことを貴下の了解であったであろう。

日本は薩哈嗹の北部一半の還付を承諾するに於いては、日本は露国より当然受領すべき俘虜収容費以外に、或る金額を獲るべき多少の期待を与えられるけれど、予は日本が不足として提示する６億弗(ドル)(ロシア人捕虜収容費用)という巨額は要求するべきもので、受諾する事は思考する事はやむを得ない。予は露国に対し如何に強く講和を勧告したかは貴下の知る通りで、同様に予は日本に対しても、償金の為に続戦しないことを力説したい。同意しなければ、日本は与論の一変転に逢着する事を予は信じて疑わない。与論の向背は必然と覚知(かくち)(気づく)し得る影響あるとは限らないが、さりとて之を軽視すべきではない。且つ日本は単に償金の為に続戦することは決してその目的を達し得られないばかりか、露国はその支払いを拒絶し、而して文明世界の共通的感情は露国に左袒(さたん)(味方)し、日本の要求する巨額は全然之を拒絶することに至るであろう。勿論(もちろん)露国は之を応諾するならば、予また何をか云わん。けれども、露国にして之を応諾する場合には、戦禍は更に次年に亘り、而して日本が仮に東部シベリアの占領に成功しても、その既に消費した金額に加えて更に４、５億弗以上を失い、更に甚大な鮮血を流し、剰(あまつさ)え(そのうえに)日本は東部シベリアを占領した所で、その獲たものは要らないものばかりであり、露国は依然として一銭の支払に全然同意するとは思わない。兎(と)に角露国は、日本が消費する十二分の額を賠償する位地には居ない。予のこの点に関する判断には或は誤りがあるかもしれない。けれども、予が言うことを日本が理解される事に従い、日本の利益を慮(おもんぱか)りの見地より、誠意を以って吐露(とろ)することを確信する。予は文明及び人道の利益を無視して巨額の為に続戦することを否認するものである。この書簡は勿論厳密であるが、貴下の之を東京政府へ打電する事を予の承諾する所で、寧ろ貴下がその取計いを為(な)すことを予は希望する。之を電送すれば、即刻之を為(な)してくれれば幸いである。

１９０５年８月２２日　　オイスター湾にて　　ルーズベルト(サイン)　》

ルーズベルトの手紙を要約すれば　「日本が巨額の償金の為に、これ以上の続戦しないことを金子に警告する。日本にサガレン領有の故を以って談判破裂するならば、自分は日本を非難し、単に金銭を獲んが為に軍事行動を起こして、その金銭を獲ることを求めるなら、忽ち米国その他国の同情を失うであろう。日本はサガレン以外には未だ露本土の一寸の地をも領有していないではないか。日本は露国より当然受領する俘

虜収容費の金額は要求すべきものである。しかし、日本は単に償金の為に続戦しても露国にその支払いを拒絶されれば、文明世界の共通的感情は日本に応援しないであろう。」と述べている。要するに償金を請求は引込めろ、と勧告して来たのである。

更に２３日朝、大統領は追加急信を金子に送り、「日本は既に満韓の支配権を得、露国艦隊の殲滅により自国艦隊を倍大にし、旅順・大連及び満州鉄道を獲、併せてサガレンをも交渉中ではないか、・・・。」まだ不満があるのかという書簡である。しかし、この時点では、この書簡の内容を見ていない小村は、２３日午後本会議に東京から妥協案の覚書をウィッテに手交した。

1、 サガレンを二分し、北緯５０度以北の地は露国に還付し、該緯度以南の地は日本に属すること。

2、 日露両国は宗谷海峡及び韃靼(だったん)海峡の自由航行を阻礙(そがい)すべき何等の措置を執る事を約すること。

3、 露国は北緯５０度以北の一半の還付に対する報酬として金１２億円を日本へ支払うこと。

4、 上記の趣旨に於いて協定成立すれば、日本は軍費払戻の要求を撤回すること、但しこの撤回は露国俘虜の保護及び給養の為日本の支払した経費に及ばないこと。

ウィッテは一読後、「日本全権委員に於いて双方の企画する平和の目的に対し、新たに一歩部を進めたのは自分等の感謝する所である」と述べ「けれども自分の意見を吐露するに先だち、本問題に関する位地を確め置くことは要(かなめ)である。露国に於いては如何なる名義及び形式を問わず、俘虜給養費以外に軍費を支払う事を引き受け難い。ついては日本全権委員に於いて軍費払戻の思を一切脱却して何等かの妥協案を成立すべき考案はないか」と問うて来た。

小村は「日本の全権委員の提出した方案は、サガレン島譲与及び軍費払戻の２大問題の解決に関する一切の難問を排除する目的にして作成されたものである。露国全権委員が頗る強固に維持した異議を排除し、同時にサガレン島北部を露国に還付する一方法である。そして日本は還付に関し領収する正当な思料(しりょう)(思い計る)する金額を領収する事を要する。我が方に於いてはこれ以外に妙案はない。若し露国側にあるならば我が方に於いて考慮されたい」と強く回答を迫った。

ウィッテはこれに対し、「自分には本国政府の承認を経た何等考案はないが、個人的

に参考迄として、日本全権の所見を聞きたい一点がある」と述べ「露国に於いてサガレン全島を日本に譲与すると仮定すれば、日本はこの条件にて金銭上の要求を一切撤回するか」と問うてきた。この時の談判会話が、ウィッテ秘書コロストヴェツツの日誌によれば「ウィッテはこの会話により日本は単に金銭の為に続戦する意を、日本全権の口から明らかにし、以って世論を露国側に味方につける考案にして、無論わざとこの質問を発したのだ。」とある。

ウィッテの幕僚の情報主任ヂロンが、講和成立の翌月に公表した「日露講和始末」に、ウィッテは小村男爵に問うて曰く「我が方、仮に貴国に樺太の南北両半を全部献ずれば、閣下は償金の要求を全然(余す事なく)撤回するかと。小村男爵答えて曰く「否と」と答えた。ウィッテは翌日の英国新聞記者に向かい諸君に請う、この一語を牢記(ろうき)(強く記録)せよと叫んだ。ウィッテのこの言たるは、実は樺太を譲る意ではなく、ただ日本全権の口から、一事実を誘い出そうとした為であった。ウィッテの意がこの様な画策に在ったのは事実であったと思われる」。と述べている。

この狡猾(こうかつ)なる諮問に対し、小村は冷然と答えた。「軍費払戻の要求を放棄する困難は、サガレン島全部の還付に同意する困難と同じ」ウィッテは「報償金問題は元来サガレンの一半(いちはん)(２分の１)の還付を受ける事になるから、同島を挙げて日本に譲与することを仮定すれば、該問題は自然の結果として消滅すべき筈ではないか」と論じ、小村は「単に形式上から論ずればそう言えるが、実質上から考えれば然(さ)らず(そうではない)。即ち妥協案は償金または軍費と云わないで、土地還付に対する報酬の名義にて金銭を授受(じゅじゅ)するにある。随(したが)って日本政府に於いて相当と認める金額を要求するのは当然である。故に妥協案は現下の２大難問を満足に解決する唯一の考案である。・・・」と。

ウィッテは「本妥協案はその実質に於いて新形式の下に軍費払戻の要求を包含するもので、金銭の要求は無く他の一切の方案は、日本の受諾しないことは明瞭となった。露国は俘虜給養費以外の軍費払戻に同意することはできない。随って本妥協案は到底本国政府の受諾を得る見込みがない」と言明した。

この時分の我が日本国に於いては、朝野を挙げて講和条件を強硬に議論が沸騰し、その穏健派の意見でも、割地及び償金を以って必須の条件とし、これを露国が承認しなければ飽くまで続戦の世論となっていた。

一方、露国に於いても続戦論が沸騰し、陸軍大臣サカロフは満州両軍の勢力比較表を添えて、露軍の優勢を奏上し、満州総司令官リネウイツチも胸中に奇策を内外に示

し、戦局挽回の成算を弁舌にする有様であった。

大統領ルーズベルトはこの険悪な情勢に鑑み、前途の露帝に対する親電以外に、独逸帝及び仏国大統領にも妥協案を報じてその成立の斡旋を請い、更に金子と会見の結果、２３日を以って駐露大使メーヤーに対し、露帝に即時奏上の第二の電報を発した。

《「・・・今朝露都発の電報によれば、陛下の外務大臣ラムスドルフ伯は、露国は償金及び土地割譲に同意しないと声明したとある。これ明らかに続戦の予告と認められるが、露国は日本の敵にあらず、ウラジオ、ハルビン、東部シベリアを失うに至るであろう。サガレンの一部買戻の金額に両国全権をして、その多寡を商定が難しい事情なら、英仏両国の最高者を出して評定し、日本へは英人、露国へは仏人を指命するか、余が茲に再応の勧告をするのは、両国の人道のため無益の殺傷を中止し、平和の慶福を願うに外ならない。」と大統領は強調した。》

《かかる間に２６日、午後３時を以って第１４回の会議に臨(のぞ)む事になる。小村は２３日の覚書に対する回答は如何とウィッテに問うた。彼は答えた「到底(とうてい)本国政府の同意を得る見込みなしと断念した。自分等は講和の成立を計ろうと尽力したけれど、とにかく露国陸軍は講和に絶対に反対で、若し本国外務省に於いて自分等の尽力を賛助しなかったならば、談判は速く破裂していただろう。日本全権委員も平和の為に充分の尽力を惜しまなかった事は自分等もこれを認めるので、互に悪感情を懐くことなくして袖を分かちたい」と。小村も充分それを諒とする意を答え、翌々２８日午後３時を相約して別れた。》

日本国政府は事態の重大なる事に鑑み、慎重の考量を加えた上、最後の訓令を発する事にした。折返しその旨を小村に電達の上、２８日の最終会議を何等かの名義の下に更に２４時間延期するよう訓令した。そこで小村は２７日夜、高平をウィッテの許に派した。コロストヴエツツの日誌に言う。

《夕刻(２７日)高平と落合来訪する。会談は１時間で終わり、高平は延期請求の理由として、東京ポーツマス間には１４時間の時差があり、東京からの回訓に接することを以ってしたという。・・・。》

小村も愈々決裂を決心、２７日夜半東京に電稟(でんりん)した。要旨は次の如く。

《「談判は今日もはや疎通(そつう)の途なきに至った。最初我が要求条件提出に注意を払い、逐条討議に割歩すべきは譲歩し、艦艇引渡及び海軍力制限の二条件の撤回を宣言し、尚進んでサガレン割譲と軍費償還問題に妥協案を提出し、談判を妥協しようと努めた

が、露国は反省の効果なく、露帝は大統領の第１回親電に続き、第２回親電も同様と思われる。幾多の譲歩を重ねたが露国の頑然拒絶したがために、我が国はやむを得ず談判終了して、続戦の責任は一に露国にある旨を宣言し、然(しか)る上は、本委員は直ちに当地を引揚、ニューヨークに到って局面の発展を見ようとする。不幸にして甚だ遺憾であるが、もはやこの儘(まま)にて最後の手段を執る決心した次第である。」》最後の小村全権としての真情を伝えたのである。

小村は談判を中止し、ポーツマス引揚げてニューヨークに還ったならば、大統領が独仏の元首の斡旋をして、新たに局面を展開に期待するかは、何人も予測し得ない。小村は２つの場合を予想し、小荷物調度の整理を命じ、ポーツマス市民の好意に対する答礼として、同市慈善資金に２万ドルの寄付小切手を認め、令状を印刷し、引揚準備終えていた。

茲の時点になると日本政府の本音が見える。我が満州軍の情勢は、事実に於いて小村の強硬な対露折衝との間に隔たりがあった。実を言えば奉天会戦も我が軍に取って随分危険な戦いであり、黒溝台、沙河、瀋陽に於ける我が軍は勝つには勝ったが、敵に致命傷を与える機会を常に逸し、それは兵力と弾薬不足の為であった。当時児玉総参謀長は、勅命にて奉天会戦始末伏奏(ふくそう)(天皇に奏上)のため、３月下旬戦地より一時帰朝した。その際、彼は文武(ぶんぶ)首脳らに「戦争を始めた者は戦争を止める技倆(ぎりょう)(手腕)を有せねばならない。貧乏国がこの上戦争を続けてなんになる。」と論じ、今や戦局収拾の秋であると力説した。児玉大将は講和条件の内報に軍費賠償の一条を見て、「桂の馬鹿が償金を取る気になっている」と語った話は公然の秘密であった。

クロパトキン将軍の回顧録にも言う。《1905 年の８月には、我が露軍の能力は露国陸軍史上未曾有の最高点に達した。リネウイツチ大将は第１３軍団の到着を以って決戦を開始の準備し、そして同軍団の本体は既にハルビンに着し、今は百万を算する編成完備の精鋭は、血闘の持続に用意欠く所がない。・・・1905 年８月の満州に於ける我が第１、第２、第３軍の集中に於いて優勢有力の軍情を戦場に見たことはない。この好潮時に突如ポーツマスから講和成立の悲報が到ったのである。》と強気の発言している。

日本陸軍は当時の情勢を如何に判断していたか、『元帥寺内伯爵伝』に言う、

《「連勝に狎(な)れて敵愾心がその極度に達し、多数の国民は、最も有利なる条件を以って戦局を結ぶことを企望(きぼう)(くわだて)に対し、深慮(しんりょ)ある軍事家は戦争継続の甚だ不利なことを看破し、或る程度の条件を以って和を講ずることを思い、朝野の希望に多少の逕庭(けいてい)

(かけ離れ)あるものの如し。我が将士如何に精鋭(せいえい)なるが、約３倍の勁敵(けいてき)(強敵)に対して侵攻することは甚だ難しい。山縣元帥の烱眼(けいがん)(見抜く力)早く既に戦争継続の極めて非なることを洞観(どうかん)(見通す)し、帰朝後主として講和進捗に努められた。」》と語る。

さて、我が国政府に於いては、小村に対し文武重臣(じゅうしん)たちは最後の疑義を尽くし、結局開戦の目的であった満韓関係の重要問題が既に有利に解決した以上は、軍費・割地の２大要求を放棄する事も已む得ない場合に立至り、この際講和の成立を期することを絶対の急務であるとして、この機会を逸せず是非講和を成立させることに一決し、勅裁を仰ぎ、２８日発電訓を以って小村に伝えた。

《「・・・帝国政府ハ閣議及御前会議ニ於テ慎重疑義ノ末、陛下ノ聖断ヲ仰キ結局下文ノ如ク廟議ヲ一決セリ、抑々(そもそも)露国カ妥協案ヲ絶対ニ拒絶シタル今日ニ於テ談判継続ノ至難ナルハ政府ノ深ク諒スル所ナルモ、軍事及経済上ノ事情ヲ熟慮シ且ツ貴官等ノ折衝ニヨリ既ニ開戦ノ目的タル満韓ニ関スル重大ナル問題ノ解決シタルニ鑑ミ、仮令償金割地ノ二問題ヲ放棄スルノ已ムヲ得サルニ至ルモ、此際講和ヲ成立セシムルコトニ議決セリ、・・・帝国政府最後ノ譲歩トシテ自ラ要求ノ撤回ヲ提出セラルヘシ、之ヲ要スルニ帝国政府ハ今回ノ講和ノ機会ヲ逸セス飽マテ和局ノ完成ヲ計ルノ決意ヲ懐クカ故ニ貴官等ハ充分ニ此趣旨ヲ体シ之レカ貫徹ニ尽力セラルヘシ」と日本政府は割地と賠償を総て放棄せよとの電訓で、政府は如何にも和議を急いでいたかが文面に現れている。

この電訓を見た小村は「多分こんな事だろうと思って居た」と言い、平然自若(へいぜんじじゃく)であったと伝わる。小村の心中は穏やかでなかったに違いないが、随員たち皆言葉は無く、無量の感慨に打ち沈んだのである。

愈々２９日、最終会議時刻となった。小村は更に政府より重要な一急報を受けた。「８月２５日、在露米国大使が英国大使に対し、２３日米大使が露帝に拝謁した際、露帝は独逸(ドイツ)皇帝より痛切に講和を勧告する電報に接したが、日本の要求を承認しない回電をした。然しサガレンに関しては露国が占有したのは過去３０年に過ぎない。従って同島の南部を譲与する覚悟はあるが、同島北部を日本より買戻すと云う如き妥協は断じて無い、と語り、又ラムスドルフ外務大臣も２６日マイヤー米国大使に、皇帝の決心はサガレン南半の譲与を承諾するも、金銭の支払いを承諾しないと告げてきた」。

以上の情報を得て日本政府は先に訓令に全面的譲渡を修正した訓令を小村に伝え、電報の交差事情に曲折あるが、最終訓旨を懐中に収めて会議室に入った。１０時５５

分、本会議に入り小村は、露国政府の正式の回答を要求した。ウィッテはその回答を覚書にして提出した。その要旨は、

《「日本全権委員の４カ条の覚書に対して、露国政府に於いて最も慎重なる研究を遂げたが、露国は俘虜給養費以外に何等の支払を為すことは、講和会議開始の当初露国の列挙した重要の一基礎に戻るが故に、承諾は出来ない。けれども露帝には極東平和の回復に資にしょうとの誠実なる希望が有り一新証として、サガレン北部を何等金銭上の報償なくして露国の保有に委すことを条件として、同島南部を日本に譲与することに同意する。但しこの場合に於いて日本は宗谷海峡の通航の自由を保障し、且つその占有する同島の部分に於いて何等軍事的措置を執らない事を約するものとする」。

小村はこの覚書を閲読した後、政府の訓令に基づき本件に関し特別の通告を為すと告げ、「露国が該要求を考量することを拒絶したことを領し、且つ日本が該要求を固持するより必然生ずべき結果を考量し、一は人道と文明のため、一は露日両国の真正の利益に鑑み、茲に日本の既に行いたるサガレン島占領を既成の事実として露国が承認することを条件として、前記軍費払戻の要求を撤回すべし」と、覚書をウィッテに手交した。》

ウィッテはこれに対し、露帝の明截(断ち切る)なる命令であるので、この提議に同意すると明答した。小村は改めて、「日本は平和を克復するために誠実な希望を懐くが故に、何等金銭の支払を要求せず、北緯５０度を境界とするサガレン北部を露国の所有に残すことを諾する、但し露国覚書記載の軍事的措置に関する条件及び宗谷韃靼海峡通航に関する約束はこれを相互的と為すべきこと。」と声明し、ウィッテはこれを諒承し、ここに至り平和の光輝く日露講和が成立したのである。

ウィッテは急ぎ会議室を出て別室の随員に「平和だ、日本は全部譲歩した」と叫び、随員一同抱き合い喜んだ。吉報は米国大統領に最先電話とし、「大出来！　これ程うれしいことは近年にない」と歓喜した。ルーズベルトは翌年１９０６年、ポーツマス講和条約の成立のために尽力した功労で翌年ノーベル平和賞を授与されている。

９月５日午後、両国全権団は、ポーツマス海軍造船所倉庫ビル２階に相会した。英文及びフランス文各２通の計４通の講和条約書と、同じ部数の計４通の追加約款英仏文のほか、最終本会議事録の英仏計４通の合計１２通に、まずロシア側全権が、次いで日本側全権がそれぞれ署名したのである。

その全署名が終わった時、戸外に控えた隊列から１９発の祝砲が天空へ轟き響き、港内の諸船舶から汽笛が鳴り響き、教会から鐘が鳴り渡り、街は平和を祝福する歓声に包まれたのである。

余話・講和の妥結と流説　講和成立をめぐって奇妙な風説が流布した。妥結した２９日の午後、ニューヨークの金子の下へ米国ＡＰ通信社のメルヴィル・ストーン社長が訪ねて来て、ポーツマスから帰任した同通信社の社員に依れば、今回の講和会議で日本政府が多大の譲歩を行なったのは小村全権の本意でなく、実は金子がルーズベルト大統領と東京の伊藤博文枢密院議長との間に介在して斡旋した結果であるとし、「高平公使ハ痛ク余（金子）ヲ非難セリ」と云うのであった。（金子堅太郎の前掲書『日露戦役米国滞在記』第６篇）

それを聞いて驚愕した金子は、同社長に対し「是レ全ク無根ノ風説ナリ」と明言し、翌日３０日、午後ポーツマスの小村へ宛てて電報打ち、ストーン社長にも次第を説明した。「高平公使ニ於テ此ノ如キ言ヲ為シタルモノトハ信ゼザルモ、或ハ御地ニテ其ノ説ヲ流布スルモノナキヤ御返電ヲ乞フ」と要請した。

これに対して、小村からはすぐにニューヨークの金子へ返電があり、「高平公使ハ毫モ「ストーン」ノ言ノ如キ事ヲ為シタルコトナク、或ハ当地ニ於ケル我国新聞通信員等憶測ヲ逞フシテ伝ヘタルモノナラン」と。そのような流説については、小村に対しルーズベルトからも問い合わせがあった事を知った金子は、来訪の新聞記者等に向かい、「明ニ其ノ虚構ナルコトヲ陳述シタ」ため、３１日のトリビューン紙をはじめ諸新聞はどれも皆その事実無根であった事を掲載したという。いずれにせよ、すでに高平と金子との間の感情的齟齬（そご）を察知していたポーツマスの日本人記者らが、外国人記者らに憶測的に喋ったことが、まことしやかに特種的なニュースとして報じられたのかもしれない。それにしても、結局はそれが流説であったにしろ、そのことで、金子の高平に対する非好意的な心情が、イエール・シンポジウム否認をめぐる米国政府への通報の件に加えて、さらに悪化し増幅されてしまったであろう事は推測に難くない。・・・。（『外務省調査月報』２００６年№1「もう一人のポーツマス講和全権委員」松村正義）

講和会議を再検討する

ウィッテの巧（たく）みな新聞操縦　日露両全権団は倉庫第８６号ビル２階に設営された会議

室で予備会談に臨んだ。ウィッテは日本側の不利になる談判状況を研究と予測し、米国世論を左右する新聞報道を操作し、露国出発時より考えていたのである。講和談判に取り決められた諸事項の中で、ウィッテは日本側から提示される講和条件が多分に過酷な条件を予想して、ロシア側のペースで米国新聞界に訴えれば、ロシア側への同情を得やすい会議になる様に画策した。そこでウィッテは、《「新聞通信員ニ対シテハ主義トシテ談判ヲ秘密ニスルヲ要スト雖、之ニ対シ一切言ハズ語ラザルコトハ不可能且不利益ニ付、彼等ニ通示スベキ事項ハ各会議ノ畢リニ双方協議ノ上一定スルコトト為シテハ如何」と提案した。小村はこれに同意し、「各会議リノ畢リニ双方書記官ヲ起草セシメル」（外務省編纂・「日露講和談判筆記」）と談判情報は新聞に洩らさないと決めた。》

日本の小村全権は講和会議への構えは正攻法で取り組み、会議場外での意図的な裏面工作や新聞操作はしなかった。ウィッテは新聞記者嫌いで有名であった小村を批評している。《「小村は新聞への対応で大失策をした。彼はアメリカで勉強し、アメリカ人気質を良く知っているはずの小村にしては、驚く程の失敗である。彼は新聞記者を避け、会議の内容を隠そうとした。私は小村の外交スタイルに乗じて、小村自身の回りを不利になるような、新聞を煽動した」と回想記に記している。》

そこで、ウィッテはロシアに都合が良い様に歪曲し、その内容を新聞記者たちへ屢々漏洩させ、日本全権団を憤慨させたのである。

８月１０日、本会議に於いて、小村がウィッテに日本側の講和条件１２カ条項からなる項目(今章 200－201 頁)にして初めて提出し、その日の夕方にウィッテが、前日の日本側との情報を漏らさないとの約束にも拘わらず、日本の講和条件を米国のＡＰ通信社の記者コルテジに敢えて漏らしていた。

このホット・ニュースは、世界中の報道機関を駆け巡めぐり、翌１１日の朝刊各紙の第１面を大きく飾り、日本側全権団は憤慨して東京への報告は《「是、露国側ノ者ヨリ漏レタルモノニシテ、其目的ノ何レニ在ルカハ解シ難キモ、世人ハ之ニ依リ、却テ我要求ノ穏和ナルヲ知ルベキガ故ニ、其結果ハ我ニ不利ナラズト認ムル旨」》と。（外務省編纂・「日露講和談判筆記」前掲書） やる瀬ない気持ちで日本へ打電したものの、後の祭りであった。日本全権団の新聞に対する秘密主義態度は、来訪した外国人新聞記者たちに向かって小村は言う、「我々は、ポーツマスへ新聞の種を作らんが為に来りしにあらず、談判を為さんが為なり」と答えて怒りをぶつけた。

欧米の新聞記者たちは秘密主義を執る日本側全権団から離れて、ロシア側全権団へ接近して取材を競うようになってしまうのは理の当然であった。従って以後、講和会議の進捗状況に関する報道は、殆どロシア側が洩らす情報によって伝えられるようになり、ロシア側に有利な世論が展開となってしまった。日本人記者らが苦しい立場に立たされ、日本側の記者たちは辛うじて随員から会議の経過を聞いて打電するのが精一杯で、大局情勢は米国側の電報に頼る他に方法がなかったのである。

小村を弁護する訳ではないが、日本人の文化論から言えば、談判情報の途中を新聞記者に洩らす事は、現在の日本人感情から言っても中々出来ない事であろう。しかし文化の違う米国世論の事、ポーツマス講和会議の場に於いてマスメディアに距離を置いた日本全権団の策は、歯がゆいがロシアより劣っていることは否めない。

ウィッテの誘導質問　小村は２３日に於ける２度目の秘密会議に続く本会議で、日本軍が占領している樺太島を二分し、その北半分をロシア側へ還付する代わりに、その還付の報酬として１２億円を日本側へ支払う事を小村は主張した時、ウィッテはそれに対し何も答えなかった。逆に彼は自分だけの仮定の話として知りたいと、質問してきた。《「若(も)し、露国ガ薩哈嗹島全島ヲ日本ニ譲与スト仮定センニ、此ノ場合ニ於テ貴委員等ハ如何ナル地位ヲ取ラルベキヤ。日本ハ金銭払戻ニ関スル一切要求ヲ撤回スルコトヲ得ベキヤ否ヤ」と問うて来たのである。それに応えて小村は、「日本ニ於テハ、軍費支払ノ要求ヲ放棄スルハ薩哈嗹全島ヲ放棄スルト同様ノ困難アリテ、塾(おわ)レモ之ヲ除クヲ得ズ」と答えた。》（『日本外交文書』日露戦争Ｖ）

それは小村へウィッテが樺太を全島返還という仮定の話として質問をし、日本側の腹を探って来たのである。この仮の質問により、きっと日本側は、樺太全島返還であっても、償金を請求して来ると予測したのだ。日本は賠償金要求の為に戦争続戦を辞さないとする立場へ、日本を追い込む誘導質問だったのである。

小村の「軍費払戻の要求を放棄する困難は、サガレン島全部の還付に同意する困難と同じ」との返答により、ロシア側は日本の「償金が目当て」という情報を新聞記者に流した。「日本ハ多額ノ償金ノ為ニ戦争を継続スルヤ・・・」という好ましくない情報を米国の世論に流したのである。

茲に至り、日本が金銭のために戦争の継続も辞さないと云う新聞報道を、欧米諸国に与えてしまった。抑々(そもそも)賠償金の要求は、領土割譲の問題と共に、日本側にとっては

「絶対的必要ノ条件ニアラザルモ、事情ノ許スガギリ・・・」の「相対的必要条件」の中に組込まれていたものが、「絶対必要条件」であるかのように、ウィッテの新聞操作にしてやられたと、云われても致し方ない事になる。

ルーズベルトの変節に驚愕的な書簡となる　そして、ルーズベルトは２１日、露都駐在米国マイヤー大使へ打電し、皇帝ニコライ２世に謁見してその勧告電報を捧呈するように命じた。「露国皇帝陛下ハ、茲ニ発送スル所ノ予（大統領）ガ勧告ヲ聞クニ当リ、予ハ露国ノ幸福ヲ祈ルコト露国人ニ譲ラザルモノナルヲ信ゼラレコトヲ望ム。・・・」の書き出しの書簡をドイツ皇帝・フランス大統領府へも送り、ロシア政府がルーズベルトの勧告に同意に協力してくれるように要請した。

ところが翌２２日、夜遅く１１時なってルーズベルトから金子の下に、一通の書簡が届けられた。それは従来の大統領の親日的な態度がガラリと豹変し、日本は償金のために戦争を続戦しないように次のような警告の書簡を金子送り付けて来た。

《「・・・予ハ、露国人ニ対シテ如何程強ク講和ヲ為スベシト勧告セシカ。之レト同ジク，予ハ、日本ニ対シテモ償金ノ為メ戦争ヲ続戦スルニ至ラバ、予ハ日本ニ対スル世論ノ変転アルヲ信ヅル者ナリ。日本国ガ単ニ償金問題ノ為ニ戦争ヲ継続スルト雖モ、其ノ目的ヲ達シ得ルトハ信ジガタキ申候。・・・日本ガ要求セシ如キ巨額ノ金員ヲ支払ハセシメザルニ至ランカト思考致候。・・・」（大統領の書簡・今章 207－208 頁参照）》

この書簡を見て金子は晴天の霹靂、大統領の変節に驚愕してこの書簡を受け取ったのである。金子は今迄の親日派大統領が、何故、今になって、度の様な事が生じたのか、何故この様な日本を抑え込む警告をしたのか、金子は判断に苦しまざるを得なかった。このルーズベルトの変節については終章で詳しく述べる。

ニコライ皇帝が遂に南樺太の割譲に同意　サンクトペテルブルク（1914 年まで旧露都）の米国駐露大使マイヤーは、大統領からのロシア皇帝に対する譲歩勧告の電報を８月２３日に受領し、彼は即座に行動し、「夏の別荘」（ロシア王室の夏の別荘）でニコライ皇帝に謁見した。マイヤー大使は大統領の趣旨に沿って譲歩の勧告を申し添えたが、皇帝は如何なる賠償金も支払うことは出来ないと語り、「必要があるならば自ら銃を取って戦場へ赴くであろう」と強弁した。更に「敗戦国のように戦費賠償を支払い、自国を辱めるよりは、一時的に領土を失うことの方を選ぶであろう」と皇帝は述べた。

そして最後に、南樺太割譲については同意した。その時の歴史的瞬間の模様を大使はこう記している。「ツァー(皇帝)が南樺太の割譲に同意したのは、本官がその土地(樺太)は旅順と同じように一時的にロシアの領土であったに過ぎないことを彼に認めさせた」事であると。この注目すべき成果を同日中にルーズベルト大統領に電稟し、この時点で英国・独逸・フランスにもニコライ２世皇帝の南樺太割譲の情報は伝わっていた筈である。実はこの情報を日本だけが知らなかった事なのである。どうしても大統領の真意が、日本国だけに伝わっていなかったのか、この露国皇帝の「樺太一半割譲」の記録は、１９０５年の『米国外交文書』にも見当たらないのである。

露帝がマイヤー大使に言及した真相とは　マイヤー大使に語った２３日の内容はデンネツトの著書にあった。(『明治秘話・二大外交の真相』信夫淳平著・昭和３年から抜粋)

《露帝は午後４時本使を引見された。曰く、「朕は名誉あり且つ永続的と信ずる講和は之を歓迎するも、償金は一切支払いを欲せず」と。帝は右手に海軍を襄(はらえる)えることを認めるも、左手に尚露都を隔たる数千里の満州にあって、日本軍に対抗するに足りる忍耐力ある陸軍に依頼し、「必要とあらば朕も戦に立つを辞せず」と附言された。「日本は薩哈嗹の一半（樺太半分）に対する補償金の如きは、名を替えて償金を取るが故に、朕は断じて之を支払うに意なし。・・・帝は昨日独逸帝より講和勧告の電文に接した事を語り、日本が何等償金を要求する限り講和は不可能と、記した答電を本使に読み聞かせた。対座すること２時間後、その同意すべき講和条件を語られた。即ち在ポーツマス全権の事実上同意の８ケ点（８条項）は承認、償金は全然不承認、但し露国の俘虜収容費としては充分の支払に応じるも、償金と呼ばれる巨額は応ずることは出来ない。・・・露国は薩哈嗹の一半を保持し、日本はその曾て所領していた南一半を領有すること。終りに帝は大統領の平和のために努力に対し、帝の深厚なる謝意を本使に命じた。》とあるが、これは「米国外交文書」にも記録が無い部分で、１５章終章で之を述べる。

帝露の心底図らず我耳に入る　『外交余録』石井菊次郎著・昭和５年より抜粋する。

《露国皇帝と米国大使との会見の消息は不思議なる機会によって我輩(石井菊次郎・外務省通商局長兼電信課長)の耳に(極秘情報)入った。８月２７日我輩は某外交官(英国駐日公使マクドナルド、義和団事件総指揮官)を往訪して時局を試み、談話中、先方は我輩

に対し前段(前の区切り)露国皇帝と米国大使との、謁見会談の顛末の内話(南樺太割譲)をしてくれた。我輩は之を天祐と思い早々暇を告げて、桂兼任外相の許に駆け付けた。我輩は露都に於ける２３日の皇帝と米大使との会談の顛末を報告してから、東京とポーツマスの間に１４時間の時差があり、明日の会議延引を訓令し、第２電として前に電訓した樺太島断念を取消、樺太南半割譲説を提議するので火急に対応する迄、唯一の措置を止めて置くよう進言した。桂首相は喜色満面で「君の聞いた所によもや間違いはないね」と念を押され、我輩は御心配無用と答えた。我輩は車で霞が関に飛ばして珍田次官（珍田捨己）に報告の上、前述の如く第１電と第２電と分けて打電した。

「帝国政府は平和に恋々たる誠意の表彰として樺太全島割譲の要求を主張することを断念し、最後の譲歩として其の南半の割譲を以って満足するに決した」と宣言した。・・・その後、北緯５０度以南、即ち樺太南半の割譲を承諾となる。》と、ぎりぎりの処で、日本は樺太南一半を領有になったと記述している。終章で述べる。

ポーツマス講和条約の「元」型があった　明治３７年、金子堅太郎はニューヨークマンハッタン５番街のホテル、ホランド・ハウス４階に事務所を構え、有能な随行員鈴木純一郎(調査関係担当)、阪井徳次郎(外部連絡係)がいて、米国に於ける公報活動と、米国の日露戦役に対する世論動向を調査していた。外務省では「金子ミッション」呼んでいた。金子の専属秘書・阪井徳次郎氏を見て行こう。

イェール大学提案の流れについて　『エール、ポーツマス条約、日本』ＨＰストークス著・1969 年 200 頁(Ｙａｌｅ，ｔｈｅ　Ｐｏｒｔｓｍｏｕｔｈ　ｔｒｅａｔｙ，ａｎｄ　Ｊａｐａｎ.)・磯野健太郎訳からあらかたを見て行く。補足を『阪井徳太郎と同志会』磯野健太郎著・私家版・1988 年・上記の小冊子、磯野健太郎氏が翻訳したもの。磯野氏と阪井徳太郎(1868－1956 年)の関係は、キリスト教に基づく学生寮「同志会」先輩後輩の関係となる。磯野氏は生存中の阪井徳太郎氏から日露講和条件提案の経緯を聞き書きの経緯とる。尚、『ポーツマス条約』(Ｔｈｅ　Ｔｒａｔｙ　ｏｆ　Ｐｏｒｔｓｍｏｕｔｈ・1969 年)の小冊子は、松村正義氏（日本外交史著書多数）が、南イリノイ大学のユージン・Ｐ・トラニ助教授(歴史学)より贈呈され経緯となっている。松村氏によって日本で初めてこの冊子の発表となる。『外交時報』松村正義著・1976 年 10 月―1977 年 2 月「ポーツマス講和条約の元型はイェール大学で生まれた」に記述されている。又松村正義著『日露戦争と金子堅太郎』の「付録」に同文が収録されている。

阪井徳太郎の履歴は、1928年ホバァト大学卒後、ハーバード大学に入り、更に同地のエピスコパル神学校でキリスト教神学び、同校卒業後に病気の為帰国。東京帝国大学でキリスト教に基づく学生寮を経営。金子男爵との出会いは、明治３１年、金子がハーバードに名誉博士号授与に渡米。その頃は小村寿太郎も米国一外交官であり、その時分、金子・小村両氏によるニューヨーク在住の日本人留学生を招待して一晩の夕食会を開いた。その晩餐会で阪井は英語による「日本の事・外交問題等」を滔々（とうとう）とスピーチをし、その時の流暢な英語と国際感覚が金子堅太郎に能力を買われた経緯となっている。

日露講和交渉の12カ条の素地に「イェール大学提案」が使用されている

１９０５年２月１２日、数千ドルの通信費を費やして、日本の小村外相宛てに電報で送られて来た。日本へこの「イェール大学提案」なるものが送られる前に、金子は「イェール大学提案」をルーズベルト大統領に見せていた。この事を知った小村外相は、講和談判前の段階で秘密事項であるこの「提案」を見せた事は、訓令違反（７カ条の心得書）であると、厳しく譴責（けんせき）するのであった。小村は講和会議前に如何なる情報も外部へ諮問して議論されることは、ロシア側に日本側の弱みが露見することを極度に警戒していた。

少し金子と高平との不仲説について述べる。講和会議中盤に差し掛かり、談判情報ラインは、金子→ルーズベルト情報ライン→小村へ、駐米公使高平小五郎→ルーズベルト情報ライン→小村へ伝達があった様である。小村外相は「イェール提案」なるものを拝見し、直ちに駐米高平公使に訓令し、「日本政府は対露講和についてイニシアティヴをとるようなことは考えていない」とジョン・ヘイ国務長官に、高平公使が正式に伝えさせた。（高平公使は２５日にヘイと会見して、「日本政府は、講和に関する見解を提示してほしいとした金子のイェール教授陣への勧告を承認しない。」と告げたのである。）米国政府へ伝達された事は、金子の面子が潰され、二人の関係が抜き差しならぬ確執を生んだようだ。金子は晩年（昭和１３年、８３歳）に高平評について、《「高平公使ハ耳ガ遠ク、英語モウマク話セナカッタ。ソレデ「ルーズベルト」ガ私ニ言フノニ、外交ノ機密ノ話ハ高平ニハ俺ノ言フコトガ能ク耳ニ入ラヌラシイシ、又俺ニハ高平ノ言フコトガヨク分ラナイ。気ノ毒ダガ君が来テ呉レ。サウシテ後デ君カラ高平ニ日本語デ能ク説明シテ呉レト言フノデ、私ガ会ツタ結果ハ英文デ私が書イテ高平に渡シ、ソレヲ書記官ガ翻訳シタ。・・・事実ハ「ルーズベルト」ト私が二人デヤッタノデ、高平ハ唯

電信係リノヤウナモノダッタ」》と、高平をコケ降ろしているのである。(外務省外交史料館所蔵『金子堅太郎伯爵述日露講和ニ関シ米国ニ於レル余ノ活動に就テ』昭和１４年）これ等を読まれた、作家・司馬氏の高平の酷評の根拠も一部はこの辺りにあったのかも知れない。と、松村氏は言う。(『もう一人のポーツマス講和全権委員―高平小五郎・駐米公使―』「日本政府の“イエール・シンポジウム”不承認」松村正義・『外務省調査月報』2006 年/No1。)

話を戻して、当時の列強国に於いて、「イェール大学提案」の国際的な世論は日露講和に対する和平の話し合いの落とし処として見れば、ある程度妥当なものであったと言われている。この「イェール大学提案」を踏まえて日本政府は、明治３８年４月８日、閣議で「日露講和条件予定の件」として論議の台本として、「絶対的必要３条件」と「努めて貫徹を図るべき４条件」、計７条件を対露講和条件として決定をみたのである。これに修正を重ねたものが、「日露講和談判全権委員に対する訓令案」が６月３０日閣議決定したのである。

『エール、ポーツマス条約、そして日本』によれば、日露講和成立の１５年後、大正９年(1920)、エール(イェール)大学事務局長ストークスが、阪井徳太郎を訪ねて東京にやって来た。阪井は急ぎ金子男爵に知らせ、帝国ホテルに於いて金子男爵主催の晩餐会が開かれ事になった。３人のエール大学の友人達は、ポーツマス条約成立までの経緯についての、日本が提議した１２条項と、その「イェール大学提案」との類似点に付いての会話に話に花が咲いたのである。

晩餐会には日本の貴顕(きけん)(名声)紳士が多数招かれ、その席で金子は近く刊行される自分の回顧録に、「エールシンポジァム提案」を詳しく発表すると、その話をした。この話を聞いたストークスは、この金子男爵の話に深い興味を持ち続けていたのである。

そして、時は下って、昭和８年(1933)に、ストークスは阪井に手紙で、知らせてほしい事項を伝えて来た。★「エールシンポジウム」の原本は何処にあるのか、★その後の金子堅太郎回顧録が刊行されたのか、知らせて呉れと頼んで来た。

阪井は、「エール大学提案」なるものは阪井自身の考えとして、①金子と小村全権に「大学提案」は示してある通りである事、②金子ミッションは「大学提案」を非常な影響を受けた事、③その「大学提案」は後に外務省に送られたが、その原本は不明である事、④金子の回顧録は刊行されなかった事を知らせた。

阪井は数カ月後に、オリジナルの「エールシンポジウム」を見つけ出すことに成功

した。なんと驚いた事に、その文書は「明治大帝の」御私諸箱から発見されたのである。阪井は文書の複写の許可を外務省から受け、その原本複写をストークスに送っている。

更に時代は下り、昭和１３年(1938)阪井は、オリジナルの「エール大学提案」文書についてストークスに再信し、①金子家あった文書は関東大震災で消失している。②天皇の御私諸箱にあった原文複写をして送っている。③外務省を詳細に調べた結果、日本語の複写が存在し、その原本文書は日本語である事、阪井は日本語文を英語文に翻訳してストークスに送っている。

金子老伯爵に追憶がある　日本は第一次世界大戦を経て、満州事変、日中戦争と拡大の一途を辿り昭和１３年(1938) ９月、金子は齢８５歳の老翁に達していた時、外務省の嘱託であった神川彦松博士(国際政治学概論)へ、金子が成し遂げた輝かしい業績を懐古しながら語り残した陳述書に、「日露講和ニ関シ米国ニ於ケル余ノ活動ニ就テ」の中に述べられていた。

《私ハ、『エール』大学ノ総長『ハッドレー』(是ハ明治３２年ニ私ト同時ニ『ハーバード』カラ名誉法学博士号ヲ貰ツタ人デ、私トハ極メテ親タシイ間柄ニ在ツタ)ガ来テ呉レト言フノデ、大講堂デ教授、学生ヲ集メテ日露戦争ノ演説ヲシタ。其ノ夜、晩餐会ガ総長邸ニ催サレ１０人バカリノ人ガ集マッタガ、其ノ中ニ４人程、国際法ノ学者ガ居リ、其ノ人々ガ、『今度ノ講和談判ニ際シ、日本ハ連戦連勝ダカラ是レダケノ条件ハ提示シテモ宜カラウト、我々ガ国際法学者トシテ思フ意見ヲ書イテ貴下ニ提出シタイガ、御受ケ下サルカ』ト言フノデ、喜ンデ承ルト応ヘタ」。》と答えている。

明治３９年１２月に『日露戦役米国滞在記』によると、金子はその当時の米国滞在期間に、２回に亘ってコネチカット州ニューヘプン市にあるイェール大学を訪問している。２度目の同総長招請でイェール大学を訪れ教授連や学生を前に、「極東ノ時局」と題して演説して、参集の聴取者らを痛く感動させた。その夕刻に、ストークス事務局長宅で催されたレセプションと晩餐会に、かの国際法や東洋史専攻のウーズレイ及びウィリアムス両教授が出席している。それは半年前に阪井徳太郎を通じての金子へ提出し、日本の対露講和条約の内容を深めている。金子は活動報告書に、

《来賓中、同大学教授国際公法学者「ウールジィ」氏、及東洋歴史教授「ウィリア

スム」氏アリ。両氏ハ倶(とも)ニ極東時局問題ニ精通セルノ士ナリシヲ以テ、余ハ両氏ト談論シ、日露戦役ノ国際公法ニ及ボス影響及ビ極東将来ノ外交等ニ関シ、極メテ有益ナル意見ヲ聞クヲ得タリ。先般、小村外務大臣ニ電信ヲ以テ報告セシ「エール」大学教授ノ平和条件ナルモノハ、即ワチ此両氏ノ意見ヨリ出デシモノナリシガ故ニ、余ハ此会合ヲ機トシ詳細ニ説明ヲ聞キシモ、其ノ内容ハ前回ノ意見ト異ナルコトナシ。》(『外交時報』1976 年 10 月号－1977 年 2 月号掲載。『日露戦争と金子堅太郎』松村正義著・「付録」より)

この『エール、ポーツマス条約、日本』ＨＰストークス著書の序文に、《1909 年エール大学の卒業生ＢＡ(学士)で、長年ニューヨークタイムス（ズ）の論説委員をしている私の弟ハロルド・フェルプス・ストークスに、1905 年のポーツマス条約に関連した手紙のファイルを見せた。彼はそれらの資料を詳しく調べて、これ等の記事をまとめてくれることを承諾した。・・・エール大学の二人の教授、セオドールＳウールジィ教授と、Ｆウェルズ・ウィリアム教授と、三人目は日本の主導的媒介者、ハーバード大学の卒業生でＰＨＤ(博士号)のバルナバ・Ｔ・阪井である。・・・私は日露の国民感情から全く隔離された大学の小グループが、二国間の平和を齎した貢献を記録に残されることを願っている。・・・この物語の元になっている手紙や文書は、エール大学の図書館に所蔵され、興味をもった学者の利用をまっている。

アンソン・フェルプス・ストークス(兄)　1948 年(昭和 23 年)5 月 1 日》

この著書の概要を述べる。《「・・・日露戦争の勃発にあたって、アメリカの同情はこのアンダードック(大型犬と子犬が喧嘩をすれば子型犬を助ける意)に向かい、小さな日本国に同情が集った。しかし後になって、日本の動機は何か、利他的な要素が少なくなって、利己的な要素が多くなって来たことが明らかになった。日本は、支那の領土保全を助けると云うより、自らの特権を朝鮮に獲得することの興味をもっていることがはっきりしてきたのである。セオドール・ルーズベルト大統領は、これを知っていた。日本の動機に言及し、「見せ掛けの礼儀正しさに関わらず、全く自己中心的である」と述べている。ルーズベルトはフィリピン及びハワイとの関わり合いに深く関係している時期を理由の為に、彼自身は日本の友人としてのポーズを取って、ルーズベルトは日本に味方していた。1904―5 年の登場人物は下記の様になる。

①阪井徳太郎は、金子堅太郎のアメリカへ「金子ミッション」に於ける右腕で、日

本外務省は日米関係が危機に陥ると阪井の助けを求めた。彼はケンブリッチ神学校に於いてストークスと知り合った。

②アンソン・フェルプス・ストークス、エール大学の事務局長。支那に於けるエール関係機関の設立の一人。この物語の筆者の兄。

③セオドール・S・ウールジィ、エール大学国際法の教授ウールジィ大統領の息子。

④F・ウェルズ・ウィリアムス、「東洋のビル」と云われている。エール大学の東洋史の教授。支那に於ける外国租界の首席牧師・・・。1853 年の日本への航海、ペリー提督の通訳者、S・ウェルズ・ウィリアムスの息子である。

⑤金子堅太郎男爵、ハーバード大学法律学校卒業生、日本国憲法の起草に参画。アメリカ広報ミッションのヘッド。ポーツマス日本全権団と密接にタッチしていた。

⑥小村寿太郎男爵、ハーバード大学の卒業生、日本外務大臣、ポーツマス会議の日本代表団を率いている。

⑦セオドール・ルーズベルト米国大統領。　⑧「明治大帝」(陸仁)。

※⑨に朝河貫一が参加していたのであるが、昭和１３年頃の日米の軋轢は段々と深刻となって行き、朝河は日本人であり、生まれ郷土の国を裏切る様な心情は出来ず、「私の名前は出さないでほしい」と、弟ストークスに伝えている。この「エール大学提案」は本質的に第３国から提出する事があってこそ、国際的に説得力がある訳で、従ってこの提案に日本人朝河本人の論意が入ることを諒としなかったのであろう。

1904 年(明治 37 年)10 月 3 日開戦以来 8 カ月過ぎた時、阪井は友人ストークス事務局長に次の様な手紙を書いた。「戦場からはよいニュースが続いている。しかし早期の和平交渉の気配は全くない。もし平和会議が行われる場合、日本が出すべき和平の条件などについて、ニューヘブン(エール)の学者達の間での感覚はどの様なものになるだろうか、と、私は君からそれを聞きたい。我々は常に本国政府と電信でつながっている。」・・・。》その返信から「エール大学提案」が始まるのである。

「エール大学シンポジウム」の骨子は　阪井徳太郎とストークスと教授連の練り上げた対露講和条約綱領は日下記の如くとなる。

Ⅰ　原則

エールシンポジァムは、軍事上の情勢が許す時、ロシアに対する講和条約に於いて、日本の最大要求を抑(おさ)えるべき原則の叙述で始まり、その原則は次の様なものである。

①ロシアは過去に於いて、国際的な約束義務に付いて忠実さを欠いた事が多いので、同国の将来の行為については、他国に対するよりも、一層大なる保証を厳しく求めても、それは正当であると考えられる。②今度の戦争は、日本にとっては全く自衛の戦いであったのである。そこで講和条件は、将来のロシアの侵略に対して、十分な保障を日本に与えるものでなければならない。日本は再び武力に訴える必要性避けるに足りるだけの手段を取るべきである。③日本は、朝鮮がロシア化されるのを防ぐ為に日本が払った犠牲の故に、同国において優越なる勢力を占める権利を正当に獲得した。

④日本は、支那がその還付された満州を保護し、又保有する事が出来る様にする為に、支那の軍事上の発達を指導する権利もまた獲得した。

⑤以上の諸原則に一致する限り、満州及び朝鮮における、ロシアを含む全ての国々の商業的発展は、賛成されるべきである。これは、ヨーロッパの干渉を予防し、又世界の進歩を助成しょうとする、利己的でない日本の要求を証拠だてるためである。

Ⅱ　講和条件

以上の原則において、ウールジィとウィリアムスは以下の講和条件を提案した。

(1)ロシアはアジアの沿海では、５万トン以上の海軍力を持たない事に同意する事。（ウィリアムス教授は「不必要である、屈辱的である」と反対した）**(2)**ロシアは、満州における一切の政治的権利を放棄し、同地に対する支那の主権を確認すること。

(3)旅順はある年限まで、これを日本政府の手に委ね、支那が満州に於いて、自分でその主権を保有する能力を十分に証明した後、支那に返還すること。**(4)**日本は朝鮮においては、日朝両国の協商により、保護又はその他の監督方法を確立する。そうして朝鮮の軍事的、政治的そして商業的発展を保障し、且つ日本の海岸を保護する為、釜山又はその付近において、要塞化した海軍根拠地を持つ。**(5)**ロシアは、戦争の終結時において、中立国の港湾に抑留されている諸軍艦を日本に交付すること。

Ⅲ　三大討議事項

二教授は付け加えた。「講和条約で守られるべき３つの重要事項を十分討議する」

(1)ロシアより賠償金をとらないこと。もし賠償金をとればフランスの感情を激昂せしめ、且つ将来ロシアと紛糾を起こす怖れがある。**(2)**シベリアの領土は日本に割譲しないこと。ウラジオストクにロシアが軍港を持つことは、「日本を脅かすことにはならない」。**(3)**満州におけるロシアの鉄道財産の処分は、エールの教授達が最大の難問としたものである。彼らが考えるのに「恐らく最も非難の少ない処分法は」同鉄道を軍

事賠償として日本に委託し、同時に支那が同鉄道を買収するのを早める様にする。又二教授は「曖昧な、そして得異なる特権」を持つ露支銀行を廃止するのをよしとした。右の様な講和条件であるから、「今回成功した戦争において、日本が支払った犠牲の見返りとして」①日本は「列国に対する地位を高め且つ確固ならしめ」②「朝鮮においては自由行動の権利を得る」③「自由の領土および国家的生存の防衛を永久に確保し」④「近代的工業および軍事技術に向かって支那を指導する」利益を得、又⑤鉄道財産をもって賠償とすることが出来る。

金子はルーズベルト大統領に感謝の手紙を出している　この「エール大学提案」を阪井徳太郎から手渡された金子堅太郎は、明治３８年２月９日大統領に手紙を出している。

《「私の親愛なる大統領閣下、　一人の友人に対する私の個人的な要求に従ってエール大学の大表的メンバーが、日本がその様な事態になった時、示すべき和平の条項に関する彼らの意見を、私のために考案して呉れました。私の理解している所によりますと、極東の状況に全く精通しているあの学園の数人の紳士が、私的な会合を開いて、共同の文書をお作りになったので、それは、あの大学の教授達の、大多数の感覚を入れている見解であると考えられる、と聞いております。ロシアとの可能なる平和を望む時に、かの声明書は極めて意義深いものであります。よって私は、非常なる喜びをもって、厳密に貴下自身の私的な検討の為に、かの声明書の一コピーを同封いたします。　敬具　金子堅太郎」　》　　２日後の返信に次の様にある。

《「　私の親愛なる金子男爵殿　　お手紙ありがとう。エール大学のあるメンバーの摘要を興味深く読みました。　　敬具　セオドール・ルーズベルト　」》

（『阪井徳太郎と同志会』磯野健太郎著より）

この３月に入り、金子はニューヘブンにやって来た。「極東の問題」についてエール大学で講演し、金子と阪井はストークの家で、エール大学教授たちと食事をした。ストークはこの食事の時におこった記録に値する出来事を覚えている。金子がロシアは日本の最悪の敵であると言ったとき、「いや違う！」阪井が金子に聞こえない様に、私の兄の耳もとで言ったのだ。「日本の最悪の敵は、ふくれあがった頭だ」と。

この「エール大学提案」を元に日本の講和条件が作られた　日本政府は明治３８年４月８日、本閣議により講和条件を「考究問題」を採択し、４月２１日、「日露講和条件予

定」なるもの閣議決定するに至る。「エール提案」にある「賠償金要求の件」、そして「領土割譲の要求」が、「絶対的に必要な条件」の範疇(はんちゅう)から外され、「事情の許す限り貫徹を図る」と云う「相対的条件」の範疇に組み入れられたのである。６月３０日、「絶対的必要」と「比較的必要」と「付加」の３範疇の条件が纏められて閣議決定された。ここに「エール大学提案」が元にしていることが判る訳である。

甲、絶対的必要ノ条件　（『日露戦争と金子堅太郎』松村正義著・昭和 62 年・付録より）

１、韓国ヲ全然(まったく)我自由処分ニ委スルコトヲ露国ニ約諾セシムルコト。

２、一定ノ期限内ニ、露国軍隊ヲ撤退セシムルコト。我方ニ於テモ満州ヨリ撤兵スルコト。３、遼東半島租借権及ハルビン旅順間鉄道ヲ我方ニ譲与セシムルコト。

乙、比較的必要条件

1、軍費ヲ賠償セシムルコト。最高金額ヲ５億円トシ・・・２、中立港に竄入(ざんにゅう)(逃げ込む)セル露国艦艇ヲ交付セシムルコト。３、サガレン(樺太)及其付属諸島ヲ割譲セシムルコト。

丙、付加条件

１、極東ニ於ケル露国海軍力ヲ制限スルコト。

２、浦潮港(ウラジオストク)ノ武備ヲ徹シ商港トナスコト。

これ等を重点条項として小村全権が渡米船中で１３カ条に纏め直し、更にルーズベルトとの会談により、更に訂正した日本側の要求が１２カ条に絞られ、対ロシア露講和条件として提出した。その日本側がロシアに示した１２カ条となる。(今章 200－201 頁参照)　８月１０日ポーツマス会議第１回会議でロシア側に提示され、ウィッテ露全権はこのうち８カ条の条件付きで承諾し、残りの４カ条を拒否したのである。

承諾の８カ条、①日本の韓国保護権、②ロシア軍の満州からの撤兵と以後の門戸開放、日本軍の満州撤兵、⑥旅順大連の租借及び東清鉄道南部支線の日本への譲渡、⑧満州の鉄道を商工業の目的のみに使用すること、⑫オホーツク海、ベーリング海の漁業権など８カ条である。

拒否は⑤樺太割譲、⑨賠償金支払い、⑩ロシア艦艇の引渡、⑪極東に於けるロシアの海軍力の制限であったが、交渉は償金と樺太割譲で難航となるが、ルーズベルトの最後の外交力調停の執念が実り、８月２９日、「賠償なし、南樺太割譲のみ」と条項で交渉は妥結し、９月４日に調印の経緯となっている。

「イェール提案」に沿って日本の講和条件が作られた　参考文献・『最後の日本人・朝河貫一』阿部善雄著・岩波書店 1983 年。『ポーツマスから消された男』矢吹　晋著・2002 年東信堂。『驕る日本と闘った男』清水美和著・2005 年講談社。『朝河貫一とその時代』矢吹　晋著・2007 年・花伝社。尚、朝河貫一の研究は『日本の発見』矢吹　晋著・花伝社。『朝河貫一書簡集』早稲田大学出版部。等々。

イェール提案の抑々(そもそも)の草案は、金子の随行員である阪井徳太郎が、ハーバード大学教授たちに日露講和議題の相談しなかったことは、ルーズベルト大統領と同じハーバード大学からの人脈によって、秘密情報がロシア側に漏れる事を恐れたことによるらしい。そこでイェール大学のストーク事務局長と阪井はエピスコパル神学校の旧友で、二人は神に誓って秘密を守る事ができた。イェール大学に於いて講和条件の条項を研究することは、情報の秘密と安全性が保障されたからである。イェールには国際法のウールジィ教授、東洋史専攻のウィリアムス教授、そしてそこに日本歴史学の権威者「朝河貫一」博士が居た。この３人の知恵を「イェール・メモランダム」(覚書) として事務局長のストークが纏めたものが「イェール大学提案」となったのである。次に朝河貫一という人物を見て行く。

朝河貫一(あさかわかんいち)という人物　朝河貫一(1873―1948)、福島県二本松出身。朝河は戊辰の役で敗れた旧二本松藩士朝河正澄の子息となる。福島尋常中学(現安積高校)、明治２５年、東京専門学校文学科(現早稲田大学文学部)を出て、同２８年、大隈重信、徳富蘇峰、勝海舟、郷土有志等の援助を受けアメリカへ留学。ダートマス大学３年、イェール大学院３年、歴史学を学び、論文『６４５年の改革(大化改新)の研究』哲学博士の学位授与は明治３５年２８歳の時。『大化改新・The Early　Institutional Life of Japan(日本の早期文化制度) 』翌年に英文 346 頁で出版された。(津田左右吉の『日本上代史研究』より３０年前となる)

1905 年、朝河の著書『日露衝突』は当時のアメリカに於いて、日露の解説した極東情報が英文で評論が初出版された。当時米国には英文による極東情報が無いため、朝河の著書はアメリカ国民に大きな影響を与え、著書が好評となり朝河の「日露解説」の講演は全米各地で好評を博した。この『日露衝突』を朝河が執筆したのは日露開戦前夜で、評論が『イェール評論』(４季刊)1904 年５月と８月号連載後に、米紙『ニューヨーク・タイムス(ズ)』の社説で取り上げられて絶賛となり、新聞５社、雑誌２社で取り上げられた経緯となっている。

論文の内容は、日本の産業が中国大陸市場を求める事情から、韓国・満州を舞台とした日露の経済摩擦を説明し、やがてロシアによる満州の植民地占拠に於ける日満韓の共通の利害を論じ、日露衝突の背景を描きだしている。当時アメリカの権威ある雑誌等に本格的な日露戦争評論は見当たらなくその反響は大きかった。

講和餘聞
怪しむべき二個の人物
其一 御用新聞 通信員
其二 朝河某と稱する者

朝河貫一博士(1940 年)『朝河貫一とその時代』より　　明治３８年１０月３０日・『東京朝日』(同)

これ等らの論文内容は、満州・韓国の機会均等でなければならない事、及びウラジオストクの割譲を求めてはならない事、それはアメリカ人の目から見た、国際的な平和論となっている。日露戦争の講和交渉の成立と、東洋の平和をアメリカ国民が期待する極東の平和の姿なのである。同年８月中頃、朝河は日露講和会議場前で、ポーツマスに参集した日本のマスコミの記者たちに、日露講和の平和論を高唱した。この時期、旅順に第３軍が２０３高地攻略中となっていた。右の記事は、『東京朝日』朝河貫一を誹謗(ひぼう)した掲載記事である。内容は『ボストン・ヘラルド』(1905 年８月２４日)ポーツマス会議をウォッチしていたＫ・アサカワのインタビューを掲げている。

朝河曰く「韓国に対する支配的な影響力を確保する事」を求めてはならない。ロシアは「韓国の名誉を傷つけ、国家としての権威を傷つける事」をしてはならない。賠償について日本は「ロシアに賠償を科す事」を望むべきではなく、一部の支払だけに留める事である。このような朝河発言の新聞記事は、「此の人、「朝河」はイェール大学を卒業し、目下「ダートマス大学」に於いて東洋政治部講師として聘(へい)せられ、名刺にはドクトル朝河、・・・日本語を用いず、必ず英語を以てする」・・・「日本は決して償金を望まず、償金は必ず撤回すべし」「謝金を撤回するに就きては、国民の意見と正反対なり、との説をなすものあるも、懸る大問題の際、国民の意見を問う必要なし。政府は思う通り断行すべきのみ」と。・・・彼は日本語を一言も語らず、・・・とある。(ポーツマス講和余聞・読み易く直してある)

朝河は『東京朝日』に「怪しむべき人物」として見られ、その記録は公式の外務省文書や日本のマスコミから黙殺された。彼は祖国の将来を憂い、日露戦争の４年後、『日本之禍機』を実業之日本社刊(現在講談社学術文庫有)から２千部発行する。この論旨は「政府が国民を唱導(先達)するだけの力を欠いている。現在の日本にとって重要なことは、反省力のある愛国心だと強調し、満州問題の核心に迫っている。中国の領土保全と機会均等の二大原則を疎かにすれば、世界は日本を非難することになる。満州に於ける利害獲得に走らない外交こそ、日本の出発点である」と朝河は力説するが、当時の日本は国際協調との外交発言は極めて離反しており、後、日本は南満州鉄道による南満州支配体制確立に万進し、満州へ日本軍国化に慢心して行く経緯となる。

付記・「米国エール大学教授等日露講和条件を研究假定す」『明治天皇記』第 11 に記載。吉川公文館・昭和５０年・明治３８年２月の５９頁より。　※()注釈筆者による

《米国に滞在中の男爵金子堅太郎、曩に同国エール大学書記官ストークスより贈られるゝ所の仮定日露講和条件を外務大臣男爵小村寿太郎に密報し、以て他日の参考に供せしむ、該条件は、去年１０月同大学国際法教授ウルゼー、東洋史教授ウィリアムス其の他諸教授相集まり、日露戦争問題を以て研究課題と爲し、仮に講和談判の条件として論定せしものにして、ストークスは堅太郎の随員阪井徳太郎と友善たるの故を以て、当時之を筆記して以て堅太郎(金子)に贈れり、爾来堅太郎は深く之を筐底に秘せしが、既にして歳改まり、旅順要塞陥り、奉天の運命も亦旦夕に迫り、一方東航の途中に在る敵の太平洋第二艦隊或は召還せらるべしとの風評伝はり、爰に再び日露講和の説喧伝せられるゝに至れるを以て、遂に之を報ぜるなり、その条件たるや、先ず軍事上の形勢之を許すものと仮定し、日本の露国に対する最大要求を決定すべき原則五事を揚ぐ、曰く、一、露国が既往に於いて国際上の義務に関し誠実を缺きたる事実に微するに、同国将来の行為に対しては、他国に対するよりも更に重大なる保障を求めるを正当とす、二、今回の戦争は、日本に取りては真実に正当防衛の場合たりしなり、故に講和条件は、露国将来の侵略に対し適当なる保障を日本に与ふるものたらざるべからず、日本は再び干戈に訴ふる必要を避くるに足る措置を取ることを要す、三、日本は戦争に供したる犠牲の代償として、韓国の露国化せられるゝ防がんため、優越なる勢力を韓国に占むる権利を正当に獲得せり、四、日本は清国をして其の還付せられたる満州を保護し、且保有することを得しめんがため、清国の軍事上の発達を指導する権利をも獲得せり、五、前記諸原則と相背馳せざる限り、日本は一面欧州の干渉を予防し、他面世界の進歩を助成せんとする公平なる希望を証明せんた

め、満州及び韓国に於ける列国の商業をして充分の発達を遂げることを要すと、以上

諸原則に基づき、仮に講和条件五事を提起す、曰く、　一、露国は東亜の沿海に於いて五萬屯以上の海軍力を有すべからず、　一、露国は満州に対する政治上一切の権利を抛棄(放棄)し、同地に対する清国の領有権を確認すべし、　一、旅順は或る期間之を日本政府に委託し、清国が満州に於いて其の主催を保有する能力あることを証明するを待ちて、之を清国に還付すべし、

一、日本は日韓両国間の協商を以て、韓国に於いて保護又は其の他適当の監督方法を立つべし、而して韓国の軍事・政府及び商業の発達を保障し、且日本の海岸を防衛するため、釜山又は附近に於いて武装せる海軍根拠地を設くべし、　一、露国は戦争終了の後、現に中立国の港湾に抑留せられるゝ所の諸軍艦を日本に交付すべしと、

尚別に講和条件中に規定すべき事項として三事を揚げ、特に深く討究を加うるべしと爲(な)す、曰く、　一、露国より償金を微(ちょう)すべからず、蓋(けだ)し仏国(フランス)の感触を激昂せしめ、且将来露国との紛糾を招く處あるを以てなり、　一、西比利亞(シベリア)の地は割譲せしむべからず、又浦塩斯徳(ウラジオストク)の割譲を求めることは、露国の感触をして激発せしむること意想の外なるべし、将来露国が仮令(たとえ)其の処に海軍根拠地を置くことありとするも、毫(ごう)も日本の脅威たらざるべし、　一、満州に於ける露国鉄道財産の処分は、最大の難問題なり、若し該鉄道を以て一営利企業と為し、露国の掌裡(しょうり)に置き、露国人をして経営せしめんか、乃(すなわ)ち陰謀の中心と為り、将来清国の主権に対する禍根と為るべし、然らば之を軍事の賠償として日本の手中に帰せしめんか、独仏の不平を招き、従って該二国をして講和条件に容喙(ようかい)(差し出口)する辞を得し虞(おそれ)あるためのみならず、将来日清両国間の紛争を招致し、露国に干渉の機会を与ふる憂あり、而して清国は目下該鉄道を買収する資力あらず、又自ら之を管理経営する組織を有せず、故に姑(しばら)く之を軍事賠償として日本に収め、清国をして現に該鉄道に対して有する買収権を今より十年乃至二十年の後に実行せしめ、一方不定且奇異なる特権を有する露清銀行を閉鎖し、併せて今後満州に於ては、何れの国たるを問わず、之に類似する営業を肇(はじ)むる(はじめる)ことを禁ずべしと、以上の条件を以てすれば、則(すなわ)ち日本は今次の戦争に供したる犠牲に対し、第一、列国に対する地位を進め、第二、韓国に於ては自由行動の権利を得、第三、自国の領土及び国家生存の防禦を永遠に確保し、第四、近時の工業及び軍事の技術を以て清国を指導するの利益を得、第五、鉄道財産を以て賠償とすることを得べしと云うに在り、　○日露戦役米国滞在記

以上が『明治天皇記』第十一にある「イェール提案」は原文通り。

15章　終章として・ポーツマス講和談判後に出て来た極秘情報

「明治の指導者・ポーツマス講和談判のあとさき」 阪井徳太郎著・『文芸春秋』秋の増刊『秋燈読本』昭和２６年１０月号。阪井徳太郎は小村の専属秘書、ポーツマスへ随行員（）注釈著者

「ルーズベルトの変節」の部分を抜粋する。

《ポーツマス講和談判の終盤８月１９日(明治３８年)、小村さん(小村寿太郎)は、樺太全島を日本軍が占領している事実より、北半(樺太１／２)を還附する報酬として１２億円を要求、ウィッテは到底１２億円は払えないと言ったが、小村全権が強硬に縷々（こまごまと話す）述べたて、兎に角之を妥協案として、両者共、本国政府の訓令を仰ぐことになった。

大統領はローゼンと会見し、本妥協案を露国が受け入れない時は愈々最後の処置を取るとのことであった。そこで金子(堅太郎)さんは大統領邸へ８月２１日１１時に訪問した。大統領はローゼン（駐米公使）との会談内容を金子さんに告げた後、小村妥協案については、「日本は一条の活路を開いたと思う。樺太の半分を返す以上、露国が日本に対して報酬を支払うことは当然である。この北樺太返還は、自分が露帝に勧告するに当たり、一つの強い言いがかりとなる。早速露帝に電報を打とう」と語り、一句、一句金子さんと大統領は相談して文案を作り、すぐに発信せしめた由である。かくて妥協案については大統領の賛成を得たので、金子さん始め我々一同愈々談判の前途に大いなる希望を持つ次第であった。

処が８月２３日の早朝、ニューヨークのホテル・リヨノーリにあった私達の宿舎へ、Ａ・Ｐの社長メルビル・ストーンがやって来た。緊張した面持ちで、「金子男爵は居らぬか」という。金子は深夜に帰宅後に寝るから、昼頃起きると答えると、「昨夜大統領から極めて重要な手紙を預かってきた」と言って「間違いなく金子男爵に渡してくれ」とのことであった。

既に述べた様に、小村妥協案に対しルーズベルトが賛意を表し、直ちに金子さんの面前で露帝への強硬な勧告電文を起草した事実に、金子さん始め我々も気をよくしていた矢先であった。金子さんはねぼけ眼でそれを一読するや、満面紅潮、ベッドの上に起き上がり、「馬鹿野郎！」と怒号した。もう一度読むや「馬鹿野郎、そんなこと出来るもんか」その手紙を床にたたき付けた。

その手紙は歴史的に最も大切な手紙なので、ここにその全訳文を揚げてみよう。恐らく日本では初公開のものと思う。》と、下記は阪井徳太郎訳文となる。（１４章 207－

208 頁の書簡の翻訳は『明治秘話・二大外交の真実』信夫淳平著となる。）

《　（秘密）　　謹啓、・・・挨拶(略)　　※()は筆者が注釈、文章は少し読み易くした

予は各方面より伝聞する苦情を、貴下に内申致し度存じ候。其の苦情とは、即ち日本は或る多額の償金(金額)の為に戦争を継続するかも計り難しと、云うにあり、而して之を唱うるは、専ら日本に同情を寄せる人に有之候。上院(合衆国国議会構成する二院あたる上院)に於ける外務部委員会に於ける有力なる一議員(外交委員長ロッヂ)は、非常に日本に加担する人となるが、只今予に一書を送り曰く、

「小生は日本が単に償金の為に戦争を継続する事とは思考致さず候。何となれば樺太譲与の争点につき談判を破裂させるなら、小生は聊かも苦情は申さず候、単に償金を得る為に再び戦争を継続するに於いては、日本はひとり償金を得るのみならず、米国及びその他の諸国に於いて速やかに同情を失うに至るべし。小生は日本が償金のために戦争するは得策でないと、断言せんと欲す。日本は樺太以外には未だ露国の領土を占領していないではないか。而して樺太は日本に於いて、永く領有せんと希望致し居処に候。」

従来日本人に好意を表したる米国人中にも、少なくとも右の論点と感覚を同情するものの多きことは、日本政府に於いて思料（思いはかる）してはいけないと、予は思考致し候。尤も樺太北半分の還付を承諾するに於いては、露国より当然受取るべき俘虜収容費の外、或る金員(額)を得る機会を与えると雖も、予は日本が要求した金額、即ち６億弗の如きは要求し、その外の金額(別額１２億円)は受取り得えるものと考え申さず候。

貴下(あなた)の熟知している如く予は、露国人に対して如何程強く、講和をなすべしと勧告した。之と同じく予は、日本に対しても償金の為に戦争を継続しないことを勧告致したく候。若し日本に於いて償金の為、戦争を継続するに至るならば、予は日本に対する世論の変転することを信ずるものなり。

尤も此の世論は現実的な効果を有するものとは思考しないけれど、全然これを度外視すること能わざる（できないのである）ものに御座候(ございます)。且つ又予は日本国が単に償金問題の為に戦争を継続すると雖も、其の目的を達し得るとは信じ申さず候。却って露国は其の支払を拒絶し、而して文明世界一般の感情は露国に加担して、日本が要求した巨額の金員(額)を支払しめざる（しない）に至らんかと、思考致し候。勿論

露国が之を支払うに於いては、予は又何をか言わん。

然れども若し露国に於いて之を支払わざる（拒否）時は、尚一カ年戦争を為し、日本は仮令(たとえば)東部シベリアの占領に成功すると雖も、既に消費した金額に加うるに４、５億弗を消費し、又非常なる鮮血を流すに至らん。若し日本にして、東部シベリアを占領すると雖も、是日本が希望しない所のものを得たのみにして、露国は尚未だ日本に償金を支払う如き状態に陥らざるなり。又露国は確かに今後、日本が消費すべき金額までも補充するに足りるべき金額は、支払うことはできないのである。

勿論此の件に関する予の判断は、或は誤りならん(かもしれない)。然れども之予が日本の利益の点より、誠実に判断したるものに御座候（ございます)。且つ予は元来文明及び人道の利害が、単に巨額の償金の為に、此の戦争を継続することを禁止すべきものなる事を、感じ申し候。予は未だ昨日発送した電報(露帝に宛てた親電)に対する返信を得ていないが、今晩若しくは明日之を得んと期待致し居り候。予は其の写しをドイツ及びフランス政府に送り、露国政府をして、予が勧告に同意する様協力あることを請求致し置き候。此の書簡は勿論極秘に属すと雖も、貴下に於いて本国政府に電報を打ってもらえば、予の喜ぶ所にして、又希望する所に御座候。若し電報を発してもらえば、直に之を発送せられたく候。敬具

１９０５年８月２２日　オイスター湾にて

セオドル・ルーズベルト

ニューヨーク市ホテル・リヨノーリ内　　男爵金子堅太郎殿　》

金子さんは（大統領に対し)、「何たることだ。昨日まで我等に斯くまで好意を持ち、我等又全幅の信頼をおいて一切を打明けて相談し居ったルーズベルトが、突如償金のことは断念せよ」といって来たのである。金子さんは激昂して「ルーズベルトの奴、変節しゃがって」、ルーズベルトは二枚舌を使っていたのである。如何なる理由によるのか、ルーズベルトは突然にその巨大な援助の手を断ち切ってきたのである。

「大統領の手紙の後日譚について」　ある日阪井徳太郎は、《あれは明治４１年、即ちポーツマス談判より２、３年後のことであったと思う。私(阪井徳太郎)は確か外務省で、ある英国の雑誌を読んで居った。「フォートナイト・レヴュー」か「ナインティーンス・センチュイ・アンド・アフター」か「コンテンポラリー・レヴュー」か、之に類する

雑誌であった。雑誌に当時「ロンドン・デーリー・テレグラフ」の露都駐在員であったヂロン(ロシア全権委員の随行員)が、ポーツマス談判当時のことを回顧して、一文を載せていたのである。このヂロンという男は英人でロシアに永く滞在し、知友が多く又信用もあり、殊にウィッテとの交遊密なものがあり、ポーツマス談判当時には、ウィッテの頼みによってその一行に加わり、ウィッテの為に英米新聞記者の操縦の任に当たって、大いに手腕を発揮した男である。

さてこのヂロンの文を読んで行くうちに、驚くべし、忘れもしない、あの朝、我々に大きな打撃を与えたあの大統領の手紙が、それこそ一字一句の違いもなしに、ちゃんと載っているではないか。しかも今細かい点は忘れたが、その当時ウィッテが入手して、ヂロンは見せられたのではないかと思う。つまりルーズベルト大統領は、金子さんに寄越(よこ)したあの重大な手紙の写しを、同時にウィッテにも渡したと推定されるのである。ウィッテが当時、之を入手せりとして、其の回顧録に載せているのは事実である。ああ！なんたることだ。私の胸にはあの朝と同じ、いやもっと激しい憤懣(ふんまん)の念がつき上がって来た。

あの手紙について電報を受け取った時の金子さんの返事を思い出した。丁寧に大統領の好意を謝し、今後も割地償金のことに努力してくれる様大統領に頼んでくれというものであった。しかしそれは全く無駄な相談であった訳だ。ウィッテが償金問題について絶対強硬になったのは当然であったと思った。

なる程、確かにそれと逆のことを、日本はやっていた。大統領とウィッテとの会談、大統領とローゼンの会談は、後で金子さんが聞きに云って小村全権に知らせている。大統領から露帝に出した電文は一回目も二回目も、金子さんの目前で起案し、機密に関することなので複写は無く、金子さんは一句ずつ思い出し、殆ど原文に近いものを小村さんに渡し、日本政府に知らせている。だから大統領は日露両国に対して公平であるというのであろうか。

否、否、断じて否である。何となれば露国側は大体、大統領が日本に通じているというのを知っていたからだ。だからウィッテにしろ、ローゼンにしろ、警戒していて本音を明かさなかったのである。日本側は何でもかんでも打明けて居った。そうして、よもや大統領が我が方との大統領の話を、ロシア側に洩らそうとは夢にも思っていなかった。つまり小村さんは、ウィッテがあの手紙を知っているとは露知(つゆし)らず、ウィッテと償金交渉をなし、それによって最後の肚をきめて政府へ電稟(でんりん)したのであった。そ

れなのに、「露国が償金を支払うに於いて、余は又何をか言わん」、何事であるか、ずい分失敬な話ではないかと思った。

この記事を一番先に見つけたのは私であった。かくも小村さんが頑張ったポーツマス談判を、突然終結せしめた証拠を目前に突き付けられた気がした。みんなも驚愕したのである。然しこのことは、殊に最高度の機密事項であった。以来４０年以上、外部の何人にも洩らさず経過した。殊に大正３年、私が三井合名会社に入ってからは、外交関係については部外者となった。私は勿論、誰にも語らずにいたが、この一件には重いしこりの様なものが心に残っていたことは確かである。》と。

日露講和条約調印時のスケッチ（外務省外交史料館蔵）　右・阪井徳太郎・三井合名会社調査秘書時代

阪井徳太郎の履歴『東京名古屋現代人物誌』柳城書院大正５年より参照。「・・・父君は尾州家の御本丸番で天守閣の鍵を預かり、二百石の俸禄に依って土蔵の三戸前（土蔵の数え方、３棟）も並べた屋敷を構えていた。明治２年多事の時に徳太郎は生まれた。「ポーツマス条約の活動」に金子子爵の米国に派遣時に随行員として渡米し、新聞雑誌に寄稿し或は有力者を訪問し又或は演説等もして、日露大戦は義戦をなしていると説明を為し、大に米人の同情を寄せ遺憾なく金子子爵の任務を補佐した。（中略）ポーツマス条約の際には大統領ルーズベルト氏と小村全権大使並びに金子子一行の間に連鎖的活動を為した。君は隠れた功労者で我国外交史に残る人で、又以って君の履歴を飾るものである。とある。（後略）

手の内を秘めたウィッテ　更に続く。《所がずっと後になってまたこれに関連する２、３の事柄を知った。その一は元外相故石井菊次郎氏が出された『外交余禄』である。第一に、即ち８月２３日午後４時、大統領の勧告電文の趣旨説明のため、駐露米大使マイヤー氏は、露帝に拝謁し、電訓に遵い委細説明を言上したが、皇帝は相変わらず、「一寸の土地を割くことも、一銭の償金を払うことも肯んぜず」と断言せられ乍ら、但し「樺太南部は歴史の関係に鑑み之を譲るも苦しからず」と、独り言の様に附言せ

られたのだそうである。

石井氏は当時珍田次官の下に、通商局長兼電信課長であったが、この経緯を２７日、東京に於いてはからずも某外交官より、聞き知り、急ぎポーツマスへ電訓して、小村さんにその旨を通じたと云うことである。確かに２９日午前９時半、小村さんは先ず内会議を要求し、ここに於いてウィッテから樺太南半割譲の内容を取ったと伝えられている。唯問題は、晩くも２４日早朝は大統領の耳に入って居った筈のこの露帝の底意を、何故に大統領は日本側に伝えなかったかということである。》

ロシア煙草を持ってこい　更に、《第二は、信夫淳平氏の著書であったと思う。信夫博士は大正になってから、小村さんの業績につき、日本は勿論露米その他の各国の回顧録・日記・伝記等につき誠に広範な研究を大成された方である。氏によると２９日の最終会議の時、ウィッテは談判不調を確信し、破裂の場合、打電すべき文案をポケットに蔵(ぞう)して会場に入り居(お)った。そしてこの日、重ねて日本全権から軍費払戻しの要求あれば、自分でおもむろに席を起ち、会議室の戸を開き、隣室に控えている随員にロシア語で、「ロシア煙草を持って来い」と命ずる。そうすると命ぜられた随員は、走って直ちに一電を露都に急送し、而してこの一電は直ちに転じて、在満州百萬に垂(なり)んとする露軍に対する即時進撃の命令となる手筈を、その朝決めておいたということである。いうまでもなくポーツマス談判の難関は、割地と軍費であった。而(しこう)してかく観(かん)じて来る時、この両者共重大な情報は何故か大統領の線で止められ、我が小村全権には伝えられなかった。小村さんは実にかかる状況下にあって沈思默考(ちんしもっこう)、毅然(きぜん)としてぎりぎりの線まで頑張ったのであった。

第三に、何等金銭の支払を要求することなく樺太北半を露国領有に残すといってウィッテを承諾せしめている。私は殊にこのロシアタバコの一件等を知るにつけ、ひとしお、この間の小村さんの苦心と周密(しゅうみつ)果断を思い、今に敬慕にたえない。最終会議に於いて小村さんは、終に一度も償金問題にふれず、ウィッテをして、「ロシアタバコを持ってこい」としうる機会を得しめなかったのであった。》

「米国の利害打算」　話は続く、《論者によっては当時の日米の利害が一致していた間だけ、大統領は親日的であったが、日本が東亜に於いて勢力を得すぎると、段々日米の利害が衝突するので、大統領はこの様な態度を取ったのだとする人もある。

而して、北支満州に広大な市場を持っていた米国の繊維工業関係者が、露国の帝国主義鋒鋩（刃の切っ先）に直面して、日露戦争の直前、盛に米国東亜政策の積極化を要望していた事実をあげ、更に講和直後の小村外相によって打ち壊された、所謂ハリマンの満鉄買収計画、更に後のルーズベルト大統領の邦人移民排斥（排斥運動）、我国に対する平和的示威なりという、米国艦隊の太平洋巡航等を関連せしめるのである。

他方、ルーズベルトがかかる態度をとったのは、何の他意もない、全く日本の為を思ったからだと見る見方がある。即ち大統領の当時の日本の軍事力と経済力に対する見方が、小村さんより、やや悲観的で、談判破裂続戦等につき日本に対する同情より発する、種々の深憂をもって居り、日露両国に対し激しい譲歩勧告を行って、一意妥結に持って行こうとしたというのである。最後の回訓等にても分る通り、小村さんの談判破裂続戦論等は確かに当時の国力から見て、強気中の強気たるものであった。この様な所に、露帝の樺太南半分割譲の底意等を伝えれば「隴を得て蜀を望むおそれあり」（人の欲望には際限がない）というのである。》と。

外交官の苦哀に徹す　《小村全権の帰国時の国民の声は、「軍は強いが外交官が腰抜けのため、同胞の血であがなった勝利を代なしにした」と三歳児に語る始末、小村さんは腰抜けであったのか。軍は国民の思っていた程強かったのか。日本の経済力は続戦に耐えたか。答えは明々白々だ。小村さんが軟弱であったのではない。腰抜けであったのではない。実に小村さんこそ最も硬骨なる外交官である。国民が無敵と思っていた軍の指導者、即ち山縣・大山・児玉・山本等こそ謙虚に自らの力を知っていた。

小村寿太郎

ポーツマス海軍工廠が会場となる

莫斯科で発行された漫画

出典『世界情勢と躍進日本外交史』昭和１５年、漫画左・ウィッテ　中央・ルーズベルト　右・小村寿太郎か

しかし小村さんは、この間の事情について生前遂に一言の弁明をもなさなかった。如何に覚悟の前とは言いながら、一言も自分の立場を釈明したかった。それは、日本の国力の内情を、最も端的に外国に見透かされる資料を与えることになるからだ。蓋(けだ)し（まさしく）外交官の苦哀は実に茲(ここ)にあると思う。実に自国の国力の為に、断腸の思いを秘め、黙々として終生あらゆる罵声雑言(ばりぞうごん)を甘受していたのである。誠に今は呼べども答えぬ小村さんの為に満腔の同情にたえず、偉大なりし小村さんの為、茲に一言の弁明を残さんとするものである。》と、阪井は小村に万感の想いを述べている。

ポーツマス講和会議とセオドア・ルーズベルト“なぜ彼は日本に伝えなかったのか”

松村正義著・『外務省調査月報』2005 年度／第２号より評論を見て行く。

《　序文に・1905 年８月１０日、日露講和会議は１週間余りで賠償金と樺太割譲問題をめぐり決裂寸前に立ち入った。事態を憂慮したルーズベルト大統領は駐露大使マイヤー指示、２３日にロシア皇帝に拝謁し、樺太南半分を日本へ譲渡に同意させたが、ルーズベルトは何故かその成果を日本へ伝えなかった。日本政府は２８日に外務省の石井菊次郎が、英国公使クロード・マクドナルド(北京籠城総指揮官)から呼び出され、駐露大使から入電した極秘電報を読み聞かされて始めて知ったのである。（石井菊次郎・『外交余録』１４章 219－220 頁）　最近、村松氏は英国公文書館の厖大な資料の中から、その駐露大使から駐日公使に宛てた極秘電報を見つけ出した。しかし、ルーズベルトがロシア皇帝の南樺太譲度への同意を知りながら、日本側に知らせなかった理由については、色々推測されているが、謎のままなのである。

ペテルブルグからの極秘電報・第154号　英国公使館に於いて石井外務省通商局長は驚く極秘情報を聞かされたのである。電報内容はニコライ２世皇帝が４日前の２３日に拝謁した米国大使ジョージ・マイヤーの説得に応じ、償金支払いには依然応じないが、樺太南半分を日本へ譲度してもよいと語ったと云うのである。マクドナルドは「この電報の写しをあなたにあげたいが、ロンドン政府の許可を得てないから、読んで聞かせるから、よくこれを記憶されたい」と念を押された。

松村氏訳―第１５４号極秘。（訳文）「米国大使、昨夕、私にこう語った。ロシア皇帝は、２３日の同大使との謁見で、次のことを口実にして樺太南半分の譲度に同意した。その口実とは、同島は、たったの３０年間だけロシアの統治下にあっただけなの

で、ロシア国有の領土としてではなく、旅順と同じような観点から考えられて良かろうと云うのであった。しかし彼は、同島の北半分を日本から買い戻すというような妥協については絶対に認めようとしなかった。また皇帝は米国大使に独逸皇帝から受け取った電報を見せ、そのヴィルヘルム２世の電報では、ニコライ皇帝が講和のために譲歩するよう強く促していた。陛下は日本の諸条件を受け入れることは、不可能である旨を回答したと述べた。」

石井局長はマクドナルドから極秘電報の写しやメモさえ貰っていない。従って日本の外務省外交史料館には、英国側の極秘電報については何も存在してこなかったのである。ロンドンの公文書館で上記の「極秘情報」を保存されている事実を松村氏は確認している。2004 年６月１６日、ＮＨＫ番組「その時歴史が動いた―逆転の極秘電報１５４号」として放映された経緯となっている。

直前の訓令を一部修正する至急電報　石井局長が受けたその日(２８日)午前８時半過ぎ、無賠償・領土無割譲でよいから講和成立させる様、小村全権は政府の打電訓令を受け取っていた。東京とポーツマスとの時差１４時間を利用しながら、急ぎ第一電を打電は、２８日の最終本会議を一日延期するように、次いで第二電を２８日夜遅くポーツマスへ打電された。「樺太全島割譲の断念を取消し、同島南半分の割譲を提議させるよう、・・・。」ポーツマス２９日午前、第１０回目となる最終本会議に臨もうとしていた小村全権の元へ到達した。これを受けて小村全権は、「帝国政府ハ平和ニ恋々タル誠意ノ表彰トシテ樺太全島割譲ノ要求ヲ主張スルコトヲ断念シ、最後ノ譲歩トシテソノ南半ノ割譲ヲ以テ満足スルニ決シタリ」とウィッテに宣言し、日露講和会議が辛うじて妥結に至ったのである。

ルーズベルトのロシア皇帝宛ての親電について　２１日、金子・ルーズベルト会談による、ロシア皇帝へ宛てた親電の文面で一句ごとに金子と協議しながら電文を作成した。内容は戦争が継続した場合は、ロシアは東シベリアの諸州を失うであろう、ここで講和を結べば日本もロシアにとっても利益となるだろう、と云う親電である。

この講和調整の親電をサンクト・ペテルブルグに駐在する米国大使マイヤーへ打電し、ロシア皇帝に拝謁して捧呈するように訓令した。(時差７時間ある)２２日は皇帝に拝謁できず、翌２３日午後、マイヤーはルーズベルトの親電を説明に上ったが、皇帝

は「ロシアとって名誉ある講和ならば歓迎するが、・・・」と語った。この時マイヤー大使が驚いたことは、皇帝はこの親電の講和勧告の同文をドイツ皇帝ヴィルヘルム２世から、従兄弟に当たるロシア皇帝に渡っていたのである。実際には、この電文はワシントンに駐在する仏独両国大使へも送っている。又、ロシア皇帝宛て電文の写しは、ポーツマスのウィッテにも送られていた。そうであれば、同じポーツマスいた小村へも親電の写しが送られてこなかったのは、何故か。ここにルーズベルトの“失態”と“謎”が生まれたのである。この電文は金子とルーズベルトが念を入れて作成したものだから、日本側には写しを必要なかろうと考えたかも知れない。しかし、金子は親電(記憶して帰宅する)の写しは貰って帰らなかったことは事実である。(金子へ正確に記憶のみと云うことは、大統領は日本側に不記録にする意図を思われる)

２３日午後、マイヤー大使の皇帝拝謁は２時間に及んだ。マイヤー大使が「サハリンは、ロシア固有の領土ではなく、旅順と同じように一時的にロシア領であったに過ぎない」事を皇帝に認めさせた。皇帝は大使の粘り強い説得に動かされ、南サハリンの日本への割譲に遂に同意したのである。正に歴史的瞬間であった。その日の内に露都からニューヨーク市のルーズベルト大統領へ打電されていた。

英国政府の冷ややかな姿勢　ルーズベルトは英国大使モーティマー・ジュランドへも書簡送り、大使はすぐにロンドンへ電報したが、しかし英国政府の反応は冷ややかだった。当時の英国指導者層は、ルーズベルト大統領の積極的な日露講和への斡旋に一種の嫉妬心を持っていたようだ。そうした英国政府の日露講和の姿勢も、８月２８日にマクドナルド駐日公使から、石井外務省通商局長へ非公式であるが、極秘情報を日本政府に提供した事は、日本の英国政府に対する信頼感は大きく好転したのである。

知らなかったのは当事国の日本だけ　２５日の時点で、ドイツ皇帝もフランス政府も、マイヤー大使のロシア皇帝拝謁の時、皇帝によるサハリンの南半分割譲は、取巻き国は知っていた。８月２６日、ポーツマス発ＡＰ電が、ロシア皇帝がサハリン南半の割譲に同意したと報じていたとすれば、日本側の情報蒐集力の不足問題になる。ともあれ、拝謁結果の肝心部分を知らなかったのは、当事国の日本、金子や小村を含めて日本政府首脳だけだったと云う事になる。８月２３日から２８日のこの間、日本は遺憾ながら、世界的規模の外交舞台や権力政治の渦巻く国際政治のカヤの外に置かれてい

たと、言わざるを得ない。何故、ルーズベルトはこの件についてのみ、大統領に満倥の友情を寄せていた日本を無視したのであろうか。現在でも明白な理由が解らず、外交史家、研究者ら推測も明確な解答はない。ただ、一般的にルーズベルトが、日本が余りに東アジアで強力になることを怖れたからだと、一般的に推察されているが、しかし、ポーツマス会談の２カ月前に、サハリン占領を日本に強く勧めたのは、ルーズベルト大統領自身でなかったのか。

南サハリンだけの譲度に満足しなかったためではなかろうか　村松正義氏は諸説を参考に思案の結果は次の様に結論を出している。

「マイヤー大使が８月２３日のニコライ２世皇帝との謁見成果を報告した電報は、彼が収穫できたものは賠償金どころか、わずかに南サハリンの割譲の同意だけだったことから、大統領自身は拝謁結果をさして成功だったとは思わなかった。翌々日２５日、金子がロシア皇帝拝謁成果を問い質した事に、賠償金や彼が提案した仲裁裁判などを通じた成果が得られなかったので、南サハリンの割譲について金子に告げようとする気になれなかったのであろうか。

ルーズベルトは２３日のマイヤーから拝謁の報告は受けているが、その程度では満足せず、２４日、２５日にもマイヤーに更なる収穫を挙げるよう電報し続けたのである。その趣旨は、日本軍が占領中のサハリン全島を二分し、その北半分をロシアに買い戻させ、その代金を日本に支払わせることをルーズベルト大統領は考えていたと、推察できないだろうか。」と、氏は述べている。

米国の外交史家の説に　大統領は８月２５日金子と会っているが、この日、大統領はアメリカ海軍の潜水艦「プランジャー」号(米国初期の)がオイスター・ベイ湾に入港に興奮し、彼の身辺警護官や秘書官をさて置き、潜水艦に乗り込んでしまった。この騒ぎに大統領は、ニコライ２世の樺太南半分譲度の話をしそびれたと、米国の外交史家は述べている。

日本から見たこの時のアメリカ大統領の印象　ルーズベルトは日露講和会議に積極的な斡旋と介入を行った功労により、1906 年にノーベル平和賞を授与されている。大統領の国際的功績に対して、戦後、日本政府から何の“論功行賞”は行われていない。本来なら大統領こそ日露講和の貢献度大で一番の国賓者として招かれ、日本の最高級

の勲章が授与されるべきであったであろう。高橋是清による軍費公債調達に、ユダヤ系米国人ジェイコブ・シフは、日本銀行総裁の招待に、家族共々２カ月に亘って来日し、日本の官民挙げての盛大な歓待されていたではないか。何故、日本国はルーズベルトに論功行賞が行われなかったのであろうか。この点に於いて、日本政府の沈黙と外交記録に記載にないことは、腑に落ちないのである。

不可解なことである。もしや、ニコライ２世とのマイヤー大使からの極秘情報が、金子や小村を介して日本政府へ、連絡がなかったことに因ることなのであろうか。遺憾ながら、当時の明治政府首脳の評価もその程度に留まっていたのか。あれほど日本へ好意を示してくれたルーズベルトであったのに、最終盤で日本に対する不可解な不作為にあったと言えよう。と、松村氏は最後に述べられている。（松村正義著・『外務省調査月報』2005 年度／第２号・平成１７年１０月・外務省第一国際情報官室） 何か、日本政府と外務省の間に、すっきり語れない理由が存在したと思わずにはいられない。

もう少し納得できる答えを探していると、『魂の外交』が出て来た　本多熊太郎著（小村寿太郎全権の専属秘書官・ポーツマス講和会議随行員）小村寿太郎侯３０周年記念版・千倉書房・昭和１６年の書籍に出会う。小村寿太郎を讃えた内容となっているが、この書にルーズベルトの気持ちを変えたと思われる個所を筆者は見出したのである。

筆者は今回の「日露戦争」終章に宮崎県日南市飫肥（おび）にある「小村記念館」を訪ねた。その会館の記念展示品に「本多熊太郎の勲六等単光旭日章等の勲章類」に目が止まった。直感、これだけ受賞されている本多熊太郎秘書官なら、きっと著書があるに違いないないと思い、その足で「熊本県立図書館」を訪ね、拝見させて頂いたのが、本多熊太郎の著書、**『魂の外交』**である。著者本多熊太郎は、小村全権の秘書官兼随行員であって、流石に記録文章に無駄がなく、急所を鋭く銘文で簡潔に纏められている。日露講和談判の記録者としての執筆に迫力を感じた次第である。この『魂の外交』中に、「韓国処分並に満州問題に付大統領の諒解を取り付く」頁に、

《・・・小村・金子両氏は日露講和締結後の９月９日午前オイスター・ベイの大統領私邸を訪れ、先ず講和成立に関する大統領の尽力に対し謝意を陳べたる後、講和条約中の（１）韓国及び（２）遼東租借地並びに南満鉄道に関する条項に言及し、

「（１）に関しては、帝国（日本）は断然韓国の外交権を我手に収め、以って東洋の禍源（かげん）を永遠に杜絶するため同国を我が保護国となす考えである。上記は出来るだけ韓国側の

同意、即ち保護条約の締結によって保護権設定を断行する覚悟であるから、大統領に於かれても宜しくお含み置き願いたい。」と述べ、次に、

「(２)については早速清国政府と商議を開き条約で承認させるつもりであるけれども、ロシア側の裏面工作が萬一にも之なきを保し難く、そうでなくとも清国政府は兎に角の文句を唱え、或は持病の以夷制夷(夷を以って夷を制す)で列国公使に訴えたりなどして、譲受承認の条約締結を逃れようとするかも知れない。そう云う場合には日本はやむなく条約の締結を断念し、実力で以って租借地及び鉄道の経営を断行して行く考えであるから、是亦予め御諒解置きを願う。」と述べた。大統領は之に対し、

「日本のそうした決意は(１)(２)ともに全くやむを得ない当然の次第と認める。韓国保護権の設定が条約による場合は勿論のこと、日本の一方的宣言によって行はれる場合に於いても、米国は列国に先んじて公使館撤退を行うべく、又租借地及び満州鉄道に対する日本の権利については支那をしてグズグズ云いださないように北京駐在の米国公使をして適当の機会に強硬に清国側当局に忠告して置く。」と気持よく小村さんの希望を快諾した。》とある。(が、大統領の話す説明は日本側に言わせられている様に感じを受けるのである。が、小村さんに気持ちよく快諾とある。)

更に、「講和条件に米国の保障を取り付く」頁には、

《・・・若し朝鮮がどうしても条約の締結に応じなければ、日本は一方的に朝鮮に保護権を設定勧告して之を実行する。其の時にアメリカは如何するか。・・・これまた支那が四の五の(あれこれぐずぐす)と言ってどうしても円満なる解決を見ざる時には、日本は支那の意向に拘わらず、自己の単独意思に依って、租借地及びポーツマス条約で譲ずられた鉄道経営を実力で以って進める積りであるが、之に対するアメリカの諒解、此の二つ共にルーズベルトは快く同意をした。殊に朝鮮の場合に於いては「あなた方(日本)の一方的宣伝で保護権設定となった場合でも、朝鮮に於けるアメリカの公使館は早速引上げる」と云うことまで言明して呉れた。又「租借地及び鉄道の問題はどうせ支那の連中のことだから、俺の所(アメリカ)にも或は言って来るだろう。四の五の言うかも知れないと思うから、ロツクヒル駐清米国公使に、支那当局が何か言って来たら何処までも日本の言うことをおとなしく聞くように忠告せよ」と訓令して置くこと、ルーズベルト氏は快諾されたのである。この二点の諒解を、小村さんは９月９日にオイスター・ベイに大統領を訪れて求めた。》とある。

筆者には、きつい言葉で大統領に警告をしている様に感じる。この時小村全権は病

を押してオイスター・ベイを訪ねたことが、『骨肉』小村捷治(小村寿太郎子息)著に、この日の記載がある。「この会見こそ、戦後韓国の自由処分に付いて米国の全幅的諒解を獲得する重大目的を帯びたもので、完全に目的を達した。」とある。日本全権委員たちは大きな山を越え、肩の荷が下りた一瞬である事が判る。(記述の如く米国大統領は日本の為に喜んで快諾したのか、・・・これからが米国の力を示す時と考えていたのではないか)

日本政府とルーズベルトとの齟齬(そご)を推測　上記の「韓国処分並に満州問題に付大統領の諒解を取り付く」と「講和条件に米国の保障を取り付く」この様なアメリカに対する文面は初めて目にした。推測出来ることは、談判会議中の８月２０日前後の日に、小村全権と金子堅太郎とが講和談判成立したならば、「アメリカへ要望する事項」の文書を、金子が日本側から米国への条項として、ルーズベルトへ進言していることは充分推察できる。とすれば、日露講和締結後の米国の布石を考慮中のルーズベルトに於いては、苛(いら)立つたに違いない。「日本人は、自分等の事だけ主張して、米国に於いても都合あるのだ。日露妥結後は、次はアメリカの満韓地域への門戸開放・機会均等・領土保全を、日本政府とすり合す事が山ほどあるのだ」と思っているに違いない。

米国は日露講和会議中に、既にルーズベルトの指示で鉄道王エドワード・ハリマンを日本へ船で向かわせている事情からでも理解が出来る。まだこの時点では流石に大統領は小村に諸問題の会談をする用意となっていないが、しかし、ルーズベルトは日露講和に日本国へ協力した以上、極東地域へのリーダーシップを取りたかった事は事実であろう。

米国は満韓の市場開拓がこれから始まろうとしている矢先、日本に先に超される不安と焦りが米国側にあった訳で、大統領を取り巻く参謀は悶々とした思いでいたのであろう。この講和が締結された今、大統領には忸怩(じくじ)たる想いが大きくなって行く事は想像できる。放って置くと、日本はどんどん極東地域を獲得するではないか。大統領は最後の大詰めの１０月２５日前後に、「日本だけに極東地域を自由にさせる訳にはいかぬ」と強く思っていたに違いない。従って樺太南半還付を知らせることを無視した一つの要因ではなかろうかと、筆者は考える。

抑々(そもそも)の日露講和会議を再確認すると、『魂の外交』「日露講和会議の特異性」の頁に、《ポーツマス講和会議には一つの特異性がある。敗戦国が戦勝国に対し和を乞うた結果として開かれた会議では無いことである。(戦勝国による敗戦国に示す講和談判でもない)

この講和会議は第三者たる米国大統領ルーズベルトが、両交戦国に対する勧告を受け入れさせた事によって開催された会議である。こうした事情の下に談判から講和が成立して、所謂(いわゆる)「戦勝国側より指命の条件による和約」で無くして、「商議に依る講和」である事は当然である。此のルーズベルト大統領の勧告は、大統領自身の発動であるが、大統領のこうした抑々(そもそも)の勧告発動は、実は裏面に於ける日本の外交工作(注)の結果である事は、今日では殆ど周知の事実である。かかる事情から妥結した講和談判であるから、所謂商議による講和の特質として日本側の提出した講和条件が、全部ロシア側に入れられるということは本質上、望み難い所である。その結果として妥協講和となる条約の成立を見たのである。・・・》と、納得のいく説明をされている。

と云う事は、講和締結の協商が成立した以上、日本側は自国の有利な事項を米国側に要求しても、大統領も認めざるを得なかった訳である。だからそこ米国の不安はそこにあった訳で、大統領は急遽鉄道王ハリマンを派遣し、米国は、「満州の大地の鉄道経営はロシアとの牽制が必要であるから、米日協商の鉄道経営なら、ロシアとの復讐戦のトラブル起らない」と米国は営業的な方策を強く求めた。桂首相を初め日本首脳・経済界たちは快諾したのが、「ハリマン覚書の仮契約」だったのである。

注・『明治秘話・二大外交の真相』信夫淳平著に、「日本海の激戦を決し米国大統領講和を斡旋」の「大統領の対露講和勧告」に、《・・・日本政府の請求（お願い）に由り、「予(大統領)の発意に於いて」、即ち日本側から出た和平話でなく、それは大統領自信の発意から出たことにして、且つ如何なる形式に於いても、日本側からの請求した風に見えないことを希望した。》とある。因って講和会議の前提は米国大統領の指導で進めた形にしてほしいと日本側からの強い要請があったのである。

日本の強言は　日露の講和条約締結した以上、ルーズベルトは、朝鮮、満州、鉄道問題等に不満な事項が有っても、取りあえず抗議は出来ない訳で、日本側としては条約締結後の重要な警告事項を大統領への報告であったのである。しかし、これは度胸ある外交の天才小村全権でも、大変骨の折れた事と想像する。日本としては日露講和会議開催から妥結まで、一番お世話になった大統領に、最後に日本側の結語を一方的に伝えることは小村全権として辛いことであったであろう想像する。

「韓国は日本の自由行動による保護権を発動するので、米国公使館早速引上げてくれ」、「清国にある満州鉄道は日本単独行動に四の五の言わせずにポーツマス条約に基

付いてを履行するのでご承知の程」と、米国大統領に向かって小村全権は言い放なったのである。ルーズベルトの心境は「今まで日本側の味方になって、講和談判を進めてやったではないか、その強引な態度はなんだ」と立腹であったであろう。

事前(８月２０日前後)に、ルーズベルトは金子よりこの報告を受けた時、「少し日本をイジメテヤレ」との気持ちになったのではないか。「余の肚の虫が収まらない」その腹の虫が樺太南半割譲の通告を“知らん顔”となって現れたのでなかろうか。

ミネソタ号甲板の小村全権一行・中央・小村、右より左へ・本多秘書官、安達秘書官、山座政務局長、石井書記、小西秘書官、デニソン顧問、佐藤公使、立花大佐(武官)　『魂の外交』本多熊太郎著より

小村全権の帰朝と同時にハリマン協定を打壊　小村全権は病のため帰国が遅れ１０月１６日横浜に入港した。英国東洋艦隊、帝国艦隊から１９発の礼砲が響いたが、しかし、歓迎の国旗は一斉に取下げられていた。帰朝歓迎の挨拶が済むと、山座局長が船室に入り、部屋のドワに鍵をおろして数刻の密談をされた。小村外相が病気で帰国が遅れている間に、米国より鉄道王ハリマンが来朝し、「南満鉄道日米合弁に関するハリマン協定」が、桂相首と政府首脳に依って、この予備協定が結ばれていた事を山座局長より伝えられた。流石(さすが)に冷静沈着な小村全権も、椅子から飛び上らんばかりに驚かれ、卓を叩いて、

《「そうか、そんなことがありはせぬかと案じたから、俺は脚腰(あしこし)も起きぬ病身をかかげて帰朝を急いだのだ。こんな事をやられては日露戦争の勝利は水泡に帰し、百難を排して漸(ようや)く勝ち得た満州経営の大動脈が、米国に奪われてしまう。ヨシ早速これを叩き潰す」決意を告げた。・・・。》

小村は船上帰国の途次、船中で「満州経営要綱」という書式を作成し、万一横浜で

爆弾に遇った時、「私の事は構いませんから、あなた(本多秘書官)は此の書類を保護して東京の山座君に渡して、桂さんに届けて下さい」と念を押した。その写しは２通作くられ、突発事故に備えた用心深さで構えていたのであった。

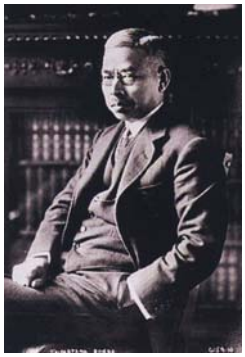
小村は言う、《「国家の運命を賭(と)して漸(ようやく)く勝得た南満州鉄道と満州の権利とを、タッタ１億か２億ドルの金で、米国の財閥に献上して仕舞うと云う実に話にもならない馬鹿げ切ったものである」と、鬼の形相で説得するのである。

新橋駅から宮中へ参内の後、小村外相は桂首相を訪問し、ハリマン協定に対して断乎たる反対を述べ、之に破棄しなければならない理由を力説し、それから両３日間は寝食を忘れて説得に走り続け、井上元老を初め之に賛同した面々を説破して漸く前議を翻(ひるがえ)さしめ、１０月２７日ハリマン氏の船が桑港(サンフランシスコ)埠頭に着くと同時に、我が上野領事より明瞭なる取消のメッセージを手交させた。

ハリマンの失望は大きかった。米国の復讐戦となって現れたのは、それから数年後の事となる。その数年後、小村さんが第２回の桂内閣に再び外相として在職中持ち上ったあの有名な「錦愛(きんあい)鉄道計画」(明治４２年ルーズベルトに代わってタフト大統領が立案)この計画と照応する米国国務長官ノツクスによる満州鉄道国際化提議である。両方とも小村さんの強硬外交で叩き潰された。・・・。》現代の我々はその凄さに舌を巻くのである。(『魂の外交』本多熊太郎著・千倉書房・昭和１０年４月)

駐露米国大使マイヤー

ヘンリー・ハリマン



本多熊太郎

山座円次郎

左より、☆ジョージ・フォン・レンガーク・マイヤー(1858－1918)、露国皇帝の間を取り持ち、露駐在大使として南樺太割譲に尽力を尽くしてくれた。　☆エドワード・ヘンリー・ハリマン(1848－1909)米国権益のために尽力する。ジェイコブ・シフと共に日本の戦時公債１千万円引き受けた人物。ポーツマス条約締結後、南満州鉄道共同経営を申し込み、桂・ハリマン仮契約を結ぶ。米国指導の金融資本を投下して、極東から欧州までの鉄道経営を狙っていた。　☆

本多熊太郎(1874－1948)明治 34 年小村寿太郎専属秘書官、ポーツマス講和会議に随行。後、東條内閣外交顧問、太平洋戦争後はＡ級戦犯として逮捕の経緯となっている。　☆山座円次郎(1866－1914)小村と共に日英同盟締結に尽力。日露戦争宣戦布告文を起草、ポーツマス講和会議随員、小村外交の中心的役割を果す。小村が最も信頼する外交官となっている。

小村外相の留守中にハリマン仮覚書が成立していた事に

『骨肉』小村捷治著(小村寿太郎次男)に、日露講和条約に国民による「屈辱講和を葬れ」大合唱が起きたとき、捷治は「お父さん、僕達は酷(ひど)い目に遭ったんですヨ」と言うと、すると父は、「何ぁに、国民にその位な元気がなくちゃいかん」と、国民の反対意向に如何にも同感するかに一言したので、私は何だか狐に抓(つま)まれたような気がした。後日、父が誰かに「実はあの講和条約に第一の反対者は俺じゃつた」と述懐したと聞くが、さも有りなん。・・・》(『骨肉』小村捷治著(小村の次男)小村寿太郎侯奉賛会・2005 年)

ハリマン事件の流れ　１０月１６日小村全権は帰国前に、これより先９月１日、ルーズベルト大統領の意向を受けて横浜港へ来日していた。(ハリマンは講和談判中の８月１６日サンフランシスコを出港する)鉄道王エドワード･ハリマンと､桂太郎首相が会談し、南満州鉄道の経営に関する仮覚書に合意した。この南満州鉄道共同経営する構想は、元老の井上馨や財界の渋沢栄一も賛成していた。鉄道王ハリマンは日露談判が始まった時期に米国を出発し、満州における共同の鉄道経営提議案を日本政府首脳らに合意を求めて来朝したのである。

❝補足・裏面史を覗けば、この頃の国内に於いて満州鉄道経営策に二つの派があり、「大陸進出を最小限に抑えて、国際戦争の危険を回避する派」と、「日本を大陸進出発展の冒険派」が存在した。それは財政上の理由と、政治的な軍事の危険が上げられていた。しかし、小村には金子堅太郎の斡旋よる南満州鉄道経営の資金調達のメドを、裏面から確保していた。ハリマン鉄道王を挫折させたのは、ニューヨークのモルガン系財閥(反ユダヤ･モルガン家とユダヤロスチャイルド一族と合併した銀行)たちであった。金子堅太郎の著､「日本モンロー主義と満州」の一文に「モルガン一派はポーツマス講和条約が発表された頃、ルーズベルトの従弟(いとこ)に当たり且つ金子とは親交関係にあった、モントゴメリー・ルーズベルトが金子のもとに送られ、金子を通じて日本政府に働きかけ、ハリマンに一泡吹かせようとしていたこと」と記述がある。小村は上記の資金

の目当てを以って、「ハリマン覚書」潰したのである。しかし、その続きはがあり、１９０７年、興銀総裁添田寿一が欧米交渉に於いて、クーン・ロープ商会に融資は断られ、モルガン商会と交渉するのではなく、ロンドンで起債している。何故、金子ルートのモルガンと交渉が進まなかった訳は、裏面の裏面で、ルーズベルトによる、小村の行動を見た時、日本は南満州の門戸開放を不可であると見た大統領は、日本・モルガン融資話をも潰したと推測出来るのである。❞

伊藤博文や井上馨らは、北満州に依然として大軍を擁するロシア軍の怖れを抱き、心配の種を解決する方策として、米国との共同経営で運営されるならば安心と、桂を囲む政府首脳たちはロシア牽制する妙案と考えていたのであろう。帰国した小村は、血も流さない米国に、満鉄の権利を渡すのは外交上の恥だと訴え、間髪を容れず、清国間で満州に第三国が資本投下の阻止条約を結び、翌年、明治３９年(1906)１月、日本は覚書を正式通告し、南満州鉄道株式会社を設立させた。正に小村は獅子奮迅の行動となる。この事件後、満韓出進の行動に打つ手を逃した米国は、カリフォルニアに於ける日本人移民の排斥運動となって現れるのである。

❝補足・この頃の米国事情を語れば、米国の綿製品が満州へ輸出が最高に伸びて時期と重なり、満州市場に於ける米国綿製品が、次第に日本製品に市場を奪われ始めていたのである。日本国産業は、軍事産業を主として、近代産業に急速に成長して行き、あらゆる生産物を満州市場に獲得し始めていた。そして満州への鉄道経営と輸出する産物で、膨大な利益を追求する資本経済の発展が望まれていった。その様な日本国の姿は、米国から見れば、大陸を支配する軍事勢力と、経済市場をも獲得する懸念に映っていたのである。だから、米国はポーツマス会議直前の 1905 年７月に、東京で桂・タフト会談を開き、「韓国について日本の保護権を認める」、「フィリピンに日本は領土的野心を持たない」と、日米間でこれを認め、交わされたものが「桂・タフト覚書」であったのである。❞

この日米の将来を考えた時、小村は天性の外交能力からくる将来展望の結論として、「米国は決して日本に対し友好ではない。日本は大陸出進に於いて、将来米国と必ず衝突が起こる事を予測したと思われる。だから米国を抜きにして、「ロシアとなら日本は未来志向に希望がもてる」との結論を小村外相は強く思っていたに違いない。

もしかしたら、日露平和交渉は一段落した時、小村は米国大統領を「お役目御免」と、考えていたかも知れない。日露講和条約締結の結果、日本が世界的列強大国に列

し、世界列強の立場で外交を協議し、世界政治の利益に左右する立場になった我が国を、小村は確信していたのではないか。それは明治４０年(1907)から日露協約が極東地域の安定を望むロシアとの間で４回に亘り条約が締結され、秘密日露協約と成っていることを考えると、日本はこの時点で米国から離れはじめている。

何故黙っていたルーズベルト大統領の謎について　このルーズベルトの“沈黙する大統領”について、上記に述べたように筆者による結論を述べたが、もうすこし納得のできる答えを見出したかったので、しつこく『明治秘話・二大外交の真相』信夫淳平(注)著・昭和３年・萬里閣書房、を何度も読むうちに、「下篇・日露戦役の外交的考察・その是非」に納得の行く部分を見つけ出すことができた。

注・信夫淳平の履歴・(1871－1962)外交官、国際法学者。日露戦争時に大日本帝国陸軍遼東守備軍司令部付、満州占領地行政事務官を務める。外交史の著書多数。日露開戦の経緯と日露講和ポーツマス会議経緯を正確な記録として、後世に残す強い希望を持っていたので、本多熊太郎らに情報提供を呼びかけて『明治秘話・二大外交の真相』が著述された。本多熊太郎は『魂の外交』の著書中で、『明治秘話・二大外交の真相』の著述を読んでもらえれば、ポーツマス会議の経緯がよく判ると述べている。

「下篇・日露戦役の外交的考察・その是非」の頁より、

その１は、《・・・ロシア皇帝は８月２３日、露国駐米マイヤー大使と引見の折、薩哈嗹(サガレン)の南一半の割譲に同意を確認した。而もこの重要なる報告に接していたルーズベルトは、我方(日本)に向かってこの点を曖気(おくび)にも出さなかった。蓋(けだ)し彼は、最後の談判破裂を至った場合に、之を以って一芝居を打つ（仕掛け種）として、更なる暫(しば)し之(これ)を深く胸底に蔵して居ったものであろう。・・・》

この事を裏付すれば、在ローマ米国大使ホワイトに送った書信(２３日付)に、《「予は日露両国を講和させようと苦悶の絶頂にある。英国政府は愚であり、日本へ穏当(おんとう)な忠告する事に踟躕(ちちゅう)している。この点に於いては、独逸(ドイツ)、仏(フランス)国政府は進んで露国へ忠告する態度の観がある。」》と伝えている。

その2は、《・・・当時在ワシントン独逸大使が、在パリ自国代表者より接手する一情報として、８月１８日を以って、ルーズベルトに内報した所に依れば、ポーツマス会議にして萬一不調に終わるならば、英・仏両国は代わって斡旋者の地位に立ち、必

然之を成功に導くことに努力する。意見交換が両国政府間に行われつつあった。隨(したが)ってルーズベルトとしは、その面目上からも、是非共この際万難を排し成功させる。・・・》

その3は、《・・・ルーズベルトはこの険悪な談判情勢に鑑み、露帝への親電を、更なる第２の電報を発した。一説にはこの電訓を受けた露帝は、「薩哈嗹(サガレン)は全島必ずしも割愛(かつあい)することを惜しまず」と最後譲歩の語気を洩らしたと伝わる。それがもし事実であるならば、ルーズベルトは独り己の肚裏(はらうら)（腹芸）に深く蔵していたのは、談判が破裂した場合に、新たな局面一転の具に之を利用する胸算(むなざん)であったと、推察される。・・・》

その4は、講和談判終了時、露国全権の随行員ヂロンが山座に《・・・日本全権たちによる新聞記者達への、日露談判事情の過程を打明ける事を努めていれば、薩哈嗹、或は全島を獲れたかもしれない。と語ると、山座は「双方間に秘密厳守を一旦約束した以上は、その約束は重大である。日本に取っては、信義は薩哈嗹全島よりも貴(たっと)し」と答え、ヂロンをして顔色をなくさせたのは、流石に山座であった。・・・》とある。

考察すれば先ず大統領の“沈黙”は、日本側をなんとか妥協に結びつけたい一心で、隠し玉として用意していた具ではなかろうか。何故ならば英駐日公使マクドナルド（北京城籠城指揮者）からの「樺太南半」情報提供は（『外交余録』石井菊次郎著・第 14 章 219－220 参照）、米国指導による操作した確率が高いと思われる。上記の**1**から**4**の記述から推測すれば、日露談判破裂した場合に大統領は日本に向かっての第一手は、「樺太半分で承諾できないか」と最後通告を残して置いたと考えられる。更にそれでも妥協を見ない時は、第二の手は、「樺太全島ではどうか」という腹芸の２つ答を持っていたのではないだろうか。山座円次郎とヂロンの会話を分析すれば、露国全権たちには「最悪の場合は樺太全島譲る」極秘協議を練っていた事が伺える。証明する手立てはないが、この沈黙の霧中は、米国大統領の一任となっていたかもしれない。因って、筆者はルーズベルト大統領の「沈黙」と「公式記録記載」が無いのは、腹芸外交にあったとみる。

最後までお付き合いありがとうございました。　　**―終―**

結びにかえて

源義経伝説を追っているうちに、末松謙澄がロンドンに於いて『ジンギスカン即源義経』の歴史論文を英文で刊行した。その英文を福沢諭吉の弟子、内田弥八に『義経再興記』として翻訳させ、そして、明治黎明期の瀬脇寿人(浦潮港貿易事務次官)らが、沿海州地域に義経が活躍した痕跡があるという記述を国民に娯楽読み物として紹介した。その義経伝説の痕跡を訪ね歩くうちに、ロシア沿海州地域に日露戦争と重なる部分が存在していることに気が付いた。(拙書電子書籍・『ジンギスカン即源義経・流布の顛末』を参照) サハリン、ウラジオストク、ハバロフスクに義経伝説と日露戦役の残影を見た筆者は、どうしても日露戦争を纏めてみたくなった次第となった。

今、日露戦争の執筆の終に宮崎県日南市飫肥にある「小村記念館」を訪ねた。４月の初めの季節柄、飫肥城大手門には桜が満開となっていた。

正面は飫肥城大手門、大手門正面右へ曲がると小村寿太郎生家となる

小村寿太郎侯銅像・竹香園

小村の生まれ育った飫肥城は「飫肥院」の跡とも言われ、何時頃創建されたかはあきらかではないと案内にあった。享徳元年(1452)日向国守護の島津忠国(９代)が、豊後守に飫肥を与えているので、それ以前の築城と考えられる。文明１７年(1485)伊東氏(都於郡城主・南北朝時代から安土桃山時代にかけて日向国に割譲した伊東氏の城)の侵攻を撃退した。飫肥城には、島津豊洲家が入城して約５０年に渡り中国貿易で全盛を誇っていた。その後、豊洲家と伊東義佑の間で２８年間、攻防が繰り返された後、豊臣秀吉の九州遠征の功により、天正１６年(1588)伊東佑兵が飫肥城に入城し、以来約３００年間、伊東家飫肥藩(５万余石)の居城として栄えた。―日南市観光協会―

飫肥藩では天保２年(1831)、藩校振徳堂が開校し安井息軒が藩校の基礎を築いた。

息軒は１８３７年に江戸に出て三計塾(私塾)開いた。当時は朱子学が武士の一般的に正学としていたが、息軒は朱子学にとらわれずに、徂徠派(近世初期の儒学者、荻生徂徠を祖とする派)を進めた。三計塾は儒学者として評判となり、全国から多くの学生を受け入れ、その中に陸奥宗光(寿太郎の恩師)、谷干城、品川弥二郎らがいた。

陸奥宗光は明治２６年(1893)、小村寿太郎を北京公使館参事官に大抜擢したのは、小村の英語才能だけでなく、上記の安井息軒の三計塾の流れを汲んだ二人の関係があった事を知る。陸奥はカミソリ大臣と呼ばれ、版籍奉還、廃藩置県、徴兵令、地租改正と世に大きな影響を与え、伊藤内閣の外務大臣として不平等条約の条約改定の辣腕をふるった陸奥が、小村寿太郎を指名したことは「陸奥外交」を継承させることにあったと思われる。

飫肥の街は小さな城下町で世間の情報など入ってこない辺鄙な地域と思われたが、実情は小村家に於いては先祖代々僧侶、医学、俳諧、商業など多方面で活躍した人が出て、優れた人材が輩出した家系となっていた。それらの役目を通して藩外からの情報が最も早く集まる家柄でもあった。

寿太郎は少年期を通して感性を磨く環境にあったことが分かる。小村家は代々本町の別当職で小禄１７石の徒士(歩卒)であった。(別当・飫肥藩に於いて鵜戸山仁王護国寺の住職を指すが、飫肥城下の商人町である本町と今町の自治を取り仕切る役職も別当と言った)

小村寿太郎の祖父は、旧飫肥藩の産業組織受け継ぎ、飫肥商社を設立して社長となっている。明治黎明期、地方の農山漁民らは恩恵を受け、発展改良を重ね、支店を大阪、上海まで設けたようである。商品種目も紅茶まで着手し、事業は船舶まで手を広げていた。事情はよく分からないが、士族組と平民組とで、事業の権利、利益配分で紛争が続き、やがて５年に及ぶ法廷闘争を繰り返した。小村家の人脈は、その債務を引き継ぐことになってしまったらしい。その債務が小村寿太郎の身にも、降りかかったようである。因って、小村はお金に縁遠い生活を送ったようである。

父の一生・補遺から小村の「躍如たる父の面影」

《・・・父が帰朝して間もなく、明治３９年正月に第一次桂内閣は総辞職を行い、父は野に下った。この時には小石川に名ばかりの私邸らしいものがあったが余りにも

手狭で、到底前大臣の一家を容れるべきでなかった。早速増築にとりかかっている最中、父は一旦帝国ホテルに泊まり、ホテルの馬車でこの自邸なるものを初めて訪れようとしたが、自分の家が何処に在るのかを知らない。植物園の傍まで来た時、今もあるあの交番に立ち寄り、父は自ら「小村の家は何処ですか」と警官に尋ねた。面目躍如たるものがある。その後葉山の例の借別荘に住まった。・・・》とある。

（『骨肉』小村捷治著（小村寿太郎の次男）より）

晩年の話　寿太郎は「日本はもう戦争をしてはなりません。戦争をする必要が無いだけには、したつもりです。今後は産業その他に力を入れて、国民を楽に暮らさせて行くことです」と周囲に語っていたと云う。しかし彼の死後(明治４４年１１月２６日神奈川県葉山で５６歳歿)、国際情勢はそう簡単に平和が保たれるものではなく、日本は益々軍事外交に引きずられて行くのである。(『小村寿太郎　若き日の肖像』小村寿太郎侯奉賛会、「飫肥歴史紀行」飫肥城下町保存会、『飫肥』日南市観光協会より)

一方ウィッテの祖国での受けは　ウィッテはポーツマスからの帰路、英国皇帝・独逸皇帝から講和祝福の誘いがあった。独帝から露帝に破格の親情を受けたことにより、ウィッテは独逸皇帝だけに拝謁している。独帝はウィッテを優遇し、赤鷲大勲章(ドイツ鷲勲章)の飾章を授けた。その流れで露国皇帝より伯爵を授かっている。露帝の心境は複雑で、彼を心より勲功したのではない。

ウィッテの回顧録に記述に、「露帝は元々自分を選ぶ気もなく、殊に露国皇后には痛く自分を毛嫌いされ、内外の宮廷役人にも嫌われたが、露帝による破格の思召で露日講和全権大使の栄誉を授与された」と記している。露国政府の内外の輩(やから)もウィッテの外交力を理解しなかった。露都はウィッテの凱旋を失望落胆で出迎え、ポーツマスの講和条件は当時の露国の実態から考慮しても、決して不幸な条約締結ではなかった。償金も支払わず、一寸の本土も失わず、日本の古来住処(すみか)であった樺太南半を失っただけで解決したのである。

露国は講和条約締結後、日本との親善回復の道を開き、更に日本との協商・同盟の展望を開いた。ウィッテはポーツマス講和会議以前から、日露提携の可能性を予見し、ヂロンを通じてロンドンの林董(ただす)に意見交換を交わしている事でも判る。ウィッテの外交交渉の流れは明治４０、４１年の日露協商に繋がって行くのである。

露国に於ける一般与論について、新聞紙面はウィッテを誹謗し、「半薩哈嗹伯爵」と呼ぶ者もいた。これ等の誹謗の話は小村全権とも相通じるものがある。しかし、この時代の列強たちは、弱国と見れば土足で踏み荒らし、相手が強国ならば大義名分を色々打ち並べ、外交交渉で自国の安全を保っている時代、強国の歴史はすざましい人間模様の歴史でもある。

終わりに『日露戦争への列強の策謀』は、フランスとの関係、アルゼンチン発注のイタリア製「日進」「春日」買い付けの話等、ロシアとトルコ関係、英仏同盟、欧州列強のアフリカ分割戦況事情等を考慮しないと「列強の策謀」は終わらないが、日露戦争は世界的な規模となっており、日本から見て遠方の紛争・戦役を削り、日本の関わり方が多い列強国間のみを述べさせていただいた。

２０１６年６月１１日　　池田　勝宣

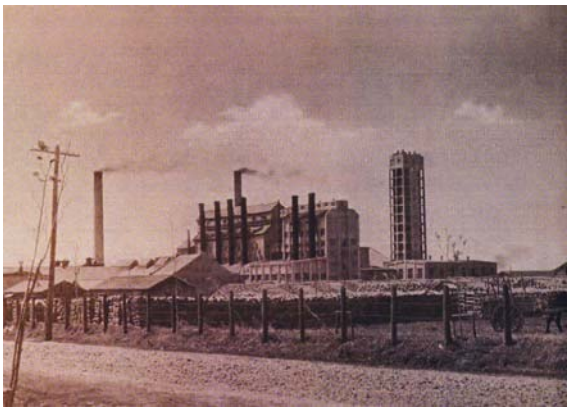
自己紹介・池田勝宣（いけだかつのぶ）１９４２年神奈川県藤沢市生まれ。歴史研究会旧会員。

附録　　サハリン・ウラジオストク・ハバロフクスの残影・他

ユジノサハリンスク・サハリン州郷土博物館にある旧日本軍の野砲・２０１３年９月

明治３７、８年戦役紀念とある　（同）　　（紀念は紀元起算）

真岡王子製紙工場跡・現ホルムスク市



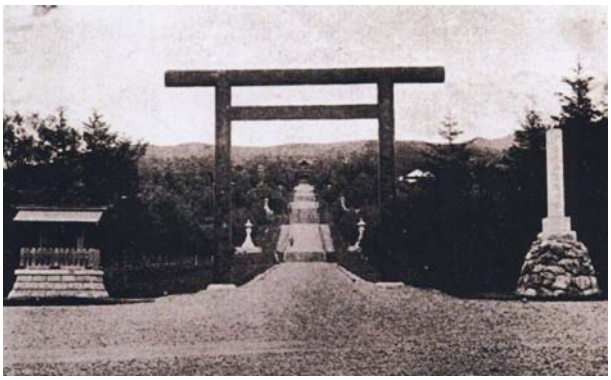
日本統治時代の王子製紙工場・サハリン州郷土博物館

真岡は 1905 年―1945 年まで日本領。終戦直後にロシア軍の侵攻を受け、日本女性電話交換手９名、日本へ最後の連絡後、集団自決した。真岡郵便電信局事件で知られる。

サハリン州郷土博物館に今も残る

日露国境標碑

国境標石日本による工事・1906 年・サハリン郷土博物館



旧統治時代・樺太神社　ウィキペディア

樺太神社跡・社殿階段部・2013 年

明治４４年創建。樺太神社は樺太豊原市にあった神社である。主祭神は大国魂神等３神となっていた。

サハリン州郷土博物館の歴史

博物館の建物は1937年、大日本帝国が旧樺太豊原市東８条南６丁目に創建した建物。現在のサハリン州郷土博物館は日本時代の展示方法を踏襲している。正面玄関の狛犬は靖国神社から移転したものと伝わる。敷香郡散江村遠内の５０度線の国境標石と、敷香郡敷香町の国境標石が保存されている。

旧・樺太庁博物館・1937 年・ウィキペディア

現在のサハリン郷土博物館

郷土博物館に残る狛犬

ウラジオストク･ルースキー島の要塞　２０１４年６月

左・ウラジオストク・ルースキー島に残る砲台跡。右・高台より日本海側を見る。砲台は島の窪地にあって海からは見えない要塞となる。海からの攻撃は不可、高台より指令で砲撃。島全体が地下道で結ばれていた。日露戦役に於いてウラジオストク、沿海州への侵攻説があるが旅順以上の苦戦が考えられる。

ルースキー島要塞各箇所に地下で結ぶ

砲台跡・海の向こうがウラジオストクとなる

ルースキー島全島が地下で要塞が結ばれている・中央に四角いコンクリートの要塞跡がみえる

シベリア抑留考　　**コニラエフスク･ナ･アレーム**　２０１５年９月拝礼。

アムール川河口ニコラエフスク郊外にある日本人の墓地・左の写真より１００メートル位奥の所

ハバロフスクからアムール河口の街(1057 km)。ニコラエフスクの街より郊外へ車で２５分位の所にあった。現地はヤナギランやトリカブトの花が咲いていた。ここに埋葬された日本人の遺骨は日本へ持ち帰ったと現地ガイドの説明を受けた。直感として受けた印象は、この地はサハリンの上部と緯度と同じなので、冬期は地面が凍結し、遺体は春先まで埋葬ができなかったと想像する。胸がしめつけられる。

ハバロフスク日本人墓地　２０１５年９月拝礼。

1、ハバロフスク郊外にあるシベリア慰霊平和公苑

２、日本人による献花があった

３、シベリア慰霊平和公苑内の慰霊碑

４、ロシア人墓地に隣にある日本人墓地

上記写真１、２、３は 1955 年、外務省、ロシア連邦、ハバロフスク市、太平洋戦争戦没者慰霊協会の４団体によって作られたシベリア慰霊平和公苑となる。公苑内に日本人戦没者慰霊碑建つ。写真４はハバロフスク街外れに大きなロシア人墓地と隣接して日本人の墓地がある。墓地の前には花屋さんがたくさん並んでいた。シベリア抑留で亡くなった３００名余の墓と慰霊碑がある。

ウズベキスタン　２００６年６月拝礼。　ウズベキスタン（１３箇所の墓地がある）には２万３千人が配属され、収容所は劣悪環境のため８１７名（１３カ所の墓地に）が帰らぬ人となっている。『ウズベキスタンの桜』中山恭子著（北朝鮮拉致担当大臣時代）墓地建設までの経緯が詳しく書かれている。他に『戦後強制抑留史』中央公論出版　『中央アジア捕虜記』山崎俊一著などがある。

ウズベキスタン・タシケント・ヤッカサライ日墓慰霊碑

墓地８７名が眠る

カザフスタン　２００７年９月拝礼。アルマトイ推定抑留者１万人が１６箇所収容所分散し強制労働に耐えた。昭和２２年１２月１２日現在、引揚者４５００人、死者１５００人余、死者の実数未確認。抑留者は「カザフは幸運の地」とも云われる。

カザフスタン・アルマトイある日本人墓地慰霊碑

一石碑に５名が眠る・３８５人という 2007 年

モンゴル　２００８年７月拝礼。『シベリア強制抑留の実態』よればモンゴル国に１０箇所の収容所に約１万４千人が入り、２千人余の死亡者をかぞえる。ウランバートルの郊外にある日本人墓地には亡くなられた人は８００人余の超える遺骨のうち、姓名が判明したのは６１４名なる。ダンバダジャー以外のモンゴル各地に日本人墓地はあるが、遺骨の多くは日本へ戻され、ここには慰霊碑のみが建立されている。碑文には「日本人死亡者慰霊碑・さきの大戦の後、１９４５年から１９４７年までの間に、祖国への帰還を希みながら、この大地で亡くなられた日本人の方々を偲び、平和への思いをこめて、この碑を建設する。平成１３年・日本国政府」とある。左の写真、日本人グープが拝礼して、御婦人による童謡「ふるさと」を何度もハモッテ霊に捧げていた。「日本女性はなんと心根が優しいのか」思わず涙があふれた。

モンゴル・ウランバートル郊外にある日本墓地慰霊碑・「モンゴルに安らかに眠ってください」とある

１９４５年(昭和 20 年)、旧ソ連が占領した満州、北朝鮮、千島列島、樺太にいた軍人、軍関係者、一般人が強制連行され、ソ連邦１０００ヶ所の収容所に強制抑留された。劣悪な生活環境の収容所で６万から７万の人が亡くなったと云われている。しかし、いまだに３７万人が帰国しない未解決の問題ともなっている。

最近の発表「犠牲者数」によれば、従来の死者は６万位とされてきたが、近年ソ連崩壊後の資料公開により実態が明らかになりつつあるが、ソ連占領下の軍民あわせて約２７２万６千人の日本人がいた。このうち約１０７万人が終戦時ソ連各地に送られ強制労働させられた。

アメリカの研究者ウイリアム・ニンモ著『検証・シベリア』によれば、死者２５万４千人行方不明(推定)９万３千名で、事実上約３４万人の日本人が死亡したという。

１９４５年―４９年の４年間で日本人捕虜の死亡者は３７万４０４１人にのぼる調査もある。モスクワのロシア国立軍事公文書館には日本人約７６万分の資料が収蔵されていることが明らかになっている。

『シベリア強制抑留の実態』阿倍軍治著には、データーに基づく７６万３、３８０人となるが、まだ集計外のペトロヴロフスク(数千人)、マガダン(約８千人)、エラブカ(約３千人)、ラーダ(約６千人)マルシャンスク(約４千人)キルギス、トルクメニスタンなどの抑留者は含まない。これらの人数をいれると７７万２、４００人ということになるという。

日本人強制抑留(捕虜ではない)は、ソ連邦の言い分は、「日本によるシベリア出兵によってソ連は占領されたため、ソ連も日本の領土を占領しなければ、国民の怒りが収まらない」日本占領政策にソ連の影響力を強めようとした政略と考えられるが、トルーマンはこれを一蹴したため、ソ連邦は「それならばその代償として捕虜をシベリアに送らせろ」という説もある。

日本側にも１９４５年８月１９日関東軍総参謀長秦彦三郎中将一行が、ソ連領ジャリコーポで極東ソ連軍総司令官ワシレフスキー元帥らと停戦交渉をおこなった時、シベリア抑留につながる日本軍将兵の労務提供の密約が交わされたのでないかとする「密約説」も浮上している。

この時、関東軍作戦参謀・中佐の瀬島龍三が密約説を誘導したのではないか、とささやかれている。スターリン秘密命令もさることながら、この密約こそがシベリア抑留の原点となることも考えられ、「密約問題」を追及することにより世間に広まったのである。又、保坂正康が、『文芸春秋』１９８７年５月号に発表した「瀬島龍三の研究」がある。保坂は、「ソ連の理不尽さと無法によって６０余万の将兵と民間人は辛酸をなめた。その原点がこの停戦協定にあったと主張する人々がいる以上、瀬島は公的な立場で歴史的な交渉に立ち会った当事者として、協定の全容を明確に語るべきでないのか」という質問には無言となっている。

或る説には日本の天皇制を最後まで反対したソ連邦は、６０万人の労務提供と相殺説で了承した説もある。しかし、日本帝国軍隊は結局、「官僚軍隊」であって、日露戦争の兵士の犠牲も、今戦争も誰が責任をとるのか、結局の処判らずじまいとするのが日本国家の歴史となっている。１９９２年以後、ロシア政府が労働証明書を発行するようになったが、日本政府はこれら将兵に賃金支払いをしていない。全国抑留者補償

協議会は２００６年１０月に未払い賃金の補償を引き続き日本政府に求めている。

シベリア抑留の経緯　先の大戦末期の 1945 年８月９日未明、日ソ中立条約を破棄して日本へ宣戦布告をし、１７４万のソ連極東軍が、満州帝国、日本領朝鮮半島北部に軍事進攻した。８月１０日、モンゴル国も日本へ宣戦布告し、日本は８月１４日に降伏を声明したが、ソ連は８月１６日に日本領南樺太、１８日には千島列島を占領し、８月２２日、日本から停戦命令が下り、降伏した経緯となる。

ソ連の軍事進攻は、アメリカ・イギリス・ソ連のヤルタ会談に基づくもので、ヤルタ秘密協定ではソ連に対日参戦の見返りとして、南樺太返還とクリル諸島の引渡、満州に於いては、旅順の租借権、大連港、中東鉄道・南満州鉄道等の優先権利を認定されていた。８月下旬までに日本軍は武装解除させられ、多数の死傷者を出した。日本人捕虜は日本帰国を求めたが、ソ連軍は復員を認めず、ソ連領内に抑留者を移送時にソ連兵はダイモ(帰れるぞ)との呼び声で日本人捕虜を乗せ移送したという。連行された総数５７万５千名とも、実際には７０万余人とも、２００万説もある。

ウズベキスタンアリシェル・ナヴォイー名称劇場　2006 年 6 月

1945 年―1946 年日本人強制労働によって完成した劇場建物となる。1966 年に直下型大地震が街を破壊したが、この劇場建物だけが残ったことにより、ウズベキスタンで有名となった。劇場建物は現在も使用され、説明碑文には「1945 年から 1946 年にかけて極東から強制移送された数百名の日本国民が、このアリシェル・ナヴォイー名称劇場の建設に参加し、その完成に貢献した。」とある。親善のため「日本軍捕虜」の文字は不可とした経緯となっている。